王の剣士3

「剣士」

著 : 雅

2006.3.10 初稿

2007.7.16 校了

2013.9.11 改定

終章	第 四 章	第 三 章	第二章	第 一 章	
:	:	:	:	:	次
:	:	:	:	:	
535	419	289	135	3	

第一章

飛竜の羽ばたきが、厚い雲の垂れ込めた上空を埋め尽くす。

黒 地 にこ 暗 紅 色 0) 双頭  $\mathcal{O}$ 蛇  $\mathcal{O}$ 紋をあ しらった軍 **一旗が、** 吹き抜ける強 1 風 幾

にも棚引いている。

王の直轄軍、近衛師団の軍旗だ。

その 第 大隊 の 一 軍 が 空と地上とに展 開 てい た。 岩だらけ

狭間に重く打ち付け合う剣撃 の音が \*満ち、 時折、 剣や槍、 鎧が . 雲間 か , ら洩 れる

0

大地

と雲との

薄い陽光を鈍く弾く。

空を覆うように布陣し た漆黒の鱗を持 つ飛竜 達の中で、一 頭だけ 銀  $\mathcal{O}$ 鱗を

纏つ に して眼下を覗き込んだ。そこから地上の布陣全体が漆黒の瞳 た飛竜の背から、 近衛師 団第一大隊大将レ オアリスは 膝に片腕を に見て取れる。 つくよう

「頭が、そろそろ出るな」

した。

誰に確認するでもなくそう口にすると、 レオアリスは屈 出めてい た上体を起こ

背 中 か 5 流 た 黒 1 長 布 が 身 体に 纏 1 つくように はた、 め 短 1 黒 髪 後

ろに 筋だけ 伸 ば L た 髪 を風 が 煽 0 た。

喉 元 まで襟の 詰 ま 0 た 黒  $\mathcal{O}$ 軍 服 は 周 囲 の者達とさほど変わらない が、 周 囲

取 ŋ 巻くこ 兵 達の 中 で、 彼だけ は鎧 ŧ 纏 わ ず、 剣 えも帯 びて 7 な か 0 た。

· の 頃 は 十七、 八。 近 衛 で最も若 傍らにて 乗騎を寄せ 将、

師

1

の中

る

副

グ

を

年

ランスレ イとは、 まる で親と子との 間 ほども年齢 が 離 れ て見える。

地 上 に 展 は開させ たの は 中 隊 隊、 敵 軍 千に対 L 7 左 軍 五. 百 騎  $\mathcal{O}$ 内、 八 小 隊 匹

たず、 既に終幕 に . 差 し掛 カン ってい た。

百

騎

0

み

だったが、

夜明けとともに始

ま

0

た戦

1

は

陽

が

中

一天に

昇りきる

0)

を待

左

地上では 中 将 フ レ 1 ザ ]  $\mathcal{O}$ 率 1 る左 軍 が 敵  $\mathcal{O}$ 陣 形 をほ ぼ 崩 L 終 え 7 1 る。

軍 の残り二小 隊 約 百 騎 が 上 空に 待機 L 7 1 た が どうやら投 入  $\mathcal{O}$ 必 要は、 なさ

そうだった。

想定してい たよ り 早く 終 ŋ ます な。 さすが は フレ イザ だし

地 上 0 戦 沢を注 視 L てい た副将グラン ス レ 1 が 満足 の色をその頬 に浮 カン

る。

近 衛 師 寸 第 大 隊 中 隊 左中 右 軍 0) 内、 フレ 1 ザー は左 軍 を 預 か る中 - 将だ。 草

原や荒野など、 広 範 囲 で  $\mathcal{O}$ 布 陣、 采配を得意としてい . る。

ただ有利 に運  $\lambda$ では 7 るも  $\mathcal{O}$ の、この戦いを終わらせるための重要な要素が、

眼下の 戦場 E . は 欠 け Ć 7 た。

そ れ を探 してグランス レ 1 が 銀髪 の頭 でを僅か に巡らせた丁度その

た。

奥の

角

が俄

か

に

· 騒 が

しさを増

した。

レ

オアリ

ス

が

口元

に

笑みを浮

か

べ

る。

時、

敵

陣

 $\mathcal{O}$ 

その 場 に、 何 か 巨 大 な影 が立 ち上がろうとし てい

腐 0 た水 0 ような臭い が 周 囲 に立ち込める。

そ の臭気 の主 が、 土  $\mathcal{O}$ 中 カ ら次第に姿を現していく。

小 Щ 0 ような背、 鋭 1 鉤 爪 を持 った節 くれだっ た

捻 れ た三本の角と、 蹄を持 0 た脚。 つだけ  $\mathcal{O}$ 瞳 が、 赤く 爛 Þ と光を湛えて

辺 りをぐるりと見回した。

馬 を落 フレ 5 1 ザ 着 か せ  $\mathcal{O}$ な 軍 が 馬 5, がたたらを踏 吹 くき付け る むように 風 に 継色の 7 激 髪を煽ら L Š 7 れ ななく。 るまま、 手 綱 フ レ を引き愛 1 ザ

は 前 方に立ち はだ かる異容を見上げた。

牛蹄 種 か。 初め て見たけど、 とんでも ない 大きさね」

0 世界  $\mathcal{O}$ 中でも、 これほどの異容と巨体を持 つ種は 滅 多に ない。

獰猛 で 戦乱と血 を好 む 種、 種、 戦闘: 種 と呼 ばれ . る種: 族だ。

手に L た斧も ま た、 刃渡りだ けでも軍 馬  $\mathcal{O}$ 大きさを軽 、凌ぎ、 振 ŋ 回さ れれ

ば 通常の 剣や盾など、 まるで意味をなさないだろう。

たなけ れ ば 戦 1 は 終わ 5 な 

だが

アフレ

イザ

]

達が待ってい

たのはこの相手、

敵軍

中の将、

ゴー

トただ。

将を討

敵 将ゴ  $\vdash$ は 大 地 カゝ ら巨大な身体を持ち上げ、 大気を押 ľ 潰すような咆

上げた。 押されるように 地 上  $\mathcal{O}$ 兵 士 達  $\mathcal{O}$ 陣 列 が 揺 れ る。

精 鋭と呼 ば れ る近 衛 兵 達  $\mathcal{O}$ 間 にさえ恐 怖 の色 が 広 がってい <  $\mathcal{O}$ を目 に 取 り、

イザ は 叱 咤 の声を上げた。

気圧され るな 陣 形を保て! ……すぐに上将が降 りられる!」

その声 を耳 に L た途 端、 兵士 達  $\mathcal{O}$ 青ざめた顔 に安 堵  $\mathcal{O}$ 色 が 点 る。

に 上 軽く息を吐いた。 空か 5 ゴ 1 0 姿を視界に捉えたまま、 レ オアリス は待ちくたび

れたよう

哮を

「漸く出たか。暢気な奴だ」

立ち Ĺ が った 状 態 か 5 は、 上空の 飛竜 にまで長い 腕が 届きそうだ。 手に した

敵陣の中に更なる混乱が満ちた。

戦

冷がが

風

を砕くように

振

り回

[され、

敵

味

方 問

わ

ず叩

きつ

け

られる。

退くぞッ!遅れるな!」

1 て フレ 7 <\_ イザ 錐 が  $\mathcal{O}$ 子 ょ うに め想定していたか 敵 陣 に 食 1 込  $\lambda$ のように、 で 1 た 部 隊が、 素早く 陣 中 央が 形を整えながら兵を退 退 くと共 に 両 翼

左右に展開し、敵軍を包囲し始めた。

あ れ が大将で は、 出 し たくなか ったの も無理 は ないでしょう」

を寄 吅 せて きつ け 1 た参 る 風 謀 に 金 官  $\mathcal{O}$ 口 髪 ツ 1 を巻き上げ バ ル } は、 5 そ れ 0 なが 整 0 ら、 た 顔 グ に ラン 皮皮 肉 ス  $\mathcal{O}$ レ 篭 1  $\mathcal{O}$ 0 た 反 薄 対 1 側 笑 に 4 乗 を 騎

刷き巨大な姿を眺めた。

井 乱 す が 口 る近 満 ツ 5 1 衛 る バ ば 師 ル 寸 卜 か り  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 戦列 言葉 で、 士 通 気 り、 逃げるように打ちか が 大将 上 が る が \*姿を 様 子 は全く 現 L たとい 、見て か 0 てい 取 うの れ な に \ <u>`</u> 敵 軍 逆に 内 に 自 は 1分達 却 0 を包 7 混

元 々が 不満分子 の集合体で組 織 力も政 治力 t あり ませ  $\lambda$ から ね。 つの 力だ

けが抜きん出ていたところで、結局は脆い」

すべきかと、 んだ笑みを眺め、 だがあの種は、 ロッ トバル 何も言わずにそれを戻した。 非常に高い戦闘能力を有している。 トは 右 降に 視線を投げ たが、 小隊一つ投入して切 レ オアリ ス 0 口 元 に り離 浮 か

「行ってくる」

一言だけ告げ、 レ オアリスが 飛竜の背を蹴 った。 そのまま地 上 一に向 って飛 び

降りる。

背中に纏う黒い長布が風を孕んで大きく広がる。

全身を取 いり巻く 風 を感じながら、レオアリスは右 手を自 5  $\mathcal{O}$ 鳩 尾 に 充てた。

そのまま、ずぶりと手首まで呑まれる。

そこから、青白い光が零れた。

手を引き抜くにつれ て光は 灰色の大気を青く染め、 地 上 一に落 5 か か っった。

ゴートの巨大な頭が光に気付いて上空へ向けられる。

つ眼が、驚愕と敵意に見開かれた。

敵陣の中に、波のようにざわめきが広がる。

ゴートが引き絞るように吼えた。

「レオ……アリス!」

青白 7 筋の 尾 を引 1 て敵 陣  $\mathcal{O}$ 只 中 に 降り立 一つと、 レ オアリス は手 にし た剣

を一閃させた。

青白い光を纏う、美しい長剣。

「け――、剣士……!」

再び、 敵 陣 が 揺 れた。 ゴ 1 が 現 わ れ た 時 よりも更に強 い 恐怖 が、 鎧もご 纏わ

ず、 ただ一振りの 剣を提げただけの少年 を中 心 に広 がっていく。

『剣士』

自らの体の一部を剣として戦う種をそう呼ぶ。

種としての数は多くは 無 V) が、 人が 百の兵を抑えると言われる程 高 7 戦 闘

スは最高位と謳われる剣士だ。

能力を有

L

7

١ ر

る。

戦

闘

種

の 中

で

ŧ

頂点に立つ種であり、

その中でも

レオ

ア

ij

通常、 剣 士 0 剣 は 主 に腕などを変化させたものだが、 レ オアリスはその十三

対目の肋骨を剣とする。

対の 剣、 それを持つものはただ一人、レオアリスのみだった。

後退る敵兵の中を悠然と歩きゴートの前方に立つと、 自分より数倍も  $\mathcal{O}$ 身の

丈を持つ敵 将を見上げ、 レ オアリス は 楽 んしげ な笑みをそ 0 頬 に 乗 せ た。

巨大な戦斧が風を裂く音を立てて振り上が り、 レ オアリス め が け 7 吅 きつけ

られる。大地を砕いて轟音が響く。

グラン スレ イは 眼 下 0 戦場 を眺め、 諦観とも苦笑とも つかない 形に眉を しか

めた。

「たまにはおとなしく戦況を見届けて戴きたいものだ」

大将自らが 戦場に立ち、 自 軍はその剣威を畏 れて陣を引く。 通 常常  $\mathcal{O}$ 戦略 にも

戦術にも無いものだ。

だがそれだけ、剣士の剣とは、破壊的な力を持っている。

まあ、剣士とはそういうものなのでしょう。全体の動きをただ見てい ろと言っ

たところで無駄ですよ」

口 ットバルトは既に、レオアリスが降りる事を想定した上で陣を引いている。

フ レ 1 ザ もそ  $\mathcal{O}$ 布 陣 に 従 って、 深すぎず、 浅すぎず、 自 軍 に 影 響を受け ずに

敵 陣 を囲 む ため  $\mathcal{O}$ 距離 を 保 ってい た。

本来、 大将ともなれ ば 軍 を采る 配 する事が主たる役割であり、 通常戦 場 で 直 接

剣を握る事 は 少 な \ <u>`</u>

大将 が 討 たれ れ ばそ 0) 軍 は 脆 \ \ \ だからこそ、 基本的にはどの 軍 ŧ 戦 場 12

お いては大 将  $\mathcal{O}$ 周 りを 固  $\Diamond$ る事がら 重要になる。

だ

が

レ

オ

アリ

ス

にとっては

そ

れ

は

煩わ

しい

ŧ

 $\mathcal{O}$ 

で

L

か

な

۱ ﴿

ようだった。

剣

士

にとって、 戦う事 は存在 0 意味と同義だ。

剣 士 は畏怖される。 敵 0) みならず、 自 軍に ŧ,

殺戮者』  $\neg$ 切 ŋ 裂く 者。 『戦うため に  $\mathcal{O}$ 4 生 ま れ

る種

そ れ が 剣 士 のもう一つの呼び 名でもあっ た。

戦 闘 種 同 士  $\mathcal{O}$ 戦 7 か…。 見物というには危 険 極 まる な

口

ツ

1

バ

ル

1

は

もう一

度、

眼

下

 $\mathcal{O}$ 

布

陣

を

見

渡

L

た。

レ

才

T

IJ

ス

 $\mathcal{O}$ 

剣

威

 $\mathcal{O}$ 

想定

怯え

て興

範 囲 を生 か に 上 口 るように、 予定 通 ŋ 陣 は 展 開 L て ζ, る。

アリス 0 剣 から発する強力な 圧 力 が 上 空 0) 飛竜に まで届く。

奮する飛竜  $\mathcal{O}$ 手 綱 を引 1 て宥 8 なが ら、 口 ツ 1 バ ルトはに 頬を叩くその 圧 力 に 目

を細めた。

右

手に提げた剣、

何

0

飾

り気、

ŧ な

V ;

戦うための

みに形造られたもの、

それ

その姿はまるで、 見る者の目に一振りの剣のように映る。

故に息を呑む美しさと危うさとを併せ持 <u>つ</u>。 剣士とは、 どちらがどちらを映し

た のだろう?

口 ットバルトはふと疑問を覚えて地 上 一に注 7 でい た瞳を上げた。

考えてみれば、 上将 が二刀をお持ちになるところを見た事 が あり ませんね。

副 将はご覧になった事 が?

オアリス は二対の 剣を有する。 だが今まで彼が二本の 剣を抜いたところを

見た事が 無 カ った。

口 ツ } バル トは近衛師団 に配属されて比較的日が浅く、それ故に眼にした事

が な 7  $\mathcal{O}$ か とも考えたが、 グランス レ 1 は首 を 振 って否定した。

剣 私も無 士として覚醒されたときに一度だけあったとお聞きしているが。 おそらく、 師 団に お入りになってからはまだ一度も無い だろう。 度見せて

頂きたいものだが、 恐ろしい気もするな」

グランスレ イの言葉が吹き上がったゴートの咆哮に紛れる。

ゴートの戦斧が、巨体からは想像できない速度で雨のように振り下ろされる。

砂 塵が吹き上がり、大地が割れ、岩となって隆起する。

オアリスの身体を切り裂く紙一重の位置を刃が過ぎ、

ゴートの位置は、 レオアリスの長剣から考えられる間合いにはまだ遠い。未

再び地面を砕いた。

だ剣を振ってすらい ない レオアリスに対し、 己の優位を確信してゴー トは 嘲

の笑いを浮かべた。

「どうした、ちょこまかと逃げ回るだけが剣士か?ただ提げているだけなら、

その剣は飾りと変わらんな」

オアリスは、自分の背丈よりも更に広い刃渡りを持つ戦斧をちらりと眺め、

返すように笑った。

「そう言うなら当てろよ。 お前の斧はでかくて見えやすくてな。でも、 避ける

のももう飽きた」

―この小童が!」

ŋ

ゴ ] 1 が 吼 え、 戦 斧を 引 **(**) 7 再 び 振 り下ろす。 V オアリ ス は 避 けようともせ

ず、 頭上に 降 ŋ 掛 か る戦斧に 向 け て、 右腕に提げた剣をすいと上げた。

青白い光が弧を描くように流れる。

ゴー 1  $\mathcal{O}$ 戦 斧 に対 し、 レ 才 マアリ ス  $\mathcal{O}$ 長 . 剣 は 余 ŋ に 頼りなく 映 る。 周

囲の兵達

が剣が砕けるのを予期して思わず顔を背けた。

金属同士のぶつかり合う激しい衝撃音が響く。

呻 1 たの ば カン はゴ な ートの方だった。 つ 目 が驚愕 に見開 か れ、 周 囲かり らどよめき

にも似た声が上がった。

ただ頭上に掲 げ られただけ  $\hat{O}$ ように映 るレ オアリ ス の剣 が、 巨大な戦斧を受

け止めている。

力任せに押し切ろうとして、高い亀裂音が走る。

ゴートの視線の先で、戦斧は音を立てて砕けた。

「馬鹿なッ!」

慌て斧を退こうとした腕を追って、レオアリスは一歩踏み込むと、 下から斬

り上げるように剣を振り抜いた。

「そんな距離で届く訳が……」

生じた剣 風 が 衝 撃波のように大地を砕いて走り、ゴートの右肩を突き抜けた。

を剥き出すように口元を歪め、レオアリスに顔を戻した。

鋭

į,

衝撃を感じたも

 $\mathcal{O}$ 

*(*)

視線

 $\mathcal{O}$ 

先

 $\mathcal{O}$ 

肩口には何

 $\mathcal{O}$ 

異常もない。

ゴート

は歯

「何のつもりか知らんが」

歩踏み É ľ た瞬 間、 ずるり、 と 湿 0 た音を立て、 ゴー  $\vdash$ 0 右腕 が ずれ た。

まるで始めから外れるものだったか

のように、

地

面の

上に

落ちた。

抱えもあ

る腕

は、

自軍を退 か せる理・ 曲、 それはここに起 因する。 剣 が 生 4 出す 衝 波 が、 容赦

なく周囲を切り裂くからだ。

一瞬の後、苦痛に満ちた咆哮が辺りを震わせた。

残った腕 が · 苦痛· を掻き消そうとするか のように、 闇雲 に 振 り 口 「 され

掠 8) ń ば吹き飛ばされるだろうその腕を少しも気にした様子もなく、レ オア

リスは平然と歩を進める。

剣 士 11 1 11 7 !

獣  $\mathcal{O}$ 如 < 、吼え、 ゴ } - が残 <u>つ</u> た左 腕を振り上げた。 その腕 が、 どす黒く瘴気

を纏 っていく。

ゴ ] } は その拳を、 レ オアリ スへでは なく自ら  $\mathcal{O}$ 足元に突き立てた。

衝擊 た大 地 が 小 刻みに · 揺 れ、 砕 け て隆 起 L 散 乱 L てい た岩が、 ゴ 1 向 0

てゆっくりと動き始める。

その 動きが 次第に速度を増していく。

ぐずぐずと音を立て、泥

大地 古 ( ) 岩盤 は巨大な沼と化し、岩も自軍の兵も関係なく、 が、 のように溶けていく。 辺りのも 0 を飲み込み始

めた。 レ オアリス の足元も、 ズブリと音を立てて沈んでい 

引きずり込んでくれる!」

自らも沼 の中に沈みながら勝ち誇るゴートの姿を眼下に捉えたまま、 謀官

口 ツト ル  $\vdash$ は 片 手を上 げ た。 隊  $\mathcal{O}$ 術 士 が すぐに乗 騎 を寄 せ る。

だが 指 示 を出い す前、 に、 口 ット . バ ル 1 は 開 きか け た П を再び閉ざした。

オアリス 0 身体はすでに膝 の 下 まで泥に沈んでいる。 それに構わず、 オ

ア リス は ゴ ] トと 距 離 を 測 るように前 方に視 線 を投げた。

無造 作 に 剣を掲げると、 息 に 振り下 -ろす。

剣風 が 生じ、 大地 を激しく打った。

反 動 を利 用して、 レ オアリス 0) 身 /体が ふわ りと宙 に浮き上が る。

戦斧の柄 の上へ降り立った。

宙空で身体を捻り、

度沈

4

か

けた岩を蹴ると、

大地

に突き刺さっ

たままの

上体を起 こした正面 記に、ゴ 1  $\mathcal{O}$ 顔 が あ る。

ま……、 待て、 降伏する、 だから……」

V

オアリスの

 $\Box$ 

元に凄惨なま

で

0)

笑み

が

浮

かぶ。

剣

が

層 0

光をは

纏

0

た。

ゴー 1 は 残っ た 一 本  $\mathcal{O}$ 腕 を押 L 止 めるように突き出 恐怖 と苦痛 に 顏 を歪

ませて泥  $\mathcal{O}$ 海 を数 歩後 退った。

お 前 は 王 に 双 を 向 けた。 今更、 無理な話だ」

言 「葉と同 時 12 青 白 1 閃 光が · 幾 筋 ŧ 走る。

次 の瞬 間 弾 け るように、 ゴ 1  $\mathcal{O}$ 体 が 幾 つ ŧ  $\mathcal{O}$ 断片となって崩 れ た。

ま るで巨大な刃に穿たれたかのように液状化 した大地が深く削られ、 中空に

巻き上がる。 ばらばらになった肉片を巻き込み、 再び 地 面 に降 り 注 いだ。

光が消え、 揺らい でい 、 た 地 面 は、 中途半端に岩を飲み込んだ形のまま、 元 の

姿を取り戻す。

僅 か .. の 静寂の後、 敵陣 が恐慌に包まれた。

戦意を失った敵兵達は 武器を取り落とし、我先に背を向けて駆け出していく。

フレイザーはその様を見ると、 円形に展開させていた陣を収縮させた。

に次々と棚引き始めた。

敵兵が 取り押さえられる中、 師団 軍旗 が荒地を吹き抜ける風に煽られ、 地 上

太陽は今だ、中天には達していない。

大 陸  $\mathcal{O}$ 西 部 に 位 置する王国アウレ ウ ス は、 グ イ ノシス大陸 で最 なも広 大で

な 国 |土を有 して 1 る。

現 王  $\mathcal{O}$ 在位は長く、 既に三百年に渡り安定した。政が続いている。

来し は された正 時 国 土には に 荷 馬 規 車 王 軍 を  $\mathcal{O}$ 都を中心に放射 五. 部 台か 隊が ら十: 治安維持に当たっ 台連 状に ね、 街 道が 護衛 の兵をつけて、 ている為、 整備され、 国 内 またそれぞ 主街道  $\mathcal{O}$ 物流 は れ 沿 (T) 盛 1  $\mathcal{O}$  $\lambda$ 地 街を 域に 配備 行き 商 隊

ただ、 国土の特性上、 アウレ ウス王国 には、 他国との交易が制限され た土 地で

た。

ŧ ある。 東  $\mathcal{O}$ 玉 境 沿 1 に は 峻 険 ミスト · ラ 山 脈、 西に 古にしえ の 海

漠アルケサス、

北

に黒森ヴィジャが広が

り、

行く者の足を阻

むか

らだ。

特

に東

バ ル

バ

ド

ス、

南

に

灼

熱

 $\mathcal{O}$ 

砂

 $\mathcal{O}$ ミス 1 ラ Щ 脈 か 5 先 は、 現 在 ŧ 玉 土 争 1 が 続 < 小 玉 が 多 ( )

む 絶 王 好 玉  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 塁 兀 一壁でも 方 を 取 あり、 り 巻く アウレ 生者を寄 ウ ス せ 玉 付 を け 戦 め 乱 酷 か 地 ら遠ざけてくれ は、 逆に それら てい 小 玉 た  $\mathcal{O}$ 侵 入 を阻

玉

境を: 以 出 来 大 L 接す た戦 きな 玉 内 は 乱 る 戦 安寧を保ってい は、三百年前 乱  $\overline{\phantom{a}}$ 西 は 海 番最 バ 近と言 ル に バドスとの百年戦争まで遡る。 両 た。 玉 つ  $\mathcal{O}$ て 間 ŧ, に 不可侵条約が お よそ四 百 年 結ば 前、 される事 双方共に多数 ア ウレ で漸く決着を見る ウス 玉  $\mathcal{O}$ と 死 西 者を  $\mathcal{O}$ 

玉 内 は 王  $\mathcal{O}$ 統 治 Oもと、 四大公と呼ば れる四 つ の 公爵 家、 +  $\bigcirc$ 侯爵家、 及び

九 + 九  $\mathcal{O}$ 家 政 務  $\mathcal{O}$ を司 諸 侯 る が それ  $\mathcal{O}$ は ぞれ 大 別  $\mathcal{O}$ 領 L て 四 地 を治 0  $\mathcal{O}$ 8 機 関 て 1 に る。 分 か

玉

内 政 を 司 る内 政 官 房、 長 は 匹 大 公 0) \_\_ 角、 北 方 公 べ ] ル。

れ

る。

治 水、 土 地、 生 一活を 司 る 地 政 院、 長 は 東 方 公 ベ ル ゼ ピ ア。

財 務、 商 工 業 を 司 る 財 務 院 長 は 西 方 公 ル シ フ ア

治 安、 軍 一務を司 る軍 部、 正 規 軍 0) 長 に 南方 公ア ス タ ロ 

内政官房は他の三部門を総括、調整する役割も果たしている。

た。

ま

た

正

規

軍

غ

は

別

に、王と王城を守護する王直

属

の軍である、近衛

師

寸

が

あ

0

高 1 天 蓋 に . 嵌  $\Diamond$ 込 ま れ た 飾 ŋ 窓 か ら、 陽光 が 様 々 な 色彩 を 纏 0 7 降 り 注

大 理 それだけで三層 石 0 床や広 間  $\mathcal{O}$ を支える数十 建 物 程 の高さは 0 柱を柔ら あろうかという巨大 か < 浮 か び 上 な が 5 両 開 せ きの てい 扉 る。  $\mathcal{O}$ 

深 緑  $\mathcal{O}$ 絾 毯 が 広 間  $\mathcal{O}$ 奥 ^ と真 つ 直ぐに敷 カ れ 7 延  $\mathcal{C}_{\mathcal{C}}$ 7 1 た。

王 ^ 0 謁 見 (T) 為  $\mathcal{O}$ この 広間 は、 百十三家 の諸 候 お ょ び 各官 衙  $\mathcal{O}$ 首 級 諸 官 が

T IJ ス لح 副 将 グ ラ ン ス レ 1  $\mathcal{O}$ みだ。 二人の 正 面 に は + 数 段  $\mathcal{O}$ 階 段 がが L つら え

れ、その高みに玉座があった。

同

に会す

うる事

が

可

能

な

ほ

どの広さだった

が、

今玉

座

 $\mathcal{O}$ 

前

12

跪

1

て

V)

る

 $\mathcal{O}$ 

は

レオ

高 1 天 井 か 5 流 れ落 ちるような暗紅色 <u>ー</u>の 長 布 の前 に、 燻したような銀 の材質

前

から、

で造 5 れ 精 緻 な 彫 刻を 施 され た 玉 座 が 置 か れ 7 1 る。

老  $\mathcal{O}$ 長、 その の — 右隣 人でもある。 ベ ] ・ルだ。 に常 に 風貌 <u>\frac{1}{2}</u> 0 は 0 若いが、 が 匹 大 公 王とともに長い歳月この国を支えてきた最古  $\mathcal{O}$ 筆 頭で あ り、 王の補佐を務める内政官房

引き締まった体 もう一人、階下に背の高 上躯をレ オアリスと同じ黒の士官服 ζ) 老齢 の男が控えている。近衛師 に包 み、 団 その背に 総 将アヴァ は 近 口 衛師 ン。

寸  $\mathcal{O}$ 軍 旗と 同 じ、 黒地 に 王  $\mathcal{O}$ 紋 章 暗 紅 色の 双 頭  $\mathcal{O}$ 蛇 が あ L 5 わ れ た長 布 を

纏っている。

王 の守護たる証 であり、 近衛師 寸 の中でもただ一人、 総将の みが 纏 う事 を許

されるものだ。

そして玉座には、この強大な王国の主が悠然と座していた。

短  $\Diamond$ 0 銀 髪を後ろに流 鋭 1 容貌  $\mathcal{O}$ 中に 金 色の 瞳 が全てを見通すような光

を湛えている。

は、 幾 それだけで周 重 ŧ  $\mathcal{O}$ 暗紅 色 囲を圧  $\mathcal{O}$ 長衣 なに包ん 倒 Ļ だ長身を、 竦ませる程 玉 の空気を身に纏ってい 座  $\mathcal{O}$ 背に 預 け . て 座 すその た。 壮 年 0) 姿

段下に 跪 き早 朝  $\mathcal{O}$ 戦  $\mathcal{O}$ 報告 を行うレ オアリ ス の言 1葉を、 王は瞳 を伏 いせた まま

聞いている。

王 の眼 は世界を遍く見通すと云われる。 それ故に王の前に跪く者は、 審判を

受けるような極度の緊張を覚えた。

王にとっては本来報告など必要としないが、 それは王の 敷く王制  $\mathcal{O}$ 仕 組

形式の中でこそ、

国家とは安定を保

0

事

が

4

Ó

できる。

中で必要な一つの形式でもあった。

報告を終え口を閉ざしたレオアリスは、 面を伏せたまま王の言葉を待った。

る。

の僅

かな静寂

0)

時

間にいつも、

レオアリス

ん は 自

分の心

臓

の鼓

動を数えてい

戦場に於いてもこれほどに鼓動を感じる事はない。

それは畏怖であり、戦慄であり、憧憬であり――期待だ。

王 は やがて瞳 を上げると、 暗紅 色  $\mathcal{O}$ 長 衣をゆ ったりと揺ら 金  $\mathcal{O}$ 光彩 の瞳

を満足そうに細めた。

低く深い、 響きの良い 声 が流れる。 聞く者の魂を竦ませ、 また包み込み捉え

る声だ。

「ご苦労。兵をゆっくり休めよ。」

抑えていた息をつき、 静かに頭を下げるレオアリスの上から、 更に 一声が

かか

る。

「見事な戦 いぶりであった。 久々にそなたの剣を見てみたいものだ。」

オアリスは 僅 カ に 瞳を見開き、 伏せた顔 に微か な、 だが誉められた子 供が

見せるような喜色を浮かべた。

その年 齢 相応ともいえる喜びの感情 に、 少し 下がった位 置 に 同 じく跪

ランスレイは心の裡で微笑った。

V 才 アリ スにとって王 は、 こ の 王 国  $\mathcal{O}$ 王、 近 衛 師 団 の将として守るべき主と

いうだけの存在ではない。

レ 才 アリスの 育った北方の村では、 彼 が生まれた頃から王とのささやかな関

わ り が あ 0 た。 長老達 が王と取 り 交わ L た 何 事 か  $\mathcal{O}$ 約定 に ょ り、 年に一度、 王

都 か 5 北 方 0 辺 境  $\mathcal{O}$ 村 こまで、 数十冊  $\mathcal{O}$ 書 物 が 届 けら れた。

そ の約 定 が 何 に 曲 縁 するの か、 長老達 に尋ねても明確な答えはなく、レオア

7

たグ

IJ スが 知っている訳では ない。

けれども、 レオアリスはそれらの書物に囲 隔 絶されたようなひっそりとした村で、 まれて育ったのだ。 冬の 雪に閉ざされた世界

その事は 静かに、 確 実に、 レ オア IJ ス 0) 中 に 根を下ろしてい る。

٢, 何となくそう思っていた。

会った事も姿を見かけた事すら無か

0

たが、

いずれ王都に出

て王に仕えたい

初 8 て王に拝謁 した時は緊張  $\mathcal{O}$ あ ま り、 どん な言葉を掛 けら れ た  $\mathcal{O}$ か、 自分

が 何を言ったの か、 殆ど記憶に残ってい ない。

ただひたすら嬉しいと感じた事、 そしてその黄金 の瞳をどこか懐かしいと感

ľ た事を、 漠然と覚えていた。

れ 0 お あ つりす~!」

中にぶつかられ、 謁 見 0 間 を出た途端 レ オアリスは軽くむせた。 澄 んだ楽器 の音色に も似た明る *\* \ 声と共に勢い良く背

背後から肩にするりと細い腕が回される。

「……アスタロト」

肩に乗せられた顔を横目で睨む。

黒 1 艶 B カゝ な髪を高 < 結い上げて背中に垂らし、透き通るような白皙 0

面

に

紅い瞳と唇が映える。

非常に華やかな、美しい少女だった。

年の頃に は レ オアリスと変わらない。 外見かり らでは 実際  $\mathcal{O}$ 年齢 [を計 り 難 1 種は

時点ではまだ彼等は見かけどおりの若い存在だ。

この世界に少なくはな

V )

アスタロ

トもレオアリスもまた同

様だっ

た

が、

この

施された丈の短 5 りと伸びた白 アスタロ } は い足にふくらはぎまでの黒い革 1 襟 黒の上下を身につけ、二の腕  $\mathcal{O}$ 詰 まった青い 長 衣を纏い、下に の半 靴 を履 は ばまである黒 V 細 ている。 1 銀糸で 繊 い手 細 袋と、 な刺 繍 す  $\mathcal{O}$ 

手や首、 耳に惜しみなく飾られた銀の装身具 が、 その容姿を一層引き立てて

いた。

「嬉しそうな顔してるなぁ。誉められたろ」

アス タ 口  $\vdash$ は  $\mathcal{O}$ ょ V ) とレ オアリス  $\mathcal{O}$ 肩 か 5 掛 か る長 布 を持 ち上 げ、 S らひ

らと振 ··· 7 4 せ た。

お 前 ホ ンッとガキみたい~。 すぐ分かるンだもん」

「うるせぇ な

長 布  $\mathcal{O}$ 裾を奪 7) 返し、 V オアリ ス は 不 満 の色 も濃く眉をしか 8 た。 だがそう

てみても、 口元 にはまだ微かな喜色が ある。

言葉に

して確

認

L

) た 事

も無く、

またレ

オアリ

ス自

身がそう言っ

て

*\* \

る訳

でも

な 7 が、 レ オア リス が 王 に仕える様は、 まるで子が 父を慕うの に も似 てい た。

アスタ 口 トには にそれが 面 白 いらしく、 折に触れてその事をつついては オア

スをか 5 か 0 7 1 る。

オ アリ ス 0) 表情を捉え、グランスレ イは苦笑を浮かべ た。 そん、 な姿は 例え

他 者 から畏怖される剣士ではあっても、 彼が まだようやく少年の 域 を 抜 け 出

か けた程 な 0) だと改め て 思い 出させた。

そしてグラン スレ イはそこに、 言葉に 、 は 出 せ ない 安堵を覚え る。

ふとアスタロ トの 背後に控えている男に気付き、 グランスレイは密 か に . 眉を

顰め、正規軍の上級士官服を纏ったその男を眺めた。

背が低く横にどっしりと肥え、 あまり軍人らしからぬ容貌ではあるが、 正規

軍二等参謀官の一人で、確か名をダルベックと言ったはずだ。

ダルベックは、二人の会話をどこか疎むような表情を浮かべて眺めてい

たが、

グランスレイの視線と合って決まり悪そうに顔を逸らした。

グランスレイは改めて向き直り姿勢を正すと、アスタロトに対して深々と頭

を下げた。

「お久しぶりです、炎帝公」

「よう。一隊は頑張ってるな~」

アスタロトはにっこり笑ってグランスレイに手を振ってみせる。

形式という

ものを気にしない点で、この二人は良く似ている。そういうところも気が合う

理由なのだろう。

まだ背中に張り付 いたままのアスタロトを、 レオアリスは首を捻って睨 み付

けた。

「いい加減離れろ。鬱陶しい」

気にすん な

炎帝公アスタロ 

るが 四大公の一人であり、 レ オア IJ ス が 王 都 正規軍将軍を務める。 に 来る前 に二人が 出会つ 立場上レ たとい オアリスより上位 う事と、 年が 同 にあ で あ

だ。

したり、

る事

か

5

か

正

規

軍

 $\mathcal{O}$ 総

将と近衛

師

団大将というよりは、

ごく親し

1

友

人

同

士

師 寸 0) レ オアリスを引っ張 オアリ Ź 0) 執務室に り出してはあちこちに出かけてい ŧ 頻繁に 顔を出 よく二人で他愛も な 話 を

正規軍 の執務はどうしたのかと、グランスレ イが いらぬ 気を回す程だ。

「なぁ、 遊ぼうぜ、 遊ぼ う。 街 いこ、街」

今もアス タロ トはうきうきと声を弾ませ、 背 中 カン らレ オアリス 0 横 顔を 覗き

込んだ。

かべた。

ああ? オアリ ノスが 何 言 あっさりと却下すると、 0 て んだ。 そん な暇 ね え アス よ。 タ 俺 口 は 1 · は 美 れ カン L 5 戻 7 頬に呆れた色を浮 0 て演 習

30

ば つか お 前、 何そんなに働 \ \ てんだ。 朝、 陣 張 0 たば かりだろ。 たまに . は 息

抜きしろよー」

「お前はたまにも何もないだろ。働け」

レオアリスは 構 わず、 ずるずるとアス タロ  $\vdash$ を引きずるようにして

ずられるような状態になる。

き出した。

レオアリスの方が少し身長が高

١ ي

ために、

アスタロ

 $\vdash$ 

は

爪先を引き

廊下

を歩

だがアスタロトも肩に回した腕を緩めるつもりは

無いようで、

形の

良

眉を

"冷たい……アリスちゃん」

切なそうに寄せ、

深々と溜息をつい

た。

「その呼び方はよせっ」

「いいじゃん」

「いい加減離れろっ」

「いいじゃん」

長 1 廊下 · を 擦 れ違う官吏や諸侯が笑いを堪え、 あるい は眉を顰めてその様子

を振り返っていく。

グランスレ イは二人の後ろを歩きながら、 彼らの 顔に浮 かぶその二つの

に、 レオアリスの立場 の微妙さを思った。

でも ない。 オアリスは貴族の出でもなく、王都に縁故もなく、 剣士として 0) 力が 彼を現在  $\mathcal{O}$ 地 位 に · 置 1 てい るが、 強力な後ろ盾を持 それ に うい つ 訳

若すぎるという批判が常に付 いて回る。

そうした背景は年若 い者達 には好まれるが、 年季の入った者ほど、

るという事その ŧ 0 を 疎 む声 も多か いった。

レオアリスが 近 衛師 団に配 属されて既に三年近くが経過 Ļ その間

実績は多くの者 の見方を変化させたが、それでも未だに一部には根深 感 情が

あ る。

ただ、グランスレ イは苛立ちを覚えながらも、 その感情が消える迄には 尚 長

1 歳月を要するだろうと考えてもいた。

どれほどレ オアリスが 案績 を重 ね ようと、例え貴族の 出身であったとしても、

剣士という事 実が 消える訳では ない からだ。

剣 士であることそのものが、最大の問題であると言える。

に上げた

剣士であ

ても

ゆ 0 くりと、 歳 月を掛 けて払拭 L 7 くし か な

何 事 も起こさず、 ゆ Ó くりと。

様 々な記憶を流す程 の歳月を、 静かに。

V 才 アリ ス は 若 \ \ \ 全て、 はこれ か らでし カュ な 1  $\mathcal{O}$ 

7 くら誘ってもレ オ アリスが付き合いそうにない だ。 のを見て取ると、 アスタロ

幾 つもの 階段を下 'n, 正 門へと通じる大広間まで来て 7 る。

はようやく回していた腕

を解いた。もう既に謁見の間

 $\mathcal{O}$ 

前  $\mathcal{O}$ 

廊下を通り抜け、

押 し開ける。それほど力を加えているとも見えず、し 二人が近づくのに併せて、 扉を警護する近衛兵が、 かし扉は音 両 側から重く巨大な扉を も立てずに ゆ 0

< りと開 1 た。

た。 第一 大隊 今朝. 方 の兵ではな  $\mathcal{O}$ 陣 にこ つい *(* ) が、 ては、兵達 近衛兵達は も既 に聞き及んでい レオアリスに対 る。 Ļ 誇らしそうに敬礼

た 牛 蹄 0) が 種 自 は 分達 戦 場  $\mathcal{O}$ に 大将 於 1 1と聞 て 最 け t ば、 恐 れ 当然の 5 ħ る ように 種 族  $\mathcal{O}$ 誇りと信 つだ。 それ 頼が 深 を まる 7 とも容易く倒 Ł のだ。

王城内でのレ オアリスへの批判 などは、 直接命を預ける彼等にとっては、 全

< 見当 違 1  $\mathcal{O}$ 意見 でし か な *\* \ だろう。

扉 を抜い け ると、 広大な庭 遠 が 目  $\mathcal{O}$ 前 に 広が る。 扉  $\mathcal{O}$ 前 か ら数段下って広

り

場

が

設

けられ、

正面と、

左右

に緩

É

カン

に

弧

を描

で階段

が

十数段

続

1

て

7

た。

7

踊

射

階 下 に は 馬車 寄 せと、 黒 1 玉 石 を 敷 1 た広 7 道 が 正 門 ま っで 長 く 伸 び て る。

冬へと移ろう季 両 脇 に広 が . る庭! 節 袁 は常  $\mathcal{O}$ 中 に美 で、 密 L Þ Š 整えられ か な気配 てい を漂わせていた。 る が 今 は 雲間 に 翳 0 た 陽

ようが な V ; 1 7 ょ、 アー シアと二人で行くか 5

ようやく

諦め

7

腕を解くと、

アス

タ

口

トは迎え

0)

馬車、

を待

つ

ため

に、

階

段

 $\mathcal{O}$ 

手摺 りに 凭 れ カン カン 0 た。 鈍色に . 光 を弾 < 黒 ١ ر 大 理 石 は優美な 彫 刻 に 縁 取 5 れ、

T ス タ 口 1  $\mathcal{O}$ 姿 を 微 か に 映 す。

アー シ ア とい う Ó は ア ス タ 口 1 が 常に傍に 置 7 てい る従者だ。 自 由 気 儘

笑 を絶やさな *(* ) 少 年 だ。

奔放

なアス

タロ

1

· を常

に

補

佐

L

てい

て苦労も多い

だろうが、

*\*\

つも穏

やか

な微

「土産持 ってきてやら な 1 か 5 な

お 前 0 土 産はろくな 干 ンが 無 *\* \ カン 5 1 らね エ

つ……ば あ か ・つ!

振 ってレオアリス 悔しそうに足踏みをするアス はそのまま正 タ 門 口 ^ 向 トに顔を向けて、にや、と笑うと、片手を か った。 グランスレイもアスタロ  $\vdash$ に 敬

礼 レ オアリス の後を追 って階段 を下

アスタロ トに付き従っていたダルベッ クは、 V オアリス 0 後ろ姿を見送って

あからさまに 不快の色を浮かべた。

「公に対してあのような態度は、 例 え近近 衛 0 大将とは 1 え、 1 か が なも

かな」

棘を含んだ響きに背を向け、 アスタロ トは振り向 かず、 黙って正門の方を眺

 $\otimes$ ている。

ダルベックはアス タ 口 トが 何 ŧ 言わ な 7 事 を同り 意と受け 取 0 たの か、 重 ねて

 $\Box$ を開い た。

お 前、

何だ?」

り親しげなご様子 「大体、 公とは 身 をお 分が 見せになるのは賛 違 1 ・すぎま、 す。 周 (成致 囲 لح L  $\mathcal{O}$ か 兼 ね ね ます 合 1 ţ ŧ あ 第 り ま 剣士など」 ょ う、 あま

乾いてひやりと低い声に、ダルベックは口を閉ざした。

アスタロ トは振り向 か ないまま、 ちらりと視線だけを投げる。

あれは私の友人。お前は何なんだ?」

「身分?」

美しい唇に薄く笑みを刷く。声は魂を凍り付かせるように響いた。

「王都は実力主義だ。 それともお前は、 私が身分だけでこの地位にい るとでも

言うか」

全身に冷水を掛けられたかのように震え、ダルベックはその場に叩頭した。

「め、めっそうも……!」

言葉を詰まらせて数度叩頭し、 おろおろと立ち上がると、 幾度も腰を折 りな

がら慌てて立ち去る。

その後ろ姿につまらなそうな一瞥をくれ、アスタロ トは 改めてレオアリスの

姿を探した。 既にグランスレイと共に、 正門の 前 辺りにい る。

あいつも、色々やっかいなとこにいるよな」

丁度そう独りごちたとき、 目の前に音も立てず四 頭立ての黒い · 馬 車 が 滑 り込

んだ。

階下に停まると開いた扉からガチャリと小さな段が降ろされ、 飛び降りた紺

色の髪の少年がにこっと笑ってアスタロトに声をかける。

「アスタロト様」

頷い て馬車に乗り込むと、アスタロトは深く艶やかな緑をした天鵞の座席の

上に、ゆったりと腰をかけた。

少 年 アーシアが差し出した琥珀色の液体が入った摺り硝子の杯を受け取

り、一口舐める。

「剣士かぁ」

窓から正門に眼を向けたが、既にレオアリスの姿は門の向こうに消えていた。

再び背凭れに身体を預け、 アスタロトは見るともなしに、動きだした馬車の

窓を流れる正門を眺めた。

浮かんだのは他愛もない疑問だ。

アス タ 口 トと別 れ て 王 城 0 正 門を出ると、 レ オアリスとグランスレ 1 は、 正

門  $\mathcal{O}$ す ぐだ右 手 カゝ ら、 城 壁 に 沿うように建 てら れ て 7 る厩 舎 へと足を 向 け

正 門 ŧ 兀 方に 設 け 6 れ て お b, 才 アリス 達 が 主 に 利 用す る  $\mathcal{O}$ は 西 正 一門だ。

厩 舎も各門 にそれぞれ置 か れ 7 *\* \ る。

5 王 正 城 門 は広  $\mathcal{O}$ 大 あ な るこの 面 積 第 を 有 層 す まで る。 でも レ 才 ア か IJ な ス 達  $\mathcal{O}$ 距 近 衛 離 師 が あ 寸 り、  $\mathcal{O}$ 司 徒 令 歩 部 で  $\mathcal{O}$ あ あ れ る ば 第 大 層か 人  $\mathcal{O}$ 

り

足でも一 刻 近 1 時 間 を 要する。

匹

なく、 加えて王 馬や 、馬車、 城  $\mathcal{O}$ 内 ŧ 部 L は < 防 は飛竜 衛 上、 街 で 往 に 来す 設 け 5 る 0 れ が 7 常 1 だっ るような た。 移 動  $\mathcal{O}$ 為  $\mathcal{O}$ 仕 掛 け は

厩舎には 昼夜 を 問 わ ず 数 名  $\mathcal{O}$ 管 理 官 が 常 駐 し、 城 に上 が る官吏、 軍 将校

貴

族

達

などの

為

に、

彼

5

 $\mathcal{O}$ 

乗

騎

を

預

カン

り

世

話

を

L

7

*\* \

る。

位 以上 城  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 入 貴 ŋ 族 П 達 ま か、 で 、馬車、 官吏で言えば を寄せら れ 内 る 政  $\mathcal{O}$ 官 は 房など各官衙 ア ス タ 口 1 のような  $\mathcal{O}$ 副 長官以 高 位 上  $\mathcal{O}$ 貴 軍で 族、 は 侯 爵 正

規、 師 寸 کے ŧ に 総 将とそ  $\mathcal{O}$ 副 官 ま で、 と定い  $\Diamond$ 5 れ て 1 た。

上 が オ る。二人の ア IJ ス 達 飛 が 竜を 入 0 預 7 来 か 0 る て  $\mathcal{O}$ を目 **,** \ た管理 にに留 官 め、 は 彼 管 等 理官 0 達 飛 竜 が が 作 憩 業  $\lambda$  $\mathcal{O}$ でい 手 を止 る め 栅 7  $\mathcal{O}$ 立 前 5 に

案内 しなが ら、 に こや か な 顔 を 向 け た。

僭越なが ら、 大 、将殿  $\mathcal{O}$ 銀翼 は 非 常 に見 ル事な翼 へをお 持ちです ね

その言葉 に レ オ アリス は 嬉 しそうな瞳 屋を上げ た。

まだ若 1 飛 竜 で す が 成 長 毎 に 層 速 く飛 行できるようにな よう」

り

ま

L

今より? すごい な

オアリ ス 0) 瞳 が更に 輝く。 彼 0 飛竜 は大将位を得た時 に、 王 か ら下賜 され

たも のだ。 大 将 に な 0 て 唯 心 底 良 カン 0 たと 思 え る ŧ  $\mathcal{O}$ か ŧ L れ な 1

付 けたそれ ま だ若 1 は、 が 疾 以 1 前 翼 を 何 持 カン ち、  $\mathcal{O}$ 書 物 レ オア で見た IJ 言 ス 葉 0 意を良く汲ん カュ 5 取 0 た。 でく 疾風を意味 れ る。 でする。 ヤテ と名

ハ ヤテと L ば L ば 遠 乗 ŋ を す る  $\mathcal{O}$ が レ オ T IJ ス 0) 気に 入り だ。 尤 ŧ レ オ T IJ

ス 言 ŧ わ せれ ハヤテも若 ば 遠乗 りではな < 、また 好 らく曲 奇 心 乗 旺 盛 ŋ に な 近 面 が 1 強 Ź, 大人 しく飛び は L な 1

周

囲

に

V オアリス が近づくの に気付いて、 ハヤテは下ろしてい 、 た 長 , · 首をもたげて

主を待った。

延ばされた手に艶やかな鱗に覆われた頭を寄せ、 青い瞳でレ オアリスを見上

げる。

、 お 前、 誉められてるぜ。 まだ速くなるってさ。すげぇなぁ」

ハヤテはそんな事も判らなかったのかと言わんば

かりに、身体を一度大きく

震わせた。 それよ りも早く乗れと、首を押し付けるように して主を促 す。

厩舎の中で退屈 してい た様子が手に取るように見え、 レ オアリスは笑ってそ

の首を叩いた。

分かってるって。……少しくらい遠乗りに」

「上将」

背後のグランスレ イの咎める響きに、 レオアリスは肩を竦めた。

「また今度行こうな」

厩 舎 (T) 中庭から飛竜を上昇させ、 レ オアリスは第一 大隊 の司令部 0 ある 西外

門の方角へ騎首を向けた。

すぐ眼 1 Ł か しく ŧ L は、 下に れ は、 な 王 城 7 が を起点とし 街 道 その通 か ら王 て、 り 都 0 を 禁じら 左右 各 抜 方 け に 面 て は、 最 12 街 終 第三層 道 的 た。 が に 伸 正 び 門 貴 7 ^ لح 族 *\* \ 続 諸 ると表現す く大 侯  $\mathcal{O}$ 館 通 が ŋ る方 広 が が あ 0 が 7 正

 $\mathcal{O}$ 中で尤も 正 門の 周 広 囲 大 に な は 敷地 兀 大 ·を有、 公  $\mathcal{O}$ する。 屋 敷 が 兀 方 に 配さ れ てお ŋ, 言うまでも 無く第

1

る

為、

そ

 $\mathcal{O}$ 

上

を

無

闇

に

飛

5

事

は

れ

て

7

L

Ŋ 必ず か ア V 眼に オ カ ス アリ る タ す 都 口 スに 度 る 1 R  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ L は が 館 てみ り は 目 ک 兀 は n 大  $\mathcal{O}$ ば 公に 位 1 くが、 参 置 謀 継 カゝ 5 官 ぐ 実 何 は 口 度 力者であ 見 ツ 見 1 え ても な バ ル 1 そこ る、 1 が、 . の 生 ヴ は そ ま 温  $\mathcal{O}$ 工 代 か れ ル 育 4 ナ わ ]  $\mathcal{O}$ り 0 た 欠 侯 王 け 館 爵 城 でも た  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 無 館 行 !き帰 あ 機 だ。 ý, 質 な印 り

が 大 好 職 通 んでそこに居 務 度だけそこを訪 Ě りに沿うように 口 ツ  $\vdash$ バ ル る 1 れ  $\mathcal{O}$ 飛 は た は 竜 第 時 勤 を飛ば、 もやは 務 12 層 都 に 支給, り、 すと、 合 が 寒 さ 1 すぐに第三層と第二層とを仕 れ **(**) Þ とい る士 L 7 うだけで 印 官 象を受けたのを覚え  $\mathcal{O}$ 宿舎に は 居 な 起 1  $\mathcal{O}$ して だろ 1 てい څ . 切 るが る 中 る。

菛

彼

象

が

強

1

通

ĺ

層

に 差 L 掛 か る。

オアリス 基 本 的 12 0) は 乗 中 る 門 銀翼 で 度 は 飛竜 大将  $\mathcal{O}$ や騎馬を降 乗 騎を意味 り、 し、門での 衛兵による身分確認を経 確認を必要としなか る  $\mathcal{O}$ だが、 った。

現れ 第二層、 る。 正 規軍 軍 . 将 が 校 東西  $\mathcal{O}$ 官 舎区 南 北 を 抜  $\mathcal{O}$ それぞれの けると、 ようやく第一 方面ごとに配置されるように、 層に ある司 令 部  $\mathcal{O}$ 近 建 衛 物が

寸 ŧ また大隊ごとにこの第一 層 に 配 置されてい る。

に は 総将 アヴァ 口 ン 0) 総司 令 部 が あ 0 た。

西

が

第

大隊、

北に第二大隊、

東に第三大隊

0) 司

令

部

及

び

兵

舎

が

置

か

れ、

南

師

方に 角とし 総 置 司 · 令 部 て か 南 れ 方を た。 が 南 統 に . 置 括する為だ。 か れ る のは、 必然的 正 規 軍 に 正  $\bigcirc$ 総将 規 軍、 であるアスタ 近 衛師 団 とも、 口 } が 総 兀 司 大公 令 部 の — は 南

見 慣 ħ た 第 大隊 0) 指 令棟 0) 甍を視界に捉え、 レ 才 アリスは飛 竜 の手 綱 を

ってその中 庭 に 飛竜を降下させた。

繰

げ、 第 立ち上がって二人を迎えた。 一大 隊  $\mathcal{O}$ 司令 部に戻ると、 書 類 V に目を落として オアリス 0 表情を見てとり、 ١ ﴿ た 口 ツトバ 整 ル 1 0 た が П 顏 元に を上

笑みを浮かべる。

随分と嬉しそうですね」

そうか?」

そんなに顔に出ていただろうかと、レオアリスは改めて、右手を頬に充てた。

雰囲気で分かりますよ。王に 拝謁された時は、 まあ大体そうでし ょ ئ ر

何となく自分が子供じみている気がして、

レ

オアリスは室内を抜

がけなが

ら髪

をくしゃくしゃと掻き回 し、 自分の執務机に座った。

口 ツ トバ ルトが今までまとめてい · た書 類を手にその 前 に立つと、 机 0 上 にそ

れを差し出

本日の 記録です。 ご確認を。 よろしければその内容で総司令部及び内務 へ 最

終報告を上げ います。 死者は なく負傷者は いずれ も軽 傷ですので、 *今* 回  $\mathcal{O}$ 作 戦 は

満 足 出 来 る ものでしょう」

書類にざっと眼を通しレ オアリスが頷くと、 口 ットバルトは今度は 別 0 書 類

を 手 に 取 り、 最 初 ∅– 枚 を 捲 0 た。 記 さ れ て 7 る 0) は 午 後  $\mathcal{O}$ 演 習  $\mathcal{O}$ 布 陣 図 だ。

れ 0 副 布 将 と 三 陣 を 読 人 み上  $\mathcal{O}$ 中 一げる。 将 が V 左 オア 軍 に IJ 関 ス しては、今日一日は  $\mathcal{O}$ 前 に がうの を待 つて、 休養を取らせるため、 中 軍 右 軍 そ れぞ

右二軍での演習となる。

ば ス 中 0 口 戦 将 ツ に 術 1 あ バ た 戦 ル り、 略  $\vdash$ は 面 それ 第 で  $\mathcal{O}$ 大 は 補 隊 佐 正 的 規、  $\mathcal{O}$ な 役 等 師 寸 割 参 謀 とも を担う。 官 に共  $\mathcal{O}$ 任 に 通 大 隊 あ L り、 て  $\mathcal{O}$ 1 大将、 等 参 る。 謀 官 つ は ま ŋ 立 場 は 的 V 才 に 言え アリ

゙げ。またお前、そんなめんどくせぇ展開を……」

ヴ とらしく肩 1 中 軍 ル 1 中 ] 将 を竦 ル クライフが は  $\Diamond$ ち てみせた。 らりとその 心 底 閉 姿を眺 П L たよう め、 ĺ 1 天井を仰ぐと、 か に も仕 方な V ; 右隣 لح に 1 立 うように つ右軍 中将 わ ざ

 $\mathcal{O}$ 将 フレ 髪と瞳 クライフ イザ が は 年齢 そ とは  $\mathcal{O}$ さほ 性 にして二十代半ば、 格 ど変わ 0) 陽 気さを表 5 な \ <u>`</u> わ 南 L 口 7 方 ツ トバ *\*\ 出 身 るような男だ。 者 ル 特 1 ょ 有 り  $\mathcal{O}$ 僅 浅 黒 か に 1 肌 年 長 لح で、 明 る 左 1 茶色 軍 中

対するヴィ ル 1 ル は 三十代半ば 0 外 見に相応 しく、 長身 の背の 半 ば ま であ

る 灰 銀 色  $\mathcal{O}$ 髪と同 色  $\mathcal{O}$ 瞳 に、 落 ち 着 1 た物 腰 が 窺 え る。

お 前 が 陣 を組 む とい つ も単 純だ か 5 ね。 ま あ 苦手 なの t 無 理 は 無 1 口 ツ 1

「そうね。たまには思考回路を働かせないと、腐るわよ」

ルトが

組

む

陣

は

頭を使う必

要が

あ

るし?

な

あ、

フレ

1

ザ

「何でフレイザーに振るんだよ」

- 何てこしっサーに扱るみたる」

フレ イザー , が 翡 翠色 0 瞳 に艶然と笑みを浮かべ るのを見て、 クライフは今度

はがくりと項垂れた。

ヴ イル  $\vdash$ ] ルに笑わ れ るの はただ腹が 立つだけだが、 フレイザーに 少な から

ず好意を抱 「フレ 1 ザ , \ ているクライフとしては、 に 振 放らない で誰 に振るんだ? その彼女に笑われ 1 くらお前 でも、 んるのは 上 少 将 々 に 堪 頷 え る。 か れ

ちゃきついだろうに」

実戦じゃ、 もっと単純に行った方が上手くいく事 も多い んだよ」

だか 5 お 前 は 破 城が 得意な  $\lambda$ だな。 と言うよりあ れ は破 壊だけどね

「てめぇ、喧嘩売ってンなら買うぜ

右隣のヴィ ル 1 ルをじろりと睨みつけクライフは顔をしかめたが、 ヴィ ル

| |-· ル は 涼 いしい顔 で 頷 **,** \

「うん。 高い ょ

グランスレイが一つ咳払いをすると、三人とも何事も無かったかのように真

思わず噴き出したレオアリスを横目で見て、

スレイは溜息を吐いた。

面目な顔をして姿勢を正す。

本来であれば、 軍 議 の最中に上官の前で軽口を言い合うなど、厳罰に処され

ても仕方な ζ, が、 レ オアリスにはそうし た事 を気にする様子は ない。

その会話を面白がって聞いているばかりか、

というよりは、

と進んで口を出 したがる。それでよく、 話がどんどん逸れていくのだ。

「 上 将 」

悪い」

レオアリスはすぐに笑みを引っ込めたものの、 執務机の上に頬杖を付いた格

好のまま中将達を見渡 した。

確かに複 雑な陣 形だが、 時 間と余力を残せよ。 演習後、 俺と手合わせが ある

だろう」

どちらかという

月に二度、中将以上の恒例のものだ。この時だけ、レオアリスは「剣」を抜く。 その言葉に、一斉に胸に左腕を充て敬礼をする。レオアリスとの手合わせは

中将達の表情も俄かに引き締まった。

ように組んであります」 「手合わせは演習後、そのまま南第二演習場です。 場がひと段落着いたのを眺 め、 ロットバルトは手にしていた書類を閉じた。 日没までには、 全て終わる

剣が 纏う青白 い光が、 意識と全身を圧迫するように感じられる。

V オ アリ ス  $\mathcal{O}$ 構 えは 無位だ。 ただ右手に剣を提げ てい る、それだけ 0 <u>1</u> 一ち姿

た。

に打ち込む隙を見つけら

つれず、

口

ツトバ

ル

**|** 

は呼吸を整える為に深く息を吐

この 相手を前 にすると、 自ら  $\mathcal{O}$ 剣 へ の 自信 などあっさりと消 し飛ぶ。

意識を研ぎ澄ませ、 集中力を高め る。 己の 限界を知り、 それを越える為 の方

法を模索する。それがこの手合わせの、最大の意義と言えた。

いくら待っても打ち込む隙 は生まれ な \ <u>`</u> 口 ツトバ ルトは自 [分が] 最も得 |意と

するもの、剣速に視点を切り替えた。

いつ撃とうと同じであれば、待っていても仕方がない。

左手で鞘を握 2 たまま、鍔に添えた親指でそれを弾く。鞘走る剣を引き抜き、

レオアリスの喉元へと一息に振り抜く。

「速つ」

先 に手合 わ せを 終 えて 眺  $\Diamond$ て 1 たクライフが、 思 わ ず 身 を 乗 ŋ ÉЩ す。 だ が 声

を発する前に、 既に手合わ せ は 終 わ っって 7 た。

撃ち抜 *\* \ た切 っ先 は 喉 元 に達する寸前 でレオアリスの剣 に阻まれ、 音を立て

7 砕けた。

それと同 時に、 その場を支配 L てい た緊張 が 解 け、 クライフは大きく息 を吐

1 て再び 演習場  $\mathcal{O}$ 壁に凭 れ か か っった。

オアリスに 口 ツ 1 バ ル  $\vdash$ 礼 は 自 L た。 分  $\mathcal{O}$ 踵 手 を  $\mathcal{O}$ 中 返 に L 残され 演習場 た 柄 0) 端 を呆り ^ 向 か れ う途 た顔 中、 で眺 入  $\Diamond$ れ た . 違 後、

「速度が 増 Ü たな たグラン

、スレ

イが軽くその肩を叩く。

「……そうか ŧ L れ ませ  $\lambda$ ね

結果止めら ħ てい る  $\mathcal{O}$ では素直 に喜ぶ気には な れず、 口 ツ 1 バ ル 1 は苦笑を

浮 カン ベ た。 手 合 わ せ は ک れ ま で幾 度となく行 わ れてい 、たが、 7 まだ 度も 切

0

先 が レ オア IJ ス  $\mathcal{O}$ 身体を掠め た事 は 無い。

折 れ た剣を片手に戻ると、クライフが座り込んでいた顔を上げ、にやりと笑っ

1

に

進

4

出

目

 $\mathcal{O}$ 

前

 $\mathcal{O}$ 

7 口 ツ } バ ル  $\vdash$ を迎えた。

広い 演習場内 は 演習も全て終えて人影も疎らになり、 時 折 緩 V 風 が 低く 砂 埃

を吹き散らしてい

冶場へご案内ってとこだ。副将入れて五名 「お疲れさん~。 やっぱり折 ň たな。 ま、 か 俺  $\mathcal{O}$ は 槍 あ も折 あ , れ 新 たけどよ 調 たば 才。 0 匹 か だっ 様 鍛

?

L

り

てのに、 また作らなきやいけねえ」

隊は鍛 冶 師 に 嫌 わ れ てますよ、完全に。これ までに何 本打 た せてい るやら」

りと頭を落とした。

口

ツト

バ

ル

 $\vdash$ 

 $\mathcal{O}$ 

言葉に

同

意するように、

クライフはし

Þ

が

み

込んだまま

がく

もう俺、 あの 親父達 のところに顔 みせるの、 辛くってなー」

同感だね。 その 内あそこは過労死するだろう。 そうしたら、 香典 は 隊 全体

 $\mathcal{O}$ 褒賞渡しても足 りな *(* ) よ

が 息 を吐 ら、 クラ イフ <u>, , </u> グランスレイとレ てみせる。 0 隣 で 塀 に クライフ 寄 オアリスの手合せに視線を向 りか は カン 穂 0 て 先 ١ ر  $\mathcal{O}$ たヴ 折 れ た槍 イ ル } を 手 0 ル けてい 中 が、 でぼ 笑 るロ  $\lambda$ 7 なが ぽ ツ  $\lambda$ ら器 1 . バ 弾 ま ル 用  $\vdash$ せ 12 を な 溜

見上げた。

お前、かなり真剣だろ。下手したらほんとに斬りかね ットバルトはレオアリスとグランスレ イの 剣  $\mathcal{O}$ 軌道を目で追ったまま ないんじゃないか?」 事

も無さそうにそれ を肯定する。

口

「そのつもりが無けれ ば、 立ち会う意味が あり

ませ

んよ」

おいお \ \_ \_

あ

の疾

7)

· 剣 は、

まともに打ち合わせれば簡単に相

か し加 減 した剣では、 剣すら合わせて貰えない でしょう」

刀を受けとめる訳でもない。 甘い 太刀筋であれば、苦もなく躱される。

彼等にとっては レ オアリス  $\mathcal{O}$ 剣と打ち合う事自体が、一 つの基準でもあった。

どこまで自分の 剣が 通 用す るの か、 レ オアリスのような相手を前にすれば知

りたくもなるだろう。

「そりやま……」

斬るつもりというのは Œ しくは語弊が ありますが、 実際のところ貴方もそう

変わらないのでは?」

手の剣を砕くが、全ての太

手抜きなんざしね え。 俺 は いつだって本気だぜ。 けど、当んねえ し折

られちまうし堪 W ね エよ。 ほ んっとマジ次こそ五合保たせてやるわ <u>!</u>

拳を握り締 め悔しそうに力説を始めたクライフの横から、 ヴィル トール 0 か

らかい混じりの声が掛かる。

「へえ、お前まだ五合いってないの?」

クライフをからかうの はヴィルトールの日課 のようなものだが、これでこの

「うっかえな!そうゝうる前よ可分ないごと」

一人は息が

合って

١ ﴿

る。

クライフはその

顔を斜

めに睨み付けた。

「うっせぇな!そういうお前は何合なんだよ」

オアリスと剣を打ち合わせて一合。躱された太刀は計算に入れない。

手を抜く訳には 最 近七は保つように 7 かな ١, してるよ。ただ力まかせに振れば が匙加減はないと、 すぐ終わったらもったい いいってものじゃ ない ない。 から

ね

不服そうに 口元 たを歪め たまま、 クライフはヴィルトー ルに向 けてい た顔を

ロットバルトに戻した。

「だ、そうだぞロットバルト。お前何合?」

## 「初太刀が良ければ一合」

「いち……」

笑い飛ばそうとして止める。 初太刀を最も重要とするロットバルトの剣にし

てみれば、一合目でレオアリスが剣を持って止める事の方が、

結果としては

「……意味ねえ議論じゃん」

気付いたか。ま、何を重視するかだね」

「私は何合を数えるより、二刀で手合せしたいわ」

それまで黙っていたフレ イザーが、腰の後ろに交差させて佩いた二本の

ない。

視線を落とす。

鞘に納まった細身のそれ

は、

やはり折れて今は使い物には

なら

クライフは地 面 に胡坐をかいたまま、 唸るように頬に右手を当てた。

「二刀か、 そういや見た事ねえな。 アスタロト公は 凄かったって言ってた事 あ

るけどな」

凄かったって表現はどうなんだ? 語 彙が足りないんじゃない 、 か ? クライ

剣に

「アスタロト様 の表現まんまだよ! 悪 V) けど!」

あの方はそういう言 い方するわね , え \_

フレ イザ から の同意に気を良くして、 クライフは大きく両手を広げ三人を

見回した。

「だろ? ま、ともかくさ、二刀見てみたいよなぁ。 見たくねえ?」

その言葉にフレ イザーは深く頷いたが、ヴィ ル <u>ا</u> ル は 同意 しかねるとい . う

ように肩を竦めた。

「一刀でも保たないのに二刀なんて無理だよ」

「そりゃそうかもしれねえけどさ。 剣士の二刀だぜ? フツ ĺ 剣士だって剣は

本しかないんだろ?」

確かに、 剣士で二刀を持つのは、 上将くらいのようだけどね」

そう言い ながらヴィル } ] ル は、 演習場中央でレオアリスと剣を合わせてい

るグランスレ イ に顔を向 けた。

巨体のグランスレ イが扱う大剣を、 レ オアリスはほんの僅かな動作で難なく

凌 いでい · <\_ .

かし、これだけ手筋の違う剣を相手に息一つ乱さない からなぁ。 さすがと

言うべきか、恐れ入る」

楽しそうだよな あ  $\Big|_{\circ}$ 

ヴィルトールは

長剣、

フレ

イザーは細身の二本の剣を、クライフは長

槍、

口

ツ

こっちは必死だってのに」

トバルトは 剣 0 鞘走りを利用する抜き打ちを得意とする。

それぞれ全く違う太刀筋と休む事もなく剣を合わせているにも係らず、

アリスは全ての太刀を読んでみせる。

けしてそれぞれ の剣技が劣っている訳ではない。 事実第一大隊は、

える近衛師 団三大隊 の中でも、 最も 剣技に長けると言わ れ --1 る程だ。

まあ、 剣 0 腕を押し上げる最大の要因だから ね。 感謝、 すべきさ」

「上将程じやな いにしろ、 剣 士 ってのは皆こうなの か ね。 あんま戦場じゃお目

に か か りたくね エ なあ。 上 将 が 師 寸 一で良 かったよ」

そう言った後、 クライ ーフは ふと首を傾 いげた。

「……そういやぁ師団に 他に į, ない な。 **,** \ たっけ。 お前 知 ってる?」

オ

精鋭

を揃

問われて、ヴィルトールが首を振る。

「いや、上将以外、正規も含めて軍に剣士はいないだろう」

「そうだよなぁ。 絶対数が少ない んだからそうかもしれないが、 他に二、三人

いてもおかしくねえのにな」

「かもな。 まあ上 が決める事だ。 さて、 私は一足先に鍛冶師  $\mathcal{O}$ 小言でも聞きに

行ってくる」

ヴィル

\ | |

ル

は

曖

味に頷くと、

剣を取り立ち上がった。

俺の分も先に謝っといてくれ」

知らないよ。自分で言え」

退意を告げる代わりに剣を上げ、ヴィルトール は演習場 の門へと足を向 けた。

クライフは軽 く悪態を吐きつつ片手を上げて答えたが、 二人の会話を聞

1 たロ ーツトバ ル トは、僅かな違和感を覚えてその後ろ姿を見送った。

高 度な戦闘 能 力を有 する剣 士。 軍に採用され てい るの が レ オアリス 人  $\mathcal{O}$ 4

と言うの は、 考えてみ れ ば お か L な話だ。 確 か に剣士は存 在その ŧ 0 が 数 少なな

いが、在野の数名の名は時折耳にする。

剣士 って軍がキライなの かね。 まぁ、 上将も結構、 役に縛られるの嫌そうだ

な

口 ツ 向けられたロットバルトの意外そうな顔に、クライフはピクリと眉を顰めた。 トバ ル トの言 葉を牽制するように、 整い過ぎとさえ言えるその顔をじろ、

お前も何それ。俺がなんか考えるのが意外か? 考えるっつーの」

と睨む。

いえ。 私も同じ事を考えていたもので」

お、そうだろ。やっぱ思うよなぁ。近いとこで言や、上将の一族だって……」

取り様によってはそれも失礼な発言だが、クライフはすぐにころっと口 調を

変え、 しゃがみ込んだまま頷 () た。 それからはた、 と口を噤み、 ひどくばつの

悪そうな表情を浮かべる。

あ、や、今の撤 回。失言だ」

口 ロットバ オアリス ル 1 0 は 族は、 何も言わず、 彼が生まれた頃に失わ 頷くだけに留  $\Diamond$ れている。

失われた詳しいいきさつについては、 大隊の者達はもとより、 レ オアリス自

身 ŧ 知 らな *(* ) ようだった。

ても、 特にそれについて、 問われ れば常に、 レオアリスが 北方 0 術 士 の 村、 何かを言った事はほとんど無い。 と、 それだけだ。 出身にし

ただ以前 それ に近接するだろう幾 0 か  $\mathcal{O}$ 出 来 事 が あ

数ヶ月

前

まだ季節

が

春を迎えたば

か

ŋ

 $\mathcal{O}$ 

頃

第一

大隊

が王

 $\mathcal{O}$ 

命を受け、

東

った。

方の辺境に聳えるミストラ山脈に住 む、 アリヤタという半獣 族 を 調 査 した時  $\mathcal{O}$ 

事だ。

絶 滅に アリヤタ族はその 瀕 L てい た。 内蔵 ヴ 1 ル が 非常に } ] ル 0 高 右軍 価で希少な術の がミス トラに着 触媒となるため、乱獲され、 *\* \ た時には、 もはや彼

5 は 取 り 返 L  $\mathcal{O}$ 付 か な 1 程 そ  $\mathcal{O}$ 数を減らしてい た。

あ 0 時  $\mathcal{O}$ 才 アリ ス は 自 分 から 望んでミストラに赴 1 たに · も関· わ らず、 終

始どこか憂鬱そうだった。

それ レ 以 オアリ 前 は 術 ス が を 生 現 活 在  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 姿 糧とする術士とし 剣士として覚醒 て育って L たの V) る。 は王 都 に 上 が る 直 前  $\mathcal{O}$ 事 で、

それ故 にその 件に関 しては、 カュ つて術士として生きてい た者が抱く罪悪 感と

も言うべき感情と、それ以外の何かを抱えていた。

ミストラ山 脈  $\mathcal{O}$ 奥で眼 に L た焼 け 落ち た村に、 生き残った僅 か 十名にも満た

ない半獣達。

その時に、レオアリスの力が暴走したのだ。

暴走 か。 表立って言える事で は な **,** \ が、 そう表現せざるを得ない)

それが何を原 因としたのか、 明 確 に は 判らない ままだ。その後  $\mathcal{O}$ 調 査 は 行わ

れていない。

王の命が下らなかったからだ。

だが、 膨 れ 上 が 0 た力が Ш  $\mathcal{O}$ 斜 面 を断 ち、 滅 び か かったアリヤタ族の村ごと

飲み込んでいく、あの様。

あ 0) 時  $\mathcal{O}$ 凄まじ 7 ま で  $\mathcal{O}$ 力  $\mathcal{O}$ 発 露、 それを、 口 ツトバ ルトは今でも明 確 に ...

い出す事が出来る。

事 件 後、 レ オアリ ス 0) 故 郷 を訪 れ る機 成会を得 た時、 彼 と村人の 姿が 全く似て

いないと知った。

鳥 0) 頭 (を持った半鳥の一族であった彼等は、 小さくひっそりとした村で十数

に も満 たな **(** ) 人数が . 暮ら して ١ ر た。

あ 0 時、 外界 か ら切り ŋ 離されたような辺境 の村 0 その更に奥を示した、

オアリス の横顔 が浮かぶ。

指 し示し た先に広がる、 深 , , 森。

あ

のずっと奥に、

連れて行かれて、爺さん達が何かに祈るのを、 訳も分からず見てた。 そこかも

今はもう滅びた村がある。

ガキの頃、

一度だけそこに

れ ない し、そうじゃない か ŧ L れ な *(* ) 

口

ットバルトの脳裏に浮か

んだ横顔に

は、

明確な感情は

読み取れな

\ <u>`</u>

L

ただその時 0 推 測だけで言えば、 レオアリスの一族も、 アリヤタ族と同じよ

うな理・ 由 で 滅  $\lambda$ だ 種 な のでは、 ない かと、そう思える。

あ の時 レ オアリ Ź が抱えて いたもの、おそらくあの力の 暴走を呼んだものは、

怒り』だ。

滅 び か けた村、 滅びに 瀕 た種族、 為す術もなくただそれを眺めるだけしか

出来 な V) 事 の : :

(……いや、少し違うな。 共感か?)

言すべきだったと考えてい それ も納 得できる根 拠 が た。 薄 1 密売に関 口 ツ 1 連 バ する裁 ル 1 は今更なが 判 へ の 対応に 5 追 あ わ  $\mathcal{O}$ れ 時 7 調 は 査 を進 1 た

が、 原因を子細に分析 し把握しておく必要は本来 あ 0 たのだろう。

それはもしまた同 じ 事 が起こった時、どう対 7処すべ きかという事だ。

あ の時 左軍に、 レ 才 アリスを抑える事 は出来なかった。

Ł しあそこにい たのが 左軍だけではなく、 一大隊だったとしても同じ事だ。

ある。 王が あ 0) 暴 走を 抑えなけれ ば、 おそらく、

ヴ

1

ル  $\vdash$ 

]

ル

ŧ

理

解

L

てい

るのだろうが

П

にし

な

だが厳然とし

た事

実が

おい」

は っと現実に引き戻されると、すぐ目 0) 前 に当  $\mathcal{O}$ レ 才 T IJ ス  $\mathcal{O}$ 顔 が あ 0

た。

「……失礼 しま L た。ご面倒ですが、 もう一度……」

た。 視 周 線を落としロットバルトが姿勢を正すと、 囲 に 眼 を 向 けると、 クライフとフレイザー、 レ オアリスは呆 グランスレ 1 れたように Ė 1 つの 笑 間に 0

か既に姿を消 L て ١, る。

ま、 そんな大した用じゃない んだが」

V 才 アリ ス は П 元に右手を当て、 まじまじとロ ツ  $\vdash$ バ ル トを 眺 め る。

「何です?」

口 ツトバル トはその視線を受けて蒼い瞳を細 めた。 先 程 までの思考を読まれ

た 0 か と思 0 た  $\mathcal{O}$ だが、 V オアリ ス が考えて 1 たの は 別  $\mathcal{O}$ 事  $\mathcal{O}$ ようだった。

いや、今度……」

ふいに声を潜めたレオアリス に 何 事 か と身構えると、 オアリスは漆黒の瞳

にどこか楽しげな光を 浮 か べ、、 口 ツ 1 バ ル  $\vdash$  $\mathcal{O}$ 持 つ剣を指 した。

「それ、貸してくれ。ちょっとでいいからさ」

ットバルトは整った顔に、物柔らかな笑みを刷いた。

「遠慮します」

口

「……即答だな……」

まだロ ツトバ ル トの剣を指差した状態 0) きま、 レ オアリスは 頬に憮然とした

を浮 か べ る。 剣を借 ŋ るというより は、 口 ツ  $\vdash$ バ ル 1  $\mathcal{O}$ 得意とする抜き打

をやってみたいのだ。

抜き打ちという特殊な技を考慮して打たれた剣は 般的ではなく、 特別 に打打

たせる必 要が あ る。 使お うと思 っても、 すぐに 手に . 入る. ŧ 0 で は な \ <u>`</u> だ か 5

取り敢えず借りて、という事なのだろう。

貴方なら出来るのでしょうが、 私 の剣 で、 というのは お断わ りします。 貴方

はすぐ折るでしょう」

折 れず、すぐに剣が折れ ħ すぐに折られると判っ てしまう。正直、一 オアリスは 鍛冶師 る 隊 が てい のだ。 鍛えた剣を使う事が  $\mathcal{O}$ 中 るも で 鍛 作りの荒 冶 のを貸す気は、 師 に V) 番 剣 嫌 で できない。 あ わ れば、 さす れ 7 が 1 その それこそ振  $\mathcal{O}$ る  $\mathcal{O}$ 口 力 は ツ 1  $\mathcal{O}$ レ 負荷 才 バ ル ア 0 ただ トに IJ 12 耐 ス もな だ。 けで えら

ちっ。さっきクライフもそう言ってさっさと逃げやがった」

当然ですね。鍛冶師に打たせたらいかがです」

鍛冶師と聞いて、レオアリスの眉間の皺が更に濃くなる。

<sup>「</sup>あのじじいども、俺が近寄るだけで怒鳴るんだぜ?」

「それ その言葉に、 ŧ 当然で、 レ オアリスは途端 しょう。 王 か ら賜 に . 決 0 まり悪そうに視線 た 剣すら がる んで、 す を泳がせた。 か 5

以前 彼 は、 王から下賜され た剣を折ってしまった事 が ある。 その 時  $\mathcal{O}$ レ オア

リスは、 蒼白になって暫くの 間落ち込んでいた。

アスタロトには散 々からか われていたが、ただ王はレオアリスが剣を折 る事

という話だ。

を見越してい

たのだろう、

謝

罪するレオアリスを前

にひとしきり笑っただけだ

「くそ、断るか? 普通」

不満そうにぶつぶつと独りごちながらも、 それ以

で、レオアリスは演習場の端に向って歩き出した。

向かった先、 演習場の出入口近くではまだ数名の隊士がいて、それぞれに訓

オアリスはその姿に嬉しそうに眉を上げ、彼等へと近づいた。

練を続い

けている。既に通常

の訓

練は終了していて、自主的に行っているものだ。

まだやってんのか、熱心だな」

掛 けられ た声に振 り返 り、 レオアリスとロ ツトバ ルトの姿を認めて、 隊士達

が 一 斉に跪 

気にしないで続けろよ。 まあ、 ちょっと見させて貰う」

上要求する気は失せたよう

カゝ な 隊 カン 士 得 達 5 は 嬉 れ な しそうに 7 ため、 お 特 互 に 1 末  $\mathcal{O}$ 端 顔 を  $\mathcal{O}$ 見 隊 士 合 達 「せた。 にとって 大 将 は が 降 個 0 々 7  $\mathcal{O}$ 湧 剣 を 1 た 見る 幸 機 運と言え 会 はな

再 び 訓 練 に 戻 0 た彼 等 を、 レ オア IJ ス はその 場 に <u>\f</u> 0 た ままじっと 眺 め た。 る。

一人一組 で の立ち 合い や、 器具を使 つ た 練習だ。

れ け 剣 は 0) その一つには、 を振 確 単 実に 純 り な器具が 捉える・ 抜 い ても、 設えら 事 打ち込みの修 は 支えが 難 れ L \ <u>`</u> 7 無 7 練 1 数 る ため 名 が  $\mathcal{O}$ 為  $\mathcal{O}$ ただ に 隊 に 標的 使 士はそれに苦心 打 わ つだけ れる、 は 容易く後方へと力を逃が では 棒の してい 切 ゆ Ś れ端 ゆらと不安定 るようだった。 を複数吊 しただ なそ 上

······手の内が甘い。捉える瞬間に絞めてみろ」

手

Š

、捉えら

れ

ず

に

**,** \

る。

度器具に 才 アリ 向 ス  $\mathcal{O}$ か 助 0 て 振 言 に、 り 抜 隊 士 1 たが、 は 柄 を 今 度 握 り は標的 直 し、二、三度振 を越 して 剣 が泳 った。 7 で それ L じまう。 からもう

「違うって。それじゃ全体に力が入り過ぎだ」

隣に立ち、 肘、 肩を軽っ でいれている。 رٰ\ て力を抜 かせる。 隊士 の肘を支えるように手を

当て、肩越しに標的を覗き込んだ。

「絞めるの は 打 ち抜く瞬間だけでい 全体に力が入ってたら逆に速度が落ち

るからな。打った後の体捌きも落ちる」

オアリスが指 導を始 8 たのを見て、他の隊士達もその周 囲に 集まって来た。

真剣な表情 で頷きなが ら一言も聞き漏らすまいと、 身を乗り出すように聞

「もう一度。深呼吸してからだ」

「はっ」

隊士は幾分緊張しながらも剣を右手で握りなおすと、身体の前で中段に構え、

呼吸置いてから振り被った。

気合いと共に正面の標的に向かって剣を振り下ろす。

先 程 より堅い手応えが響いたものの、 芯を捉えきれずに標的は今度は左 へ逃

げた。

「やっぱり右肩 12 . 力が 入ってるなあ。……ちょっと貸してみな」

慌てて差し出された剣を受け取ると、 レオアリスは器具の正 面に立ち、 周囲

 $\mathcal{O}$ 隊士 達を見渡 L た。

打つ寸前まで力は大していらない。 特 に肩 は楽にしろ。 絞めるのは 小指 から

二本、 中指から先は支え程度で十分だ」

一旦柄を上に して逆手に持った剣を持ち上げ、 言 1葉の! 順 原に沿っ て右手

ろへ引き、 身体を僅かに落とした。

周囲が無意識

 $\mathcal{O}$ 

内に

息を飲んで見

つめ

る中、

度剣の平

を流すように当て、

と薬指の二本だけで握って見せる。

隊士

達が頷くの

を見てから、

左足を斜

め後

0

小指

吊 した十個 程 <u>の</u> 標的を全て揺らす。

つ一つがばらばらな方向へ浮ききった瞬間に、 オアリスは右足を一 歩踏

み込んだ。

閃としか映らなか った。

瞬きの 間 に、 標的 が 全て乾いた音を立てて砕ける。 その場の隊士達が同 · 時 に

感嘆  $\mathcal{O}$ 声 を上 一げた。

お お . つ \_

早……見たか?」

いや、初太刀しか……」

続けざま、高い金属音が弾ける。

「げっ……」

剣を振り抜いた姿勢の ま ま 固 ま ったレ オアリスに、 歩下が つて眺 めて

ロットバルトは溜息をついた。

身体を起こし、 刃の中程から砕けた剣を束の間まじまじと見つめ、

オアリスは気まずそうに視線を反らせた。

茫然としたままの隊士へ、そろそろとそれを差し出す。

「……悪い……。」

「は……? ——あ、いえ」

今更ながらに折れた自分の剣に気付いて、 隊士は 目にし た剣 の感: 嘆と無残

な剣の状態に、複雑な顔のままそれを手にした。

ついうっかり……悪かったな」

「い、いえ! とんでもございません」

自分よりも低い位置にある顔が更に低くなるのを慌てて押し止 め、 隊士はそ

それから

いた

の剣を素早く鞘に収める。

口 ツトバ ル トは その様子に仕方無さそうに息を吐き、二人の方へ歩み寄った。

りなさい。上将が折ったと言えば咎める者もないでしょ

う。経費は上将の報償から落とすよう伝えますよ」

戻る前に調

度課に寄

「……そうしてくれ……」

「もちろん、この器具についても」

「それもかよ?」何の為に修繕経費積んでんだ」

既に逼迫しておりますので。 まあ増額を財務と交渉してみることは可能で

しょうが、その場合は財務の担当者を崩すのはお任せしますよ」

「判った判った。俺が責任持つ」

溜息をついて歩き出そうとした時、 折れた剣を眺めてい た隊士が遠 慮が ちに

口を開いた。

「上将、お願いがあるんですが」

オアリス が 振 り返ると、 隊士 は 折 れ た剣を掴 んだまま左腕を胸に当てる。

折れた剣を、返却しなくても宜しいですか」

?

隊の武具は全て貸与品のため、 破損した場合は新 しいものを受け取る際に返

却するのが常だ。

「その、手元に置いておきたいので……」

「いや、だけど」

「構いませんよ」

オアリスが戸惑っている間 に、 ロットバルトが 微かに笑ってそれを了 承す

る。隊士は勢い良く一礼すると、仲間の元に戻った。レオアリスが首を傾げる。

「何で? 意味ねぇじゃんか。それより持ってられると余計後ろめたい んだけ

ا ....

「貴方にとってはいい薬でしょう」

口に出してはそう言って笑ったものの、 実際隊士にとっては逆にいい指標に

なるだろう。

足元に小さな飾りらしきものが落ちた。 心なしか肩を落としたまま レオアリスが歩き出した時、微かな金属音 地面を二三度転がったそれを、 が 口 鳴り、 ット

バルトの手が拾い上げる。

「上将、こちらは」

オアリスは 振 り向 いて、 今更ながらに自分の襟元をつまみ上げた。

「ああ、悪い」

細 ١ ر 鎖 に 通した小さい 銀の飾りだ。 握り込めば掌 子に軽く 納まるくら い のそれ

には、中央に青い石と剣の意匠が施されている。

確か、レオアリスが常に身に付けているものだ。

レ オアリスに手 渡そうとして、 青 ζ) 石 が暮 れ かけ た陽光を微 カン に弾 き、

トバルトはふと瞳を細めた。

石  $\mathcal{O}$ 奥に 何 か  $\mathcal{O}$ 影が浮き上が ってい る。 剣 の意匠。 見ない紋章だ。 レ オアリ

スの一族のものなのだろう。

(剣士の一族か……)

レオアリスのような剣士ばかりだったのだろうか。

(それで滅びるとは、考えにくいな)

オアリスはその中でも、 特に高位 の戦闘能力を持っていたと言えるのだろ

ロッ

う。ふとある疑問を抱いて、ロットバルトは視線を上げた。

(---この人はこれまでに、全力で戦えた事があるのか?)

常に二本の剣の内の一本しか用いない。グランスレイもまた、レオアリスが

二本の剣を持つところを見た事が無いと言っていた。

それはレオアリスにとって、「剣士」にとって、どうなのだろう。

「何だ?」

我に返り、 他愛もない疑問 は消える。 レオアリスは受け 取る為に手を差 し出

しかけたまま、怪訝そうにロットバルトを眺めている。

いえ……。失礼しました」

飾りをレオアリ スの手に戻すと、 レオアリスは切 れた鎖を見て面倒そうに

つ息を吐いた。

ガキの頃からずっと付けてるからなぁ……」

鎖を代えれば済みますよ。大切なものなのでしょう」

オアリスは銀のそれを持ち上げた。 陽光を弾き、 青い 石の奥まで透けるよ

うに光る。

に止めた」 食うのに困 爺さん達が つ た 時 /片時 にでも売ろうかと思ってたんだけど、 も離すなって言ってたから、 何となくだ。 それはちょ ま あ、 っとさすが 前 は 1 つか

その言い草に、ロットバルトは少し呆れて笑った。

食うに困る、ですか」

「ら句はっとって見象十つない

「お前はちょっと想像付かないかもな」

食料や衣服に困るなど、 ヴ エ ル ナー - 家は、 貴族の子息が 言葉すら頭 比 のの中 較的 に入ってい 多 (V 近 衛師 な 団 1  $\mathcal{O}$ のでは、 中 でも異色といえる。 ないだろうか。

想像した事もありませんね」

悪びれも せずに言ってのける参謀官に に肩を竦 めると、 レ オアリスは上着 にそ

れをしまって演習場の出口に足を向けた。

「この後、何だっけ」

「夕刻から会議が一件。出席者は総将、三隊の各大将です」

「めんどくせぇ……。働きすぎだろ」

オアリスは天を仰ぎ、うんざりと溜息を吐いた。 訓練ならいくらでもやっ

7 1 1 が、 会議 など 肩 が 凝 る ば か りだ。 この 後  $\mathcal{O}$ 会 議 は ま だ 1 **(** ) が、 出席 人数

が 増えるに 従って 議事 進 行 は 遅くなり、 時 間 ば か ŋ が 無駄 に なる。

「王の御前演習が近いでしょう。その件ですよ」

「ああ」

僅 かにレ オアリス 0) 声 の響きが変わ 0 た事 に、 口 ツト バ ル  $\vdash$ が笑みを洩らす。

「何だよ」

「いえ」

殊、王に関する事になると、 気 付 V) ているの か い ない 0 か、 レ 才 アリ ス 0) 纏

う空気が変わる。 その様子を眺めると誰もが、 父親 に褒 いめられ た子供  $\mathcal{O}$ ような

印象を覚えた。

演習場を横切 り厩舎 の扉をくぐると、 個別に仕切 られた柵がずらりと並 び、

数 騎 0 飛 竜 が 翼を休 8 ている。レオアリスは入り口 0 程 近くの 栅  $\mathcal{O}$ 中に寝そ

べっている、銀鱗の飛竜に近寄った。

ハヤテ」

主の声に首を擡げ、 ハ ヤテは喉を鳴らしてレオアリスの差し出 した手に 顔を

寄 せ る。 青 1 宝 玉  $\mathcal{O}$ よう な瞳 を 瞬 か せ、 早く 乗 れ لح ( ) うように 声 鳴 き翼 を

わせた。

「散歩には行かないぜ。司令部に戻るだけだ」

ノヽ ヤテ は つ ま 5 なさそうに 木  $\mathcal{O}$ 栅 に 顎 を置き、 それ でも主 を 乗 せ る た 8) に

手綱を繰ると、銀の翼が風を孕み、ふわりと宙に舞う。

体

を

屈

め

た。

レ

才

アリスはその首

を軽

<

叩

*(* )

て

か

ら、

Y

テ

 $\mathcal{O}$ 

背

に

飛

U

乗

る。

身

を目 5 はそこか  $\mathcal{O}$ 厩 飛 指 舎 竜  $\mathcal{O}$ L 5 中 て翼を  $\mathcal{O}$ 央は 元 厩 舎 ^ لح は 飛  $\mathcal{O}$ 足を 外 ば 竜 に た が 向 か 上 出 が せ 入り け た。 た。 り、 Ĺ やす 口 度気持ち良さそうに旋 ツ } ĺ١ バ ように ル トはそれ 広 V 間 を見届す  $\Box$ が 口 取 け 5 L て た れ 後、 カン てい ら 一 悠然と る。 礼 ハ 王 ヤ

に は、 演習場と 血.  $\mathcal{O}$ 様 王 城 に 赤  $\mathcal{O}$ 間 1 斜 に 陽 は  $\mathcal{O}$ 長 広 7) 7 影 城 が 下 差  $\mathcal{O}$ 街 L 7 が 横 1 た。 た わ 0 て 1 る。 上 空か 5 映 る 王 都

頃 カゝ 燃えるよ 5 あ ま うに り 好きでは 王 都 を な 染 \ <u>`</u>  $\Diamond$ 上 飛竜 げ る、 0) 上 美 に L も染 1 は 8 ず  $\mathcal{O}$ か カゝ そ  $\mathcal{O}$ る夕光を避 色 が レ け 才 るように ア IJ ス は 瞳を 幼 1

閉

じる。

城

テ

自

燃えるような夕日の中、 落日よりも更に紅い炎が幾筋も走り、 枯れかけた草

木に灯る。

それを追うように衝撃が大気を切り裂き、樹々を刈った。

灯った炎は一瞬にして掻き消え、轟音と共に大地に亀裂が穿たれる。

総てとはいかない。

崩れゆく音と闇の中、

男は満足そうな笑みを冥い口元に浮かべた。

だが、元通り。

さあ、再会と行こうじゃないか?

執務室の扉を開けたとたん、 レオアリスはぎょっと後ずさった。

それ もそ 0 はずで、 部屋に一 步 踏 み込んだそこに、 壁が ある。 思わず後ろを

振り返って自分が 扉 の前 面を覆い尽くすように、 ·確か に 扉を潜ったのを確認し、もう一度改めて壁を眺め 何かが天井まで積み上げてある。 た。

「……何だ、これ」

ああ、 お気を付けて。 左右に通り道は開 いてますので、そこを抜けてくださ

V

ながら、漸く朝の光に満ちた部屋に出る。 人抜けられそうな程 口 ツトバルト  $\mathcal{O}$ 声 が 0 隙 壁 間 0 が 向こう側から聞こえ、 あった。 触れると崩れそうなその壁に注意を払 左右を見ると確 かにやっと一

何となく詰めて ١ ر た息を吐 7 て改め て振り返り、 壁を眺 め、 執 務 机  $\mathcal{O}$ 前 に 座 0

ているロットバルトに視線を向けた。

……で?」

「今朝早くアスタロ ト公がおいでになって、 置いてい か れました。 土産と仰 0

ておられましたが、お心あたりが?」

そう言えば昨日、どこかに行くと言っていたが……。 昨日の別れ際のアスタ

---あ、の野郎オ」

口

トの悔しそうな顔が

脳裏を過った。

つまりは意趣返し、だろう。

「何でも、丁度時期で沢山出ていたからとか何とか」

どこから手を付ければ崩さずに取れるのかすら判らない。

色とりどり、様々な形の小さい箱が天井までぎっしりと積みあがったそれは、

「お前、見てたわけ?」

「ええ。それは見事な手際でしたよ」

「止めろよ……」

思わず額に手を当てると、 口 ツトバ ルトはわざとらしいほど意外そうな色を

浮かべてレオアリスを見た。

「私が、公のなさる事をですか?」

## 出来るだろ……)

普段アスタロ トが羽目を外した時などは容赦無く厳しい事を言ってのけるく

にも吹き出しそうな笑みが見える。 せに、と思いは 要は単に 面 白 が したも つてい のの、レオアリスはただ肩を落として室内を見 るだけだ。 ヴィ 一人グランスレイだけは、 ル \ | | ルもフレ イザー 曖昧、 ŧ, П な表情を浮 元に 回した。

は今

かべて僅かに視線を逸らせている。

度深い溜息をつき、 レオアリス はもう一 度目の前の壁を見上げた。

いっそ、 崩すか」

いえ、もうすぐ崩れます」

ットバルトが書類 から眼 を離さない まま、 あっさりと告げる。

はあ?」

口

クライフ中将がまだ出仕しておりませんので……」

その言葉が終わ らな 7 内に、 扉が 勢い良く開く音と共に、 クライフの 声 が

いた。

「すんませんっ遅刻……っぎゃああぁあ!」

ぶつかる音に合わせ、 見事なまでに雪崩を打って、 壁が 崩れ落ちた。

お前な あ、 何 0 つもりだ」

王城の第三層 にあるアスタロ トの館の一室で、広い庭園に面 した露台の椅子

り、 と言わ んばか りに白い 頬に得意げな微笑みを浮かべる。

に座り、

レオアリスは

目の前

の華やかな顔を睨んだ。

アスタロ

トはしてやった

好意を抱いてる男に女が贈るらしいぞ。つまりお前はこの私に好意を抱かれて 「ふふん。嬉しいだろ。今回はちょっと遠出したんだ。そこの風習とやらでは、

るって事だ。 誇りに思え」

阿呆か」

普通は一つらしいけど、 私なんてあれだけたくさん?」

馬鹿?」

全部食えよ」

ーはあ」

に つこり、 と満 面 に笑みを浮 かべたア スタ 口  $\vdash$ 0 華 Ŕ か な顔に、 返す言語

見つからず、レオアリスはただ大きな溜息をついた。

リス とか アスタロトが持ってきた物に、 が 理由を付けて、 戻 0 た時まで、床の上で通行 あ れ は崩 れたまま、 おいそれと手を触れる訳にはい の 邪 誰 魔になっているのだろう。 も片付けようとしな かないとか何 多分レ オア

7  $\vdash$ ζÌ ちなみにレオアリスはここに来る時、 るの ルトがどうし かと思うとうんざりする。 ているのか想像すると笑えるが、 窓か ら出てきた。グランスレ 戻ったらあの片づ けが イや ・ロッ 待 0

ア ーシアが申し訳なさそうな苦笑を浮かべ、二人の前に暖かい紅茶を注 いだ

白い陶磁の茶器を差し出した。

「す 仕方ない。 ĺ١ ませ ん、 お前 レ が謝 オアリスさん。一応、 る必要はないさ。 苦労するよな、 お止めしたんですが……」 お前、 £

ともらしく アー シアはとんでもございません、と慌てて手を振ったが、アス 頷いた。 身を乗り出 Ļ 白い藤椅子をきしりときしませ タ る。 口 1 は 0

そうだ、 謝る必要な いだで。 あれ積むの苦労したんだから。 最初行 った時 もう

たけど何も 口 つまずいて崩したんだ。あいつでかすぎ。もぉー、せっかくのヒトの苦労をさぁ」 ツ } バ ル  $\vdash$ 言わな が いてさ、あいつ意外とくそ真面 いから安心してたのに、 途中まで積んだらグランスレ 目だよね?、絶対怒られ ると思 が 蹴 0

に得意そうな顔 オアリス Ł 7 アスタロ かず、 は トが 乾 かと言って止める訳にも 7 た笑い を 滔々と話 向 け を漏 ر خ ه し続ける横で、 らし た。 それ いか 、 を 知 ずに困 生真面目なグランスレ ってか 惑している姿が 知らず かア 眼 ス イが手伝う訳に に浮 タ 口 } カン び、レ は すぐ

すっごい高価なものもあるんだぞ! 一粒三百ルス!」

「さ、三百!」

馬鹿 かお 前は ! と言いそうになったが、 却 って呆れ てしま V. オアリス

は口を閉ざした。

ŧ アス の事だ。 タ 口 5  $\vdash$ なみに三百ル が 食 ベ 物、 特 ス、 に甘 銀貨三枚あ 1 Ł  $\mathcal{O}$ に 対 れば、 ては 大 金 体 に · 糸 王 都 目 を付  $\mathcal{O}$ 下 ·層あ け な た 1 りでひと  $\mathcal{O}$ は 1 0

月

部

屋が

借

りられる。

「もお、 さすがに持ってっ たお 金 が 底つきるかと思ったぁ。 で ŧ 私  $\mathcal{O}$ 分 は 隣  $\mathcal{O}$ 

部屋一杯買って来たから、十日は保つかも」

- 組んだ手の上に形の良い顎を載せ、至福の表情を見せる。1997 - 1

という事 は、 あ んな ŧ のが 部屋一杯を埋め てい るのだろうか。 隣  $\mathcal{O}$ 

部屋と一

「……頭痛ぇ……」

口に言うが、

隣

は

相当

に

· 広 か

つ

たはずだ。

「大丈夫か? 風邪?」

\_ :: :

アスタロトの顔を眺めれば、 紅い瞳は心底心配そうだ。レ オアリスは頬杖を

つき、これで本日何度目になるか判らない溜息を洩らした。

何か疲れて見えるな、 気を付けろよ。 お前意外と繊細じゃん?」

:

誰のせい なんだと言い たい 気持ちを飲み込み、 レオアリスは席を立 一った。

「何だよ。もう行くのか」

「文句を言いに来ただけだしな。俺も暇だよ、全く」

アス タロ  $\vdash$ は つまらなさそうに唇を尖らせたが、 ふと思い つ *(* ) たように 才

アリスを見上げる。

「そうだ、 お前、今度の御前、 剣舞やるの?」

御前とは、年に一度、王 の天覧の上で行われる総合合同 演習  $\mathcal{O}$ 事 だ。 正

近衛師 団全ての兵が参加し、 祝祭のように華やかに行われる。

将校や剣

の優

れ

必須となってい る。 レ オアリ Ź が他者と剣を合わ せ るの は 困難 なた め、 選ぶと

た兵達が演武や手合わせを行うのが通例で、

大将級はそれが

規

軍、

すれば剣舞くらい なのだ。

舞とは言っても型に近い。 前回 0 御前 演習の折りに一 度見ただけだが、 静か

だがレ オアリス は あ まり気乗りの しない 顔を見せた。 5

動

あ

 $\mathcal{O}$ 青

1

剣が

大気を切

り裂く

様

は

T

ス

タ

口

1

 $\mathcal{O}$ 

お

気に

入りだ。

そうなりそうで気が重い んだ。 また会場壊 す  $(\mathcal{O})$ もなぁ……」

「そんな些細なこと気にす んな。 なんなら 私 が バ ツ チリ 術 掛けてやる カン ら し

なれば、 オアリスのうんざりし 何も術を施さない場で行うには た顔、 に t 理 由 危険が伴う。 は あ る。 舞 とは 前もって厳 云え剣 士 重 が 一な結界 剣 を抜くと を張

り巡らすなど、 周囲に損害を与えないよう対策を講じる必要が あった。 その為

に設けられる会議など居心地が悪い事この上ない。

「平気かよ」

「まかせとけって。 楽しみにしてるからな。 王なんか、 お前がぶつ壊した方が

喜ぶんじゃないか」

疑わしそうな視線を向けるレオアリスに対し、アスタロトはに、と自信に満

ちた笑みを浮かべ、 白い円卓の上に頬杖をついたまま、 空いている右手をひら

ひらと振った。

「今度は一緒に行こうよ。いい店見つけたんだ」

「……そうするよ。またあんなモン持って来られちゃ敵わねェし。 アーシア、

ごちそうさま」

「お気を付けて」

アスタロトと会釈をするアーシアに軽く右手を上げて答え、 レオアリスはア

スタロトの館を後にした。

七

通常の訓練は大体毎日同じような日程で回る。

朝 0) 半 刻 程 度、 隊  $\mathcal{O}$ 少将以上  $\mathcal{O}$ 打 ち合う せが あ ý, そ 0 後 レ オアリスとグラ

ため総司令部に出向く。

ン

ス

レ

1

は

七日

に

度の

割合で、

師

団

全体

 $\mathcal{O}$ 

連

絡

調整

を

兼ね

た会議

に

· 出席

する

近衛! 師 寸 とは 7 え王に謁見する機会はそれ程多くはな \ \ \ 総将 アヴァ

諸侯の揃う謁見に列席する程度だ。

常に王の

傍に控え

るが、大将であっても特別な案件が無い

限

りは、十

日

に

度、

口

ンは

方、 各 中 · 隊 で は午 · 前 中 は 個 々 の 基 礎 訓 練 を行 V ; 午 後に全体 0 演

日 おきに左中右、 三隊 揃 って  $\mathcal{O}$ 布 陣 . 演習 が 行 わ れる。

この流れ

は

師

寸

0

第二、

三大隊

に

於い

てもさほどの違

*\*\

はな

か

っった。

だが今は 御 前 演 習が 近い ため、 通 常常  $\mathcal{O}$ 内容とは別に、 演習訓 練とその 詰  $\emptyset$  $\mathcal{O}$ 

会議が連日行われていた。

会議を終え、 漸 <u><</u> 日  $\mathcal{O}$ 終 わ りを迎えてレ 才 アリ ス が 執 務 室 に 戻ると、 帰 り

支度を整えていたクライ ・フが 顔 を上 一げた。 執 務 室  $\mathcal{O}$ 奥 に 置 か れ た 机 に . 向か うレ

オアリス を、 クラ イフ 0) 声 が 追 1 カン け る。

上将、 お 疲れさまです。 終 わ ŋ **、ですか** ? これ か ら飯行きませ  $\lambda$ か

空腹を感じてい

たレオアリス

は迷う事無く頷い

た。

どうせ屋敷に戻っても食

るもの は な \ <u>`</u> どこかで 食事 を 摂 0 て か ら帰ろうと思って **(** ) たところだ。

行く。 すげ え腹 減った。 けどちょ っと待ってくれ、 件書 類  $\mathcal{O}$ 確 認 を

そう言ってロ ツトバ ル トの席を振 り返 ったが、 珍しく空席だ。

ああ、

奴

なら

先

に

飯

K

行

きま

L

た

ょ。

また戻るみ

たい

ですが」

戻るの か ょ。 ま あ な 5 俺 でも 戻、 れ ば 1 1 か

V 才 アリスは 手 に L 7 7 た書類 ※を自分  $\mathcal{O}$ 机 の上に · 放 り、 再び 扉 に 向 か った。

取 つ手 に 手 を か け て 1 た クラ イフ が 手 を 止  $\Diamond$ 7 レ 才 アリ ス を 振 り 返 る。

「え、 じ Þ 酒 な つす か

お前 飲 めば ? 俺 は 元 々飲まね え 

一人で飲んだくれるのもなぁ。ヴィルトールは?」

それも悪くは無い が、 やはり一人で飲む より 相 . 手 が ζ, た方がい いと、 クライ

ル

<u>ا</u>

ルに声をかけた。しかし普段は

クライフに付き合う事  $\mathcal{O}$ 多いヴィル | | ル ŧ, あ っさりと肩を竦める。

フは同じように帰り支度をしていたヴィ

てない。 「私は今日は帰るよ、 そろそろ忘れられそうだ」 悪いね。 最近 帰 り が 遅い せ V > で娘とまともに顔を合わせ

「あー、そうだな。ご愁傷さん」

深刻そうな面持ちで溜め息をつくヴィルトールに対して、 クライフはさっさ

と、それ以上彼が口を開く前に会話を打ち切った。

る彼の娘の姿を思い そのクライフ 0) 態度に <u>`</u>出 し、 気付 口元を綻ばせた。前回 かず、 レ オアリス 一会っ は以 た 時 前 12 は 何 まだ本当に小さか 回 か 会ったことの あ 0

たが、子供の成長は早い。

「そうい . や 最 近会 ってない けど、 大分大きくなったんだろうなぁ」

「上将、突っ込まないほうが」

途端にヴィルトールの顔が蕩ける。

てま 言葉を言ったりして、そこら辺がまたかわいいんですよ。 言葉を話 1 いして、 やあ、 L 妻の お 始めましたね。どこで覚えてくるものか、 陰さまで。そろそろ三歳になるんですが、 口ぐせそのもので叱られ たりするので私の立 結構驚くような大人びた もう大分しっ 妻に物言 一つ瀬 が ない いが良く似 か んです りした

が。 あ、 先 日は

「分かった分かった、さっさと帰れ」

堪 ŋ 兼 ね たクラ イフが、 蕩々と語りだしたヴィルトー ル を追 V) 払うように 再

ヴィル トール

び

手を振

った。

を語 1 った態だ。 りだすときりがなく、 は 愛妻家で、現在三歳の愛娘がいる。 クライフにしてみればもはやその 普段は穏やかだが娘 話 は 聞 き飽きたと  $\mathcal{O}$ 事

カュ って分厚 クライフは 1 はだ話 書 類 に眼を通しているグランスレイに声をかけた。 し足りなさそうなヴィルトールを無視して、 執務机に向

副 将、 7) か が 0 すか

杯を傾ける仕草に、グランスレイは日頃厳し い眉根を苦笑に寄せた。

私はもう少しやる事がある。 あまり飲みすぎるなよ」

残念だな。 フレ イザーは?」

フレイザーは少し考え込んだものの、 チラリとグランスレイに視線を向け、

すぐに首を振った。

「私も、もう少し片付けてからにするわ。またね」

しやあねえ。上将、 飯だけ付き合ってください。飲みは現地 調達します」

その場の全員にすげなく断られ、クライフは心底残念そうに肩を落とした。

笑って頷くと、レオアリスはグランスレイ達に一言声をかけて執務室を出た。

中庭と、それをぐるりと囲む士官棟の回廊を抜けていく風が全身を包み、心

た気持ちがほぐれるのを感じながら、 地良い。上弦の月が照らし出す庭は穏やかそのものだ。 レ オアリスは続いて出てきたクライフを 会議続きで滅入ってい

振り返った。

「どこにいく?」

「食うだけなら、 食堂行きますか。 誰 カ しらいるだろうし」

飲み相手が、ということだ。

いいぜ。近いし」

そう言うと、二人は目指す食堂  $\mathcal{O}$ ある方 一回 廊 を抜けて歩き出 した。 た。

あー 腹減った。 俺今日 は会議ば 0 か で あ んま身体 -動か してな **,** \ のにな

あ。

絶

対会議って演習より体力使うぜ」

「俺は常に寝てるんで分かりません」

「グランスレイに言うなよ、それ」

「バレてますよ。あっはっは」

士官棟を抜けて 通り を歩く道すが ら、 行き交う兵士達が 立ち 止 ま っては 二人

に 敬礼を向 けてい <\_ 丁 度勤務交替 の時 間 が 過ぎたところで、 日中 ょ り 人 影が

多い。

達 の為 王城  $\mathcal{O}$  $\widetilde{\mathcal{O}}$ 第 食堂が 層、 置 各 軍 カ れ 7  $\mathcal{O}$ 司 ζ, る。 令部と兵舎が 第一 層 は 立ち並ぶ区 方角ごとに四分割され 一域との 境 目 てい 辺 りに る 0 は、 に 近 兵士

作 り  $\mathcal{O}$ 為、 食堂 ŧ そ れ ぞ れ 匹 ケ が所に あ 0 た。

に 繰 般兵 り出す者も多い 0) 配 備 は 大体 が、 半 兵舎の傍に 日交替で、 ある食堂を利用 夕刻までの 勤 務 する者も少なくな  $\mathcal{O}$ 者 は 時 間 が 終 わ ると城下

士 官 専 用  $\mathcal{O}$ ŧ  $\mathcal{O}$ Ł あ るが、 それ は 南  $\mathcal{O}$ 総 司 令部 近くに 棟 あ るだ、 け だった。 があ

その るのだが、 専 用  $\mathcal{O}$ わざわざ士官専用に 棟  $\mathcal{O}$ 中に は、 少し 手間 行くのは を掛 面 けた食事や酒を出す店などが 「倒さもあり、 だからレ オア リス 数店 達

大体この 食堂を利 用してい る。

ヴィル トールなど家庭がある者はここで食事を共にする事 は多くは ない が、

オアリスやクライフなど独り身には有り難

*\*\

ŧ

のだ。

された兵達が 食堂に足を踏 思 1 4 入れ 思い た途端 に 卓につき、 に、 賑 P 酒 杯 カゝ を傾 な活 分けてい 気 が二人を包 て、 ずらりと百台近く しんだ。 任 務 か 5 並 解放

「 空 い てな 7 な あ だ卓は既にほ

とん

ど埋まってい

. る。

「この 時 間 回 転 悪 7 0 すか らね え。 安い か ら皆長居し て飲んだくれるんだよ

なぁ……」

どこに座ろうか と首を巡らせ ているうち、 その 中 で 角だけ、 恐ろしく 静ま

返ってい る卓 が 月 に 入った。

周 进 よりも空席 0 目立つそこには、五 一人ば か り の 兵が 師 団兵も正規兵も、 お

 $\lambda$ 

そらく先 に 座 0 て しま 0 て *\* \ た  $\mathcal{O}$ だろう、 離 れ た 場 所 に 座 0 7 1 る 他  $\mathcal{O}$ 兵 達

は 対 照的 に、 ま る で 訓 練 中  $\mathcal{O}$ ように . 畏ま いって 7 る。

その元 Xを見つけてクラ イフ は あ ん ぐりと口 を開 けた。

元 区 はというと傍らに · 置 *\*\ た書類に 目 を落 L なが 5, 我 関 せ ずとい 0 た 様 子

元 囚 口 ツ 1 バ ル  $\vdash$  $\mathcal{O}$ 隣  $\mathcal{O}$ 席 にどか り غ 腰を下 うし た。

で

食事

を取

いってい

る。

斉に立ち上

が

り敬礼

する兵達

0)

間

を抜

け、

クラ

1

フは

確

か

に

煩

雑

な

ک

0

食堂

内でそこだけ

別

0)

空間

のようだと、

レ

才

ア

リス

ŧ

苦笑

うっ

は

1

 $\emptyset$ 

0

ずら

L

7

な、

お

\ <u>`</u>

9

]

か

周

り

固

ま

0

て

 $\lambda$ 

ľ

Þ

ね

え

か

を浮 口 ツ 1 カ べ バ て ル 1 口  $\mathcal{O}$ ツ 持 1 バ 0 背 ル 景  $\vdash$ と の前 本  $\mathcal{O}$ 席 人  $\mathcal{O}$ に 近 寄 腰 掛 け ŋ 難 た。 さ 理 か 由 5 来 は考えるまでも る ŧ  $\mathcal{O}$ だ。 無 要は

見 あ

た目 لح 違 0 7 面 白 *\* \ んだけどな

ら 見 レ オ れ ア ば IJ 面 ス 白 独 1 لح 自 暢  $\mathcal{O}$ 感 気 な考え 想 に 同 意 0) 下 する者は少なそうだが、 まだ 緊張感漂う周 囲 こ の  $\mathcal{O}$ 食卓 状 を 況 は 度 ک 見 れ で 口 傍 7 カン

か 5 才 ア IJ ス は 品 書 きを手 に 取 0 た。

隣  $\mathcal{O}$ クラ イフ を気に . む 止 一めず、 口 ツト バ ル  $\vdash$ · は読 んでい た書類を閉 レ オ

アリスに顔を向ける。

「会議は終了されたようですね」

「一応、今日のところはな。 お前この後戻るんだろ? 悪いけど一件確認した

い書類があるんだ」

「何です?」

「前回の御前の警備体制」

「承知しました。ご用意しておきましょう」

頼む」 V オアリスが言葉を切ると、クライフは机に深く肘を付きながら、

「美味いか?」

浮かべる。

5

口

ツ

トバ

ルト

の顔をまじまじと覗き込んだ。

にや、

とからかうような笑みを

斜め下か

普段あまり口に はする事 は なさそうな料 理の  $\prod$ をつついてみせる。

「……まあ、それなりに。いい味ですよ」

口 ットバルトの評価に、 背後の席を片付けていた給仕が、 傍目にも分かる程

ほ っと肩を下ろす。

っか L お 前、 何だってこんなとこで食ってるわ け? 似合 わねえよなあ。

周 りの奴ら圧迫すんなよ飯時に」

お忘れのようですが、

私も入隊当初

しばらくは宿

舎に

1

まし

たよ。

別

に

今初

番派手だったも

めてという訳でもない」

「いや、忘れてねえ。お前 の入隊当初が最近の奴等の中じゃ一

んなあー。 だから圧迫す んなっ て言って んじ ¢ ん

口

ツトバル

トは改めてクライフに身体を向

け、

蒼い

瞳

を細め

た。

仕方ないでしょう、 時間 ごが無い んですよ。ここが一 番 近 \ \_

戻ってまた仕 事 かよ。 せわ i ねえなぁ。 俺みてえに勤務時間 内でビ ッと終わ

らせろよ」

明朝までの 書類を、 どなたかが夕刻に出してくださったお陰でね」

は…」

 $\Box$ を開け、 そのまま冷や汗をか 7 て固まったクライフを尻目に、 口 ツトバ ル

1 は レオアリスに視線を戻した。

御前演習については、大方整ったのですか?」

「まぁ」

た。 言葉を濁らせたレオアリスの様子に、 レオアリスが あまり 剣舞 をやり たが って 口 ット 1 ない バル トは  $\mathcal{O}$ は、 П 周 の端に笑みを浮 囲 に も伝わってく かべ

「では、剣舞をなさるという事ですね」

る。

「ま、そういう」

レオアリスは非常に気が進まなさそうに言葉を濁 したが、 口 ツトバ ルトは逆

に口元の笑みを深めた。

るには ますが、 見せ 物 1 修 *\* \ 的 | 繕費は な要素 機会でしょう。 は強 想定被害分予算計上してありますので、 1 ですからね、 周 囲 を破壊し お気持 ない 5 ように気を付けて戴く は お 察ししますが、 一定範囲内であ 力を示り 必 要は れば され あ り

「何だそりや……」

対応

は可

能

です」

体何を基準に予算要求したのだろう。 口 ツ トバ ルトの試算した範囲がどれ

くら な  $\mathcal{O}$ か 分か 5 な *\* \ が、 あ まり知ら ŋ たい とは 思 わ な か つ た。

大体 お 前 こない だ は 金ね えって言ってたじ Þ ね え か

勿論 無尽蔵にある訳 が ないでしょう。 使いどころの 問題 ですよ」

使いどころが 間 違ってんだろ……」

オアリス

は

П

の中でそう呟くと、卓上に頬杖をつい

た。

第 あ んなも の見て面白 いか?」

オアリスに してみ れ ば単に 気の赴くまま に 剣 を 振 0 てい るだけで、 特

まった型がある訳でも ない。

逆に言えば、 自分の精神状態 が如実に 表れるのがレオアリスにとっての 剣 舞

だ。

術を施さなけ れ ばなら ない  $\mathcal{O}$ f, 裏を返 せ ば 自 分  $\mathcal{O}$ 能 力 が 未熟で、 完全に

剣

みっとも ない じ やん か を制

御仕切

ħ

--

7

ないということなのだ。

多分完成され た 剣士なら、 見 事 に 舞 0 て見せるのだろう。 ただどうすればそ

こに近付くの

か、

今のレオアリスには見えな

に

決

指 導を仰ぎたくても、 その 相手が近くにい な 1  $\mathcal{O}$ 

御前でなさることに意味が あるんですよ」

口

ツト

バルトの指している意味は

レオアリスにも判っている。

王

 $\mathcal{O}$ 御

前

演習

は 軍 . つ 大行 事 の一つで、そこでの 演武を行うの は 最大 の栄誉だ。

ただ、 レ オアリス自身はやはり単 純に喜ぶ気には なれ なかった。

まして王の前で不完全なもの を披露するなど、 尚 更嫌だ。

上将、二刀使 1 ましょうよ。 派手でい いっすよ」

クライフは卓

 $\mathcal{O}$ 

上に身を乗り出

し、

期待を込めた顔でレ

オアリスを見たが、

当のレオアリスは 余計情けない 顔になって視線を逸らし、言いにくそうに · 口 籠

もった。

いやあ・・・・・、 無理じゃない か、 多分。 正直言って二刀使いこなす自信が ない

んだ。 制御が 難 しくってさ」

制

御

つて、

まだそんな力が

有

り

余

ってんですか?」

有り余ってるってな あ ……」

クライフの驚いた声に、 レオアリスは心外そうに眉をしかめた。 口 ットバル

トが蒼い瞳を測るように細める。

「……使おうと思っても、使えないという事ですか?」

使わないのか、使えないのか、それは大きな違いを持つ。 口 ットバ ルトの問

いに、レオアリスは宙を睨むように考え込んだ。

しい コンジョンル官を開せて、いまとはノア

いや……。 そもそも使おうと思う事がまずないしな」

二刀を抜いた事はこれまでに二度ある。そのどれも、王都に上がる前の事だ。

く身体が動いた。よく覚えて ١ ر ない というのが 実際のところだ。

一度目は

剣士としての覚醒

の時。

あの

時は死

が目前に

あり、

ただ無意識

に近

二度目は 御前試合の前だったが、手にした瞬間意識ごと持っていかれそうな

感覚に、慌てて収めた。

慣らしとかなきゃいけ ない 0) は判ってんだけどさ。 まあもうちょっと……」

その言葉の中にはさほど真剣な懸念の 色は無い。 口 ツトバ ル トは東 の間 レオ

アリス 0 瞳 を覗 き込むような視線を向け たが、 そこにあるのは 7 つもと変 わ 'n

ない色だけだ。

----いずれ、見せていただきたいものですね」

V オアリス達が 頼 んだ料 理 が 運 ば れ て来たのを機 に、 口 ットバルト - は席を

立った。

「では、私はこれで。書類はすぐに用意しておきます。ですが今日はもう遅い、

御覧になるのは明日でもよろしいのでは?」

「ん……いや、戻るよ」

承知しました。ごゆっくり」

礼しロットバルトが立ち去ると、二人の卓の周 ŋ も漸く賑やかさを取り戻

した。それを眺め、 「上将、何とかしたほうがいいっすよ、 クライフは大仰に天井を仰ぐ。

あいつ」

「何とかって」

もっと親しみやすくとか。 あんなに兵を緊張させてもなぁ」

そりや隊内の環境改善も俺 の仕 事だけど……。 親しみやすいねぇ……」

て腕を解いた。

レ

オアリ

ノスは

旦考え込むように腕を組

み卓上を眺

めたが、

すぐ眉をし

かめ

やめた。 想像すると意外と恐え……。いいじゃないか、 個性だろ、 あれも」

それで片付けるンすか ?

隊持ってねえからな。兵と直接関 わる訳じゃない し

まあ、 家が家ですからねえ。 ヴェ ルナーなんて普通、 その辺歩いてるような

家じゃないですし、 仕 方 ない . つ ち Þ な 1 んですが。 俺も最初、 単なる冷やか

暇潰しかと思いましたからね」

か

クライフは既に見知 った気安さで口にしているが、

ともなれば、

誰

ŧ

が

より

深刻にそれ

を感じるの

は当然

 $\mathcal{O}$ 

事

でもあ

れ な

実際侯爵家、

それも筆

頭

王都に、 王城内にあ れ ば、 尚更そこを意識せずには通

「そういうモンでもなくて、 意外でしたけど」

「……いろいろあるさ」

オアリス自身にもその枷は大きい。 正直に言ってしまえば、 時折 大将 など

という地位は返上 したくもなる。 レ オアリスとしては王に仕えられるのであれ

ば、ここでなくて もい *(* ) のだ。

王都とは本当に 面倒 な 5所だ、 とつくづく思う。

そう言えば、 お . 前 は 何で師団に入ったんだ?」

クライフは一 旦 食· 事  $\mathcal{O}$ 手を休め、 思い起こすように一 度天井を仰 7

「俺ですか? 生活の為ですね」

「判りやすいな……」

ね。果実農家やっちゃ

いますが、さすが

に食わせきれね

えでし

ょ。

兄

貴は

跡

継

「俺んとこ、弟妹すげ え多い んですよ。 俺が二 番目であと下に六人い ます から

ぎだし他はまだガキなんで、 働ける俺が出て来たって訳です」

「八人兄弟か、すげえ」

「じじばばも入れると十二ですよ」

考えてみればクライフのこうした話は聞いた事が無かったが、

いうのはいかにもクライフらしい気がする。

ぱ俺らの地方でも花形だし、腕っぷしにはそれなりに自信ありました ま、腕試しって気持ちの方がホントは大きかったんすけど。師 寸 つったらやっ んで」

ガ キの頃はさんざん暴れてま したからね、と今でもそう変わらなさそうな事

を言って笑い、クライフはレオアリスに視線を戻した。

「上将はどうなんですか? やっぱ腕試しとか」

弟妹が多いと

返すように考え込んだ。 改 めて問 わ れ た  $\mathcal{O}$ は 初 めて 故郷を想ってまず浮かぶ か もし れ な レ オアリス  $\mathcal{O}$ は、 は 白く雪に閉ざされた村 束  $\mathcal{O}$ 間、 過 去を思

「……俺もお前と似たようなもんか もな。俺の故 郷もそう豊 かじや なかっ たし、

風景だ。

それにやっぱり、 力を試したいって気持ちはあった」

訳でもない。 がする。 つからだろう、 あの 場所を嫌 明確に意識 。 つ ていた訳でも、 L た事は、 育ててくれた祖父達に感謝 無いが、ずっとそんな想いはあった気 L てい ない

田 畑を耕すに オアリスの育った北の辺境は、 も生 活 は 容易くない。 年の半分が雪で閉ざされる厳しい地だ。

彼等の 側にいて彼等を助けたいと思い ながら、 心 の何処かで常に、 王都 へ の

漠然とした想いを感じていた。

「剣士ですもんねえ」

や、そん時 は剣なんて使えなくてさ。術士だったんだ。結構 通用すると思っ

てたんだけど……」

そこまで口 に して、 王 都  $\mathcal{O}$ 術 士 達を 目 の当たりに した時に受け た衝 撃 すを思

出し、 オアリスは気まずそうに語 尾を П の 中 1. 1. L ま 1 込んだ。

「まあ、 何だ、 前も言 ったかもしれない けど、 俺に はあ W き術 は 向いてねえ、

クライフが爆笑する。

「……笑い過ぎだ」

やいや、すんません。……ま あでも」

目

の端に浮

かべ

た涙を掌で擦

ってから、クライフはもう一度にやりと笑った。

「上将は 剣 士 0 が 向 てますよ。 あ の 時 0 御前、 俺見てたけど正直舌巻き

は早く手合わせして見たくてウズウズしてたんで」

まし

たか

ら

ね

剣士な

んて初めて見た

し、

師

寸

*(*)

し

か

も第一に配属され

オアリスが剣 士として頭角を表 した 0) が、三年前 の 王  $\mathcal{O}$ 御 前 試合の時だ。

誰もが 想定 L て 7 なかっ た、 年若 V 剣 士  $\mathcal{O}$ 圧 倒 的 な 勝 利

は 不満 王が が 近 あ 衛 ったとしても、 師 団 に 配 Ļ その後僅 直 に剣を合わ か 二年 せるクライフ  $\mathcal{O}$ 内 に 大将 0 達師 地 位 を得り 団 の者にとっては自 たの f, 外 部 に

然な事と言えた。

兵士達が卓 こうしてい (T) 周 る間 りにやってくる。 ŧ, レ オアリスが 他 の大 居るのに気付くと、 将達ではこれほど気軽 入れ代 に わ り立 . 兵 士 ち代 達 と言葉 わ り

を交わす事はないだろう。

若く、 要は 屈託なく、 彼等にとって、最高位と謳 貴族や王都  $\mathcal{O}$ 出 では、 わ れる剣士 な V ) 0) 謂 存在 わば彼等の は誇 りなのだ。 土壌 に 近 V) 加 事 えて が 年が 大 き

く影響している。

だっ れま たが、 。 で 近 オアリスが近 衛師 レ オア 寸 に リス 衛師 剣 士 はすぐにその 団に配属され が おらず、 た時、 印象を忘れさせた。 般に流布する印象 全く反発が 無 L カゝ カ 0 な た カン 訳では 0 た  $\mathcal{O}$ な ŧ \ \ \ 因 そ

それでも、 クライフ が ふと目を転じると、 一方では面 白 < な V 表情 を浮 か べ

た者達も見える。

(西方

か

正規軍  $\mathcal{O}$ 部、 特 に古 株 0) 士 官 0) 間 に は V 才 アリスに 対する反感を抱く者が

数名いて、それが少なからず兵士達にも波及している。

正規軍と近 衛 師 寸 は、 完全に両立 しているとは 言 1 難 正 規  $\mathcal{O}$ 誇 り、 王直

轄軍としての誇 り が、 時として兵同 士の対立を生む。 V オア リス ^  $\mathcal{O}$ 反感 Ŕ

そうした事に端を発しているとも言えた。

(この地位 で若 7 からな、うちの大将。 あんま大将らしくねえし。 俺はそうい

うとこがいいんだけどなぁ)

地位や階級に拘る者からすれば面白くはないのだろう。

(まぁ、全体がけんつくやってる訳じゃねえし)

クライフは視界に見知った顔を捉えて片手を上げた。 彼もまた西方軍第一大

隊 の左 軍中将、 ワッツだ。 ワッ ツは飲み仲間であるクライフを認め、 にやりと

笑って大股に近づいてきた。

岩を削ったような顔に髪をすっかり剃り上げていて、グランスレ イよりも体

格 が良く、見た目には近寄り難い容貌なのだが、どこか剽軽さを漂わ せ ている。

オアリスの 前に立つと、一 旦腕を胸に当て敬礼を施す。 正 規 軍 の場合、 右

腕を当てる。

お久しぶりです、大将殿。今日はもう上がられるのですか」

いや、一度戻るんだ。ワッツのとこの大将は」

「既にあちらで出来上がっております」

ワッツは身体をずらし、 奥の一角を示した。 賑やかな様が見て取れ、

レオア

リスは笑った。

「クライフをお借りしても?」

「連れてってやってくれ。一隊には振られたところだ」

「承知しました。じゃ、クライフ、食い終わったら飲もうぜ」

クライフが頷くのを見届け、 ワッツはまた重い身体を揺らすようにして戻っ

た。

食事を終えてレオアリスは席を立つと、クライフへ、にや、 と笑い かける。

「じゃあな。一応言っておくけど、飲みすぎるなよ」

昨夜飲みすぎたと言って、今朝も遅刻しかけたところだ。 明 日 また遅刻した

ら、グランスレイの大目玉を食らうのは間違いない。

「肝に命じます」

真面目くさって敬礼してみせるクライフに苦笑を洩らし、 レオアリスは入り

口に向った。

ようなら今回の体制の大枠を考える。……本格的に図面に落し込んで組 戻って前回 の警備体制を確認して、グランスレイやロットバルトがまだいる む のは

明日でもいいだろう。 取り敢えずそれだけしたら、今日はもう寝よう。

レオアリスの後ろ姿を見送り、クライフは早速奥の卓に足を向けた。

明日は午後に演習があるが、午前中までなら多少頭が重くても大丈夫だろう。

いつも通りの一日が、穏やかに終わろうとしていた。

北の空が明るかった。

夜 の関 を 嘲 笑う かのようなその赤 7 色に気付いて、 北  $\mathcal{O}$ 外門の 警護に当たっ

ていた近衛兵の一人が目を凝らす。

おい、北が変じゃないか?」

傍らに立 つ同僚に声をかけ、 その方角を指差すと、 彼もまた空を見上げて頷

いた。

「火……か? もしかしたらどこかの森が燃えてるのかもな」

それが北  $\mathcal{O}$ 街道 が伸 びている方角である事 を確認 Ļ 城壁の・ 上を見上げ

誰かに声をかけて上から確認してもらうつもりだったが、 歩哨 は 少し 前に 通り

過ぎたところで、すぐ近くに姿は見えなかった。

ていこに「いう」、ことでである。このでは、ここを頼む……」「とにかく准将に報告しよう。悪いが、ここを頼む……」

微かに風に何かの匂いが混じった。

衛士 0 視線が、 外門に掲げられた松明 の明かりと闇との境界に注がれる。

いつの間にか、男が一人立っていた。

闇が形を成したようだ。

外堀 に 掛 けられた橋を、音もなく、 だが悠然と近づいてくる。

その 7 かにも平然とした姿に、衛士達は思わず諸 侯  $\mathcal{O}$ 名前と顔 を 通 り

「……止まれ! 何者だ!」

浮

かべた後、

漸く見た事

ずのない

相手だという事に気付

1

た。

頭に

声を張り、 二人の 衛 士 一が手に L た長 槍  $\mathcal{O}$ 石 突きを足元に打ち

その音に気付いた数名 0 歩哨 が、 城壁を門の 真上まで駆け 寄 0 た。 男 の姿を認

付けら

威

嚇

する。

玄こつがえられめ、弓を構える。

弦につがえられ た矢先が · 男 の 喉 元に向 けら れ てい るも  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 男の 歩 みが 止ま

る気配はない。

「所属と名を名乗られよ!」

男は 口元を笑 1  $\mathcal{O}$ 形 に 歪 一めた。 瞳 の上まで艶  $\mathcal{O}$ な ر ر 黒 1 前 髪が 落 ち か か り、

表情を覆い隠している。

低く陰鬱な愉悦を宿した声が、ゆるく吹き付ける風に乗った。

## 「――近衛師団第二大隊中将……バインド」

衛士らは ぽ か んと口を開 け、 それ から顔を見合わせた。 二隊は衛士 らの 所属

する隊だ。

おい、ふざけるな! 第二大隊 の中将にそのような者は , \ な V !

立てられていた槍が、 一斉に男に 向って倒される。 城壁の上でいくつも の弓

が引き絞られた。

「捕えよ!」

クク」

男の左腕の ある辺りが、 夜の闇の中で赤く輝く。 口元の笑みが、 層深く吊

り上がった。

ざわりと、樹々が揺れる。

身の 裡  $\mathcal{O}$ 剣 が 僅 か に震えるのを感じ、 レ オアリスは足を止めた。

辺りに視線を巡らせても、 映るのは夜 の闇と、 中天に昇った細い月が投げ掛

ける僅、 か な光に浮 かぶ 石 塀、 そして樹 々の影だけだ。 影に · 埋 ŧ れ たもうすぐそ

こには、自分の屋敷の門がある。

だが、レオアリスは今来た道に再び身体を向けた。

騒めく樹。

その脈動に合わせるように、剣が鼓動を刻む。

「……誰だ」

闇に呑まれた視線の向うからは、何の答えもない。

だが、確かに、そこにいる。

何か。

自分に意識が向けられているのが判る。

漆黒の瞳が一点を捉えて、ゆっくりと細められた。

俺に用なんだろうが、だんまりじゃ分からねぇ。出て来い」

ここは外れとは云え王 しかしレ オアリスに向 けら 城の城壁内だ。滅多な者では入り込め れた気配は、これまで感じた事 . О 無 る場 7 %所では ものだった。 ない。

どこか不快な、味わった事の無い感覚。

そのくせどこか……、 どこかで知 って **(** ) る か  $\mathcal{O}$ ような、 剣  $\mathcal{O}$ 騒  $\emptyset$ き。

暫らく闇に視線を向けてい たが、 動 < 、気配 が 無 1  $\mathcal{O}$ を見て取 ると、 レ 才 アリ

スは僅かに息を吐いた。

それ から、 自分が息を詰 めて 1 た事 に、 少 なか らず驚きを覚える。

「……出てくる気が無い なら、 引つ 張 り 出 よすい ぜ。 王 一城内に 無断で立ち入らせる

訳にはいかない」

闍 ~ と 一 歩 踏 4 É した時、 微 か な笑 1 声 が 風 に 乗 0 た。

低く嘲るように震える、含んだような笑い。

視線の先で朧ろげな影が闇から浮かび上がる。

師団第一大隊大将、だったなぁ」

言葉と共に、 微 がな鉄 のような句 **(** ) が 流 れ た。 あ れ は、 血 *の* ::。。

オアリスは瞳をきつく眇めた。

「貴様……どうやって入った」

「クク。簡単だったな。もっとましな兵を配せよ、大将殿

言葉が 終わらな い内に、 風 を切る音と共に青白い 、閃光が 闇 へと走る。 足元に

敷き詰  $\Diamond$ 5 れ た 石 畳 の 上 に、 直 線に 亀 裂が 生 しる。

浮 カン び 上 が 2 て 1 た影がゆら りと溶けた。

右手に青白く光を纏う剣を提げたまま、 レ オアリスは視線を巡らせる。

先に再び 影が浮 カゝ んだ。

お お、止めてくれ。まだ何も話し てないじゃ あ ない か。 久々

0)

再会の

感動を、

その

知らね え な 少しは味わわせて欲しいなぁ」

視線だけを影に 向けたまま、 手の 中 0 剣  $\mathcal{O}$ 感 触 を 確 カン 85 る。

先 程 0 刀は、 十分な速さを持た しせた。 威 嚇  $\mathcal{O}$ 0 もりは ない。

だが、 影 は 何  $\mathcal{O}$ 気なしに避 けて 7 る。

が 連 れ な 7 事を言うなよ。 俺 は、 お 前をよ お < 知 ってる。 ま あ、 ŧ 0 とも俺達

. 逢 ったの は、 お . 前 がまだ赤子の 頃 だだ 0 た が

眉 を潜め るレ オアリ ス 0) 視 線  $\mathcal{O}$ 先で、 何 か 細 長 1 Ł  $\mathcal{O}$ が、 ぼうっと赤 7 輪郭

を纏 つった。

呼応するように、 レオアリスの 剣が、 ゆっくりと一つ脈打つ。

「レオアリス。今じゃ最高位とさえ謳われる剣士だってなぁ。 クク、 嬉しいぜ」

「なのに、お前は仇のもとに仕えるか。哀れだなぁ」

「……何、だと?」

お前の一族はどうなった?」

一歩、踏み込もうとした瞬間、背後で足音が鳴った。

影が動く。

レオアリスは踏み込みざま、剣を振り抜いた。

火花が散り、 赤い 輪郭を纏う何かが、 レオアリスの切っ先を受け止めた。

赤く、焔を纏う、

剣。

柄はなく、 刃はそのまま、男の左肘から盛り上がるように生えている。

レオアリスの瞳が、僅かに見開かれた。

——剣士。

自分と同じ―

じわり、 と紅 *\* \ 剣が熱を帯びた。

男と目が合う。

冥い、 愉悦と闇を宿 した瞳。

上将!」

声が掛かった一瞬に視線が弾かれる。

お前が生 まれた頃だ。 調べ てみろよ」

俺 の名は、バインド」 どこか楽しげな響き。

ふっと、

圧し返してい

、 た 剣

0)

力が

消える。

向けた視 線の先には、 もう男の姿は 無 カン った。

直後に 駆 け寄 0 たロ ットバ ル  $\vdash$ が 闇  $\mathcal{O}$ 向うを追おうとするのを、 手 を上げて

ある事を悟 り、 驚 ζ) た色をその 顔 に浮かべた。 制する。

レ

オア

リス

0)

手

0

中  $\bigcirc$ 

剣

に

目を留

め、

口 ツ

トバル

トは只なら

ぬ事態で

「上将? 何 が

分からない。 …いや」

レ オアリ スはもう一度だけ、 闇  $\mathcal{O}$ 中 に 視線 を向けた。

確 かに、 あ れ は 剣士だ。

焔を纏 0 た 剣。

既に 何  $\mathcal{O}$ 気配 ŧ な \ <u>`</u>

V オアリス 0 剣 がそ 0) 手の中 から掻き消える。

何が あ 0 た

俄 いに外に 門の 方 角 が慌ただ しく騒めきだした。

レ オアリスは 口 ットバ

ルトに視線を向 けたが、答えは大方予想が付い

先 程 の影が纏 ってい た、 血.  $\mathcal{O}$ 匂 い : :。

「北外門 で、 衛士 数名 が · 何者 かによって殺害されました。 現 在、 王城内 に兵を

手配しています」

兵達の呼び交わす声が、 深い 夜の中に響いて、 レオアリス達の所までも聴こ

えてくる。

もう、 城内には 7 な *(* ) だろう」

口 ツト ・バル トがレ オアリスの視線を追って、 再び木立の影に視線を向ける。

ている。

「中将以上を集めろ」

無言で頭を下げるロットバルトの横を抜け、レオアリスは城門へ足を向けた。

『お前が生まれた頃だ』

『仇の下に仕えるか』

(---何者だ)

バインドと名乗った。 初めて聞く名だ。 自分の事を詳しく知っているような

口振り。

『お前の一族はどうなった?』

打ち込んだ右腕に、微かな痺れを感じた。

九

冥い夜の帳の中で、男は低く笑いを忍ばせた。

左腕には、先程剣を受けた時の鋭い衝撃が未だに残っている。

右肩の付け根から腕にかけて、 鈍く重 <u>, , </u> 痛みが走るのを感じて、 視線を落と

した。

馴れ親しんだ痛みだと、口元を歪めながら思う。

視線の先、 男の右腕は、 肩から先が闇に溶けたかのように、そこには無かっ

た。

忍び笑いが圧し殺しきれない哄笑に変わる。

「もう少し待てよ。もう少し。 思う存分、 切り刻ませてやる……。 楽しみだ

なあ」

121

+

副 将以下、 中隊中将が顔を揃える中、レオアリスは執務机に肘を乗せ、 その

手に頭を預けたたまま暫らくの間考えに沈んでいた。

グランスレ イが促そうと口を開 きかけ た時、 漸く顔を上げ、 その場にいる者

達の顔をぐるりと眺め渡す。

「報告しろ」

グランスレイは改めて姿勢を正した。

「侵入者はおそらく一名。北外門から衛士六名を殺害し侵入。

頃合を考えると、その足で士官区に向ったと思われます」

遭遇?

違う。あの男は始めから、レオアリスを目的にしていた。

殺害され た衛 士 達 は、 手足を落とされ、 傷 П が 焼 かれてい ・ます。 武器 は 何を

使ったものかは目下調査中ですが、」

「剣だ」

上将が遭遇した

視線が集中する中、レオアリスは宙空を睨む。

「警備は」

「現在、引き続き二隊全体が当たっています」

「三隊にも警備の増強を伝えろ。それから、クライフ」

は

「夜明けまでは、お前の中軍を当てろ」

レオアリスの指示に、クライフは厳しい面持ちのまま頷

「……それと、グランスレイ。二、三隊に伝達を。 もし出くわ しても手を

歌いた。 た。

出すな、と」

その場の全員が驚いたようにレオアリスを見つめる。

「それは、どういう……」

集まる視線の中、 レオアリスがゆっくりと立ち上がる。 痺れを残していた右

腕。

|剣士だ|

短く、確信を持って告げられた言葉に、 彼等は一瞬息を呑み、 お 互 いの顔を

見回した。

俺 の剣を止めた」

止めた・・・・・」 執務室内に、 電流 にも似た緊張

が走った。

オアリスの 剣を止る 一める。

それがどのような意味を持つのか、

この場の全員が身を以って知っている。

隊もだ。 発見しても手を出さず、 俺 が 行くの を待 て \_

それぞれが

無言

のまま頷くと、

張り詰めた表情を浮かべ

たまま一礼し、

各隊

に指示を出す為に退出 していく。 レオアリスは一 番最後に 扉へ 向 かったグラン

ス イの背に声をかけた。

· グランスレ 1

呼び止められ、グランスレイは足を止めてレオアリスを振り返った。

お 前、 *\*\ . つから. 師団 に ١ ر た?

唐突な問 **,** \ にグランス レ イは怪訝そうな色を浮かべ、レ オアリスを見つめた。

「……二十七年前に入隊しております」

第一大隊 の中では、誰よりもグランスレイが尤も長く在任してい る事になる。

「そうか、なら……」

言い掛けて、ふと言葉を切った。レオアリスはそのまま、何事か迷うように、

壁に掲げられた軍旗に視線を向けていたが、暫らくして再びグランスレイへ視

線を戻した。

「上将?」

なかなか口 を開こうとしないレオアリスへと、グランスレイは戸惑っ た視線

を向ける。

―『十七年前』と『バインド』という名に、何か覚えはあるか」

「――いえ」

トには、下ろした拳が グランスレイの表情も声音も全く変わらなかったが、 僅かに握り締められたのが分かった。 背後に立つロ レ オアリスからは ットバル

執務机の死角になり、気付いたかどうかは分からない。

暫らくグランスレ イを見 つめた後、 レ オアリスは視線を外した。

「そうか。呼び止めて悪かったな」

「いえ。では、これで」

退出するグランスレイの後ろ姿を見送り、 口 ットバルトは侵入者との遭遇以

来、 ずっと厳し 7 表情を浮 かべたままの上官に視線 を戻り す。

いた時だ。

あの時

口

ツ

1

バ

ルトが

あ

の場に着

ζ,

た時、丁

度レオアリ

スが

剣

を振

り抜

オアリスの剣を止めたあの男は、その後何事かを発した。『一 を調べる」、

<u>ک</u> 。

何をか は聞き取る事は出来なかったが、 ただ侵入者が あったというだけにし

ては、レオアリスの様子は不可解な印象が強い。

先 程 のグランスレ イヘ 0 間 1 掛 け 1十七 年前』 とい うのが、 おそらくは

男が調べろと告げた事なのだろう。

十七年――丁度レオアリスの年令がその位だ。

問うべ きか、 間 わ な V) ま ま に · 進 展 を見るべきか、 視線 を向 けた先  $\mathcal{O}$ オアリ

スの横顔には、彼自身が戸惑っているような陰がある。

(……あまり、退いているべきではないか)

今レ オアリスが 全て把握しておらず、 何を言うべきか 迷ってい るの だとして

も、早い段階で口火を切る切っ掛けはあった方がいい。

「――上将。あの時、あの男は何を言ったんです?」

口 ツ トバル 1 0 問 1 掛 け に、 レ オアリスは考え込むような視 線

を返

「どう聞こえた?」

V

オアリスは暫らく黙ったまま

口

ツトバ

ル

 $\vdash$ 

. の

視線を受けてい

たが、

やがて

何かを、 調べろと。それ以外は。 ……必要とあれば、 お調べ 致しますが」

普段の彼らしく肩を竦めた。 僅 かに苦笑を浮 かべ る。

「……いや。いいさ。どうせ戯言だ」

自分に言い · 聞 か せる響きに、 口 ットバルトは それ 以上尋 ねる事 なく、 自

らの

執務机に戻り警備再配置の為の図面を広げた。

どれだけ経っただろう、 ふと顔を上げると、 レオアリスは再び何事かを考え

込むように、軍旗に視線を注いでいた。

グランスレイは灯りを落とした室内で、窓際に立つ老将の言葉を待っていた。

東に設けられたその 窓の外には、ようやく仄かな夜明けの 気配り が漂ってい る。

深 7 藍色と闇の色とが渾然と重なり混ざる時刻だ。

の空に闇を斬るように黎明 ずいぶん長い間、 総将アヴ  $\mathcal{O}$ 兆しが アロンは窓の外を眺めたままだったが、 一筋差し掛かった時、 漸く振り返った。 やがて東

バインド か。 古い名だ」

、 お 前

は あ 0) 時 Þ は り一隊にい たか」 淡々とした口調には、苦さと、追憶、

そして僅かに懐かしむ色がある。

グランスレ イもまた何かを透かし見ようとするかのように、 窓の外 での藍 色の

闇に眼を向けた。

少しずつ、 しかし 確実に、 闇 は薄 れ ていく。 覆い 隠されてい た 様 々な形 が 現

れる。

王城の甍。 王の居城の尖塔の影。

「直前に、 隊の中将に任ぜられました。 ですから、 幸いと申し上げるべきで

しょう。――二隊は、全滅でしたから」

そう――。

あの時、第二大隊は全滅した。

あの男――左軍中将だった、バインド、たった一人の為に。

第二大隊だけではない。 あの戦場にあった北方辺境軍、 千余名。

それから――。

だが、あの時死んだはずだ。

いや、そう結論付けられたのだ。どれだけ捜索しても、剣以外、何も出なかっ

たのだから。

剣を失った剣士は、死んだも同然だ。

そのバインドが、生きていた。

剣を、 再 びそ  $\mathcal{O}$ 腕 に 宿 L た 0 か。

不 意に 問 7 か け た、 黒 1 瞳

お 前、 バ インド · を 知 0 てい るか?』

何故、 今になって、し かもレオアリスの前 に現わ れた?

レ オアリス の問いに、 グランスレ 1 は 返答を躊躇った。

その名は、 禁忌だ。 特にレ オアリスにとって。

その為に、 第一大隊には特に、 当時を知らない者を多く配 ているのだ。

L

誰 もが 口にする事を避 にけてい るとは *(* ) え、 蓋をしたい が 故 に 明文化され てい

る訳ではない。 ふとした弾みで耳に入らないとも限らな \ \ •

如 何致 しましょう。 おそらく、再び上将に接触してくる可能性は高いでしょ

う

その問 **,** \ には答えず、 アヴァ ロンは灰 色の瞳をグランス レ イに向けた。

お 前 は、 当 時 のバインドと、今の レオアリス、どう見る」

グランスレイは僅かに躊躇した後、顔を上げた。

「……私は あ  $\mathcal{O}$ 時 のバ インド を直接見ておりません。 しかし、 上将が二本目の

剣をお持ちになるところも、 未だ見た事がない。……ただ、今でさえ、 仮にあ

の方を本気で抑えよと命ぜられたら、 何隊出すべきか な計 ŋ かねます」

「……そうだな。そしてそれが、もう一つの不安材料でもある」

グランスレイは黙って頭を下げる。

「暫くは状況を見よ」

「上将には、何も?」

それは、少し危険に思える。バインドと出遭った以上、 もはや伏せておく事

が良策とは思えなかった。

だが、そう口にしたグランスレイに、アヴァロ ンは頷 か なかった。

「それは、 私の一・ 存では決められぬ事だ。……バインドに 関 L ては、 レ オアリ

ス 0) 指示通 り、 発見しても手を出さぬよう徹底させよ。 正規四 軍 上には 私 か ら伝

えよう」

それ以上は何も問わず、 グランスレイは左腕を胸に充て深く頭を下げる。 ア

ヴァロ ンは 再び、 次第に 明るさを増していく窓の外 に 視線 を向 けた。

その先に、王城の尖塔が影のように聳えている。

「王にお伺いを立てねばな」

総将  $\mathcal{O}$ 執務室を退出し、 グランスレイは重い足どりを第一大隊の司令部に向

けた。

第一大隊の士官棟 へ の 回廊 の角を曲ると、 そこから司令部 の窓際にレオ アリ

スの姿が見える。 グランスレ イは足を止め、 窓にかかるその姿を眺めた。

レ オアリスはバインド  $\mathcal{O}$ П か ら、 何 を 聞 1/1 たのだろう。 あ の 時 の事を全て語

る時間は、おそらく無かったはずだ。

だが。

「バインドーー」

右腕に焔を纏う剣を備え、最強と謳われた剣士。

十七年前のあの場で、敵味方を問わず、全てを切り裂いた。

切り裂き、 焼き尽くし――そして、唐突に、 消えた。

その剣のみを、 焼け爛れた戦場に残し。

王はその名を禁忌とし、 暗黙の内にあ の戦場は伏された。

そして、 以来 レ オアリスま で、 軍に剣 士 は 存在 しなかったのだ。

王がレオアリス を師 寸 に配配 したとき、 当時を知る者は等しく不安を抱いた。

十七年。

たったの、 十七 年だ。

あ の戦場を直接知る者はいないとはいえ、 焼き尽くされたあの 地を見た者は

切り裂か れ、 焼 か れた身体。 多い。

グランスレ

イの脳

裏に

ŧ,

離れる事なく焼き付いている。

腕 足、 胴、 首……それらが延々と転がる様。

戦場を見知った者にとってすら、 再び それは悪夢のようだった。

同じ事を起こさないと、

誰に保障できる?

そして、 レオアリス は

同じ剣士

グランスレイは浮か んだ考えを振り切るように、 頭を一つ振った。

ず、その不安は時を追うにつれ、次第に薄れて行った。 周囲の思惑をよそに、レオアリスの中にバインドの持っていた闇は感じられ

漸く解消されつつあるその不安に、再び暗い光が照らされようとしている。

第二音

翌早朝に、 正規 軍、 近衛 師 団に かかる軍議 が召集された。

王 城  $\widehat{\mathcal{O}}$ 議 場 0 つに 長 1 円 |卓が 据 えら れ、 正 規軍 総将アス タロ  $\vdash$ を 始めとし

て、 各軍 正 副 将 等が顔を揃える。

ヴァン・ 副将と、 正規軍 ヴレ は 王都 副 将 ツ ク、 タウゼン、 に駐屯する各第一大隊 南方 軍大将 参謀長 ケス ハイマンス、 トナー、 大将。 北 方軍. 東方軍大将ミラー、 大将ランドリー、 西方軍大将 そしてそ

0

工 ル、 卓を挟むようにして、近衛師 そしてレオアリス、 1 ウレ 寸 ス、 総 将 アヴァロ セルファン、 ン、 副 将 各大隊大将と、 ハリス、 参謀長ウェイ その 副 将が

座る。

 $\mathcal{O}$ 

たが、 高く取られた壁 議場内 は L んと冷え込んだままだ。 面に設けられた窓からは、 朝の明るい日差しが差し込んでい

めんどくさい挨拶は抜きだ。 始めろ」

議 長席に着くと、アスタロ トは呼吸を置く間もなくそう告げ、片手を上げた。

概 略 に つい ては 昨 晚  $\mathcal{O}$ 内 に報告を受け、 またその記 述もそれぞれ 0 手 元 に 紙 が

置 カン れ てい る。

昨 晚 王 城 の警備を担当していた、 近衛師団第二大隊大将トゥレ スが まず立ち

見合せ、 厳 しい表情で囁きを交わす。 上

が

り、

改

8

Ź

経

緯

 $\mathcal{O}$ 

報告をする中、

報告書を手に

した列席者

達が

互

1

に

顔

を

スが着席すると、アスタロトはレオアリスに視線を向けた。

1

ウレ

V

オアリスは傍らのグランスレ

イが僅

かに身を堅くするのを、

視界

 $\mathcal{O}$ 

)隅に捉

お 前 は出 「くわ したんだろ。どんなヤツだ」

えながら立ち上がる。 昨夜の レ オ アリス 0 間 7, に答えた時の様子。 おそらくグ

ランス レ 1 は 何 か た を 知 0 てい る。

それが 何 か、 これで分かるだろう。

夜陰に紛れての事だから確 証は無い。 だが、 おそらく、 剣士だ」

剣士……」

改めて、 議場 内 が 潮 騒 のようにざわめく。

―バインドと名乗った」

バ インド 0) 名 が 出 た瞬 間、 議 場 内の 空 気 がが 変わ つ た。 戦慄に も似た、 肌 が 粟

だつような感覚が、確かに生まれる。

ここまでの反応を予測していた訳ではない。

(何だ?)

に視線を巡らせた。 レオアリスは自分がもたらした空気の だがそれを捉える前に、 原因を突き止めようと、 空気は何事 も無かったか 広い · 楕 円 のように の卓

平常を取り戻していく。

それを掴みきれなかった事に、レオアリスは軽い苛立ちを覚えた。

「……あなた方の中に、この名に心当たりがあるのなら、教えていただきたい」

重苦し 7 沈黙が その場に落ちる。 幾人かが息苦しそうに身じろぎした時、 ア

ヴァロンの低い声が流れた。

「レオアリス。今は報告だけに留めよ」

「しかし――」

だが既に、誰もレオアリスに答える気配は な \ \ \ レ オアリスは喉まで出か カュ つ

た抗議を漸く飲み込み、椅子に身を戻した。

釈然としない、居心地の悪さが身に纏い付いている気がする。

張り詰めた空気と、沈黙。

今ここで、 あのバインドの言葉をそのままぶつけたら、 彼らはどんな反応を

見せるのか。

相手が剣士ともなれば、 ただ囲んで討ち取れるものではない。 発見したとし

ても、各隊とも、すぐに仕掛けるのは避け」

『仇のもとに仕えるか』

晒いさえ含んだ声だった。仇? 仇とは誰だ。

(でたらめを)

近衛師団に、と言うよりは、この レ オアリスに任せてもらおう」

"お前の一族はどうなった?"

族の事など、知らない。

信頼できるのですかな」

オアリスは思考か ら引き戻され、 顔を上げた。 自分の考えに沈んでいたた

め、それが誰の発言かは分からない。

「……どういう意味です」

苦々しい空気が、 その場に流れている。

「信頼、とは」

―いや、そのバインドという輩が、 事実剣士なのか、と、 そういう意味で

しょう。剣士かそうでないかで、対応に大きな違いがある」

そう言ったのは東方軍大将ミラーだ。

他の将校達は黙ったまま、レオアリス

に顔を向けている。

無表情を貼り付けたような顔。

(違う。……いや)

レオアリスは居並ぶ顔をぐるりと見回す。 その奥の考えは読 み取り

ħ

ない。

( 俺 が、 捉われ過ぎなのか)

あの男の言葉に。

「……確 証 が 持てないという意味で仰 0 たの で あ れ ば、 確 かに、 俺の感覚で、

としか申し上げられない。 それこそ、 信頼して頂くしか ない」

信頼?

|葉が上 滑りを起こしているような感 覚が あ る。 自 分  $\mathcal{O}$ <u>\f</u> 0 てい る 位 置 は、

これほど胡乱なものだっただろうか。

今度は特に返す言葉は無く、 再び議論は事後の対応へと移った。 侵入者の追

跡と討る 伐に つい て 盛 んに意見が · 交わ され 始  $\emptyset$ る。

近衛師 オアリス の昨 対応につい ても、 時折針のように

晚  $\mathcal{O}$ 

批 判

が 混じる。

可

そしてレ

「今回の 件 は 明 5 カン な失態だ」

「王城の警護と言 () ながら、こうも容易く侵入を許すとは、 根本的

 $\mathcal{O}$ 体制を見直すべきかも知れませんな」

すがにこらえて何も言わ 1 ウ レ ス は苦虫 を噛 み 潰 ない。レ したように顔をしか オアリスもただ彼等を眺めた。 め П 0 中で悪態 を 昨 夜 つ **,** \  $\mathcal{O}$ 情 たが、さ 景 が、

脳 裏にまざまざと甦る。

失態か。 確 かにそう言わ れたって仕方が な い

侵入者を許し た上に、 捕らえる事も倒 す事 も出来なか ったのだ。 それは レオ

アリス自身が最も憤りを感じている。

に

近

衛

師 団

ただ、 あ  $\mathcal{O}$ 時、 レ オア IJ ス は 斃 す つ ŧ りで 剣 を 抜 7 た  $\mathcal{O}$ だ。 王 城 内 という考

慮 は あ 0 たにせよ、 これま で あ  $\mathcal{O}$ 剣 を止 め た者などい な \ <u>`</u>

ゆ つくりと、 鼓動 が 高 鳴る。

ŧ L<sub>o</sub> 本気では 剣 を合 わ せたら…… ?

体内で、 剣が 鼓 動 を 刻 む。

近

衛師

寸

 $\mathcal{O}$ 

将

校

が

誰

も 反

論

しな

V)

まま、

議

論

は

歯

車を違えたように、

次第に

批判 は 近 衛 師 寸 カゝ ら、 なが レ オ ア , リス. 個 人  $\mathcal{O}$ 責 任 問 来 題 へと焦点を逸 1 は 非 らし

最

高

位

を

謳

わ

れ

ら、

侵入者を

討

つ

事

が

出

な

لح

常に

残念だ」

始

がめた。

剣 士 0 名 が 泣きますな。 有名無実 つでは 木 」 る

ま あ、 元 々 剣 士 など、 軍 に V > る 事 自 体 が

アヴァ 口 ンが 鋭く卓を打った。

王 の 守 護者 0 眼 光に、 議場 が L んと静 まり かえる。 レ 才 アリス 自身 が 驚 7 て

ア ヷ ア 口 ン 0 顔 を 見 0 め た。

「今議 論 すべ きは 侵 入 者に対 L てどう対処するか、 そ  $\mathcal{O}$ 手 法 であろう。

た議 論を、 王 が 好まれ るか

アヴァ 口 ンの 厳 7 表 情 の前 で、 将校 達 は 青ざめ、 打たれたように 視 を落

とした。

北方軍大将ランドリー が立ち上がり、 場の空気を変えるように咳払 V をして

卓上を見回

追跡を行うにしても、 現 時· 点で足跡を残してい ない 状況だ。 まずは 徹

底

に 現場を洗う事 から・・・・・」

的

飛び込んで来 俄 かに、 廊下 た が 慌 0 は ただしさを帯 正規 軍 の 下 がた。 級将 校 重  $\mathcal{O}$ 1 両 人だ。 開 きの ランド 屝 が 勢 IJ 1 良く[ ] が 開 鋭 1 叱 責の

声 を浴びせる。

何事だ! 騒 々 L い

顔か 5 は 血 0) 気が 失せ、 ひどく慌てて息を乱したまま、 将校 は ア ス タ 口 1 . の

前で姿勢を正 した。

ŧ 申 上 げ ます。 たっ た今、 北方第二 軍 より、 急使が 入りました。 街

道添 7 の、 工 ザ 7 が、 か、 壊 滅、 ك ::::\_\_

ざわ り、 と議場が 波波立  $\sim$ エザ ムは北 の街道上の、 王都に最 も近い街だ。 数

名が、弾かれたように席を立った。

「エザム?」あそこには二個小隊が駐屯していたはずだ!」

「そ、それが……おそらく昨夕の事かと思われます」

声を荒げたランドリーへ、伝令兵は青ざめた顔を向けた。

---馬鹿な。全滅だと……?」

ランドリーはその場に立ち尽くしたまま、見別が、金沙方。

呆然と呻いた。

二個小隊、約百名もの兵が、一晩の内に?

隊士も、 住民も、 家畜に至るまで切り刻まれ…… 街は焼き払われていると…

\_

協議はその時点で中断された。北方軍大将ランドリーがその幕下を伴い、 慌

ただしく議場を後にする。 アスタロ トもまた、 王 へ の 報告の為に席を立つ。

ろしたまま、 その動きを見送った。

俄かに慌ただしい空気に包まれた議場内で、

レ

オアリス

はまだ自席に腰を降

「どう思う」

傍らのアヴァロンがレオアリスに視線を向ける。

――バインドかと。奴の左腕 エザムの街を焼い たの はその炎だろう。 の剣は、 炎を纏っていました」 レ オアリ 、スには、 あの男が 嬉 々として

街を焼き尽くす様が見えるような気がした。 いや、 その光景を、 自 分は見た事

が ある。

かつて・・・・・。

赤い炎が記憶 の片隅 で揺れる。

いつだ?

嬉々として剣を振るう。

木々が炎の中で捩れ、家が崩れる。

裂け目から紅い炎が傾れ込み、

誰か、が……

! ! つ ! - !

不意に目の前が紅煉に染まった。

「上将?」

突然椅子を蹴立てるように立ち上がったレオアリスに、グランスレ イは咄嗟

虚ろに開かれていた瞳に、光が戻った。

にその背に手を充てた。一瞬だけ、手によろめきかけた身体の重みが

「……上将?」

「何だ」

うに問い グランスレ · 返す。 1  $\mathcal{O}$ まるっきり、 声に含まれた懸念の響きに対して、 自分の変化に気付いていない声だ。 レ オアリス は事も無さそ

「……いえ」

加わる。

レ オアリスの背後で、グランスレイとアヴァロンの瞳がちらりと交わされる。

「ぼうっとしてるな。座れよ、レオアリス」

 $\vdash$ ウレ スが呆れたように笑ってレオアリスに席を指し示すと、漸く自分が立

ち上がってい る事に気付き、 レ オアリスは机 の上に視線を落とした。

何を考えていたのだったか。

少し疲れているのか、頭が重い。

グランスレイに声をかけられる前、確か

「左……」

アヴァロンの呟きにレオアリスは視線を上げた。

――何か、気になる事が?」

「いや。それより、今後の動きについてだが」

レオアリスはアヴァロンに正面を向けると姿勢を正す。 他の大将もまたその

前に立った。

「エザムの調査は北方に任せ、各隊は王城の警護を固めよ」

「バインドであった場合は、どのように」

残念ながら今の 議 論 が 中 断 てし ま 0 た以上、 北  $\mathcal{O}$ 管 轄 に手 を出 す 訳 に

くまい」

オアリスが悔しそうな表情を浮かべるのに気付き、 アヴ ア 口 ンの 厳 7 顔

に苦笑が過ぎる。

「そう焦るな。 我等としても外門を破ら れた責 は果たさねばならん。 公と直接

話をしよう」

アヴァ 口 ンは 席 を立ち、 大将 達 が 斉に敬: 礼する中、 長 有を翻 て扉 と 向

かった。一歩遅れて、二、三隊の大将達も退出する。

第二大隊大将トゥレ スは扉の外でアヴ アロンに並 び、 厳しさを浮かべて ١ ر る

その顔を眺めた。

俺は嫌ですよ、 剣士とやり合うのは。 俺 は 見 た訳じ Þ あ ŋ ŧ せ んが ね、 また

うちの隊を全滅させるのは遠慮したい」

案ずる必 要は な ただ、 決断 を間違 えれば、 あ 0) 時 よりも 被害 が 甚大にな

る可能性は否めんな」

「……したくない決断にならなければいいんですが」

1 ウ レ スは一 度議場内 を 振 り返 った後、 左腕を胸 に当てて敬礼し、 踵を

返し

た。

アヴァロンや他の大将らの退室を見送り、レオアリスは再び席に深く腰掛け、

椅子の背に身体 を預けた。 傍らに立つグランスレイが首を傾けてその顔を見下

わせている。

ろす。

陽

は

うすっ

カゝ

り上空へ上がり、

窓から差し込む光は細く議場内は

翳りを漂

「上将。お疲れであれば一度屋敷に戻られては。 昨夜からずっと不休で動いて

おいでだ」

「大丈夫だ。それにお前等だって同じだろう」

そう言ったものの、レ オアリスは思い直したようにグランスレイの顔を見上

げた。

「――いや。悪いが、やっぱり少し一人にさせてもらえるか」

グランスレ イが覗き込んだ漆黒の瞳には、いつもと違った色はない。

では、 何 か 変 化 が あ れ ば お 呼 び *\* \ たします」

隊の 警備 は 朝 口 ツ 1 バ ル  $\vdash$ が 作った案でいいだろう」

が、 も う 一 度軽 く頭を下げて議り 場 0 扉へ足を向 けた。

グランスレ

イは

胸に左

腕を充てたまま、束の間上官の表情に視線を落とした

どうしても違 オアリスは背もたれに寄り掛 和感が拭えな V ) 確実とは言えないものの、 か ったまま目を閉じ、 思考を巡らせる。 部の者達はおそ

らく何かを隠して ١ ر る。

そしてそれを口にする事を、どこか恐れているようにも見えた。

自分に対してなのか、それとも自分を含めた他 の者達全体に対してなのか。

考え過ぎだと否定されればそうなのかもし れ な V が。

過去。

(どこか…… 書庫へでも行って調べる方が早い か

閉ざしてい 、 た 瞳 を上げる。 その 途 端 離 れ てい た所 か 5 遠 慮 が ち に 才 アリ

スに視線を向 け て **(** ) た女官と目が合った。 どうやら議場 0 片付 け (T) 邪魔 に なっ

ていたようだ。

「悪い、もう行く」

長 い間考え込んでいた事に苦笑を浮 か べて立ち上がり、 申 L 訳なさそうに頭

を下げる女官の傍を横を通り抜ける。

(何を調べればいい?)

分かっているのは、三点だ。バインドという名と、

剣士である事。

そして、 自分 の生まれた頃と一族に、 何らか の 関 係があるという事。

調べない方がいいんじゃないのか。

ちらりと浮かんだ警告にも似た考えを、レオアリス

調べて、あの男の言葉を否定する。

侵 入者が 混 乱させるために言った偽 ŋ に過ぎな 1 0 だと、 それ を確 信する為

にも、調べてはっきりさせなくてはいけない。

明 か 第 り の 層、 灯る短 近 衛 *\* \ 師 廊下を進むと、 寸 総 司 令 部 0 棟 すぐに古びた木 0) 外 れ から 石造 0 り 扉 Ó がが 階段を地 ある。 近衛 下へと下り、 師 団 の文書 薄

は敢えて打ち消した。

## 保管庫だ。

近 衛 師 寸 に · 関 わ る全ての文書 · 記 録 が 収めら れ、 管理されてい る。

ここに足を運  $\lambda$ だのは、 軍に 入ってか 5 既 に · 何度 目 か 知 れ な

もともとレ オア リス は 書物 に · 囲 ま れ て育 0 たため、 すこし 湿 0 た 紙 独 特  $\mathcal{O}$ 

1 が漂うこの 場 所 は好きだっ た。 軍という性質上、 特 定  $\mathcal{O}$ 用 事 が 無 1 限 ŋ

は

匂

こに立ち入る者は少ない。

出 L 誰 ては読 も来 な み耽 *\*\ カュ る 5 事も 煩 わ L しさもなく、 ば しばあった。 好きに過 お か げで管理官とも親 去  $\mathcal{O}$ 記 録 Þ 戦 術書 しくなって、 などをひ 0 ぱ 基 Ŋ

本的に持ち出し禁止の書物も度々借り出している。

だが、 今日こうして 書 庫 に 足を運  $\lambda$ で みて、 改め て、 レ オアリス は 自 分 が 生

まれた当時の記録を見た覚えが無い事に気付いた。

1 出 こんな事でもな 来 事 は それ な ŋ ζ`\ 限 に 記 り考えもしな 憶 L て 1 る ŧ V) 事  $\mathcal{O}$ の 、 では 順 あ るが、 に 並 べ かえてみると、 各年代にあった 事 レ で大き 才 ア ij

スの生まれた年代に当てはまるものは無い。

書 庫 0 屝 を抜け、 管 理 官 0 アンケスに片手を上げると、 アンケスもにこりと

笑みを浮かべた。

「こんにちは。今日 は何の書物を?」

アンケスの背後には 書 物 が収まった書棚が、ずらりと壁のように並んでいる。

きてくれる。

アンケスに欲

Ĺ

1

書物や見た

**(** )

内容を告げれば、この書士はすぐに取り出

整理途中なのだろう、雑然と書物の積まれた受付用の机の前に立ち、レオア

リスはその背後 の書棚 に瞳を向けた。

十七年前

の前

後

一、二年、

記録を全部出してもらえるか」

全部ですか? お待ちください。でも結構な量ですよ」

かまわな いい

アンケスは軽く頷くと、 書物を取りに奥に並 んだ書棚に消えた。 程なく戻っ

てきたが、数冊 の綴りを手にしてしきりと首を傾げてい る。

「どうした?」

いえ、……おか ľ いなあ。 ずいぶん少ないんですよ、 他の年代と比べて」

少ない?」

しのところだけ、 「ええ。例えば、 これ 前後はそれぞれ二、三冊ずつくら 冊ですね。 連番ですから間 違 ( ) あ 1 は るんですが、 な 1 かと思 \ \ 丁 ます 度 お Ú 探

「……へえ。ま、いいや。ちょっと借りるぜ」

ピ

レオアリスは微 かに眉をひそめたが、 アンケスはそれには気付 かず、 綴 りを

机の上に置きレオアリスに向かって差し出した。

「どうぞ。返却はお好きな時でいいですよ」

綴りを受け取 って礼を述べ、 書庫を出る。 総司令部から西の区まではさほど

アリスは通りを歩く事にした。

 $\mathcal{O}$ 

距離は無い。

隊士達や城内の

様子を確

かめるため、ハヤテを先に戻し、

レ

才

れ ほど逼迫した様 通りを行きかう兵達の上には慌しさと緊張感が漂ってはいるものの、 子はな 薄い雲を輝 かせ青く晴れ渡った空の下では、 まだそ 昨夜

の事、そしてエザムの事はどこか現実感がなく感じられる。

全体に伝わるだろう。 L か し北 方軍 は 既に 臨 戦態勢にあるはずで、 その空気は時を置 一かず、 第

層

西 0 区に入ったところで、ヴィル ۱ ۱ ル 0 揮 下 0 少将、 ファー レ 1 が オア

IJ スを認め、 足早に近寄ってきた。 多少緊張  $\mathcal{O}$ 面持ちではあるが、 普段通 りの

落ち着いた顔をレオアリスに向ける。

「兵達の 様子は?」

「警備を固めよという指示を既に頂 いておりますので、 師団は落ち着 (\) たもの

です。正規が少々混乱気味ですが」

「仕方ない な。 議場も似たようなもんだ」

レオアリスの苦りきった声に、ファーレ

きたのだろう、 困ったものだと言うように苦笑を浮かべる。 それ から再び厳し

1 顔を取り戻した。

「それで、 エザムが……」

口にするのを恐れる様子が、 ファーレ イの面に過る。 レオアリスも頷 いた。

「その一 報で混乱したんだ。 北方が 調査 の兵を出すと思うが、 まだ状況は 殆ど

判ってない」

そうですか

イはある程度議場での様子を想像で

師 団がすべきは、まずは王城の警護だ。いずれ王の 命が あるか もし れ ない が、

今はな」

そう言いながら、一番動きたいのは自分自身なのだと、レオアリスは胸 の裡

で笑った。

謎掛けなどくだらない。 実際に動 いてしまえば、 考える余裕など無くなる。

実際はそうしたくて堪らないのだ。

王の命さえ下れば。

けれど、この件に関して――。

どくりと、心音が高鳴る。

自分に、王の命は下るだろうか。

(--いや)

では、失礼致します」

ファーレ イは レ オアリスの 煩悶 に は 気付 かず、 ただ頷い て退意を告げた。

手にした綴りが、 存在を訴える。 それを強く握りしめ、 レ オアリスは離れか

けたファーレイの背に声をかけた。

「……ファーレイ、お前」

を閉ざした。 ファー・ レ イはすぐ振 誰に でも聞 り返ったが、 けば いいというも 問 1 かけようとして、レ のでもなく、第一ファ オアリス Ì レ は結 1 は + 局 七 П

年前はまだ近衛師団にいなかったはずだ。

るだろうが、その前 「い ₽ ....° 動きが に流 な **,** \ れてくるようだったら教えてくれ」 ままだと兵達が動 (揺するだろう。すぐ状況は伝えられ

「承知致しました」

敬礼し、 再び歩き出 したファ Ì V イを暫く見送り、 レ オアリス は ひとつ頭を

振って、士官棟へ向かった。

ろで一度立 てくれば、 早朝に会 既に 議 5 止 が .. 始 ま 時 り、 刻 まったにも関わらず、 は ふと思い 正 午も近い。 直して、 第一 大隊 士官 王城 棟 か  $\mathcal{O}$ 士官棟 ら総司  $\mathcal{O}$ 手 前 令 で が 道 通 部 りの を逸 0 書 庫に れ 先 た。 に見 寄 えたとこ って戻っ

執務室でこの綴りを開く事は、何とは無く憚られた。

士 官棟 の背面 の壁を右手に見なが , ら棟 の裏手に出ると、 そこには小さな裏庭

都 あ  $\mathcal{O}$ 街 る。 並 4 棟 が  $\mathcal{O}$ 見渡せた。 反 対 側 は 高 王 台 都 のように  $\mathcal{O}$ 構 造その · 張 り ŧ ÉЩ 0 L が、 た造 王 りになってお 城を中心 に り、 緩や か そこか な階 層を ら 王

が

重ね てい る為に、こうした高台は多くあ っった。

空に向

か

って開けたそこか

らは、

王

都

から各方

面

へと延び、

旦

深

1

森

 $\mathcal{O}$ 

中

こ の

西

側

か

らは見えない

が、

北

 $\mathcal{O}$ 

街道が森を抜け

れば、

エザム

0

街

があ

る。

に消えてい く街道 が、 白 7 帯 0 ように映 る。

馬で、 あ ń ば 日足らずで着く距 離 でし か ない。 今、 北方| 軍 が 調 査 を 向 け て 7 る

はずだ。

バ インドと遭遇すれば激し 7 戦闘 になるだろうが、 既にエザムにはバ インド

は 7 ない だろうと、 レ オ アリス は思 0 て ١ ر る。

尤も、 まだエザムについてバ インドだと決まっ た訳では な 今は 調 査 の結

果を待つし か なか っった。

街 並 4 か 5 視 線 を外し、 草を踏 À で裏庭を歩 うき中 央の 噴 水 0) 辺 ŋ で 足を 止 85

た。

噴水はずいぶん前に枯れ、 存在も忘れられたような庭で、ここに来るのはほ

とんどレ オアリ ス L か 1 な い。少し息抜きをしたい時に、よくここに来 7

我ながらそういう場所を見 つける のが上手い、 と思わず苦笑を零す。

噴水 の脇 に · 座 り、  $\mathcal{O}$ び 割 れ て崩れ かけた縁 石に寄り掛かると、 手に していた

綴 ぬりを眺 めた。

暫らくそうしてい 、たが、 やがて息を吐き、 表紙に手を掛けて、 ゆ 0 くり、 項

を捲る。

心音がやけ に 煩 こめ か み  $\stackrel{'}{\mathcal{O}}$ 辺 りを、 Щ. 液がどくどくと巡ってい くの が 鮮

明に判る。

注意深く、

前年、

目的

の年、

翌年と全て目を通したが、

通常

の任務と演習の

記 述があるだけで、 特にこれとい 0 0

た記 述 は 無 か た。

オアリスは暫く息を止めるように飲み込み、

綴

ŋ

を見つめた。

拍 子抜けした気分さえ覚える。

れ なかった。 もう一度全て 手の中で綴 0 記述に りを幾度もひっくり返して弄びながら、 目 を通 L たが、 やは り 何も変わ ったところを見つけ オアリス は

自分の行為を笑った。

気にし過ぎて、滑稽だ。

(何もないじゃないか。何があると思ってるんだ?)

無い訳ではないだろう。

目

的

の年だけ少ないの

が

気になるが、

冊だけという年

がこの

年以外に全く

適当な偽り

あ の男 ――バインドが言った事が正しいとも限らない。 むしろ、

を言っていると考える方が、正しい考え方かもしれない。

お前の生まれた頃だ。』

(気にしすぎだ)

「何もない」

今度は声に出し て呟いてみる。 だが、 それは自分の耳 へすら、どこか力無く

届いた。

グランスレ イの 態 度。 議 場 に一瞬だけ満ちた、 戦 慄に、 も似た空気……。

否定をしようとすれば するほど、 与えられる反応が疑問を投げかける。

何もなかったじゃないか」

もう一度、 切 り捨てるように呟 いて、 綴りを脇に 置き両 手を頭 の後ろに 組む

と、レオアリスは瞳を閉じた。

瞼の裏に、昨夜の光景が甦る。

焔を纏った、紅い剣。

レオアリスと同じ剣士。自分以外の剣士を、

剣を止められた感触を、 つい先程 (T) 事 のように思い出す事 が出来る。

始めて目にした。

驚き。

男の言葉への疑念。

それから、確かに湧き上がった、もう一つの感情――

あれは。

閉じた瞳の奥に、ちらりと紅い陰が揺れる。

体内で、もう一つの鼓動が小さく脈を打った。

それは剣の声だ。よく、知っている。

震えるようなその

鼓

動が、

断続的

に響く。

顕現す る事への歓喜を、 剣を振るう瞬間に伝わる感情を、こうしている今も

思い出す事が出来る。

更に覗き込めば、剣もまた手を伸ばす。

---自分の、深淵を。

ふいに身体を引きずり込まれるような、 瞬 ッ の 剥: 落感を覚え、 レオアリスは

跳ね起きた。

荒い息をつき、自分の鳩尾に視線を落とす。

何も変わった事はな V ) 剣 は 静 かにレオアリスの中に眠ってい . る。

|

「上将。やはりこちらですか」

かった。瞳を上げると、沈み始めた太陽を背にロットバルトが歩いてくるとこ 呼吸を整えようと息を吐いた時、 水気の無い草を踏む音と聞き慣れ た声 ん が 掛

ろだった。

金髪が陽光を弾くせい で表情は あ まり見えない。 だが、 レ オアリス の脇 に置

かれた綴りを見て、僅かに眉を潜めたようだった。

副 将 が お 呼びです。 工 ザ ムに つい て緊急  $\overline{\mathcal{O}}$ 軍 議が 招 集されま L た。 議場 お

越しいただきたいと」

口 ツ } . バ ル トの髪が薄く赤い夕光を纏 っている事に、 ۲, つの間にそれ程 時間

が経っていたのかと驚きを覚える。眠っていただろうか。

ああ、悪ぃ。――動きは」

特にはありませんね。まあ、昨日の今日で王城の警備は膨 れ上がっています。

この状態で尚、城内に忍び込もうという輩もいないでしょう」

「まあな」

服 に付いた草を払 って立ち上がり、 綴りを取り上げる。 士官棟に足を向けた

レオアリスの背に、ロットバルトが声をかけた。

「上将」

呼び止める声にレ オアリスが振 り返る。 その顔に、 落ちてゆく西日がきつく

差した。

振り返ったその先に、落日が城下の町並みを、緋く深 *(* ) 光  $\mathcal{O}$ 中 · に 沈 め ている。

V オア IJ スは 振 り返 0 たまま、 動きを止めた。

瞳 が、 光 を吸 V 取ら つれたか のように色を消 手 ていた綴

に

ŋ

が 足

元の草の 上に落ち る。

落

日

に

「上将……?」

訝しそうに歩み寄った 口 ツ } バ ル  $\vdash$ 0) 前 で、 レ 才 アリ ス 0 身 体 が 揺 らぐ。

ヒヤリとした感覚が、 口 ツ } バ ル 1 0 背筋を過 った。 それ が 何 か 捉えきれな

1 まま、 咄嗟に腕を延ば す。

倒 れこむ 肩を支え、 その顔 を覗き込み、 口 ツ -バ ル 1 は 感じ た寒気  $\mathcal{O}$ 理 由 に

気付いた。

同じなのだ。 暴走を起こしたあの時と――。

だが、今、 何がそれ を呼び起こし たの か。

あ の時 はおそらく、 切り裂かれたミストラ族の姿に触発され たのだ。

まだ動 かない レオアリス の身体を支えたまま、 口 ツトバ ル トは背後を振 り

返 ったが、 特にこれ とい つ たも  $\mathcal{O}$ は見当たら な

ただ夕照に沈 む王都 が 映るだけだ。

V オアリスの 身体が、 大きく鼓動を刻 む。

草 0 上に 落とされ た 瞳 は、 何 か 別  $\mathcal{O}$ ŧ のを見て 7 る。

呼吸が 乱 れて *\* \ くのを感じ、 口 ツ 1 バ ル 卜 は素早 く頬を打っ

た。

「……痛え」

乾

(1

た音と同時

に、

レ

オアリスの

視点が

定まる。

少し強く打ち過ぎたようだ。 レ オアリスは赤くなった頬を手 0 甲で擦り、 訳

が 判らないといった顔で目 の前  $\mathcal{O}$ バ ル · を 眺 めた。

口

ット

 $\vdash$ 

失礼。 ぼうっとし ておられ たようなの で

ぼうつと? 俺が?」

まったく心当たりがない . の か、 レ オアリスは自分の行動を思い 起こそうと瞳

を眇 らめた。

ます。 1 え、 また余計な皮肉は 気 0 せ **(**) でしょう。 聞きたくはないでしょう」 失礼し ま L た。 それより、 急がな ( ) と軍議 に遅れ

口 ツ 1 バ ル **|** はそれ を押し止 めるように告 げ、 レ オアリスを促す。

今、 思 1 出させるべきではな それ が レ 才 アリ ス にどのような影響を与え

るのか分か

らな

いが、ここは王都だ。

ヤテは ? 戻ってるか?」

戻っていますよ。 一人で帰されて、少 /々不機 嫌 なようですが

口

ツト

バル

トの言葉にレ

オアリスは笑って、

出

П

へと足を向けた。

ね

「そうですか 不機嫌な 0 は、 最近 前 に 副 遠 乗り 将 か É 5 答め 行 か 5 せ れ て貰って てか 5, ね え まだ半月ほどし からだ」 か 経 って

いと記憶しておりますが」

?

ひと月は 経 ってるだろ」

オアリス は 眉 をし カン め、 口 ツ  $\vdash$ バ ル } . の 澄 ま した横っ 顔を見上げた。 口 ツ 1

バ ル トは 昨 夜  $\mathcal{O}$ バ 1 ン F の告げた言葉を聞 1 てい るが、 1 つも 通 り、 変わ らな

1 表情 で L カン な V

オアリスが探 しているものを伝えれば、 この参 謀官 0 方が上手く探し出す

ζÌ

な

だろう。

一度問われたように、伝えた方がいいのかもしれない。

少しだけ迷い 結局レオアリスは 何も告げないまま視線を戻した。

(まだ、もう少し、事の全体が掴めてからだ)

口にするのが怖 , · 0 か · と問 わ れ れ ば、 レオアリス はそれを否定するだろう。

けれど確実に、それはレオアリスの中にあった。

振り返った。 王城へ向うレオアリスの後ろ姿を見送り、 既に陽い は 落ちきり、 薄赤い夕闇 が ロットバルトは再び先程 辺りを覆 つてい る。 の方向を

(——何だ)

先 程 のレオアリスの様子は、ミストラの時と同じようで少し違う。 あの時は

押さえられ ていたものが、一つを切っ掛けに一 気に弾けたような状況だったが、

今回は。

ロットバルトは当てはまる言葉を探した。そう……。

曖昧 な のだ。 明 確 な 原 因 が . 見え な \ <u>`</u>

確実に言える  $\mathcal{O}$ は、 レ オア リス 0 変調 に、 バ インドが関係 L ているという事

だけだ。

V オアリス が 話 を向 ける気になるま で 待 つつ もり でい たが、 今 の 様 子を考え

しておく必要が あ る。

れば、それでは対

応が

後手に

口

り カン

ね

な

十七年

前

に

何

が

あ

0

た

 $\mathcal{O}$ 

か、

把握

オアリスは 近 衛 師 団 文 書 庫 を 調 べ て V) たようだが、 先ほどの

らく何も得るも 0 は無 か 9 た のだろう。

無いと考えた方が いいい かもし れないな。とすると、人か……)

(文書での記

録

は

少なくとも十七 年前 から情報を得 る地 位にあ り、 剣士についても一 定の 知識

が ある人物。

思い当たる相手はいる。 幾人かは 面会も得られるだろう。

手持ちの 札 は 少 ない が、 多く見せるの はそれ にほど困 難 では な \ <u>`</u>

ただ、 事 実が 何 か、 そこが全く見えてい な 7 以上、 札 0 引きを間 違えれば、

オアリスの立場を悪くもしかねなかった。

様子では

おそ

## (剣士。剣士か……)

これまで漠然とした疑問しか持っていなかったが、 思った以上に、 剣士とい

う種に関する情報は少ない。

ロットバルトはもう一度、 完全に陽 の落ち切った西の空へ視線を投げ、 執務

室に足を向け歩きだした。

夜の闇 の中で一人目を閉じる。

そうしてい ると遠 7 場 所 か . ら 聞 こえるざわめきと、 横たわ つ た 寝

台

 $\mathcal{O}$ 

柔

らか

た。

生地 0 感覚しか 感じら れな 

1 冬が近づきつつある王都では、 夜は次第に冷え込みを強くし始めてい

北 方  $\mathcal{O}$ 辺 境 0) あ 0) 村 では、 もうそろそろ雪が · 降 り 始め る頃だ。 <u>日</u> 雪 に 覆わ

れ れば、 王都 が 春を迎えてもなお、 父の顔は、ひどく懐かしさを伴った。 一面 の白 *(* ) 世界に閉ざされてい る。

今もあ

 $\mathcal{O}$ 

囲炉

裏の

脳裏に想い

描

7)

、 た 祖

傍で、 薬草や術 具、 大量  $\mathcal{O}$ 本に囲ま れ てい るのだろう。 王 都 に 出 てきてか ら数

えるほどし カ 帰 ってい な ζ, が、 常に 彼等を忘れた事 は無 カゝ つ た。

自分を育ててくれた養 い親 達

オアリス が王 一都で 0) 王  $\mathcal{O}$ 御 前 試 合に出ると言っ た 時、 彼ら は強強 (く反: 対

ただそれは、 自 分 0 未熟さを思慮したものだとばか り 思って ١ ر た。

けれど、もしあの男、バインドの言葉に真実があるのなら、彼らは何かを知 0

7 1 た (T) で は な 1 か ?

お 前  $\mathcal{O}$ 族 はどうなった」

俺 の 、 族

瞳を開け る。 薄 闇 の中に、 格子状に細 7 木  $\mathcal{O}$ 張 5 れ た 天 が井が

映

族などと言われても、 それは レ オアリス 0 中に 明 確 な像を結ば な かった。

1 村で育ってきた中で、 それを想う事は ほとんど無 かっただろう。

親

の顔など知らない。気にならなかったと言えば

嘘

になるが、

あ

 $\mathcal{O}$ 

北

 $\mathcal{O}$ 

雪深

というよりは、

ある一

時期まで確実に、

全ての子供に

は

『親』という存

在が

あるのだという事 すら知らなかった。 村には自分の 他に子供は おらず、 年を経

た老人達ば かりだった か らだ。

自 分と祖父達 の姿が違うのは知っていたが、 村 の外を知るまでは、 ある 意味

それは レ オ アリスにとって当たり前 の事だった。

1 子供 7 つだっ 0 手 たか、 を引く者の姿を、 初めて近隣 どこか不思議な思いで眺め 0 村へ出た時、自分と同じような姿の者や、 た事を覚えている。 小さ

それ

が

親

子というものだと自分に告げた祖父の顔には、

どこか翳った色が

あった。 その後考え込むように黙ってしまった祖父の悲しそうな姿に、 聞くべ

き事ではないのだと、以来その事を口にした事はない。

だが、あの時自分はどう思っただろう?

か。

あまり気に留めなかった気がする。それとも、 少し、 寂しさを感じただろう

ただそれ以来、あの廃墟、ずっと昔に焼け落ちた森の中の家々が、自分の『親』

一族。 一族。 が居たところなのではないかと、時折思った。

オアリスは再び瞳を閉じた。

V

手が無意識  $\mathcal{O}$ 内 に、 首からかけた小さな青い 石の飾りを握り込む。 そうする

と、波打つ思考が静かに、穏やかになる。

何があるというのだろう。隠すべきもの。

静かなざわめきが、次第に意識を眠りへと引き込んでいく。

深 7 闍  $\mathcal{O}$ 中、 長 靴 0 固 1 足音が大理 石 0) 廊 下に響く。

ア ヴ ア 口 ン は 謁 見  $\mathcal{O}$ 間  $\mathcal{O}$ 扉 を 通 り 過 ぎ、 そ  $\mathcal{O}$ 先に ある階段を昇ると、 幾 0 ŧ

け た、 王  $\mathcal{O}$ 居城  $\mathcal{O}$ X 域域 内だ。

 $\mathcal{O}$ 

扉を抜

け

· て

つ

0

部

屋

の 前

で

足を止め

た。

既にそこは

王

城

内

 $\mathcal{O}$ 

公的

な層

を抜

屝 屝 を開  $\mathcal{O}$ 前 け で おとな 左 胸 に 腕を当てて一 1 を告げると、 礼を捧げ 王本: 人 る。 の低 。アヴ 1 声 ア が 口 応えた。 ンは王 0 前 と歩を進め、

た め に 歩 退 <  $\mathcal{O}$ 静 か に 頭 を下 げ る。

深

夜に

ŧ

関わ

5

ず、

王

は

ま

るで休息

L

てい

た

気

配

t

見せ

ず、

黒檀

 $\mathcal{O}$ 

執

務

机

 $\mathcal{O}$ 

その場に片

膝を付

7

た。

王

の傍らに立っていたべ

ルル

がアヴ

ア

口

ンに場を譲る

前 に 腰 カ け たま まアヴ ア 口 ンに その 黄 金  $\mathcal{O}$ 視 線 を向 け た。

家、 な \ \ \ 王 相  $\mathcal{O}$ 談 居 通 常常 役、 城 0) 0 謁 そし 角、 見 て近 及び執務 執 衛 務 師  $\mathcal{O}$ は 寸 為 総 に 階 下 使 将 の 、 わ  $\mathcal{O}$ れ 謁 限 7 5 7 見 0) るこ れ 間 た で行 者  $\mathcal{O}$ L 部 われ か 立 屋 に る。 5 は 入る 兀 事 大 を許さ 公 B 筆 れ 頭 7 侯 爵

壁 面  $\mathcal{O}$ 書 棚 لح 執 務  $\mathcal{O}$ 机  $\mathcal{O}$ 4 が 置 か れ た 簡 素 な造り だ が、 王 城 内 لح 同 U 黒 لح

銀を基調に L た室 内 に は 重 厚 な空気 が 漂 0 7 1 た。 そ れ は 目  $\mathcal{O}$ 前  $\mathcal{O}$ 存 在 が 纏

う空気だ。

無か

った。

昼に

ア

ス

タ

口

1

か

5

報告を受けてい

る事

ŧ

あ

る 0

だろう

が

王

 $\mathcal{O}$ 

上

アヴァロ ン  $\mathcal{O}$ П か 5 バ インド Ø) — 件を聞 7 て ŧ 王 は そ 0 表 情 を 動 か す 事 は

に は 少し  $\mathcal{O}$ 焦燥 Ł 懸念も ない。

トやアヴ ア ンに委ねら なって

工

ザ

4

調

査

 $\mathcal{O}$ 

指

示

を出

して

7

るが、

通

常常

 $\mathcal{O}$ 

指

示

 $\mathcal{O}$ 

範

囲

「を 出

7

は

おらず、

アス

タ 口 口 れ た形に *(* ) る。

王には国など必ずしも必要ではないのだと、

アヴァロンは時折そんな

事 を思う事が あ る。

本来、

王を守護する要の 役割に あ ŋ なが ら不敬な考えか ŧ L れ ない が、 王 を守 護 す

ると言ったところで王 0) 前 に自 分達 の力など微々たるも のだ。

王が 支配を必要とし 7 7 る  $\mathcal{O}$ で は な く 自 分達、 この 地 が 王  $\mathcal{O}$ 支配 を必 要と

てい るのだ。 王 0) 支配と規律 が無ければ、 ک こ の 国 は他 玉 <u>ك</u> 同 様に、 混沌 と戦

乱 が 満ちるだろう。

こうしてアヴァ 口 ンの 報告に 「耳を傾う け る時 の 王  $\mathcal{O}$ 姿を眼にすると、 アヴ ア 口

はより強くその事を思った。

でし 十七年前、 か な \ \ \ 王自 バインドの件を伏せさせた事についても、 身がどれほどの危惧を感じてい るの か、 内 部 ア ヴ の混乱を抑える為 ア ロンには

取る事は出来な 

ただあの時は、 王の関与は少なからずあった。 十七年という歳月は、 王の意

識を摩耗させるほど長 1 とは 思わ な \ <u>`</u>

王は今回 一の事 を、 どう捉えてい る 0 か。 今 回、 あの時より問題 は ひとつ多い

「……バインドとの接触 により、レオアリスは既に疑問を持ち始 めております。

全てが明らかにな るの は、 時 間 の問題かと」

れら 例えバインドの名を伏せ、 はこび は答えに行き着くだろう。 り付付 1 て消える事 は あ の戦 な 場 バ を伏せたとしても、多くの者の記憶にそ インドが動き続ける限 り、 やがてはレ

それは再び、 あ 0 戦場を蘇らせる危険すら併せ持っていた。

オアリス

判 断 を待 つア グヴァ 口 ン  $\mathcal{O}$ 前 べで、 王 は 僅 か に  $\square$ 元に 笑 み を刷 1

そなたは あ れ が 過 去 一を知 って変わ ると思うか」

アヴァ

変わ る か、 変わ 5 な 7 か

王の言葉に、

口

ンは

暫く

 $\mathcal{O}$ 

間

黙ってその顔を見つめた。

V オアリス の 王 に対する忠 誠心 は疑うべくも無 今の段階

では変節

が

ある

とは考え難 ζ\ | 程 それ は 強 固 に 思える。

はな

だが それ は あ くまでア グ ア 口 ンの主観 に過ぎず、 説明できる根 拠 が あ

敢えて知 アヴァロ 5 ンの思考を読んだように、 せる必要は ない」 王は再び薄く笑みを浮かべた。

し かし、」

「だが、バインドが現れた以上、 事 態 は 再び動き出 した。 もはやレオ アリ スが

だ。 知る事を止 あれとバ め る必 インド以外、 要もな 7 誰一人当事者では だろう。 真実 は あ 有 れ ŋ 自 得な 身 が 自 1 5  $\mathcal{O}$ だか 知 り、 らな 判 断 す ベ き事

アヴァロンは傍らのべ ールに意見を求めるように、 ちらりとその視線を向け

る

訳で

たが、ベ ルル はただアヴァロ ンに視線を返すだけで特に口を挟もうとは しな

かった。 諦めて王に視線を戻す。

王は、レオアリスが変節する事は無いと確信しているのだろうか。

それとも、 変わったとしても、それはそれで構わないと、そう考えているの

だろうか。

アヴァロンの顔に浮かんだ疑問に答えるかのように、王は黄金の瞳を細めた。

私は、 少し、 見てみたいのだ」

何を、 と問おうとして、王がもはやそれに関して語る気の無い · 事を、 その瞳

から悟る。

を下げた。

る術はない。 黄金の瞳 が 向 心 の中に持ち上がる僅 けられる先に見えているだろうもの かな懸念を飲み込み、 は、アヴァロ アヴァ 口 ンに ンは深く頭 · は想: 像す

エ ザ ム 0 壊滅。

軍 議 は 対 応を巡 0 て 紛 糾 た。 当 初  $\mathcal{O}$ 報 告 に あ 9 たと お り、 北 方 軍 が 駆 け

し尽くされ、 燻 0 た煙を上げてい た。

調

査

0

結

果、

エ

ザ

ムを

壊滅させ

た

のが

`

た

0

た

名によるも

 $\mathcal{O}$ 

であろうとい

けた時・

点で既に、

工

ザ

A

に

は

動

くも

のすら

な

か

0

た。

街

並

み

は

見

る

影

ŧ

な

<

破

0

壊

う 結 論に 達 し、 軍 内 . 部 に 衝擊 が 走 0 た。

壊 滅から三日が 経 った今も、 明 確 な対応を打ち出 I せない まま、 既に 数回  $\mathcal{O}$ 討

議を 重ね て **,** \ る。

充てれば討 バ インド 5 0 取 情 る 報 事 が が 少なすぎる事、 出 来る 0 か。 それ ま たバ らを巡って議論 インドと対峙 L は た時、 平行線を辿 どれ . 程 0 た。 0 兵 を

「それで は 本 来  $\mathcal{O}$ 軍  $\mathcal{O}$ 編 成 が 意味を成さなくなる。 第 一、 警戒 L 過ぎでは ない

か ? \_

個

小

隊

が

壊

滅

ごさせ

5

れ

た

 $\mathcal{O}$ 

だ、

動

<

0)

であ

れば

中

隊

を基

本に

すべきだ」

軍を 各方 面 に差し向 けて、 草  $\mathcal{O}$ 根を分けてでも捜し出すべきです。 王 城 0)

侵入、 工 ザ ム 0 壊 滅、 これで手をこまねいてい れば、 軍  $\mathcal{O}$ 威信に関わ る

「たった一 匹 . (7) 賊 の為 に · 軍 を動かせば、それこそ威信 に傷が付くと言うものだ」

「もはやその様な事を言っている場合ではない!」

オアリスはその様に、 心に広がる苛立ちを隠しきれない。

インドに関する情報を知っている者は、全て出せば

*\*\

いのだ。

現 在

0)

事の

バ

みならず、過去 のものも全て。そうしなけ ればまとも な対応など出 来 は す ま \ <u>`</u>

そうなる事を、レオアリスは期待すらしていた。

む しろ軍 だが事ここに至っても、 -議 に お *\*\ て積. 極的 に 知っているであろう者はそれをしようとは 発言する事を避け、 事 の行く先を見定めようとし しない。

ているようだった。

運 ょ 彼等自身に < 話 す 事 · 直 が 接 出 尋 来た者も、 ねようにも、 何 の 事 互いに多忙の中ではその機会も無い。 かと問 ζ, 返され れば、 それ 以 上問 V 質 また、 分す術

が無かった。

手探 りで不確かな情報を拾 い集めようとする今の状況は、 レオアリスの中に

少しずつ 焦燥 を 積 み上げてい

「そもそも、 責 任  $\mathcal{O}$ 所在 をし

閣 議 0 間 で延々と交わされる議論に、 正規 軍 の長であるアスタロ } は 欠 伸を

を向 けた。 噛

み殺す事

もし

な

ちらりと細

長

1

円

|卓の

対

角

に 座

0

て

, \ る

レ 才

ア

IJ

ス

に

目

(苛立ってるなぁ)

バイン ド が · 現 れ て以降、 軍 議 で は 連 日 0 ようにレ オアリ ノスに 対する 批 判  $\mathcal{O}$ 声

バ インドと対峙 逃し た事 に対する批

L

なが

5

判だ

が

そ

 $\mathcal{O}$ 

根

底には 日頃 カ らの 様 々な思惑がある。 が

上

がっ

7

*(* )

た。

もちろん、 この 責任 は 果たされ るのでしょうな」

既にそれは何度 も繰 り返された言葉だが、 議場内 を覆う焦りや屈 辱 感 は ょ

り単 純 な議 論 L やすい ものへ収斂されていく。 アスタロ トは小さく溜息を

方ないものだ」

「王城を守護すべ

き近衛の

大将が侵入者を逃すなど、

本来任を解か

れても致し

吐

た。

「この先、 V ずれ カゝ  $\mathcal{O}$ 街 が 襲撃されたとしたら、 どうその責任 を取 るつ

りか

堪り兼ねたトゥレスが、 苛々と正規軍 の将校達を睨めつける。

「そう言うなら、 早いところバイン ド  $\mathcal{O}$ 情 報 を 取 ってきて貰えない か

バインドがエザム以来動いていない事、 またエザムに関する件については全

て正規軍 に 権 限 が あるため、 近衛 師 団 が勝手に動く事 は 出 来ない。 未だ管 轄に

拘っているのは正規軍の方だ。

喉元までで か か った不満を飲み込んだトゥレスに対し、 北方軍大将ランド

リーはやはり苛立ちを隠さず、トゥレスと、そしてレオアリスを睨 んだ。

勿 論 正 規 は 昼夜を問 わず捜索している。 だが、 剣士殿は 動 く気配もない で

はないか」

「どこにいるかも判らずに、動ける訳がない」

「まさか同じ剣士とあって、臆したのではないでしょうな」

て立ち上がろうとしたグランスレ ランドリ ĺ の言葉に、 正規 軍  $\mathcal{O}$ イの腕 将 達  $\mathcal{O}$ を、 間 カン レ 5 微 オアリスが押さえる。 か な失笑が 洩 れた。 色をなし

「……臆する……? 俺が?」

見据えた。 それまでの苛立ちも その 口元に浮か 相まって、 んだ凄惨とも云うべき笑みに、それまで不満を レ オアリスは取り繕う事すらせずに、 彼らを ロに

していた諸侯が押し黙る。

レオアリスが 剣 士 が戦いを臆する事は無いと、 その場  $\mathcal{O}$ 誰もが

戦い を、 同じ 剣 士と剣を交える事を、 待ち望 立むか のような笑み。

それは――。

る。

しかしその頬に浮か

んだ笑みは、

彼等を少なからず戦慄させた。

理解

して

(まあ、今回のこれを片付ければ、皆どうせ何も言えなくなる)

その場を満 たした緊張を事 も無く見渡して、 アスタロトはもう一つ欠伸をす

る。

(---剣士か)

アスタロ トにとって は 軍 議 は 退 屈 で、 工 ザ  $\Delta$  $\mathcal{O}$ 壊 滅もここであ れこれと言

ても仕方  $\mathcal{O}$ ない 事だと思って 1 たが、 レ オアリ ス 0) 剣を止めたその男には 僅

かに興味を覚えた。

ここに居 並 3 諸 候 の中で、 おそらく剣 士を 抑え得る者など僅 か だろう。 正 規

兀 軍 一の大将 か 近 衛 師 寸 総 将であっても、 エザムをたった一人で壊滅させる 事な

ど、不可能に等しい。

アスタロ トが考える限 りでは、 最もそれを可能とする のが、 同じ 剣 士で ある

レオアリスだ。

軍を出すの出さないのと、ここで議論をする事自体が無駄なのだ。

何故それ

が判らないのだろう。

アスタロ

トは短く息を吐き、顔を上げた。

「さて、今日はこれまで。解散だ」

「し、しかしアスタロト公」

· か、かかし?」 · しかしもかかしもあるか」

お前等連 日 顏 を突き合わせて、一体 どん な 議 論 が 進 んだ? ぐるぐるぐるぐ

る同じとこを回りやがって、尻尾を追 **(**) · 掛け る犬じゃ あ るまい L<sub>o</sub> 時 間  $\mathcal{O}$ 無駄

だ。どうしても議論を続けたいなら次回までに具体案を出せ。 ほれ 解 散

アス タロトがさっさと席を立つと、 正規軍 副 将タウゼンが軍 議 の終 わりを告

げる。

しぶしぶといった呈で席を立つ者、解放された色を浮かべる者、様々だ。

レ オアリスも溜息を一つ吐いて立ち上がった。アヴァロンが彼を手招き、二、

三言、今後の体制について言葉を交わすと、先に退出する。

その前に立った。傍らのグランスレイが深く頭を下げるのに対し、軽く手を振 諸侯が退出して行くのを眺めながら、アスタロトはレオアリスに歩み寄り、

て答える。

ンスレイの方が噛み付きそうな顔してたけど」 「お疲れ。大変だなーお前も。めんどくさい奴らばっかでさ。まぁ後ろのグラ

アスタロ トに L っかり見られていた事に、グランスレイは恥じ入ったように

元を歪めた。

「これは、 みっともない姿をお目に入れました」

てのは情けないけど、一旦動き出したらきっちりやるからさ、まあ勘弁してよ」 「気にするな。 あいつらもう、 やれる事なくって焦ってるんだ。正規がこれっ

0

控えめな笑みを浮かべ、グランスレイは再び頭を下げた。

カン L 相手 が 動 か な ζ, 事には、 我 々としても手の施 しようが あ り ません。

公、 ほ  $\lambda$ 0 僅 カ で も情 報が 入れ ば、 何卒 我が隊にもお知 らせ戴きますよう」

「分かってる。 結 局 レ オ アリス には 動 1 てもら ゎ なきや、 なんな V ね

恐れ入ります。 上将、 私は先に戻ります。 午後は演習がございますので」

「ああ」

左腕を胸に当て二人に敬礼すると、グランスレイは後方の扉に向 カン つ た。

グランスレ イの後姿を、レオアリスはどこか複雑な色を浮かべ て眺めている。

アスタ 口 トはその横顔をチラリと見て、白っぽい陽射しの差し込むがらんと

た議 場 内 を見渡した。 ここ数日で、 すっ か り見飽 にきた眺 めだ。

が言わないのであったら、敢えて水を向ける気も無い。

オアリ

Ź

は

何

かを気にしている。

そ

れ

が

何

か

は

分か

5

な

いが、

V

オア

リス

自分の助けが欲しくなったら、そう言って来る。

V オア IJ ス は暫らく同じように黙って議場内 を眺 めて ١ ر たが、 改めてアスタ

ロトに顔を向けた。

悪いな、アスタロト。お陰で早めに開放された」

首を傾げ少し考えてか 5, 軍 議  $\mathcal{O}$ 事を言っているのだと気付いて、 アス タロ

トはもっと礼を言えといわんばかりの笑みを浮かべた。

「ふふん、 感謝しろ。 まあ本当は私 も鬱 滴 L か っただけだ。 時 間  $\mathcal{O}$ 無 駄 な んだ

もん」

「無駄……。そりゃそうだが、お前がそれでいいのかよ」

レ オアリスに呆れた視線を向けら れても、 ア 、スタ 口 トは あ 0 けらか んとした

態で顎を持ち上げた。

いの。とにかくお前さ、さっさとバインドとやらを斬っちゃえよ」

その言葉に、 レ オアリスは笑みを刷い た。 楽しそうに声を立てて笑うと、

ス タロ トは再びその鮮やかな深紅 の瞳をレオアリスに向ける。

「どっちにしろあんまり考えすぎんなよ。 たまには息抜きしなきゃ。 遊びに行

くなら付き合うぞ」

本当、 お 前はそれば 0 かりだな。 分か ってる。 まぁ、 適当にやるさ。 相

手が目の前にいない以上、どうしようもないからな」

だがそう言って 笑い ながらも、 黒 1 瞳 には 沈 んだ色が 見える。 ア ス タ 口 トは

思わし気な色を浮 かべ たが、 それ に は気付 か ず、 レ オア リス は 窓  $\mathcal{O}$ 外 に 視 線 を

投げた。

この二目、 当たった先 は空振 り ば カゝ りだ。 誰に問うべ きな 0) カン も 明 確 で はな

く、誰にでも問えばいいという問題でもない。

自分で探って行く他に 手は無 V) が 既 に 手詰 まりの感がある。

近衛

師

寸

保管

庫にはあれ以上の情報はなかった。

(もう一つ、調べてみる所がある)

王立文書宮。

そこなら、全て 0 書物 が 揃 つてい る。 今の段階で、 情 報 を得ら れ る可 性が

最も高いのは、王立文書宮だろう。

蔵書量もさる事ながら、 王立文書宮の長スランザールはこの 国随 の賢者と

呼ばれ、膨大な知識を有している。

時間を見つけて、明日にでも行ってみる必要があった。

「雰囲気悪ぃね。何っかピリピリしてやがる」

昼 一食時 で 混 はみ合つ た食堂内 を見回 し、 クライフ は 顔 を L か めた。 ح の三日と

不安であり、見えるものへと転じていく不満だ。

いうもの、

兵 達

0)

中にも重苦しい空気が漂ってい

る。

それ

は見えな

1

ŧ

0)

 $\mathcal{O}$ 

クライフの前 で、フレ イザー は手に した陶器の茶 器 を П 許 に 寄 せ る。 S

とした湯気と花

の香りに翡翠

Ö

瞳を僅か

か

に細めた。

では、 ザ 「上層部 Á 二 つ の 何をどうすれ の様子は 状 況 だけ 表には ば L 7 カン 出てこなくても、 1 判 0) つ か てい 不安にもなるわ ない Ļ 何となくは伝わるものよ。 その後 ね のバ インド  $\mathcal{O}$ 情 報 外門とエ が 無 中

が と両者 可, 合えば 二人が今いる食堂の中にもそれが 正 規  $\mathcal{O}$ 互 軍 間 1 双 に · に 睨 線 方 引  $\mathcal{O}$ きが 兵が むか あ 視線を逸らすようになっていた。 さほどの 0 た。 間 それぞれ 題 はっきりと見て取れる。 もなく混 が .食堂 在 内 していたここで、今は 0 左右に分か これまでは近 れて固 「まり、 くっきり 衛師 目

わ

n

「ちえ、 せ っかくフレイザー との食事だってのに、 こんなんじ Þ 雰囲 気出ねえ

よなあ」

「あら、何の勘違い?」

クライフが 情 け無さそうに顔を歪 山めた・ 時、 奥 0 席 が 俄 カン に 騒 が しくなった。

怒鳴り声と床の上に食器が散らば る派手な音が響く。 クライフは眉をしか めた

まま立ち上がった。

「ったく、馬鹿が」

口の中で呟き、ずかずかと大股で騒ぎの方へと足を進める。

そもそも、お前等が外門を守れなかったのが問題だろう!」

正規兵の一人が 目  $\mathcal{O}$ 前  $\mathcal{O}$ 近衛師 団 隊 士 一を睨 7 付 けると、 隣で立ち上が った正

規兵も声を上げる。

「そうだ! 王城の守護が聞いて呆れるぜ!」

正規兵達から 囃 す ように同 意 の声 がかかり、 今度は近 師 寸  $\mathcal{O}$ 他  $\mathcal{O}$ 隊 士 達が

立ち上がった。

エ ザムの二個小隊を壊滅させといてよく言うな。 力不足は正規の方じゃねぇ

のか!

同 意と野次が双方から飛び交い、 瞬く間にそこにいた兵達が集まり、 騒 々し

さが一段と増していく。

「大体お前等の大将は何やってんだ? さっさと出て奴を討てば

いいい

 $\mathcal{O}$ 

によオ」

「そうだ、どうせ同じ剣士でなきゃ何もできないんだ」

実際、怖くて出らんねえんじゃねえのか?」

「ふざけるな!」

「おい、聞き捨てならんぞ!」

近衛師団兵達が一斉に色めき立つ。

びびって んな あ 正規 の方だろう! 捜索に手 , 工 抜 į, \ · ~  $\lambda$ じゃ ない  $\mathcal{O}$ か ?

「何だとオッ」

まさに掴み合いになりかけた瞬間、 左右から同時に叱責の声が飛んだ。

いい加減にしろ、テメェ等!」

「ガキみてえに浮っ付くんじゃねぇ!」

雷に討たれたようにさっと静まり返り、 兵達はそれぞれ自分達の後方で仁王

立 ちになったクライフと、 正 規 軍 中 · 将 ワ ッツツ  $\mathcal{O}$ 厳 L **(** ) 表情を見 つめた。

ぐるりと居並ぶ顔を見渡す。 ワ ッツ は 集まっていた兵達 細  $\mathcal{O}$ 間 い眼 に 巨体 の中 -の 鋭 : を押 7 L 眼光を浴びせられ、 込むようにして中央まで行くと、 兵達は 熱が

冷めたように顔を伏せた。

都が守れる L 正 てい 規と師団 体何やって る  $\mathcal{O}$ か が  $\mathcal{O}$ 実体 何 んだ?  $\mathcal{O}$ 為か、 か。 王城の守護は それを忘れ お前等は。 この狭え中でお互いに非難 てる訳じゃ 師 寸 の役割だが、 ないだろうな? 正 規 軍 隊が し合ってる そんな 王 都  $\lambda$ に で 王 のが 駐屯

く畏まる。呆れ顔で眉を一つ上げ、ワッツは兵達 つ一つの顔を覗き込むように視線を向けるワッツに対し、 の向こうのクライフを振り返っ 兵達は言葉もな

「クライフ、テメェもビシッと言ってやれ」

た。

「……てめえが全部言っちまったよ」

ワッツがいてくれて良かったわね。貴方殴って止めるつもりだったでしょう」 息を吐き、 首筋 を掻 < クライフの隣でフレ イザーが微笑みを浮かべた。

「んな事は……」

ワッツがにやりと笑う。

「クライフが先に仲裁に入ってたら、 俺も参戦してたぜ。その方が意外と発散

できたんじゃない か、なあ?」

ワッツに同意を求められ、兵達は慌てて首を振った。

「と、とんでもございません!」

遠慮すんなよ。 溜まってんだろオ」

目 の前 にい た不幸な正規兵の肩を力一杯揺すり、 ワ ッツは豪快な笑い声を上

げた。

はいはい、そこまでにして頂戴。言うことは他にあるでしょう」

パンパンパン、と両手を打って兵達を振り向 か せ、 フレ イザーは改めて彼等

の顔を見渡した。

「苛立つ気持ちは良く判るわ。 でも、 上 層部 か ら 0) 指 示 が 無 7 限 ij, 言ってし

まえばあなた方に責任 は 発生しない  $\mathcal{O}_{\circ}$ 気楽に構えるの ね

イザーの柔らかい笑みと口調 に緊張をほぐされたのか、 兵達の 顔から強

ば りが 取 れ る。 番端 に 1 た兵 が 顔を上げ、 おず、 おずと口 を開 た。

「しかし、何も指示が無いのでは……」

「不安かしら」

「エ ザムを壊滅させる程  $\mathcal{O}$ 相 手です。 奴 が また来たら、 俺 達 に 対抗 できるんで

しょうか」

「おいおい、そんな事でどうする」

しかし……相手が剣士では」

再び不安そうに顔を見合せた兵達 の前 で、 フレ イザー はにっこりと笑って腰

に手を当てた。

「あら、忘れた 0) ? 王 都 には上い 将 が 1 らつ L やる わ。 貴方達、バ イン ド がど

んな相手 か判らなくても、 近 衛 師 寸 第 大隊大将は 知ってるでしょう。 王  $\mathcal{O}$ 御

前試合を見ているんだから」

そ の言葉で完全に不安が晴 れ た 訳 いでは ないだろう。 し か 兵 達  $\mathcal{O}$ 顔 か 5 は、

先 程 までの怯えに . も近 7 · 色が 大分薄れ てい る。 フレ イザーはもう一度、 安心さ

せるように彼等を見回した。

そう遠か ?らず結! 果 は 出 るわ。 そ れ は 私 が 予 想する通りに なるでし ょ うね

訳ではない。 フレ イザーもまた、 だが彼女の瞳にはレ バ インドという剣 オ アリスに対する強固 士 がどれ ほどの な信 相手、 な 頼 が  $\mathcal{O}$ あ か 知 0 それ 7 1 は る

兵達へ静かに広まっていくようだった。

「さあさあ、 ぼうっとしてんなよ。午後の訓 練 があるだろう。とっとと飯を食っ

ちまえ」

なった食堂内を眺 ワッツ が 彼 等の め、 背を追い立てるようにして元いた席に戻す。 クライフとフレイザーも卓に戻った。 再び大人しく

すげえ。惚れなおした」

あらそお? それより、困った状況よね」

「それより……」

項垂れかけたもの *O* フレ イザー · の 瞳 に視 V) た深刻な色に、 クライフも表情

を引き締め直す。

けな 1 つまで のに。 結局、 軍 · 議 ば 上将 0 か り続 L か · 剣 士 け Ź を抑えられな 0 か しら ね。 *\* \ 言討 んだ いから」 伐を決めれば、 後は動くだ

「でも正規の管轄になっちまってんだろ?」

まだそれすら決まってない のよ。 だけど正規の管轄になって、 誰 が 剣士と闘

うの?

そう問われて、クライフは恐る恐る口を開いた。

「……アスタロト様とか?」

「馬鹿言って。あの方を動かすのなんて相当の一大事、「馬鹿言って。あの方を動かすのなんて相当の一大事、

それこそ大戦並みよ」

がでかかったんだから。 「今だって一大事だろ――それ 何て言ったっけ、 に剣士だって同じだ。 大戦 の剣士。 前 ……まさかそいつじゃ の大戦じや、 剣 士 の 力

ねえよなあ」

違うわよ。ジンでしょ。今はどうしてるのか知らないけど」

最早三百年も前の話だ。 フレ イザーにしても歴史の一端として知っているに

過ぎない。その当時 から軍にいたのはアヴァロンぐらいだろう。

「上は結局ぶるってんだろ。だからさ」

フレイザ ĺ はクライフの物 言 いに咎める視線を向 けたが、 そのまま視線を落

とした。

## ――そうね……」

ふと黙り込むと、まだぎこちないながらも兵達の交わす声がざわざわと聞こ

えてくる。フレイザーは冷めた紅茶を一度掻き回し、ただ匙を置いた。

「……あの人、また迷ってるのかしら」

呟きを耳に止め、クライフが顔を上げる。

「あの人? 誰?」

「えっ? あっ、やだわ、何か言った?」

途端にフレイザーは顔を真っ赤に染め、 クライフの眼から逃げるように右手

を上げて遮った。

「何かって、……」

「とにかく、もう迷ってる時じゃないのは確かよ。どうにか……決断してもら

いたいものね」

そう言い置いて、フレ イザー は席を立ち、 まだ微 がに赤 い頬に手を当てるよ

うにして、足早に食堂の出口へ向かった。

「ちょっと、フレイザー……。——誰の事だよ……くっそぉ」

拳を握り締めたも  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 向ける先も無い。 クライフも一度自分の頬を軽 くは

たいて席を立った。

クライフが士官棟へ戻ると、先に食堂を出たフレ イザーとヴィルトー ルがい

るのみで、他はまだ戻っていないようだった。

「上将は?」

席に着いて椅子の背に身体を預け、ヴィルトールに顔を巡らせる。 何か 0) 書

「お二人ともまだだよ。けどもう戻るだろう」

面を読んでいたヴィルトールは、それを伏せて顔を上げた。

長えなぁ。決まったのかな」

「さて……」

丁度そう言っている間 に、 扉が開き、 グランスレイが入ってくる。

「お疲れ様です。上将は?」

「公と少し話をされている。程なくお戻りになるだろう」

それで……」

まだだ」

ル

が立ち上が

り、

グランスレ

イの傍に寄ると、

先 程

ま

で

見

て

1

た紙

を

渡

て

眉をしかめ短く告げただけで、グランスレイ - は 自 席 に 向 かっ た。 ヴィ ル <u>ا</u>

言二言何 事 か告げる。グランスレ イは再び眉をし か  $\Diamond$ た が 頷 7

た。

顔を向る け た が、 入って来 た  $\mathcal{O}$ は 口 ツ 1 バ ル トだ。

ヴィル

 $\vdash$ 

j

ル

が

紙を畳

一んで懐ら

に

L

まっ

た 時、

再び

屝

が開

1

た。

彼等は

同

時

に

何だ、お前 か

余りに一

斉にこ

視

線を向

けら

れた為、

口

ツ

トバ

ル 1

-が思わ

ず足を止め

る。

身を起こし かけたクライフは、 また元 のように椅子の背に寄 ŋ か か 0 た。

何だと言わ れて ţ : :: 上 将はまだお 戻りでは ない んですか」

まだだし、まだ決まってない ってよ」

口 ツトバ ル  $\vdash$ は 何 も言わず、 ただ呆れ たように 肩 を竦 8 て 机 向 か う。 何と

はなしに会話 は 途 切 れ、 クライフは 暫く窓の外 を眺 めて 7 たが それをグラン

ス イへと戻した。

つい先程  $\mathcal{O}$ 食堂 一での 諍 1 が 思 いだされ、 軍 議 が · 決着 しなかっ たと聞 ただけ

で、はいそうですかと黙ってもいら れない。

「……副将、 いつまで放っておくつもりなんです」

何の話だ」

クライフは立ち上がり、グランスレイの机に近寄った。

ですよ。軍議じゃまともに対策も練らないでそればっかって話じゃないですか」

決まってんでしょ、上将に対する批判とか、言わせっ放しでいいのかって事

クライフほど表情には出していないものの、フレ イザーやヴィルトールの顔

の上にも同様 の思いがあるのを見て取り、グランスレイは苦々しい溜息と共に

頷い た。

「それば か りが <sup>7</sup>上が っている訳ではない が、 連 日飽きもせず、 口がさない輩で

は ある」

ちっム カつくな。 今度は俺を連れてってください ょ。 が つんと言ってやる」

掌に拳を当てなが 。 ら、 腹立たしげに室内を歩き回るクライフを眼で追って、

イザーが苦笑交じりの声をかけた。

「我々の立場では臨席できないのよ。仕方ないでしょう」

基 本的 に · 正 規 軍 近 衛 師 寸 全体 に カン か る 軍 議 12 出 席 が認めら れるのは、 大隊

それもクライフには不満だった。

 $\mathcal{O}$ 

副

将までだ。

その規定でい

けば

出

席者は圧倒的

に

.正規!

軍側

が多い事にな

ガイレトーレバ自居こ音、こまよ、フラインス・ジング

お前までそんな事でどうするんだ?

大体お前が出たら、

余計

面倒な事にな

ヴィルトール が 自 席 に着い たまま、クライフを見上げる。

るだけだよ」

「だからって黙ったままでいられねぇだろ。第一、 下にまで広がっちまってギ

スギスしてんだ。さっきなんて乱闘寸前だぜ?」

クラ /イフが. · 食 堂 <u>の</u> 一 件を掻 1 摘 んで報告すると、グランスレイ - は苦 々し 7) . 息

を吐いた。

上 あ 層 部 0 場ではひとまず収まったものの、全体的な問題は解決したとは言えない。  $\mathcal{O}$ 不 協 和 音 が 確 実 に隊内にも伝わって、 普段なら気にならない事まで不

和の要因になっている。

この ままの状態が続けば、兵達の不安はますます大きくなっていくばかりだ。

フレ イザー が与えた安堵も、 この ままレオアリス なりが 動 か なけ れ ば、 時 ŧ

なくまた焦燥と疑念に変わってしまうだろう。

「批判を言わ せね ええか、 軍を出すか、せめてどっちかになんねぇと収まりませ

んよ」

しかしグランスレ イはクライフに同意せず、 厳しい表情のまま首を振った。

我々が下手に

口出

しすべ

きでは

ない。

だが

もの批判に過ぎん」

「上将が黙っておられるのだ。

「ったく、正規にゃそんな時じゃねぇって、誰も言う奴はい

それまでは口を開 カ ずその様子を眺めていたロ ロットバ ル トは、 グランスレ 1

に蒼い瞳を向けた。

「それだけですか」

「……何がだ。」

「何。それ以外にまだあんの?」

東の 間 口 ツ 1 バ ル  $\vdash$ はグランス レ 1 に視線を注 いでい たが、 すぐに口元に

微かな笑みを浮かべた。

ねえのか

ょ

芽を出してか ついてはいずれにせよ結果を出せば いえ。 .....私 らでは、 ŧ, 少 刈り取るのは 々苦言を申し上げるべきと思 困難 消えてい でしょう。 く話ですが、 ……兵にも一定 ( ) ますが。 意 識 それ に 蒔 の情 か に、 れ 報 た 批 は 判に 種 必 が

要ですよ」

グランスレイは一度その瞳を見返しただけで、 何も言おうとはしない。 代わ

りにクライフがグランスレ てくださいよ。 口 ツトバル トの言うとおりだ。上将が黙ってたって、副 放っとくからどんどん広がってくんです」 イに抗議 の篭った視線を向ける。 将から苦情 ぐら

「俺が何だって?」

様子に驚 丁度その時、 1 た瞳を 王城 向 か け i ら 戻 Ź. つたレ 険悪という程 オアリ スが では無い 入り口で立ち にしろ、 どこか睨み合うよう · 止 ま り、 執 務 内  $\mathcal{O}$ 

な雰囲気がある。

何かあったのか」

上 一将が 批判を受けてるってのに、 黙ってる事 は無 ζ) って話です」

.....ああ」

0

不服そうな色を隠さないクライフの 様 子に苦笑を漏らし、 レオアリス は 室内

を横切って自分の執務机まで行くと、 ひょいと机 の上に座った。

別に。気に しても仕方ない」

腹立たない んですか? 俺 は気に食わねえっ スよ。 俺らの大将を何だと思

てんだ」

本気で怒っているらしいクライフを眺めて、レオアリスは宥めるように笑っ

た。

俺達はいいんです。そうじゃなくて」

「落ち着けよ。……まあ、

お前らには悪

いけど、

少しの間我慢してくれ」

漸く息を付いた。バインドの件が片付けば、今持ち上がってい クライフは尚も言い募ろうとして、レオアリスの 瞳に浮 かんだ光に気付 る批判も少しは

減るのだろう。その瞳は、自分がバインドを斬るのだと、見る者に告げている。

ただそれは、 安堵の他にもう一つ、一瞬の戦慄に近い感覚をクライフに与え

た。

判りました。 上将にお任せします。でも、早いとこ決着つけてください

ょ。 正 規  $\mathcal{O}$ 奴等 も結果を見 せ りや 納 得するし か ね えでしょうし」

見渡した。 クライフ 演習 が退るとロ  $\mathcal{O}$ 布陣 ツトバ 図だと気付いて、 ル  $\vdash$ が . 入れ 代わ クライフは呆れ りに 進み出 た声を上げた。 て、 書類を手に彼らを

「こんな時でも演習やんのかよ」

「バインドに動きが無く、 事 態が師 団 の管轄下に無い以上、 我 Þ の打つべき手

は態勢を整えておく事以外に無いでしょう。

必要以

上に特別な行動

を取

る事も

ない」

「俺はどっちかっつうと、バインドがさっさと動い て実戦になっ た方が 7 ( ) な。

その方が兵も落ち着くんじゃないか?」

クライフにしてみれば、いつもの軽口程度の発言だった。

「軽々しい事を口にするな!」

鞭を弾くような響きがあった。予想外 た成厳 **,** \ П 調に、 クライフだけではな

くその場の全員が、グランスレイに驚いた視線を向ける。

「え……っと、――申し訳ありません」

クライフが圧されたように頭を下げる。 レ オアリスは黙ったまま、 グランス

レイの僅かに逸らされた横顔に視線を注いだ。グランスレイの表情には、どこ

か苦い色がある。

だが、それ以上の変化が無いのを見て取り、レオアリスは微かな苛立ちの交

じった溜息をついた。

七

バインドが王都に現れてから、四日目の朝を迎えた。

薄紫と輝くような朱が入り交じる明 け 方の空は、地上でどんな事があろうと、

ただ色を移ろわせていく。

記

録

を調

べる事

L

かできてい

ないに

も関わらず、

疲労は

日々積

いみ重さ

なるように

窓 の向こうに変わる事なく上がる朝日を眺め、 レオアリスは溜息をついた。

身体に纏 1 つい ている。

蛇口を捻ると壁面に設けられた管から勢い良く水が降り注ぐ。

浴室に行き、

部屋 着 のままなの も構わず、 頭を突っ 込むように して水を被っ た。

明け方 の冷えきった水が肌 を叩り き、 寝不足気味 0 頭が漸くすっきりとしてく

る。 雨の ように注がれる冷た い水の中で、 浴室 の壁に片手を当てたまま、 瞳を

閉じた。

0 もりでいた。 今日は公休日に当たる。 そこで何もなければ 午前中 . О 時 自 間 分一人の力で探れる範 を利用して、 王立文書宮 囲 は へ行ってみる 探 し尽く

L た事になる。

その後、 どうするか……。

単純に、 やはりただの偽りだったと切り捨てる手はある。 いっそそうして蓋

をしてしまい た 1 誘惑 には 強 か つ た。

けれど、ずっと引っ掛

かっているのは、

グランスレ

イの様子だ。

昨日のグランスレ イの 姿が 脳裏を過る。

何 を知 ってい るの か。 何 故、 黙ってい る

 $\mathcal{O}$ か。

その事 がずっと、 レオアリスに煩悶を投げ続けていた。

勢い 良く注いでいた水を止め、 滴る雫ごと煩悶を振り払おうとするように頭

を振った。

渡 はせる。 身支度を整えて表に出ると、 通 りに沿って右手には官舎 既に夜明け  $\mathcal{O}$ 塀 が の色 延 び、 は消え、 左 一側は常見 良く晴 緑 樹 0 れ 、 た 高 植 え 込み 1 空が が 続続 . 見

V) てい る。 秋  $\mathcal{O}$ 日 差しが 樹 々 の 葉や石畳 一に照り 映え、 冷えた大気を少 んずつ 暖

8) てい た。

館 の門を出て少し歩いた所で、 レオアリスは足を止めた。そこが、バインド

と 初 めて遭 遇 L た場 所だ。 まだ 舗 装  $\mathcal{O}$ 亀 裂もその ま いまに、 なって **(** )

深く生々 L **,** \ 傷 を晒 L てい るも  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 無 ※機質に 語 らず、 そこから得られるもの

は無い。

引 き寄 せら ħ る視が 線 を振りほどき、 レ オアリ スは 第 層へ 向 か っった。

早 1 時 間 に も関わ らず、 執 務室 に は 既 に 口 ツトバ ルト 0 姿が あった。 口 ツ  $\vdash$ 

「どうなさったんです、随分お早いですね。それに今日は公休では ?

バ

ルトは不意に入って来たレオアリスの顔を見て、

「さすがにこんな時 に 0 んび ŋ 休 んでる訳には *\*\ カン な 1 か 、らな。 情 報 は ?

未だ変化は あり ませ  $\lambda$ ね。 どうせ軍 議 があ っても大し た内容でも な いで しよ

何です。 う、息抜きくらいされ カイを置 , \ て **,** \ ても文句は つてい ただけ 言わ れ れ ませ ば、 緊急 んよ。 時 遠乗 でも連 りにでも行 絡 は 可 能 でしょう」 か れた ら如

「そうだな……」

ハヤテは王城への行き帰りばかりで、 すっかりふてくされた様子だ。 心引か

意外そうに眉を上げた。

れ た様子 で少し考え込むように黙ったレオアリス に 度視線 を 向 けて カゝ 5

口 ツ 1 バ ル  $\vdash$ は 書 類を整えて卓上へ重ねて置い た。

申し訳 あ ŋ ませ こんが、 私は午前中に少 々時間を頂きます」

用 事 か ?

口 ツト バル トの手元に積み上げられている書類  $\mathcal{O}$ 山を眺 めなが 5, 何 か 急ぎ

返 った言葉に、 視線を引き上げる。  $\mathcal{O}$ 

案件があっただろうかと、

レ

オアリス

は

特に意図

も無く聞き返した。

シスファン大将

が

昨

日

から帰還されているそうです」

「シスファン

度それを口  $\mathcal{O}$ 中で反復してから、 思 V) が け ない 名にレ オアリス は 驚 7 て瞳

を見開い た。

まさか。 昨日 の軍議じや、何も言って無か ったぜ。第一 軍 議 に 出席 してな いし

「そのようですね 私も 表立 一つて聞 *\*\ た訳では あ ŋ ませ W が、 辺 境 を空け て秘

密裡に帰還するだけの 理 由が あるのでしょう。 ……今回 0 件と無関係とは考え

難 <u>,</u>

正 規東方軍 第七大隊大将、 レベッカ・シスファン。 第七 軍、 **(** ) わ ゆ る辺 境軍

を統括する彼女が、 口 ットバルトの言うとおり、 アスタロ 1 · や 軍 秘密裡に、 の召喚がなく帰還する事は考えら 重大な案件を以て召喚されたと考え れ な

るのが妥当だろう。

バインドの件に関わりがあるのだろうか。

(この時期だ。それ以外……)

どこが、

何の為にシスファンを召喚し

たの

か。

剣士と向き合うのは、 *(* ) つ以来か な

不意に、いつかのシスファンの言葉が耳を打った。

鼓動が早まる。

確かに、シスファンはそう言っていたはずだ。

その時はただ額面どおりに受け取っていたが、今その言葉は、 無視できない

響きを孕んでいた。

バインドの事を知っているのか。 十七年前を?

早い鼓動に合わせるように、目まぐるしく疑問が入れ替わる。

答えへの期待と不安。

オアリスは逸る気持ちを押さえ込むように、 両手を握り込んだ。

(……会って、話を——)

けれど、 秘密裡に上がっているのであれば、 通常  $\mathcal{O}$ 面会を求めてもはぐらか

されるだけだ。

口 ットバルトは暫くその様子を見てい たが立ち上がり、 執務 机 を回ってその

前に出た。

面会の申し入れは受け入れて戴いています。任せて戴いても?」

浮 かんだ表情は、 跳 ねるように顔 普段と少しも変わ を上げ、 レ オアリスは つてい 口 な ツト \ <u>`</u> バ ルトを見上げた。 整 った面に

レオアリスは僅かに躊躇った。

バ インドの言葉に . 捉 わ れ 過ぎていると自分でも判ってい る。 けれど、それを

自分の中でどう方向 付 け れ ば V) , \ 0) か、 それが 未だに見えてい ない のだ。

け引きなどは向かな

例え面会したとしても、

カン

し自分には政治的な駆

無駄に終わるだろう。 口 ツ } . バ ルトならその 術に長けて

「――何を聞けばいいか、俺にもはっきり判ってない」

まだ迷ったまま  $\mathcal{O}$ レオアリスに対 口 ツト バ ルトは対照的な表情を浮かべ

た。

無論、 明確な指示を出される必要はありません。 逆に現時点では、 私個 人の

範疇で動いている事に留めておいた方がいいでしょう」

口 ツ 1 バ ルトは特に急かすでもなくそう言うと、 執務机 (T) 縁 に軽く身体 を預

けた。

この三日間、 迷うだけ迷って来た。それで何が前進した訳でもない。

オアリスは深呼吸をするように、大きく息を吐いた。

「……頼む」

口にしてみて漸く、胸の裡に重くわだかまっていたものが、僅かだが軽くなっ

た気がする。

口 ツトバル トは頷くと、 先程卓上に置 <u>, , </u> . た書 類を取り上げ、 レ オアリス へ 差

し出した。

「せっかく出ていらしたのなら、ご確認を」

レオアリスが受け取ると、口元を皮肉っぽく歪める。

調 査報告と申し上げたいところですが、残念ながら何も得られておりません。

午後まで待って戴くしかありませんね。この後のご予定は?」

「王立文書宮に行くつもりでい る。 ……一つくらいひっ かかるかも しれ ない

L

な

期待半分といったところだ。 ただ先程までは 無け れば 手 詰まりになると思 0

ていたが、今はもう一つ別の道が開けている。

可可 能性 はあるでしょうね。では、午後に館にお伺いして、ご報告いたしま しょ

う

「……スランザールに話を聞くのが早いかな」

「さて…… 話が伺えれば 非常 に 有益 一でしょうが、 口を開 いたら開いたで、 あの

方の講 義 は きりが あ り ま せ んからね。 ま あ、 お 戻りが 明 日 にならないように お

気をつけください」

口 ツ } バル トの的を得た物言いに可笑しそうに笑い、 深く頷いてからレオア

リスは手にした数枚の綴りを開 1 た。

者や現在 そこに記されてい 別の部署へ異動している者の名もあるが、 るのは、 主に内務官房の人事関係者の名だ。 基本的に軍部 既に引退 人 事 した · 関

(T)

に

わっていた者のようだ。

ここまで調べていてくれたのかと、驚きと、もう一つ別の想いが 胸 の内

に

湧

き上がる。

情報が無さ過ぎますね。 表立って聞く事が出来ない分、 拘束力が 弱 1 のは仕

方ありませ んが……」

V オアリスはそれを閉じ、一度壁に掲げられた近衛師団の軍 旗に瞳を向けた。

自分もそれに対して誠実であるべきだ。

俺 の持ってる情報が、 少しならある」

誰

かを頼るのなら、

才 アリスとしては、 ずっと一人で持っていた事に後ろめたい気持ちがあっ

たが、 口 ットバルトは意外な顔もせず、 蒼い瞳を促すように細めた。

半刻後、 レ オアリスは 士官棟を出ると、今度 は王 城 へと向 か 0 た。

ヤテを厩舎に 預 け、 正門を潜る。 見上げ れば、 王 城  $\mathcal{O}$ 尖塔 は 首 が 痛くなる

ほどに高く聳えている。

王がそこに座す事を考えると、こんな状況でさえ、 確実に心が浮き立 つ のが

判る。

仇のし

浮か んで・ 来ようとするざわめきを押さえ、 唇を引き結ぶと、 レ オアリス は高

1 扉を通り抜けた。

正 面 の広く長い階段の横を抜け、 長い廊下を何度か曲ると、 王城の中庭に造

5 れた回 廊 に . 出 る。

その先に、 王立文書 宮 が あった。

れ た中 白い 庭 花崗岩を格子状 が 広 が 0 てい る に 組 0) が み合わせた回 見える。 紅 葉した樹 廊 の 壁 面 マと秋 カ らは、 の草花、 左右に美しく整えら 常 緑  $\mathcal{O}$ 植 え込

4 が均 整 を 取って 配置されて ١ ر た。

この辺りで行き交うのは、多くは文官達と王立学術院の学士や学生達だ。 時

折 1 か に ŧ 意外そうな 視 線 が、 士 官 服 姿  $\mathcal{O}$ V 才 ア IJ ス  $\mathcal{O}$ 上 を 過 ぎて 1

を進 意 匠 口 であ み、 廊 は 行き止 る、 途 中で十字に交差 葉 を茂らせ ま めに あ る た 年 L 両 経 開 7 分 た き 樹 0 か 屝 木 れ が て  $\mathcal{O}$ 前 1 に る。 面 <u>\f</u> 12 彫 0 V た。 5 才 ア れ 7 扉 IJ 1 12 ス は る。 は そ 知  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ ま 象 徴 ま を 正 表 面 わ  $\mathcal{O}$ 道 す

外 側 12 取 0 手 は 無く、 V 才 ア IJ ス は 扉 12 両 手 を 置 1 て、 重く大きな扉 を 押

1

開

けた。

り、 を弓状に た 軋 物 天窓か  $\lambda$ を浮 だ 音 作 ら差 を立 5 カン び れ てて開 た 上 L 込 通 が 5 む 路 せ が 幾 7 設 てい 筋 た け 扉 t 5 る。  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 光 れ 奥 7 両 لح に 奥 は、 舞 1 た。  $\mathcal{O}$ 1 壁 天 井 散 に る は、 埃  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 高 そ 中 < れぞれ に、 取 5 壁にず れ 次 た広 0 6 間 間 ŋ が 続 لح 左 並 < 右 に べ 上 5 広 が 部 れ

膨 0 間 に 大な量 ここの 整然 で は 蔵  $\mathcal{O}$ 書 開 収 書 物 量 闢 8 5 B لح は 同 記 近 れ 時 7 録 衛 にここに 師 7 が る。 寸 文書宮 文書保管 そしてその 7 る  $\mathcal{O}$ 幾 庫 のだと冗談 0  $\mathcal{O}$ 長 比 あ ハスラ る で は  $\mathcal{O}$ 混 ン な か ザ す \ \ \ U 6 り ک 分 に ル 噂 か  $\mathcal{O}$ t ささ 5 ま 玉 た、 な れ  $\mathcal{O}$ 7 開 71 7 部 闢 王 た。 城 当 屋 初  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 諸 か 官 つ 5 達  $\mathcal{O}$ 

 $\mathcal{O}$ 

それ

なほど彼

 $\mathcal{O}$ 

知

識

は

深

うっ

か

り何

カン

· を尋

ね

ようも

 $\mathcal{O}$ 

なら、

朝

に

来

た

は

ず

が 気 付 け ば 深 夜 を 迎 えて 1 たとい う事 ŧ L ば L ば あ 0

あ り、 スラン その ザ 知 ] 識 ル 故 は に古 王立文書宮長と王立学術院 くから王  $\mathcal{O}$ 相 談役 くを務め 長 てい を兼 る。 任するこの 玉 随  $\mathcal{O}$ 賢 者で

眇 に て 突っ込むように めて、 1 V 才 るため、 アリ 皺に ス · 埋 そ が ŧ 扉  $\mathcal{O}$ 声 れ L  $\mathcal{O}$ て た真 は 正 1 7 面 つ白な眉を動 た顔を上げ、 に つもくぐもって聞こえる。 置 か れ た 机 ĬZ か 首を突き出すように した。 近づくと、 長く豊富 スランザー な Ĺ 髭 て が 小 ル П さ 元 は を 分 1 覆 目 厚 を 1 1 更に 隠 書 物

「ずいぶんと久 ばならん。 それを怠るとは L 7  $\mathcal{O}_{\circ}$ お 前 のような小僧 か。 っ 子 はもっ と進 んで 知 識 を身に

何

事

たるんどる」

V) きなり説 教 カン ょ。 忙 L か つ た  $\lambda$ だっ て

ね

「そ れが たる んどる証 拠 じ や。 寝 食を惜り L  $\lambda$ で勉学 に 勤 L ま  $\lambda$ か

相変わ 5 ず口うるせえな あ

レ 才 ア IJ ス は 眉 を L か  $\Diamond$ た が 本気 で 煩 わ L 7 と思 0 た 事 は てくる。 な カュ 0 た。 威 厳

愛敬 こんな時に自分でも驚くほど気持 が 同 居 L て *\* \ る せ 1 か、 相 対 ちが軽くなってい するとつい 笑 1 が . る。 込 み上げ 歩 か半歩か、 前

進

付け

てい る気気 が して 1 る事 t あ るが、 目  $\mathcal{O}$ 前  $\mathcal{O}$ 存 在が 持 0 空気  $\mathcal{O}$ せ ŧ あ 0 ただ

ろう。

この老公はどこか、故郷の育て親に似て懐かしい。

「なあ、爺さん」

「スランザール様と呼 ば  $\lambda$ か、 無礼もん。第一 お 前  $\mathcal{O}$ ような不勉 強者  $\mathcal{O}$ 孫を持

0

た覚えはないわ」

スラン ザー ル は レ オアリ スよりふた回 りも小さい 姿で、 胸 を反 り返 しらせ た。

髭に覆われた顔は、あまり威厳があるとは言い難い。

だが幾重に

. も重.

ね

た長

衣

から突き出た腕

は枯

れ

木のように細く、

皺と長く白い

「様って玉かよ。それより聞きたい事があって来たんだ」

「自分で調べてか ら来  $\lambda$ か。 普 通 は 下調べ をした上で、 尚 且つ分から ないとこ

ろに関しての み、 目上の者に聞くものじ や。 丸投げで聞こうとする時点でなっ

とらんわ」

調べたよ。 全然出てこね え。 だか ら、 ちょっと頼る事に した。 だっ たら爺さ

んに聞くのが一番だろ? 何だって知ってるじゃないか」

スランザール はその言葉を聞 7 た途端、 にんまりと満足そうな表情を浮 かべ

た。

「ふん。して、何が聞きたい」

ほっと息をつき、身体を乗り出す。

「バインド。俺と同じ剣士で――」

「ほああ!」 突然奇声を上げたスランザールに、レオアリスは 思わず後退った。

いた幾人かも、何事かと驚いた視線を向けている。

まじまじとスランザールを見つめる。

周

囲で書物を閲覧

て

ぽか

んと

口を開けたまま、

「……な、何だ?」

わしゃ忙しいんじゃ。もう行け、 あっちへ行け。 こんな所で油を売っとる暇

があったら仕事をせえ」

て小さい身体に抱え込み、 せかせかとそう言うと椅子 さっさと机の奥の扉に消えようとする。 から飛び降 り、広げていた本を掻き集めるように

ああ? ……ちょっと……おい、待てって! ―じじいっ!」

あ っけにとられて見送りかけていたレオアリスは、 慌てて机を飛 び越え、 ス

ランザー ル 0 服  $\mathcal{O}$ 裾を掴んだ。

「こりや、 離さんかい! このスランザール様の服を掴むなんぞ、 数百億年早

、 わ !

あんた生まれてねェだろうっ!って、そうじゃなく!」

じたばたと細 い手足を振り回して暴れる老人を、何とか机まで引き戻す。

無礼もん か 弱い老人を何だと思っとるんじゃっ」

やっとの事で椅子に座らせると、 スランザールは膨れっ面でレオアリスを睨

み付けた。

あのなぁ・・・・・。 信じらんねえな、もう」

肺の空気を全て吐き出すような溜息を漏らした。

これが

この国の頂点に立つ大賢者の取る態度だろうか。

思わずレオアリスは

知らん」

「… い

١ ر

から、

教えてくれよ。

知ってんだろ」

スランザールはまるっきり駄々をこねる子供のように、レオアリスから顔を

背ける。

――俺、ここに何しに来たんだっけ)

夜明けを眺めた時の気分と今の状況では、 数刻しか経っていないとは思えな

1 · 程だ。

机の上に両手をつき、そっぽを向くスランザールに頭を下げる。

頼むよ。スランザール様」

知らんっ」

レオアリスは大きく息を吐き、 身体を起こすと、スランザール の皺ぶいた顔

を見下ろした。

「ふうん。あ、そ。

知らねえ

んだ。

情 け

ね

エなあ、

知のスランザールとも

う者が、知らない事があるなんてな」

「何を言うか、このわ しに知 らぬ事などない!」

オアリスの 挑 発 に 心 底憤 ったと言わ んば かりに、 スランザー ル 0) 枯 木の

ような手が古び た机をば んば んと叩く。 レオアリスは、に、と笑みを刷い た。

「じゃ、教えてくれ」

スランザール は釣られたように口 を開 きかけたが 不意 に厳 1 表情 を浮

かべて再び閉ざしてしまった。

「爺さん」

促すようにレオアリスが呼んでも、 じっと落ち窪 んだ瞳 を向 け たまま、

動こ

うとしない。

「……何だよ」

黙ったままの老人にレオアリスは眉根を歪めた。

また、同じ反応だ。誰もが同じように口を閉ざす。

知らなくて良い 事もあ る。

「一体皆、何を隠してるんだ。バインドって名前に何がある?」

知らなくていい ? 奴は剣士で、 俺を知っていた。

知らなくていい

事

な

んて

無い」

睨み付けるレ 才 アリス O視線を、 スランザー ルは無言で受け止 める。 オア

リスは 纏 1 付く何かを振り払おうとするかのように、 握り込んだ拳を鋭く振

た。

いいい 自分で調べるさ」

記録など無いよ」

足音も荒く書庫へ向おうとしていたレオアリスは、その言葉に老公を振り

返った。 スランザールの真っ白い眉の下の小さな眼には、どこか思わしげな光

がある。

「過去など、逐一掘り返さずとも良いものじゃ。掘り返したところで、後悔し

か生まぬものもある」

―そうやって誰も彼も上っ面ばかり言うな。 それで気にならない訳がない

だろう。」

「お前自身の為じや」

オアリスは一度だけスランザールに視線を向け、踵を返した。 俺の為、か」

「だったら皆、やり方を間違えてんだ」

何だ、 暗 1 顔 してるな あ

鈴を振るような悪戯 つぽ 1 声 が か かって振り返れば、 ア ス クロ トが 王城と文

書宮を繋ぐ回 廊を歩いて近づいてくるところだった。

相 変わ らず軍 服 は 着 ていない。首に巻いて背中に流した繊 細 な織 り の白 1

に に纏う銀  $\mathcal{O}$ 装 品が歩くのに合わせて微かな音を立てる。 前

の開

V)

た 同

じ白

*\*\

長衣の下に、丈の短い青の上下を合わせてい

る。

首や肩

「尤も、

連

日

あ

W

な会議じゃ暗くなるの

も無理ない

か。

私ももう疲れ

た

腕 飾

オアリス はそれに は曖昧に 頷いて、 アスタロ トが 自分の 前まで来る 0 を

待った。純白の花崗岩を細く繊細に組み合わせ光を取り込んだ回 廊 に、 アスタ

口 } の艶 P か な髪 の漆 黒が 鮮やかだ。

気にするなよ、 奴らだって分かってるんだ。 お 前  $\mathcal{O}$ 剣 を止め 5 れ るヤツが、

軍にどれだけいる?」

そう言ってから、アス タロ } は レ オアリスの 表情 に 眼 を止め、 首を傾げた。

黒い ・艶やかり な髪 が 肩にさらりと零 れ る。

゙……それが気になってるんじゃないんだ?」

口 廊  $\mathcal{O}$ 白 *\* \ 格 子 壁 に 寄 り か か り、 レ オアリス はア ス タ 口 トを見た。

アス タ 口 1  $\mathcal{O}$ 様 子 は バ イン ド が現れる前も後も、 あ  $\mathcal{O}$ 軍 議 の中でさえ、全く

変わらない。

多分アスタロ 1 ŧ 知 5 ない のだろうと思 7 ながらも、 レ オアリスは 問 掛 け

¬

た。

「――お前、十七年前の事ってなんか知ってるか?」

レ オアリス 0) 問 1 に、 案の定アスタロ トは 長 ζ, 睫毛に 縁 取 5 れ た 瞳 を丸くす

る。

同

1

年だぞ。

他

 $\mathcal{O}$ 

ヤツに聞けよ、ベ

]

ルとか、

ファーとかさ。二人とも無

駄に

「十七年前? 知るわけ無いだろ。 お前私をいくつだと思ってるんだ、 お前と

長く生きてんだし、知ってるんじゃない?」

呆れたように細 1 肩を竦めると、 剥き出しの肩にかかる細 い鎖がしゃらりと

音を立てた。

だ。 アスタロ レオアリスもこれまで幾度か  $\vdash$ の言うファーとは、 面 同じく四大公の一人、 識を得てはい たが、 西 四大公などそう簡 方公ルシファ 単に  $\mathcal{O}$ 事

会える相 手では、 な ア 、スタ 口 1 が 特 別 なのだ。

大体、 十七年前 の何 に つい て な訳 ?

「よく分からな 7 が、多分師 団

に任せてある。アスタロ シスファンの事を問 おうかとも思ったが、 トも目に見える言動ほど実質は無軌道な 思い 直 した。 それ は 口 ツ 1 ルト

訳ではない

嘘 の上手い方ではない。

れば、 ŧ L 正規軍 シスファン に 余計な亀裂を与えか の喚問 が アス タ 口 ね 1 な  $\mathcal{O}$ \ \ \ 預 か 今は り 知 少しず 5 な 1 つ動 所で行 7 た方 わ れ が て 1 7 るとす いと、

お前に言わ れたくね え な

そう思った。

はあ?

そんな

事

L

か

わ

か

んなくて聞

いて

 $\lambda$ 

の ?

お

おざっ

ぱなヤツだなぁ」

を踏むように回 廊を抜け、 大広間を過ぎ、 警備

アスタ 口 トは軽 やかに、 舞踊

 $\mathcal{O}$ <u>\f</u> アス 一つ扉を タ 口 出  $\vdash$ が る。 話 扉を警護 L なが ら先に立ってどんどん して **,** \ た近衛兵が二人 歩 (V に て 向 **,** \ か くため、 0 7 敬 礼する。 レ オアリス

は

自然、 アス タロ } の後を追うような形で王城  $\mathcal{O}$ 正門 に向 か っった。

「それじゃ、師団のヤツに聞けばいいじゃんか」

「……聞いた」

ちらりと紅い瞳だけを向ける。

「ふうん。……なあ、どっかいこう」

ふいにくるりと振り返ると、レオアリスの腕をわしっと掴み、ぐんぐんと引っ

張って歩き始める。

「ちょっと……待てよ、おいっ」

「いいところあるんだ~。最近お気に入りで、しょっちゅう行ってんだけど、

お前まだ行った事ないだろ?」

「待てって。今はそんな時じゃねェだろう。それに俺ちょっと用事 が

ば、 空を見上げれば、太陽は真上近くに昇っている。午後にロットバルトが戻れ 何がしか の答えが聞けるだろう。出来れば館に戻っていたかった。し かし

アスタロトは腕を離す気配はない。

こうして待ってて事態が変わるか? 「堅いことばっか言ってるから、そうやって暗~い 事態起こしてんのは私達じゃない。 顔になっちゃうんだ。 大体

何 か あ れ ば 知ら せ が 来るさ」

会 話  $\mathcal{O}$ 途中も 足を緩 めず、 アスタロトはずんずんと黒い · 玉 石 0 敷 カ れ た道を

 $\mathcal{O}$ 後を歩くは めに なった。 進

んでいく。

先日とは逆に、

レ

オアリスは半ば引きずられるようにア

ス

、タロ

 $\vdash$ 

上将?」

正門から王城内に向かう途中だろう、 丁度通りかかったヴィル トールがその

様子に驚 1 た顔 を 向 けて足を止める。

「これは、

公。ご無沙汰しております。

で、上将、どちらへ?」

アスタロ トに一礼し、 ヴィル ト | ルが首を傾げる。

アスタ 口 トに聞 7 てくれ……」

よく言った!」

諦 め半分のレオアリスの言葉ににっこり微笑んで、 アスタロトはヴィルトー

ル に手を振 公ってみ っせた。

ちょっと借りる。 上層 0 『アル・レ イズ』に行くから。 知ってるだろ?」

は?

近 1 後で返 す カュ 5 心 配 すん な。 じ Þ あ ね 

言うが早 , , か、 レ 才 アリ スにもヴィル 1 ル にも П · を挟 む暇を与えず、 アス

ヴ 1 ル 1 ル が あ 0 け に 取 5 れ てい る間 に、 正 門の 外に 消 ごえる。

口

1

は

V

オ

ア

IJ

ス

0)

腕

を掴

んだまま、

さっさと正

門に

向

か

0

て歩き出

「……あ  $\mathcal{O}$ 方には 捕 ま ったら、 暫らくは戻らないだろうな……」

ぼそりと呟いて、

今の事を見なか

った事にすべきか否か、

ヴ

1

ル

1 ]

ル

は僅

か に思い 悩 んだ。 グラン ス レ 1 は ま た溜息を吐くだろうが

ま、

Þ

再び歩き出したヴ 公が 相手じ イ お ル 止 <u>ا</u> め 出 来 ル は、目 な か の前に たのも無理は ある場内への巨大な扉に目をやり、 ない。 正直に報告するか」

0

自分  $\mathcal{O}$ 用 件 を思 1 出して グラン スレ 1  $\mathcal{O}$ 代 わ り のように溜息を吐い た。

内 務 か。 どうせなら私じゃなく、 口 ツ トバ ル トを召喚してくれれ ば 1 1 も の

を

正 門の 脇 で衛士と談笑していたア ーシアが、 アス タ 口 1 に気付 いて顔を上げ

る。

「アスタロト様。ずいぶんとお早いお戻りですね」

それから背後のレオアリスに改めて気付くと、にこりと柔らかい微笑みを浮

かべた。

「レオアリスさん。こんにちは」

お前も元気そうだな、アーシア」

レ オアリスが疲れた様子をしているのに気付いて、 アーシアは心配そうに眉

根を寄せた。

「っていうより、 お前の主人のお陰でなぁ」

随分お疲れのようですね。やはり今回の件に関して、お忙しいんですか」

はは。それは、 もう……諦めていただくしか」

小首を傾げて爽やかな笑みを浮かべた少年を眺めて、レオアリスは改めて

がっ かりと肩を落とした。

「アーシア。『アル・レイズ』に行くぞ」

一ええ? よろしいんですか?」

た。ただ気のままに動 アスタロ *(* ) ・も悪い  $\vdash$ · が 細 も私 V) が 決めるの。こい 顎を振り向け、 いている訳でもないと判っていながら、 改めてレオアリスは彼女をしげしげと眺め つの話、 聞 いてやんなきゃいけないしな」 アスタロ トには

自分を見つめるレオアリスに対し、 アスタロトはいつもの得意そうな笑みを

「さて、外門まで出るのもめんどくさい

このまま行くか」

見せた。

時折驚かされる。

「……このまま? 俺、ハヤテが……」

オアリスが皆まで言い終わる前に、 左腕 にアーシアを抱え込み、 右手でレ

オアリスの腕を捉えたまま。

アスタロトの姿はその場から消えた。

入り口で迎え出た家令は、 廊 下に立つ被きの 奥の 顔を確 認すると、 黙って深

く頭を下げた。 先に立って部屋の奥へと進み、 ー つ の 扉 の前で足を止める。

家令が扉を押 し開くと、薄い陽光の落ちた部屋の中で、女が一人振 り返った。

癖 女性特有 0) 無い 黒髪を耳 の柔らかさは少ない。 の下辺りで切り揃え、きつく釣り上がった切 身に纏っているのは 私服だが、 傍ら れ 長  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 瞳 卓上には は 黒、

よく手入れを施された長剣が置かれ 来 訪者が外套 を脱ぎ一 礼すると、 現 れ てい た整 た。 った顔 を眺り め、 女は 赤 7 口元

みを刷い た。

「久しい な、 半年振り程か。 と言ってもこれでまだ二度、いや、三度の面会で

かない が

らず、面会をご了承戴きお礼を申し上げます」 「先のミストラの 件ではご助力を戴きました。 この度は急な申 し出にも関わ

に笑

それ には鷹揚 に 頷 き、 正 規 軍 東方第七 軍大将レベッ 力 シ スファン は 口 ツ  $\vdash$ 

バルトに窓際の椅子を薦め、自分もその前に座った。

薄 1 陽 光以外 に 光源  $\mathcal{O}$ 無い 部屋では、二人の姿もその間に置かれた円卓 · も 墨

絵 のように 映 る。 窓越 L に覗 え常 緑 樹 0) 枝葉が、 風にざわざわと身 を揺り 「すっ つ

いた。

家令が茶器を二人の前に置き部屋を辞すと、 シスファンは椅子の背に深 く預

けていた身体を起こした。

卿がわざわざ訪ねて来るとは思わ なかったな。 使者を戴け ħ ば館 まで出 向 1

たものを」

シ スファンは 円卓 に 両 肘 を付き、 組 んだ手  $\mathcal{O}$ 中 か 5 黒 1 瞳 を 閃 カゝ せ るように

口 ツ F バ ル  $\vdash$ 0 瞳 を覗き込んだ。 探る瞳 0) 色に ŧ, 口 ツ 1 バ ル 1 は ただ笑みを

返す。

「近衛」 師 寸 謀 官とし ての 用件 ですので、こちらか ら伺 うの が 筋で しょう」

\$ ん、 そっ 5 か。 つまら ん事だな。 二人きりで密会など、 王都の女どもに恨

まれるとヒヤヒヤしていたんだが」

はありませ ご心配はご無用ですよ。 貴女にご迷惑が ん 潜から ここに貴女がいらっし ないよう、 顔 を見られ れ ない やることも、 配慮は して 他 お に知られ ります。 る 懸念 その

シスファンはじっとロ ツトバ ルトを見てから、 気持 ちの 良 1 響きを立てて

笑った。

閑静な街中に建つそこは、訪れるにも離れるにも、人の目に立たない造りになっ ここはシスファンの官舎でも私邸でもない、王都の上層部にある宿の一室だ。

ている。

甘い期待を掛けていたのに残念だ」

それから今ま での会話 とは 打って変わ って、低く声を落とす。

良く私が王都 に来てい ると判ったな。 公式にはサランバードを離 れては 7 な

いのだがな」

ラ 山 境、ミストラ山 サランバー 脈での一件の折り、 ドはシスファン 脈 を擁するミスティ 口 ットバルトはサランバ 0 第七 リア 軍 が 地方一 駐屯する、 帯 ードを訪れ、 0 東方 治安を担っ 最 大  $\mathcal{O}$ てい シスファンと面 軍 都 る。 だ。 ? 東 ス  $\mathcal{O}$ 1 辺

識 を得て 1 た。

少し聞き及んだもので。……この度のご用件 は 査 問、 です か。 内 務 *の* 

シ スファンの 瞳 に 浮 かんだ光が鋭さを増す。

侯 爵 か 5 聞 1 た  $\mathcal{O}$ か

口 ツ 1 バ ル  $\vdash$ は ただ笑って、 シスファンの想像するに任せた。

軍が · 辺境 か らシスファンを召喚する場合、 通常 ア ス タ 口 1  $\mathcal{O}$ 命で動 うくが、

ス タ 口 1 は 秘 密裡 を好好 むま \ \ \ こ の 件に . 関 L て は尚 . 更だ。

となれば シ スファンを喚問 出来る権限 を持 0  $\mathcal{O}$ は 他に内政 官房 L か あ

ない。 それもごく上層部に限 られ る。

 $\vdash$ バ ヴ ル エ 1 ル ナー 自 |身が 侯 最も考えていないところだが、 爵がそうした情報を単 -なる血  $\mathcal{O}$ 繋が それ を敢えて否定し り 程 度で洩らすと てみせる必 は、 口 ツ

要は なか った。 手にしている札は多く見えるに越したことは 無 

私 ŧ, 全てを聞 1 て **,** \ る訳 で は あ りま せ  $\lambda$ 

ン は身体中の息を吐くように П を閉ざし、 促すように自分に視線 して椅子の背凭れ を 向 け た に身を投げた。 口 ツ トバ ル トを眺 め、 シ ス ファ

り

得

ア

口 ツ } バ ルトがここを訪 れ た理 由 は 察 しが 付 ζ) てい る。 面会を受け入れ た以

上 問 \ \ カュ けをはぐらかす気は シスフ アンには な 1 が、 それにどこまでどう答え

るべきか、そこを自問していた。

「それで? 私が何を知っていると考えているんだ?」

ロットバル トは 目礼だけを返し、 その蒼い瞳をシスファンの上に留める。

「内務での喚問案件は、先のミストラの一件でしょう」

シスファンは少し剣呑に片眉を上げたが、躊躇無く答えた。

「そうだな。」

近衛師団第一大隊大将に関わる件ですね」

「……どこまで知っているのか……。私に聞く必要があるの

かな」

推測に過ぎませんよ。ただ」

口 ツト バ ル トはシスファンの反応を子細洩らさぬような色を蒼い瞳 に宿 す。

見穏やかな瞳  $\mathcal{O}$ 中にあ る冷えた光に、 シスフ アンは苦 い笑みを微 か に浮 かべ

た。

シスファンは持って回った言い方は好まない。 目 0 前 の男に全く取り繕う素

振 りが 無 1  $\mathcal{O}$ は、 自分に 対しては単 力直 一入が一 番有 効だと見抜 カ れ 7 1 る から

だろう。

れば、私としては結び付けて考えざるを得ない」 ると言っているようなものだ。そこへ、貴女が ですが、 「ご存知の通り、 ただ剣士というだけには、 現在王城は侵入者の件で少々騒めいてい 周 囲  $\mathcal{O}$ П が 非公式に王 重すぎる。 ・ます。 都 なにが に帰還さ L 侵入者は か れたとあ  $\mathcal{O}$ 裏 剣士 が あ

シスファンは黒い瞳を細めた。

結び付ける。何に」

室内  $\mathcal{O}$ 空気が張り詰 じめる のが判る。 窓の外では相変わらず、 樹々の穏やかな

葉擦れの音が続いていた。

「バインドと軍との関わりを、です」

事も無く告げられた声に、 シスファンは一呼吸置いてから、 長椅子の上の 脚

を組み直した。

\_

査問 の内容については詳しく伺う事はしません。 大方の設問は予想が着きま

すし、私の管轄ではありません」

ミストラに残 L た情 報も多くはない。 そこから得られる情報だけなら対処は

可能な範囲だ。

「では何を聞きたい」

「バインド はあ  $\mathcal{O}$ 日 我が大将に幾 つか の言葉を残してい ・ます。 その全てが真

実かは判りませんが、十七年前という鍵がそこにある」

聞 *\* \ て 7 ない な。 捜査上 0 重要な要素となるものを秘匿 してい るとは、 軍法

会議ものだぞ」

シスファンの咎める響きにも、ロットバルトはただ笑った。

第 一回 目 (T) 軍 議でバインドに関する言及を断 たれているのですから、 単に · 機

会を逸しただけですよ」

「……その程度で済むと……」

「済ませましょう」

事もなく言い切っ たその顔を呆れた瞳で眺め、 シ スファンは続けさせるため

に片手を振った。

貴女は第七 軍  $\mathcal{O}$ 大将として、 既に十七 年前 にはサランバ ードにおら れ た。

存知でしょう」

女の歳を測ろうとは、 意外に女の扱い を知らないのではないか?」

「興味があれば伺いもしますよ」

小 ·手先程 度の会話 は 思案  $\mathcal{O}$ 間 ごが欲 ĺ **,** \ からだが、苦もなくやんわりと返され

苦虫を噛み潰したように眉をしかめる。

教えて戴

け

ま

す

か。

十七.

年

前

に、

何 が

あ

つった

0

か

口

ツト

. バ

ル

トは

「知らないと言ったら?」

逆に厳 L 1 札 を 引 カン せ 7 しまっ た事に気付き、シスファンは内心で額を打った。

一度反らした瞳を、静かにシスファンに注ぐ。浮かんだ光に、

口 ツト バ ル  $\vdash$ が シ スファン  $\mathcal{O}$ 内心を見透かすように、口元に薄い笑みを刷く。

貴女は以前、 我 が大将を前にして、こう仰った。 剣士と対峙するのはい

つ以来か、と」

シスファンは 益 々眉をしかめ、 今度は実際に額を右手につくと視線を窓 の外

に逃がした。

全く、 迂 闊 な事 を 口 にするも のでは、 な V) な

非常に 1有益 な示唆でしたよ。 だが 調べ ても貴女が剣 八士と対: 峙した公式 な記

録 は出てきません。 いつ、どこでか。 ……何という名の剣士か

シスファンは身体をずらして深く腰掛 け、 上体を僅か に 乗り出して正 面 から

口 ツトバ ルトの瞳を見つめた。

聞いたところでどうする」

現時点で必要なのは

情報です。

情報

が

無け

れ

, ば対.

応の

しようもない」

例え事実が ? 彼 に 不利 なものであっても?」

「この状況 下で、 優位 なも のが出てくるとは思っており ませんよ」

東の 間 の沈 黙に重なるように、 樹木の騒めきが届く。 よく耳を傾け れば、 丁

寧に整えら れ た 小 ぶりの 庭園 に遊 5 小 鳥 達  $\mathcal{O}$ 囀 ŋ ŧ 聞える。 シ スフ アンの 瞳 が

囀 り 0 主を探すように、 窓か ら見える梢 0 揺 5 め きを追った。

こんな穏やかな情景の 中では、 十七年前 の出 来事はまるで遠 · 夢の 中の・ 事  $\mathcal{O}$ 

ように感じられた。

ただしそれは、悪夢だが。

脳裏にあ の男、バインドの冥い笑みが過る。 いつだったかバインドと対面し

た 時、 あの男が纏う闇にぞっとした。

全ての事が終わって思い返せば、あれは狂気だったのだろう。

いや……終わったと思っていただけか)

追憶を振り払うように、シスファンは一 度息を吐いた。

十七年前まで、バインドは確 かに、 我 々 に関 入わりが あった。 軍として、

日常的にな」

「どのような関わりです」

「それ以上語る口を持たん。 そう言って口を閉ざしたシスファンの上には、 記録 も出まい。 ……そういう事だ」 語る意思の無いことが明確に

読み取れる。 だがそれは言葉よりも雄弁に、 口 ットバルトにある事を伝えてい

成程

る。

242

せず、 シスファンの対応 一言知らないと言って通せば は、この 状 況に於いて非 口 ツト 常に好る バ ルト にはそれ以上の 意的と言えた。 全くご 追 及は 対 応も 職 位

上できないからだ。

口 ットバルトの問 7 か るのだろう。 けを完全に否定しない上で言及を避 けるの で あ れ ばな ば、

シスファンが

口にする事を避け

なけ

ĥ

らない理由 が。 そこに明白

「な理

由 が あ

(ここまでか)

得られた情報は乏し *\*\ が、 示唆された背景は大きい。

退意を告げようとした時、 視線を窓 の外に投げていたシスファンの、 独り言

のように呟い た言葉が耳 を打打 つ た。

「……十七年を経て、 バ インドは過 去の亡霊ではなくなった。 もはや時間  $\mathcal{O}$ 問

題だろうな」

それ以上は何 も言わず、 手の付い け 5 れ ,る事. 無く冷え切った茶器の上に視 線を

落としている。

有難うございました。 お手を煩わせて恐縮です」

口 ツトバ ルトは丁重に 頭を下げ、それから立ち上がった。

ζ, いや。 まあ有益な時間 の使い方ではあるさ。 卿との面会は 面白 V > し、 何よ

翳り Ó

り眼福だ」

無い 口調でそう言うと、 ロットバルトの後を追ってシスファンも席を

立つ。

ロットバルトは今までと変わって、魅惑的な笑みをシスファンへ向けた。

「今度は、また別 の折にお時間を戴きたいものですね」

どこまで本気なものかと内心苦笑を覚えながらも、シスファン目の前

た顔を見返した。

(迂闊に乗ったら痛 い目を見そうだ)

「その時には仕事 の 話 は無しにしてもらいたいものだ。 卿とは厄介な件でしか

会って無いからな」

「そうさせて戴きましょう」

シスファン喉の奥で笑うと、 扉の外に声を掛け、 家令を呼んだ。すぐに応え

る声が返り、 足音が近づく。

の整

0

最後にあと一つ、お聞かせ願いたい」

口 ットバルト は振り返り、 すぐ隣に立つシスファンと向 かい合った。

誰もがこの件に関して示す反応がある。 少しずつ異なりは L こたが、 その根底

には同種の感情が流れているように思える。

剣士という種……いえ、 存在にと言うべきかも知れませんが……。

あなた方

が抱いている感情は、一体何です」

シスファンは東 の間 口 ットバルトの瞳 を見返してから、 自嘲を含んだ笑みを

浮かべた。

「――恐怖さ」

九

士官棟 へ の 通りを歩くロ ットバルトの姿を認め、 クライフは走り寄ってその

肩を叩いた。

口 ツト バル ト ! どこ行ってたんだよお前。 探してたんだぜ。 ヴィルトール

も気付いたらいねえしさ」

「少し私用で」

口 ツ 1 バ ル } が · 歩い てきたのは城下に出る外門のある方向だ。 その方向と

ットバルトの顔を見比べ、クライフはにやりと笑った。

まさか女に会いに行ってたとか言うんじゃぁねえだろうな」

口

私用?

「当らずとも遠からず、ですね。いい勘だ」

マジで ? お前なぁ、勤務中だぞ」

口 ツ } バ ル  $\vdash$  $\mathcal{O}$ П 振 ŋ は まるで作戦 行 動 を 読 み上 げるようで、 冗談 な  $\mathcal{O}$ か 本

気な 0 か、 **今** 一 つ 判別 が 付 か な 大して答える気が無い 0 か、 口 ツ トバ ル **\** 

はクライフを眺め、その件を打ち切った。

何  $\mathcal{O}$ 用です? 貴方が わざわざ私を探すとは 珍 

そんな事 ねえだろ。 いっつも仲い いじ Þ ん俺等」

冷めた視線を向ける ロットバル トに 構 わ ず、 肩にがっと腕を回し、

はそのまま声を落とした。

お前どう思う? 今 回 の件」

「……どう、とは?」 ットバル トは特に表情も変えず問 7 返したが、

口

あるのは、 「だからさ、 昨 剣士だよ。 日  $\mathcal{O}$ 口 ット 何か全体がはっきりしねえ。 バルトとグラン スレ イとのやり取りだ。 挟まった感じ

奥歯に物

 $\mathcal{O}$ 

クライフの問

1

掛

け

0

根に

だろ?」

「抽象的ですね」

だから聞いてんじゃねえか」

クライフ は 周 囲 をさり気なく見回 L て か 5 通 しりを 歩き出 した。 陽 は 中 天 を過

ぎてい るが、 今 の 季節はどことなく空気 が 肌 寒 V) 通りの 街路樹 は す 0 か り茶

や黄に染まり乾いて、 後は散るのを待つだけだ。

兵 舎の 並 3 通 ŋ を抜けて士官棟 へと歩く間、 隊士 達が二人が 通 り過ぎるに

従って立ち 止 ま り、 敬 礼を捧 ; げる。 クライフは手を上げて答えなが 5 改 めて

隣 に視線 を向 けた。

お 前 は 何 か 知ってんじゃねえかと思ってさ。 副将 に何 カン 言 ってたよ いなあ」

おや、 よく覚えてますね」

おい・・・・」 眉をしかめるクラ 度確 か めるように 眺 め、

イフ

を一

口

ツ

1

バ

ル

トは

視線

を前

残念ながら私も、 大した情報は持っていませんよ」 方 へ

戻した。

ホントかよ」

ス t に示したように、 りではな 疑うというよりは、 かったが、 表立って探 確実な情報は 意外そうな響きだ。 る事 は 持ってい 出 来な 口 な V ットバルトとしてもはぐらかすつ · 状況 V) 0) は 下では、 事 実でもある。 得ら れた情 報 才 は アリ 無

シスファンとの面会も結局は、 口 ツト バ ルトの推 測をある程度補 っただけに か

0

た。

過ぎない。

やはり一番明 確 な情報を得られるのは、 グランスレ イが 口を開く以外にない

のだろう。

「……確かに、 副 将 は我 々に隠 している 事が ある 0 でしょうね。 我 々と言うよ

限らない。出すにしても時期は

あ る りは上将に。

もちろん、

全ての情報を開

示する事が

物事

を優位

に働

か

せるとは

真実を知る者達が隠 し てい るの は レ オアリスとバインドとの関わり、 そして

バ インドそのも のについてだ。

あれほどの力を持つ剣士が、何故記録として留められていない のか。

全く情報を持 たない 存在など無 意図的 に殺されない 限 り。

情報を殺せる のは誰 だ?

グランスレイに、シスファンに口を閉ざさせる存在は。

そして、そうまでして殺したい 情 報、 その事 実が 何 な  $\mathcal{O}$ か。

インドは現在、 軍の、 王国 の敵だが、 十七 年前 は。

違うはずだ。 少なくとも単純にそこに分類できるものではないだろう)

隠し事をする場合は、身内に都合の悪い事の方が圧倒的だ。

『恐怖さ』

自嘲するような響きだった。

(やはり、 バ インドは カン つて軍に所属 していたと考えるべきだろうな)

その上で、レオアリスとの関わりがどう生じてくるのか、一

番の

問題はそこ

だ。

インドがレオアリスと同じように、 「暴走」 を起した事があるの か。

(そうだとすると、少し不味い)

内務がシスファンに証言を求めたのがミストラでの状況だとすれば、

事の外郭が見えてくる気がする。

蓋をされた過去と、

レ オアリスを補佐すべき立場にあるグランスレ 1 の沈黙。

剣士に対する反応、

レ

オアリスに対する殊更の批判。

ンフリフを補佐すべると場にあるクランフレイの沙黒

知らせないようにしているのは、何の為か。

数少ない断片を繋ぎ合わせて無理やり形作るとすれば。

ットバルトは自分が取る道を、そこから想定してみる。

口

朧げに

隠すの は、 レ オアリスが バインドと直 接の 繋が り が ある場合。

ŧ しく

同じ事を引き起こす可能性がある場合だ)

おーい。一人で考えるなよ! 暗えなぁ!」

込んだが、思考を中断されて冷え切った視線に迎えられ、そのまま肩 を縮めた。

黙り込んだロットバルトの肩を思い切り小突いて、クライフはその顔を覗き

「すんません……」

「……私の意見は取り敢えず置いておきましょう。 貴方は今回 0 事をどう捉え

ているんです?」

クライフは一 旦口 ツ トバ ルトを眺 め て から、視線を戻し、表情 を引き締めた。

外門を破 0 とい て、 何をするでもね え。 割に合わね え行為だよな」

成程、 破城は 貴 (方の専) 門分野でしたね」

そう、 だか 5 奴 0) 目 的 は 元 Þ 狭 エ んだ」

立ち止ま り、 戦 場 に あ る時 0 ような厳し *\*\ 眼 を 口 ツ トバ ルトに向ける。 声 んは

囁くように低い。

「目的は上将だろうな」

「――その発言は、上将の立場を悪くしかねない」

返す声は更に低く、 向 けられた氷のような視線にも、 クライフは動じる事

無

く、にやりと笑った。

「俺はもしそうだって、変わんねぇ」

口 ットバルトはその眼を見据えていたが、 ややあって口元を歪めた。

瞳に刷

いた凍る色が薄れる。

――そこに答えがありそうですね」

いオアリスの立場に。

グランスレ 1 0) 態度、 隠され えた 情 報 は、 口 ツ } バ ル 1 達 が想定してい る以上

に、レオアリスを中心にある可能性が高い。

「けど、砦の崩しどころが見えねぇんだよなぁ」

クライフらしい表現にロットバルトも頷く。

ただ崩れ ない だけならましですが、 思 わ め 所 から決壊するのが 恐 **,** \

想定外の所から崩れた場合、 事態は必要以上に悪くなりかねない。 ただでさ

えレオアリス は 批 判 の多い不安定な位置にある。 それは避けるべきだ。

(それも、少しくらい手を打つか)

「いい加減今度、 副将にはっきり聞いてみようぜ。ごちゃごちゃすんのはめん

どくせぇ」

「直球ですねぇ」

ようとしても埋

ま

いり切ら

な

い の

かも知れなかった。いっそ危険を無視してでも、

その言い草にロットバルトは苦笑を浮かべたが、実際この問題は外堀を埋め

直接門に手を掛けた方がいい結果を生むかもしれない。

「今日にでも俺から聞 いてみる。あの人だって何か理由 があって黙ってんだろ。

だからって一人で考える事でもねぇけどな」

「不本意ですが、同意しますよ」

何で一言多いの? ……と、ヴィルトールじゃん」

近衛 師 団士 官 棟  $\mathcal{O}$ 入 口に着いたところで、 通りの左手 カン らヴ イ ル 1 ル が歩

てくるのが 見えた。 足を止めた二人の前まで来ると、 ヴィル <u>ا</u> ル は軽 で大右

手を上げた。

珍しく真剣な顔してるけど、女の子に振られたかい?」

誰が、とは言っていないもの 0 自分に真っ直ぐ向けら れた顔にクライフは

顔をしかめた。

「それは俺に言ってんのか?」

私の訳がないでしょう」

「何で言い切る……」

満ちた回廊 繊細な色硝子が嵌め込まれた扉を潜り、 に抜ける。四角く中庭を囲んだ回廊の正面が、彼等 冷えた広間を通って 0 執務 明 る 室 1 になる。 陽 射 しの

少し前に中将以上 の執務室を一部屋にまとめたところ、 業務の効率が良くなっ

添えている。

右手に見える中央の噴水が鳴らす涼やかな流水音が、

静か

な

回

廊内

に彩りを

た。

「そういや、お前はどこ行ってたんだ? 途中から顔が見えなくなったけどよ」

「うーん。まあ面倒くさい用事って言うかねぇ」

「めんどくさい用? 奥さんのお使いか?」

「何でそれ が 面 倒 なんだ? 人参 本買うの ŧ, どんな手 料理 になるの

えたら楽し ( ) じ Þ ない か

ああ、そう……」

閉 口したようにクライフが 顔を逸らすのを眺 め、 それ カン 5 口 ツ トバ ル <u>۱</u>  $\mathcal{O}$ 蒼

1 瞳に向かって、ヴィル | |-|

そういう楽しい事じゃあなくて、

面倒で時間の無駄なだけの事だよ」

ルは穏やかな笑みを見せた。

訳わからね えな」

クライフは眉をしかめただけだが、ロ ットバルトは心 の裡で苦い息を吐い た。

(それも当然か)

シスファンが辺 境か ら呼ば、 れた以上、 あの・ 時ミス トラにあっ た第 大隊 の 者

が召喚を受けな 7 訳が 無い。

ヴィル て見せるという事 ト | ル  $\mathcal{O}$ П .調 は、 も表情も穏やかそのものだ。明言しないながらも おそらく問 題は ない のだろうが、 状況 を問うべきか П に出

うか、 口 ツ トバ ル トは思考を巡らすように瞳を細めた。

「そうだ、 ロット バ ル 内務でヴェルナー侯爵から言付かったんだ」

## 何の用です?」

注意深く見なければそれとは気付かないが、 眉根に苛立ちを覗かせ たロ ツト

なりともこうした表情 を見せるの は、この名を聞い た時くらい

「私などに用件の内容までは仰らないよ。

けれど、

午後にでも一度屋敷に戻る

バルトの顔を眺め、ヴィルトールは内心苦笑を浮かべた。

ロットバ

ル

1

が

僅

カン

だ。

ようにとの仰せだ」

口 ツ トバルトは一 度ヴィル } ルに眼を向 け、 すぐに浮 かべ た表情 を掻 き消

すと、 口元に笑みを刷いた。

「判りました。後程時間を見て出向きます」

「そうだね。 ああ、 それ から上将 は 公に引っ張られて『アル・レ イズ』 に行か

れたよ。 戻りは遅い んじゃな V) か な

アル・レイズ?」

クライフが聞 き馴 れ ない 響きに眉 を上げる。

どこの街だ?」

ヴィル トールは大げさに溜息をついた。

「お前はだから振られるんだよ」

「だから俺がいつ振られたってんだ?」

「最近城下の一層に出来た料理店ですよ。まあ、連れて行けば女性は喜ぶでしょ

うね」

「そういう心遣いがないから振られるんだ」

「いい加減にしろよ……」

クライフはそう言いながらも、 今度使おうと口の中でそれを復唱し直

る。

丁度その時、 執務室の扉が開いた。顔を覗かせたフレイザーが取っ手に手を

掛けたまま、 扉の 前で立ち話 をしている男達を不審そうに見回 す。

「貴方達、 何をやってるの?窓から姿が見えたのに入って来ないと思ったら、

こんなところで井戸端会議?」

クライフは一度視線を天井に向けてから、 フレ イザー に向き直った。 軽く咳

払いして、口を開く。

「フレイザー。今夜アル・レイズに行かねぇ?」

てい

フレイザーは束の間クライフを眺め、柔らかく微笑んだ。

「また今度ね」

そのまま扉が閉ざされる。 クライフは暫く黙った後、 両 脇 を睨んだ。

「……使えねぇじゃねーか」

直球過ぎるんですよ。誘うにのも時と場所というものが 阿呆か」 あるでしょう。

「はぁ。もう使えない情報は忘れるべきだよ」

者が居るところでなどと、第一に

誠

実さが感じられ

ない

クライフは二人を睨 んだものの、 文句を言う代わ りに力なく肩を落とした。

「フレイザーって、好きなヤツいんのかなぁ」

は項垂れたクライフの頭ごしに顔を見合わせた。 どちらかといえば自問自答の溜息に近 かか ったが、 口 口 ツト ツトバ バ ル ル トとヴィルトー トが珍しく、 優

しいとさえ言える笑みを向ける。

「……仕方ありませんね。私でよければ相談に乗りますよ」

何だ、その哀れみの篭った眼は」

「ただ、 私はこれまで一 度も女性に振 られた事 はないので、どこまで参考にな

るか判りませんが」

ヴィルトールもまた、クライフの肩に手を置いて頷いた。

「そうだな。クライフの為だ。及ばないだろうけど力になるよ。 飲み明、 かすな

ら付き合うからね」

「――てめェら、喧嘩売ってンなら……」

ふと口をつぐみ、 口 廊 0 入り口を振り返る。

慌ただしい足音が硬

い大理石

の廊下に響き、すぐに一人の兵が回廊に姿を見

せた。近衛師 団兵ではなく、正規軍 の下士官服を纏っている事に、三人は顔を

見合わせた。 正規 との 連絡 調 整を行 う事 務官が · 遅 れ て駆け てくる。

堵の色を浮かべ、走り寄った。

正規兵と事

務官は

執

務

室

の前

に 立

つ三人の中将を見て、

緊張した面持ちに安

+

旅 で成功し、 人や商 王都で一 城下の街は常に賑やかな喧騒に満ちている。 人など、様 旗上げようとやってくる者達は後を絶たない。 財を成した者は少なからずいたが、 々な者達が肩を擦り合わすように大通りを行き交ってい その成功の陰で陽 王都の住人達と各地から訪れた 清濁併せ持つこの街 の目を見ない た。

た。 内だ。 ここ上層区域 L か し 周 自己 縁 認識 部 で  $\mathcal{O}$ あ や安全管理を怠っては 下層地 れ ば 財産 区では、金銭どころか生命を失う例 を失っても故郷に帰 , \ けない . と、 る程度で済み、 その 後 ŧ の教 少 なく 訓 まだ軽 に は すれ な 7 失敗 か ば 0 7

者達も数え

切

れ

な

7

程

7

る。

枚一 アル・ディ・シウム、『美しき花弁』 枚に複 雑 な色 合 7 0) 影を宿 L 7 ١ ر と呼ばれるこの都は、 る。 広げた花びらの一

 $\Diamond$ って歩い オア IJ た事を思 ス は 様 \ \ \ Þ · 出 な 店 していた。 が並 ぶ賑 やか な通りを歩きながら、 自分がこの街を初

あ 0) 時  $\mathcal{O}$ 自分にとっては王 都 は 途方もなく巨大で、 曖昧 な意 志 や期 待

容易く打ちひしぐ容赦のない場所に思えた。

そもそも剣 士: 立など、 自分ですら話程度にしか 知らないものが自分なのだと

知って、 王の御 戸惑い 前 試 合を勝ち抜く事 ば かりが 強か で僅 った事 か もあ な自信を得、 る。 近衛師! 寸 に配配 属され

大将などという場所に居る。

だ嬉しかった。

最初、

から全て順

調

に

行

っていた訳ではな

か

ったが、

気

が

付

け

ば

、 た 事

はた

(大将か)

いつの間に、こんな所まで来たのだろう。

王城内ではそれに 身を覆ってい たも . 囚 わ 0 れ は る 事 歩ごとに剥 無く在る事 は が れ 不 落 可 ち、 能 だが、 何も持たない ただこうして あ  $\mathcal{O}$ 頃 街 を歩  $\mathcal{O}$ 自

分に戻る気がする。

L か つ ŧ は 開 放 感 を感じるそれ f, 今はどこか心細ささえ覚えた。

タ 口 喧 1 騒 が 12 足を止 紛 れ 7 め、 1 た思 思考は中断された。 7 が 再 び 心に浮き上がってきた時、 ふと気が付けば、 見た事 前を歩 い ŧ な て い V た 程 アス 0) 美

しい少女を追って、辺り一帯の視線も止まっている。

(目立つヤツ……)

少な

いが、

アスタロ

 $\vdash$ 

は

非

常

に

美

L

7

顔立ち

をしてい

る。

レ

オアリ

ス

の故

郷

 $\mathcal{O}$ 

普段顔を見ていて、しかもアスタロトの言動を知ってい る為に 意識 する 事は

辺境部でさえ、 アス タ 口 1  $\mathcal{O}$ 噂 は 聞 き及 んでい た程だ。

曰く、傾国の美女と……。

(先代だ、絶対……。)

美女と言うにはまだ年が足りない。 加えてアス タ 口  $\vdash$ 0 実態 を知 0 たら、

等の内少なくとも二割は視線を戻すに違いない。

ぼーっとするなよ。可愛い女でもいたか?」

アスタロ } · は 店 0 扉を押し 開けようとしていた手を止 め、 レ 才 マアリ スを振 り

返った。

いないよなー、私以上のヤツは」

そう言って非常に得意そうに顎をつんと上げてみせる。

それにはそれなりに同意も覚える。 それ相応の年齢になれば、 傾国 も大袈裟

彼

な言 1 方で は なくなるだろう。 ……見た 目 は。

「それ より ほ 5, 結構 最近お気に入りな店なんだー。 何て言ってもご飯が美味

[ ]

飯?

窓が 煉 前 瓦 が、 通 何 塀 いくつも張られた、 り の話かと改めて目の前 緑  $\mathcal{O}$ 銅で縁取られた白 向うに、 右 奥は行き止まりで、 薄く柔らかい色をした雲と青い空が半分覗 瀟洒な雰囲気を持った店だ。『アル・レ い雪花石膏の板に刻まれ、扉の  $\mathcal{O}$ 建物を眺め その先は高台になってい れば、 通りに面した白 上に見 る 0 か、 撂 いていた。 ・イズ』 げら *\*\ · 壁に 低く作ら れ 広い てい という名 れた る。 硝子

眺 め t 1 *\* \ んだぞ」

(T)

食時にはまだ少 ら 店 広く間取 そう言ってアスタロ 景色が 内に入ると入り口 り の 見 渡 取られ L せ 早 る。 į, の傍に が、店内 外 た店内  $\vdash$ 12 は 屝 は を押 露 , \ は には既に何組 た店員が 台が 右 奥 L 張 開 0 壁 けた。 5 強切 れ、 面 もの客がいて結構込み合ってい そこにも三つほど席が れ が 確かに、 の良 硝子張りに い声をあげた。 眺  $\Diamond$ は良さそうだ。 なっていて、高台か 卓に着いて あっ た。 る。

思 1 思 \ \ \ に . 食 事 を して *(* ) た客達が、 釣 5 れるようにアスタ 口 }  $\mathcal{O}$ 上 に 視 線 を向

け、 驚い たように眼を丸くする。

ま あ、 アスタロ ト様だわ」

「この店によく見えるとは聞 1

アスタロ 1 . (T) 名前 に店内にざわめ てたけど……」 きが広がる。 この 国  $\mathcal{O}$ 最 高 位 一の貴

えら れ もし な V) 事 だ。 気さくなアス タロ トは、 城下でも非常に 人気 が 高 \ \ •

あ の隣 の子は?」

四大公の一人が、一般

0

民が通う店

に来るということ自体、

他

 $\mathcal{O}$ 

兀

大

公では考

作族で

ある

子って、 あれ、 あの服! 師 団だぜ。 しかも士官だ」

一士官? あ 0 歳で?」

彼等の 興 、味は、 自然、 横にい るレ オアリ スに ŧ 注 が れたが、 近 衛師 寸 大将とは

V) え一般 に は ほ とんど顔 は 知 5 れ ていな

剣 士 或 į, は その 名 を 聞 け ば 誰 L もが膝を打 つだろうが、 注が れる 視 線  $\mathcal{O}$ 中

にそれと気付 1 た者 は *\* \ な **(**) ようだった。

軍と言えば、 エ ザ ムが 襲撃されたという話だ」

微 か な声だっ たが、 レ オアリス は 素早く視 線を投げた。 中程  $\mathcal{O}$ 卓 に 座 0 7

る壮. 年の男だ。 妻らしき女性が 眉 を寄せ る。

怖 1 わ……貴方、気を付けていただかなくては……」

が 出来な V) らし \ \_

私

0

販

路

は

西方だか

ら、

それほど心配

はない。

だが、

工

ザ

Ĺ

0

近辺は今通行

そんなに · 酷 い状態なんですか、 お父さん」

席  $\mathcal{O}$ 青 年 が 身 7を乗り Ш́ す。

「北方軍

が

封

鎖

L

ているから、

状況

は良く判っていないようだ。ただ、

男と同

人達は迂回させられて、 日数も経費 くも余 計 に か か ってしまうとぼやいてるよ」

「でも、 アス タ 口 ト様がこちらにい らっ Þ るって事は、 それ程問 題 はな *\* \ つ

て事なんじゃないですか?」

「そうかもしれない。 だが王城でも先日、 北  $\mathcal{O}$ 外門で侵入者騒ぎがあっただろ

う。 治安が悪化 L ているとまでは行 かない  $\mathcal{O}$ か ŧ L れな V) が、 情 報 が ŧ っと欲

ところだ」

アスタロ トは空いていた露台の席を注文すると、レオアリスの了解を得ず案

北

の 商

内  $\mathcal{O}$ 後を付 \ \ てすたすたと歩 1 て *(* ) く。先ほどの 男 達 の 卓  $\mathcal{O}$ 傍を 通 り か かると、

彼らは慌て口を閉ざした。

(城下は、まだこの程度の情報か……)

今回の件に関 しても、 城 下  $\mathcal{O}$ 情 報 規制 をし てい るとは 聞 1 て 7 たが、 思

んどの客の視線はアスタロトの姿を追っている。

以上に閉ざされているようだ。

レ

才

アリ

スはさりげ

なく店内を見渡

L

た。

ほ

ح

9

た

アー シアに促され て レ オアリスも 露台に置 カゝ れ た席まで行くと、 既に席 に着

いているアスタロトの前に座った。

7 1 アスタ ない < 口 トは早 せ に 次 いから次 速、 店員に何やら注文を始めている。 へと出てくる単語にただ感心して、 手元の品書きを何 レ オアリスは . も 見 やる

事もなく頬杖を付いた。

露台  $\mathcal{O}$ 席 と店内を仕切る硝子戸に目を向けると、 注がれていた視線が一斉に

散る。

多くはアスタロ 1 を見ていたが、 興味の対象はそれだけではないのだろう。

B はり彼等 ŧ 今王城内とエザムで起こってい · る事 が気になっているのだ。

ら城下の 乳白 色の優美な欄干の向こうに目を向ければ、 街が望める。すぐ下に見えているのは商人や職人達の多く住む地区だ。 高台に張り出すようなそこか

通りに沿って店の日除け布が色とりどりに広がっている。

るが、伝わったとしても、生活に影響がなけ 日 々の暮らしは変わる事 普段と何も変わらない、 無く流 王都 の町 れ てい 並み。 <\_ . れば 今 回 旧は厳 噂話 程度に しく情報規制 囁かれるくらいで、 が 敷 か れ てい

この場所から北の方角は望めない。

街道上のエザム、そして、北の果てにある故郷。

(十七年前か)

重 7 . 息を 吐い て 正 面 に 顔を戻 思わずが たりと椅子を引い た。

「なっ……」

息を呑 む光景とい . う の は、 実際こういう事 をい う の で は な 1 か。

黒檀を円に削 り上げた上品な卓の、 艶やか な表 面 にはす 0 カュ り覆わ れ て、 見え

ない。

卓を覆 **\**\ 隠してい るの は、 様 々な料 理 の盛 られた幾つもの 皿 だ。 冷菜、 温菜、

汁物、 炒  $\emptyset$ 物 12 揚 げ 物、 焼き物 肉 料理 や魚料理。 全部で十人前くらい は軽く

ありそうだ。

「……何だ、これ……」

呆然と呟いたレオアリスを余所に、 アスタロ トは 嬉しそうに瞳を輝かせた。

「食うか? お前の分も頼むぞ」

レオアリスは思わずもう一度卓の上を見渡した。

-.....。え、これ俺の分ねェの?」

弾かれるように顔を上げてアスタロ . |-を眺めたが、 はっと気が付いて慌てて

首を振る。

「って、そうじゃねえだろ!」

机を叩きたくても叩く余地が無い。 オアリスは仕方なくアスタロ トを睨む

だけに止めた。アスタロトが愛らしく首を傾げる。

何って、ごはんデショ」

向けられた甘やかな笑みに、つい緩みそうになる口元を無理矢理引き結ぶ。

# そうじゃなくてよぉ……」

オアリス は 肺の空気を全て吐き出す程の溜息をついた。

だがそれ 店内の客達は、 ŧ, たった三人でこれだけ 今度は別の意味で硝子戸の奥の卓に視線を集中させている。 の量 を注 一文すれ ば当然だろう。 アは

食事を摂らないしレオアリスの分は含まれていないというのだから、 アスタロ ト一人で食べるのだが、多分、 不本意にも、 他 の客達はレオアリスが アー 正 確 に

は

#### 相談料」

この大半を食べると思っていに違い

ない。

アスタロ トがにこり、 と笑う。 頬を赤くして熱心に見つめてくる窓越し の客

に、ひらひらと手を振ってみせた。

はあ?」

だからあー、 話を聞いてやるから奢れってコト」

・何かず ĺ١ ぶん高 くねえか?」

安い方だ」

は あ、と再び溜息をついて背凭れに寄り掛かり、レ オアリスは諦めた顔になっ

て、嬉々として食べ始めたアスタロトを眺めた。

くて、色んなお皿をそれぞれまんべんなく召し上がるのが 「ああ、 アス タロ ト様、 こぼさない で。 それから一皿だけ召し上がるのではな 礼儀 ですよ」

はあい」

た。 とアス つくのもも 三度溜息が タ 口 つった  $\vdash$ 0 洩れそうになる口元を咄嗟に押さえた。こうなったらもう溜 П 7 ない。 に消えていくのを、 口元に片手を当てたまま、目の前にあ レ オアリスは今更ながらに感心 いった料 して 理 が 眺 次 息を 8 Þ

ているに違 元来アスタロトは良く食べる。しかし、あの胃は絶対どこか、異次元に繋が ۲, レ 7 オアリス な は 噛 非 み 砕 常にどうでも カン れたものが 1 ١ ﴿ 降 事を想像した。 ってきたらもの凄く迷惑だよな あ 0

「んで? 十七年前って何?」

「え……? ——あ、ああ」

起こした。 ふいに問 思わず本来 われ て、 V の目的を忘れていた。 才 アリスは二、三度瞬きをし、 椅子に預けてい た身体を

美し その \ \ 顎を持ち上げると、 原 因 [を作 0 たのが自 既に半分以上片付 分であるにも 関 わ らず、 け た料 理 アス  $\mathcal{O}$ タロ  $\prod$ を 脇 } 12 は 寄 呆れ せ たように 先ず

「今の件に関係あるのか?」

アーシアが

淹

れ

た

お茶に手を伸ば

した。

ら、 だが、逆にこの方がい えてこの場所を選 ざわざわと店内 第三者的 i な 視 に点を: んだだ に満ちる賑やかな空気は、まるで今の状況にはそぐわな  $\mathcal{O}$ 持 7 か って眺  $\mathcal{O}$ か は 分 ŧ から  $\emptyset$ しれなかった。少しぐら る事 な も必要だろう。 アス *\*\ 現実 タロ と離 1 がそこま れ た場 で考 所か

(意外性あるからな、こいつ)

に気付く。 L か Ļ では 躊躇うように卓の上に視線を落とし 何 を、 と 問 わ れると、 何 が 番 たレ の 問 オアリスに、 題 な  $\mathcal{O}$ か、 曖 昧 ア なま ス タ 口 ま トは な事

首を傾けた。

······答え、か······。多分、答えは全く出てないんだ」「何を調べてて、どの部分で答えが出てないわけ?」

改めて考えてみれば、バインドが ·現れ てか ら既に五日近くが経過 しようとし

てい るのに、 レ オアリ ス 0 手 元に あ る情 報 はそれ か ら殆ど変わ って *\* \ ない ま ま

だ。 逆に、 捜せば: 捜すほど、 周 囲  $\mathcal{O}$ 扉 が閉ざされていくような感覚 が ある。

判ってる 0 は十七年前 に 鍵 が あるって事と、 バインドの名前だけだ。 だ

から、そこから調べようとした」

「師団に関係あるのか?」

判らない。おそらく、だ」

深紅の瞳をじっとレオアリスに注いで、アスタロー・

トは

暫らく

両

手の

指

顎

 $\mathcal{O}$ 

下で組んだまま黙っていたが、一度ゆっくりと瞼を閉じた。

開かれた深紅の瞳に、心の中を見通すような光が浮かぶ。

「なあ。

まだ私

は、

何で

お

前

が

そんなこと調べ

てる

O

か、

聞い

7

な

オアリスは再び躊躇うようにアスタロトの顔を見つめた。

"お前の一族はどうなった"

あ れ 以 来、 常 に 頭  $\mathcal{O}$ 中 に留 ま ŋ 続 け 7 離 n な V ; その言葉。

そ れ が 何を指 L てい る  $\mathcal{O}$ カン .判ら な 7 事 が 番 0 問 題だ。

『仇の元に仕えるか』

嘲笑う響き。

オアリスは静 かに息を吸い込み、 それから肺 か ら押し出される空気の勢い

を借りるように、 言葉を吐き出した。

「……奴が王 城に侵入した晩に、 俺に告げた事 だし

アスタロ トが細い弓なりの眉を寄せる。

生まれた頃と、一族について、調べろと」

族 ? お 前 の一族を?」 俺の、

意外そうに声を上げたアスタロトに頷く。

オアリス自身、 自分の一族について、これまであまり多くを考えた事は無

失わ 'n たの か、 もし かしたらどこかにいるの か。

かと思

いながら、否定する気持ちはずっとどこかにあった。

1

故郷

 $\mathcal{O}$ 

森にある、

あ

の廃墟。そこがそうだという確証など無

そこではな

それ は淡 () 希望だ。 だからこそ、 敢えて考えようとしなかったのかもし れな

黙り込んだレオアリスを見て、 アスタロトは首を傾げた。

自分で調べてたんだろ。さっきもさ。何かあったのか.

「無い。不自然なくらい、何も――」

中途半端に、レオアリスは口を閉ざした。

(不自然だ) 今までは漠然と、 記録 が無 *\*\ のなら、 そういうものなのかと半ば 納

得しよう

としながら、ずっと胸  $\mathcal{O}$ 辺りに引 うつ掛か っていたの はそれだ。

た。 スランザー バインドの名すら出てこない。 ル の言ったとお り、 王立文· 名が 達って 書宮に *\* \ Ŕ るの 当 か 時 と剣・ を 記 士 L 一で引 た文 書 け ば、 は 無 か 0

は三百年前まで遡ってしまう。

オアリ ス は右 手を二、三度握 り込み、 開 1 た掌 に視 線 を落とした。

バインドの存在は確かだ。

剣を打ち込んだ感触は、今でも明確に思い出せる。

ス ラン ザー ル は 確 実 (C 何 かを知 0 て 1 る。 総 将 アヴ ア 口 正 規 軍  $\mathcal{O}$ 何 人か

の将校、そしておそらく、グランスレイも。

存在は事実、 何かしら、 それが何 か 判 らない ものの、 知ってい ながら隠して

*\* \ る者があるのも事実なら、 文書に残っていない からと言って初めから無 か 0

たと考えるのは、その方が無理がある。

(---何だ……)

何を隠している? 隠すのは何故だ?

自分とバインドとの間に、一体何があるのか。

誰もが口を閉ざす事によって、言外に告げているのではないそれが何であれ――

そして。

あの男の言葉が、

正しいと。

仇

心臓が早鐘を打つ。

焦燥がじりじりと胃の中で焦げる。

ロットバルトはシスファンから何か情報を得られただろうか。

か。

シスファンはバインドを知っているのか。

「――バインドか」

考え込むようなアスタロトの呟きに、 レオアリスは顔を跳ね上げた。

「何か知ってるのか!!」

オアリスの勢い に驚いて、 アスタロトは少し瞳を見開いた。

柔らかな頬

 $\mathcal{O}$ 

線が引き締まる。

いや。 けど調べよう。 先日 のタウゼン達は 確 かに変だったしな」

アスタロ トはたおやかな手に細 *(* ) 顎を乗せたまま、 思い 起すように天井を見

上げた。

そう、・ 確かに初めてバインドの 名が・ 出 た時、 議場内に 瞬戦 慄にも似た空気

が走った。それ は 何 かに抑えられたかのようにすぐ消えたが、 表情 に微妙 な変

化を残した者、全く反応を示さなかった者、二通りだ。

判ったら、 教えてやる。……ま、 あまり考え込むなよ。バインドとやらを倒

す事が先決だろ。それより、 お前<sub>-</sub> バインドが言った事は、 他にはもうない

な?

アス タロ  $\vdash$  $\mathcal{O}$ 深 紅  $\mathcal{O}$ 瞳 がじっとレ オアリスに 注が れ、 レ オアリス ハはそれ を受

け止めるべきか逸らすべきか、迷うように見返した。

「・・・・・いや」

歯切れの悪いレオアリスの瞳を、アスタロトがじっと覗き込

「本当か?」

「……お前には言うよ。判ったら」

「……ふんだ。それならいいけど、ちゃんと話

頷いた時店の 扉が開 き、 東の 間、 通 り 0 喧 騒 が 店 内の空気と混ざり合った。

てよね

扉の傍から店内に騒めきが広がる。

すぐその視線を 入ってきたの は 点に 背の 高 止 め 1 た。 金 の 客席、 髪の青年だ。 特に女性 中 一客が · 性 的 陶然と見惚 に 整 0 た 顔 を店内 れる中、 に 青 向 年は け、

店員の案内を断って露台の席へ足を向けた。

「げげ」

少し慌てたようなアス タロ トの表情に気付い て、 入り口に背を向けてい たレ

オアリスが振り返る。

ロットバルト。良くここが判ったな。それで」

立ち上がろうとしたレオアリスを片手を上げてやんわりと制し、 口 ツトバ ル

 $\vdash$ はアスタロトに一礼すると、 レ オアリスの耳元に顔を寄せた。

「――バインドです、上将」

低い声に乗せられた名前に、 レ オアリ ス の瞳 でが険 しさを帯び る。

それまでの

「私にも聞かせろ」

煩悶の色も、

影を潜めた。

アスタロ トの言葉に頷き、 口 ットバルトは二人に姿勢を向け直 した。

つい先刻、 アス・ウィアンに 現 わ れ たとの報告が ありました。 現在、 街道に

配備されてい た北 方二軍 の中 隊 が 向 って おりますが、 間 もなくアス・ ウ イアン

に到達するものと思われます」

アス・ウィアン。先日の エザ ム よりも更に北の街だ。レオアリスは席を立ち、

アスタロトに視線を投げた。

「アスタロト。手え出すけど、いいな」

正規軍の管轄に、という事だ。

「いいよ」

あっさりと頷いて、アスタロ トはレ オアリスを促すように手を振ってみせる。

「――カイ」

V オアリスが 小声で呼ぶと、どこからか微かな鳥の声が答えた。 常にレオア

リスの傍に従う使い魔だ。レオアリスの指示を瞬時に伝える事ができる。

イに伝えろ。市街地ならヴィルトールだな。俺は直接現地に向う」

低く告げ、今度はロットバルトに視線を向ける。

グランスレ

「ハヤテは?」

「上空に」

頷いて見上げると、上空で銀  $\mathcal{O}$ 鱗 が 光を弾 7 た。 旦動 きかけてぴたりと足

を止め、レオアリスは再びロットバルトを振り返った。

悪い、立て替えといてくれ。それから、戻ったら話を」

それだけ告げて一度高く指笛を鳴ら 露台の低い欄に手を掛け、 レ オアリ

スはそのまま飛び降りた。

店内で数名が思わず息を呑んだ。

直後、 上空から銀色  $\mathcal{O}$ 疾 風 が 駆 け抜 け、 その背にレオアリスを掬 **,** \ · 上 げ て再

び上空へと上昇する。

アス・ウィアンだ。お前なら半刻で飛べるな?」

飛竜 の青 い瞳を覗き込むと、ハヤテは聞くまでも無い と言わ んば カン り

に

高

かに鳴き、 一度大きく風を煽った。

を支えたまま、どこか気まずそうに 瞬く間に銀竜の姿が蒼天に消えるのを見送って、アスタロトは肘を突いて顎 . 口 ツトバル トか ら顔を背ける。

「……立て替え、ですか」

「うーん。

律儀なヤツだ。

別の機会で

7

V 0)

に

۲,

1 ちいち確認するように繰 り返す声 が 怖 

口 ットバルトが冷めた蒼い 、 瞳 を、 チラリと卓に流す。 卓の上には既にすっか

り空になった皿 が、 いくつも重ねてあった。

なるほど?」

あはは~。……い、一応言っとくけど、レオアリスにも勧めたぞ」

食べてないけど、という言葉は口の中に飲み込み、 取 り繕うようにひらひら

と手を振るアスタロ トの横で、 アー シアが笑い を含んだ溜息を洩らす。

公公

整った面に柔らかい笑みを刻み、 ロットバルトはアスタロトに向き直った。

「な、何だ」

アスタロトは少し身構えるように ロットバルトを見、 それから傍らのアーシ

アの耳元でこっそりと囁いた。

「やっぱ食い過ぎ? でも腹八分目だよな」

知りませんよ」

締めの菓子食ってないし」

まだ召し上がるおつもりだったんですか?」

ひそひそと交わされる言葉が 漏れ聞こえ、 口 ットバルトは浮 かべた笑みを苦

笑に変えたが、すぐに蒼い瞳に一種の冷厳とさえ言える色を刷い た。

改めて姿勢を正し、アスタロトに視線を向ける。

私が直接参ったのは、

単に伝

令役だけの為ではございません」

分を超えた発言と承知の上で申し上げます」

支払 1 に関して苦言を呈されるかと首を竦 がめてい たア ス タロ 1 は、 肩を 降ろ

してほっと息を吐いた。ロットバルトが笑みを消す。

―アス・ウィアンに向った北方二軍 を抑えて戴きたい。 無駄な犠牲は 避け

るべきかと」

北方二軍ではバインドを止め られない、 と 明 確に告げている。 侮辱とも取ら

れかねない、そんな発言だ。

レオアリスの邪魔をするなって?」

「そうお取り戴いて結構です」

口 ツ トバル トの 口元に浮かんだ穏やかとさえ言える笑みに、 アスタロ トも笑

う。

相変わらず言うなぁ。 ま、 お 前のとこの総将 こからも言われてる事だ。 いいさ、

そう指示しよう」

口 ツト バ ル トは胸 に左 腕 をあ て敬 礼を施すと、 踵 を返 して扉 に向っ

アス タ 口  $\vdash$ は じ っ つ とその様子を見守り、 充分離, れ た所で、 は あ あ、 と息を吐

き肩の力を抜いた。

「うわ、フツーに払ってるっ怖っ」

「……アスタロト様は、あの方はやっぱり苦手なんですね」

アーシアが可笑しそうに笑みを浮 かべると、 アスタロ トは白 *\* \ · 頬 に 少し 憤慨

した色を刷いた。

「苦手なわけじゃ ないぞ。けどさぁ、 一言ったら十返してくるし、 何言ったっ

あいつに比べたらタウゼングランスレ

イ

の方が数

十倍可愛いよな?」

て表情も変えやがらないし、

「さ、さあ……」

立場上も含めて頷くのは難しい。 ただ、ふい、と横を向くアスタロトを見て、

, ーシアは更に可笑しそうにくすくすと笑い声を洩らした。

「どうやらアスタ 口 ト様に忠告を聞いて戴くには、 ああ L た所作を身に付けた

方が良さそうですね」

途端にアスタロトはひどく動揺した顔で振り返った。

止めろよ、 アーシアの頭をぎゅうぎゅうと抱き込み、髪に頬をすり寄せる。 可愛くなーい。 お 前 は 番可愛い んだから、この ままで アーシアは 7 Į, 0 <u>!</u>

収めかけていた笑いを再び上らせた。

「……冗談ですよ。でも」

(やっぱり少し、羨ましいな)

アーシアとしては、 ああしてレオアリ スを補 佐できてい るロ ツト バ

ても出来ないからだ。

ましささえ覚える。

自

分の立場では、

アス

タロ

トを政治的

に補佐

しようと思

ルト

は羨

「でも何だよ」

「いえ」

アーシアはいつも通りの柔らかい口調で首を振った。

ばアスタロ 力や地位や財力など、 トは怒るのだろうが、 伴えば伴う程逆に アーシアは時折、 孤 独を産 立むも アスタロト 0) だ。 そん 0 中にそれを見 な 事を言え

る。 アス タ 口 トの奔放な態度は、そこに起因していると思ってい . る。

楽しそうな表情を浮かべ うに思う。 三年 一前に 結局 レ オアリスと出会った事で、アス は 離 れ 5 るアスタロトを見つける度、 れなくても、そこから見える景色は前 タロトは少 アーシアは穏やかな安堵 し 立 つ位置を変えたよ と違うだろう。

#### を覚えた。

アスタロ トはまだアーシアの頭を抱え込んだまま、 店の扉と北の空を見比べ

た。

ない所を選んで、自分一人の発言に留めるところなんてやっぱ考えてるよ。 「ふんだ。 まあでも、 あいつは有能で地位がある。今みたいにレ オアリスが

ずれいい補佐役にも後ろ盾にもなるだろう」

「……アスタロト様がなって差し上げてはいけないんですか」でれいい液体径にで後ろ所に至れる方法で

くとも軍内部で批判が上がる事はなくなるだろう。

後ろ盾に、という意味だ。アスタロトが明確にその立場を表明すれば、

だがアスタロトはあっさり首を振った。

とう言うと、アスヌュトのミニ話と立っこ。「ヤだよ。私は友人だもん。アイツに感謝なんかされたくない」

そう言うと、アスタロトもまた席を立った。

「さて、私達も行こう。バインドとやらを拝んでやる」

少な

ざわざわと喧騒に溢 れる街を抜ける。 自分に注がれる視線を少しも気にする

様子もなく、 ロットバ ル トは 人々の行き交う通りを歩く。

北方二軍は勇猛 アス・ウィアンに向った北方軍は、 で知られ、 率いているの アスタロ トの けて気性の荒い中将カシム 命で止まるだろうか?

は 輪

をか

だ。

口 ットバルトは銀翼 への飛竜 が飛び去った空へ視線を向けた。

止まらなくても 問 題 は ない。

ド を止め得る者は 必要なのはアス , \ タ な 口 7  $\vdash$ - の命が. のだという認識、 あったという事実と、レ その二つだ。 オアリス以外にバイン

そろそろ王城内の

無意味

な批判を封じ

る必要があった。

### (間に合うか?)

風を切り裂いて走る飛竜の背で、レオアリスは北の地を見透かすように視線

を凝らした。

バインドが現れてから、どれ程経つのか。

アス・ウィアン――そこに、バインドが居る。

全ての疑問の答えが、そこにあるはずだ。

自分の剣を止めた、剣士。

どくん、と身の裡の剣が鳴動した。

レオアリスは自分でも気付かないまま、口元に笑みを浮かべた。

第三音

\_\_\_

が、先 1 兵 5 展 達 軍 棚引く幾筋も 開 陣 街 アス・ウィアンの外壁を囲むように、 の 間 の内 議 0 L 日 を行 中 てい 0 部 ・央に張られた本陣では、先程から指揮官カシムや参謀官、 に 工 は、 た。 つ の様子は城壁に阻まれ、この場所からは見て取る事は出来ない。だ ザ て ムと同じような状況であろう事は、立ち昇る煙か 重装步 戦 7 の煙を視界に捉えながら、進攻の号令を今や遅しと待っている。 るが、 いに逸る気持ちとバインドに対する怒りが満 兵 まだ動く気配 を中心とした屈 は 強な兵 周囲 な V ) の草原に北方軍第二軍中隊千騎が 士達は、 アス・ウィアンの ちて 5 想像できた。 1 少将等が集 た。 街 か

敵を脅 ける。 人の 規則: かさんとするように、 兵 的 が に 逸る気持ちを表すように、 口门 かれるそれが、やがて輪のように広が 雷鳴のごとく響き始めた。 腰に帯 び た <u>剣</u> 0) り、 鞘 を叩 アス・ き、 ウィアンの 鎧 に打 ち付

――馬鹿な! 公は何を考えておられる!」

本 陣 の幕中で、 中将 カシ ム は憤 り のあまり、 手にしていた剣 を足元に叩 き付

けた。たった今、伝令がアスタロトの指示を運んできたのだ。

『レオアリスが着くまで、陣を展開させ、そこで待て』

「手を出すな、と……」

腕 の血管が浮き上がるほど両手を握り込む。 周囲からは兵士達の剣を打ち付

ける音が、幕内の会話を掻き消すように響いてくる。

バインドが 7目前 に居るのは 分かってい る。アス・ウィアンの警備兵を殺害

「あのガキに、譲れと…… ?」

その後は街

に入っ

たまま動

V)

てい

な

V )

足でそこに置 か れて *\*\ た衝立を蹴 り上げる。 衝立 は激しく音を立てて倒 れ

側近達はびくりと身を縮ませた。

ともとカシ A は 気 性 の 荒 い将だ。 先 日バインド によって焼 カン れ た エザムは

カシ ムの 管 轄でも あり、 名誉挽 口 [を期] Ĺ て功を焦る気持ち も強

インドをこの手で討てば、名を上げられる。

それを、

ただ待てだと?)

剣 士 一がどれ · 程 のものだというのだ。 自分とて剣にそれ な ŋ  $\mathcal{O}$ 自 負が ある。 更

に千もの重装歩兵を擁 して、 何の不足があると言うの か。

「ここは、公の仰るとおり、 様子を見るしか」

恐る恐る、北方二軍の二等参謀官

ノ |

-マンは

シカシ

ムの

顔を見上げた。

その

弱

慎重策ばかり説き、 腰と映る態度をカシ ンムは憎 それもカシムの苛立ちに拍車を掛けていた。 々しげに睨む。 剣士と聞 いて以来、 この男はやけに

(老いぼれ . め

だが、 命令に反するか?

規則正しく、雷鳴は轟いてい . る。

(……いや、 倒 せ ば 7 **,** \ · 事だ。 命令に背 ζì たも何も関係ない。 あの方は、 所詮

あまり多くを気にされ め

カシムは、荒く息を吐くと、ノーマンに眼を向けた。

三方の門より討って入る」

包囲

を狭め、

かし・・・・・」

怒りに満ちた眼で、カシムはノーマンを睨み付けた。

「しかしだと! では貴様は、ここで間 抜け 面を晒 して笑い者になるか! 北

方二軍はたった一人の敵を囲むだけで、 手も足も出なかったと

- そ·····」

「さっさと行って全軍に伝えよ!」

「は――はっ」

慌てて伝令を呼ばわりながら駆け出していく後姿に舌打ちをし、 カシムは剣

を取り上げた。

り、 重い足音を立てながら進行していく。アス・ウィアンはすぐ背後に深 すぐに、全軍 門を持つのは北、東、南の三方だけだ。 が移動を始める。 外壁の三方の門に向かって、三隊 に分かれ い森 が迫 れて

その様を横目で眺めながら門を抜け、兵士達の列がひしめきながらアス・ウィ 門を守る警備 兵は、全てバインドによって切り裂かれ、 辺りに転 がっていた。

アンに入る。

折 ŋ 重 な 0 た 死 体。 それ は 何 か、 どこ カュ が 異 様 で、 兵 達  $\mathcal{O}$ 間 に 正 体  $\mathcal{O}$ 知 れ な

い不安が過ぎった。

て 煙 街 を上 並 4 はまるで大きな鉈でも振るった げ てい る。 狭 7 石 畳 0) そこか しこに かのように壁は 住 民 達  $\mathcal{O}$ 死 体 切 が り崩され、 転 が 0 7 焼 1 る。 け 落 街 ち

 $\mathcal{O}$ 中 に は 進 軍する兵列  $\mathcal{O}$ 他 に、 動く 影 は 見 あ たら な か 0 た。

兵 達 の怒りを急速に冷 ますような、 心 胆 を寒 カゝ 5 L め る Ł 0 が あ 0 た

ア

ス

ウィアンはそれほど大きい

街

で

は

な

だがそれでも、

その光景には

「……本当に、これを一人でやったってのか……?」

歩兵の一人が厚 (1 頬当ての奥で呟いた言葉は、 等しく兵達 の心 の中に浮 かん

だ疑問でもある。

音 を 極 力崩 石 畳 に れ た た 家 打ち鳴 々 らし を、 な 倒 が れ たら進 7 ١ ر んだ。 る 人々 視線 を見な の 先 いように前 には 先頭 に を向き、 騎 馬 を立てて進 兵列 は 重 7 足

中将カシムの姿が映る。

その堂 く傲慢なところが Þ たる姿は あ 兵 ŋ 達 は  $\mathcal{O}$ 心 するも を鼓 0 舞 0 し、 殊戦場 不安を打ち E お 消す いては、  $\mathcal{O}$ に十分な 力 シ ムは ものだ。 十二分に き

その将たる所以を示している。

んだ。 カシ その塔の上 ム は 兵列 の先頭に立ち、 一屋に、 隠そうともしない気配があった。 苛立ちを隠さない瞳で街の中央に聳える塔を睨

バインドは街の中央に聳える塔の屋根に座り、 軍が街中を三方から進んでく

る様を面白そうに眺めた。

動くか。愚かな奴等だ。損害を増やすだけだと、判断できる将もい

足下の街からは、 炎の起こす煙と肉の焼ける臭気が立ち昇ってくる。

低く笑った。

既に正規軍はバインドの足元の広場を埋め尽くそうとしてい る。

くつくつと、喉の奥に湧き上がるそれは、次第に狂気を孕んだ哄笑に変わる。

何がおかしい」

背 後 0 気 配 に 振 り 返る事もなく、 バ インドは笑い 続け Ź. カシ ムは バ インド

ヒ振り向かない事に痺れを切らして、剣を抜き放った。

が

ない

0

か?

貴様 がバイン ド か。 俺は正見 規北 方軍二 軍 中 将

誰でも 1

何だと?!

切り刻めるなら、 構わ んよ。 兵 は 何 |騎だ? 五百 か、 千かり 多い 方が

いなぁ」

ふざけ……」

紅い熱が、 幾筋も走った。

音を立てて砕ける。バインドは一切振り返らないまま、 再び笑い出した。

振り上げようとしたカシムの剣と、二人の間に伸びる煉瓦作りの塔の屋

時を止めたように立ち尽くしたカシムの身体に幾つもの 亀裂が生じ、ずるり、

と崩れた。

次の瞬間赤い炎に包まれ、 燃え上がる。

クックク……ハ! ハハハハハ! あ あ、 まらね え・・・・・」

喉を反らせて呟き― バインド  $\mathcal{O}$ 瞳 が 地上に落ちる。

手応えの無い分、 思う存分切り刻ませてくれよ」

根が、

ら炎に包まれた身体 地 上に落下したカシ  $\mathcal{O}$ 部 ム 品 0) がばらばらと降 破片を追って、 バインド りか か り、 0 足が 言葉を失っ 屋根 を蹴 た兵 る。 士 達 上 空か  $\mathcal{O}$ 真

ん中に降り立った。

広場を取 り 囲 んだ兵士達は、 何が起こってい . る の か全く理解 出 来 な まま、

バインドが歪んだ笑みを頬に刻んだ。

ゆっくりと立ち上がる男と、

燃える身体

の破片を見つめる。

兵達に剣を構 える暇も与えず、 左足を軸に円を描き、 バ インド . の

る。

バインドの 周 井 の兵士達が、 雪崩れるように外に向かって倒れた。 切断 され

た 面 から噴き出 す はずの 血は なく、 肉 の焼ける音と臭い が 辺りに 漂っつ た。

「....ひっ」

たった一刀が切り裂いた結果を目の当たりにして、 兵士達が一気に浮き足立

バインドは崩れた兵列に向かって地を蹴った。

もはや戦場とは呼べない。それは一方的な殺戮だった。

剣

が

閃す

焔を纏 0 た剣 が 翻る度に、 腕 が、 脚 が、 首が、 撥 ね上がる。 傷  $\square$ カン ら血 が流

れないが故に、それはどこか、ひどく作り物めいて見えた。

二つに割られた胴が燃え落ちる。身体を守る分厚い鎧など無いかのごとく、

まるで人形 の手足を落としてでもい るか のように、バインドは 無造作に剣を振

るう。 瞬く間に、 その場に切断された身体の Щ が築かれていく。

バインドが足を進めるごとに、 血を流、 す事  $\mathcal{O}$ な 7 死体が列をなす。

つの鎧も身に 纏わないにも関わらず、バインドは平原を行くがごとくにた

だ歩みを進める。

無防備とも思えるその背に、数人の兵が恐怖に震える腕を鼓舞し、一斉に剣

を突き立てた。

瞬、バインドの動きが止まる。逃げ惑っていた兵達が、息を飲んで佇んだ。

「やった・・・・・」

バインドがゆるやかに振り向くと同 時に、 突き立てた数 本 · の 剣 が 根 元から砕

けた。

喜びに見開 かれた兵士の眼が、一瞬の内に驚愕に取って代わった。

低 1 · 忍び 笑い が 耳を打ち、 歓声を上げようとしていた兵士達  $\mathcal{O}$ П カン ら、 ら、 恐怖

に追われるように悲鳴が上がる。

先程よりも散り散りに、 統率すらなく、兵士達は走り出した。

それを悠然と追 い、 既に戦う意志を失った兵達を、 バ インドは 動 きを止 める

事なく刻み続ける。

顔に浮かんだ、狂気のような笑み――。 その瞳が、ふと見開かれた。

喜色がそこに踊る。

兵の一人を切り裂く寸前で、剣が動きを止めた。

来たか――」

笑みが、深まる。

上空で、何かが陽光を銀の矢のように弾いた。

そこから叩きつけるような風と共に、 青白い光が尾を引いて地上に急降下す

る。

バインドの、真上――。

撥 ね上がった炎の剣が、 閃光となって撃ち込まれた青白い剣を受け止めた。

剣と剣とが 撃 ち合った |瞬 間 爆 発 L た か  $\mathcal{O}$ ように 穾 風 が 吹き上が 0

周 囲 に 残 へった兵 士 達 が 爆 風 に押 され て石 畳  $\mathcal{O}$ 上 一に倒 れ 込む。

顔を上 一げ、 突風  $\mathcal{O}$ 中 心 に視線を向 けた兵士達  $\mathcal{O}$ 顔 に、 漸く安堵と希望 一の光が

灯った。

「……ああ——」

呻くような歓声が、 残った兵士達の間 に々と広がっていく。 バ インドは合せ

た 剣 の向こうにレ オアリスの姿を捉え、 口元 の笑みを広げた。

「……待っていたぞ。 あ んまり遅くて、 食い尽くすところだった。」

剣を合せたまま、 レ オ アリ ス は 周 囲 に 視線を走らせた。転が った兵士達 0) 身

体と、 恐怖 |と憔! 悴  $\mathcal{O}$ 貼 り ر م 7 た 意 。 肉  $\mathcal{O}$ 焼け る、 吐き気を催すような臭気。

怒りが、黒い瞳に灯る。

――貴……様ア」

クク、楽しい光景だろう?」

弾くようにバ 1 ンドを睨み、 レ 才 ア IJ ス は 剣 に 乗 せた力を緩めた。

押さえを失ったバ インドの 剣 が 撥 ね 上 が る 0 に合せて、 青白 1 切っ先が紅

刀 身 0) 上 を 滑 る。 踏 み込 み、 手  $\mathcal{O}$ 中 で 剣 を反 空い た 左 脇 腹 を 斬 り 上げ

間 合 僅 1 カ · を 詰 に 切 め、 · つ 先 に掠り 左 カ ら剣を薙ぐ。 8) た感触だけ 迎え撃 を残 し、 すったバ バ インド 1 ンド が . О 後 剣 退する。 が大きく弾 そ れ か を追って れた。

でバ 瞬 イン 間 吅 き込ま ド が <u>T</u> 2 れ てい た 剣 た を 地 躱 面 が、 バ イン レ 才 ド ア IJ は Ź 地  $\mathcal{O}$ 面 剣 を 蹴  $\mathcal{O}$ 余波 0 て 距 を受けて大きく陥 離 を 取 0 た。 そ れま

イン K は そ れ を眺 め、 ゆらりと立ち上が った。

る。

\ <u>`</u> は、

恐

れ

7

離

れ

た

0

で

は

な

その瞳に

あ

る

0

紛

れ

ŧ

ない

喜びだ。

ず 7) ぶん長 7 間 この時 · を 待 って た んだ。 この 右 腕 を失ってか 5 十七

楽 L みで、 仕方 なか 0 た

頬を叩く バ インド 風 0) に 黒 身 から叩 1 髪を巻き上 きつけ うる剣気 げなが ら、 が、 ピ レ リビ 才 アリス リと大気を振 は 歩、 バ 動させる。 インドへ 自 分の 4

右 手に無造作 に · 提 げ た 剣 0 青 白 1 光が、 じ わ りと大きくなる。

出

た。

相 手 か 5 瞬たりとも視線 を動 か さず、 互 *\* \ 0 間 合いを計る。 二人の纏 った

剣 気 が *"* つかり合い、渦を巻いて周 囲 の石くれを砕い てい あ まりの・ 鬼気に、

周囲を囲む兵士達が後退った。

呼吸すら苦しいほどの静寂が落ちる。

バ イン K 0) 剣 が 僅 かに 動 いた瞬間、 Ş, とその瞳 がレオアリス

の後方に

向け

られた。

遥か彼方から、強烈な圧力の塊が近づいてくる。炎の気配だ。

「ち、アスタロトか――。さすがに二人相手はきついなぁ」

十七年も待ったのだ。 誰にも邪魔をされず、 ゆっくりと戦える方が *(* )

残念だが、仕切り直しだ。」

「ふざけるな!」

「謎掛けは解いたのか?」

嘲るように問 7 かけたバ インドの言葉に、 レオアリスは息を詰めた。バイン

ドが口元を歪める。

「その様子じゃまだだなぁ。 クク、 念入りに隠して、 随分と大仰な事だ」

「……戯言ばかり」

, ,

いうように、 苛立ったレ オアリスの言葉を皆まで聞 レ オアリス の左後方に居た兵士達めがけて、 かず、バインドは挨拶代わりだとでも 剣を討ちこんだ。

!

「そうだなぁ……一番相応しい思い出の地で、再び会おうか」 きれず、レオアリスは弾き飛ばされるように後方の兵士達の間 咄嗟に伸ばされたレオアリスの剣が、辛うじてその刃を弾く。 に倒れ込んだ。 剣の勢いを殺

「つ」

頭を振って立ち上がった時には、そこにバインドの姿は無かった。

苦い溜息を吐き、バインドの気配が完全にその場 から去ったのを確認して、

いオアリスは上空を振り仰いだ。

全てが解決すると、そう思ってここに来たものの、結局何も変わっていない。

(何も問い質す暇も無かった……)

せただけで、 そんな余裕など見当たらなかったと言った方が正 まだレオアリスにはバインドの力を計りきれていない。 しいだろう。 数合剣を合わ

オアリスは 自分の 剣に視線を落とした。

(これだけじゃ無理か)

空いている左手を、 鳩尾に当てる。もう一つの鼓動が、 微かに感じられる。

瞳を閉じ、 抑えるように息を吐いた。 右手の剣が掻き消える。

さっと陽が翳

り、

飛竜

の翼

 $\widehat{\mathcal{O}}$ 

羽ば

たきが大きく風を散らした。

視線を上げる

٢, 艶やかに磨き上げら れた濃紺 0 鱗をした飛竜が、 レ オアリス 達 の上空に浮

かんでいた。

空の飛竜に向 その背からアスタロトが飛び降りる。 か 0 て手を振 った。 軽やかな動作で地上に降り立つと、上

ありがとう、 アーシア」

飛竜 こ の 青 い瞳 が頷くように細められる。

アス タ 口 } は 辺りを見 回 しながら、 普段 は 無い 張 詰 8 た表情を浮かべてレ

オアリス の横に立った。

「これは予想以上だな。 お前が間に合って良かった」

「……これじゃあ 間に合ったとは言えない」

低くそう返し、 レ オアリスはまだ呆然と蹲ったままの兵士達に歩み寄った。

見覚えのある顔を見つけ、 その前 に 膝を付く。

は怯えた色が ある。

老齢に近

いその男は

確

か、

北方二軍

 $\mathcal{O}$ 

参謀官だったはずだ。

覗き込んだ目に

正規二軍は 勇猛 で知られる。 それが、これ程とは

動 け るか」

は、 はい

良かった。 カシム、だったか? 二軍 の将は。どこにいる?」

ふいにノー マン の眼  $\mathcal{O}$ 中の怯えが 大きくなった。 両 腕 が 何かに縋ろうとする

ように、 レオアリス 0 腕 を掴 む。

アスタロ トと顔を見交わ し、レ オアリスは ノーマンへ 視線を戻した。

ちゅ、 中将は…… あ、 あの男、 あっという間だった。 まるで、 紙でも 切る

みたいに、 あ んな」

オアリスの 腕に縋る手の指が、 軍服 の厚い生地を通して強く食い込む。 そ

の力から感じられる恐怖。

だが、背後に広がる悪夢じみた光景を見れば、それは無理もない事といえた。

「……ひどい有様だ。全滅を免れただけでも、 幸いと言うべきか」

ノーマンの 身体 の震えが一 層強くなり、 レオアリスの腕 に伝わ る。 オ アリ

スは戦場に向けていた視線を戻した。

聞き取るのがやっとの声だった。

あ、 あ  $\mathcal{O}$ 時 、 全滅 したのに 北 方辺境軍、 近衛 師 寸 第二大隊……

へきじゃなかった」

レオアリスの 瞳が険 しくなる。肩を掴み、虚ろに見開かれた瞳を覗き込んだ。

「どういう事だ」

あの男が……師団の。味方の軍を、全部」

突然、燻っていた柱が音を立てて崩れた。

虚ろな瞳 がさっと焦点を結 び、 呆然と座り込んでい たノー マンは跳 ねるよう

に立ち上がると、アスタロトに向かって敬礼した。

「ご、ご無礼を! ご報告いたします、 我が隊は正午丁度を以ってアス・ウィ

手を出す

アンの三方 0 門よ り入り、 街  $\mathcal{O}$ 中 央の 塔 し で 目 標を包 囲、 L か

「……私は、手を出すなと伝えたはずだったんだがな」

アスタロトが声を落とす。

「も、申し訳ございません!」

まあ \ \ \ \ \ カシ ム が死んだ以上、 責を問う奴もい ない。

だと判った。

ふいに遠くが騒

がしくなる。

南の空に

靡

がた

軍旗

に、

近

衛

師

寸

が到

着したの

それより」

ヴィルトールは 飛竜 の背から飛び降りると、 先 程 ロのアス・ タロ トと同 様、 周 进

の光景に信じられないといった表情を浮かべ、 レオアリス達 の方へと歩み 寄 0

た。

足を打ち鳴らすように姿勢を正すと、 左腕 を胸 に当てる。 後ろで纏めた長い

灰銀色の髪が揺れた。

御前に、上将。右軍全騎揃っております」

もう一度、ヴィル 1 ル は 厳 しく眉を寄せ たま、 ま 周 囲を見回した。

が……どうやら援軍よりも救護班が必要のようですね」

まずは生存者を探して手当てを。……死者は、どうする?」

後の言葉はアスタロトに向けたものだ。

多すぎるな……。 後から一隊を寄越そう。生きてる奴から頼む」

いく。

ヴィル

ト |

ル

は頷くと広場にいた近衛師団少将を呼び、

手短に指

示

を出

して

レオアリスは目の前の将校に瞳を向けた。その上には先程までの取り乱 した

怯えの色よりも、 軍 の失態とアスタロトによる叱責を恐れる、 ある意味正

感情しか見出せない。

オアリスの視線に気付き、ノーマンは何かを恐れるように視線を逸らした。

(――同じか)

グランスレイ、総将アヴァロン、それから軍 議 の間で感じたあの空気と。

おそらくもう問い糺しても口を開くま 

兵に肩を支えられながら退出するノー

マンの後姿を、

レオアリスは

黙ったまま見送り、拳を握り締めた。

近衛師

寸

常な

『全滅した――北方辺境軍、近衛師団第二大隊』

『味方の軍を……』

アスタロトはその横顔を暫く見つめていたが、どこか怒ったような表情を浮

かべ、視線を街に逸らす。

肉の焦げる重い匂いが、吹き抜ける風に散らされる事を拒むように、いつま

でも漂っていた。

アス・ウィアンから戻ったその足で、 アスタロトは王宮内の一角、 内政宮

と 向 かった。 内 政宮は王城の北面三階層までを占め、 三階層 0 最奥に内政官房

長官室がある。

「これは、アスタロト公」

長官室の扉をくぐると、すぐ脇に据えられ てい た机の奥で内

. 務秘書·

官が

顔を

上げ、アスタロトを認めて素早く立ち上がる。

「本日はいかがされました」

「うん。ベールはいる?」

「ありがとう」

執務室に

おいでです」

アスタ 口 トが ١ ر きなりやって来る事などい つも の 事 で、 内務 秘 書官 は特 に用

向きを確認する事もなくそのまま見送った。

長官の執務室は広い室内の奥に位置する。 秘書官達の机や個室が並ぶ室内を

通り 抜 がけなが ら、 アスタロ  $\vdash$ は長官室  $\mathcal{O}$ 手 前  $\mathcal{O}$ ひと部屋 が 空室室 表示、 なの を 認め

た。

(---ロットバルトの親父がいないな)

口 ツ } バ ル  $\vdash$ 0) 父、 ヴ エ ル ナ ] 卿 は内 務 内 政 官房 0) 次官、 つま ŋ は

長官たるベールの補佐を努める。

その事が何となく気に カ かったものの、 特に足を止める事無くべ

| | |ル

の執務

官房

室前まで来ると、 アスタロ トはおとない も告げずに扉を開けた。

「入るぞ」

「入った後に言う言葉じゃあないな」

広い黒檀  $\mathcal{O}$ 机 の向うで、 内政官房長官べ ] ル は 知 性を湛えた 静 カゝ な瞳、 を上げ

た。 目を 通 して 1 た書類を脇 に 押し遣り、 ず か ず か .と執 務 机 0 前 ま で 、歩み. 寄る

アスタロ トに身体を向 ける。 どこか怒ったようなアスタロ トの 表情に、ベール

は僅かに眉を上げた。

「今日は何の用だ?」

机 の前まで来て立ち止まるかと思えば、アスタロ トは部 屋の中をぐるぐると

歩き出

して扉を出た。 ールが扉の 脇 が閉 に机を置い まるのを視界の隅 ている長官随行官へ顔を向けると、 に移しなが アスタロ トは 秘書 官 は 黙礼 みを

5

腕 組

て尚も歩く。

屝

アス・ウィアンの あ 0 光景。 エザ ムは 見てい ない。 だか ら正 直、 漠然とした

感覚でいた。

だが、 あれほどまでに踏みにじら ħ た街 は、 アスタロ 1 の心 にも、 少な から

ぬ怒りを生んで 1 る。

オアリス 0) 疑問、バインドについて何かを伏せるような軍内の様子、 それ

ŧ あ ったが 何よ いりさほ . ど 関 心を示 して V なかった自分に対する憤りだ。

北 :方辺境| 軍 。 の 全 滅

知らなかったって?)

インドについ て、 知ってる か

アスタ 口  $\vdash$ 0 単 力直 入な質問以上に、 べ ] ル の 回 答は簡潔だった。

知っている」

最 初 は何だかんだと躱されるだろうと予測 していたため、 アス タロ  $\vdash$ は 思わ

ず立ち止まってべ ールを見つめた。 力づくでも聞き出してやろうと気合いを入

れてきたのが馬鹿らし い程だ。

「……今回 0 件 U やないぞ」

驚く事か。 北 方 は私の管轄だ。 それでお前も来たんだろう」

「だって、……秘密なんだろ」

アスタロトが 睨 むとベールは再び

「そうだ。だが お 前のは不勉強というやつだな。正規軍 あっさりと頷 V) た。 を統帥する将として当

然知っているべき話だろう」

一つ笑うとべ ] ルは立ち上が り、 ア スタロ トに長椅子を勧めて、 自分も 向

に腰を降ろす。

解ってるよっ」

乱暴に腰掛けると、 弾 力性  $\mathcal{O}$ あ る厚 *\* \ 綿  $\mathcal{O}$ せ いで 長い 黒髪が 跳 ね た。

だ。誰も教えなかったからと言うのは甘えだろう。『アスタロ ルの言うとおり、 本来自: 分の立場なら知っていなけ ń ば ト』として正 お カン L \ \ 位 規軍  $\mathcal{O}$ 話

 $\mathcal{O}$ 将  $\mathcal{O}$ 座 に 着 1 た 時、 過 去 を 紐 解 < 0 は アス タ 口 1  $\mathcal{O}$ 義 務 だ 0 た 0) だ。

縛 5 ħ たくな 7 とい う 崽 1 か ら、 自 分 は未だに 色 々 な ŧ  $\mathcal{O}$ に 眼を 瞑 0 て **,** \ る

のかもしれない。

ベ ] ル は 怒ったようなアス タ 口 トの 顔 を眺 め、 意外そうな表情 を見 せ

「なにやら反省をしているようだな。 まあそう腐るな、 これに つい 7 は 何 もお

前 の所為だけでもない。 誰 ŧ が П に出 すのを憚る事だったのだ か ~ら 」

知らせないことにそんなに価値があるのか?」

憚る、

か。

憚

ってば

か

り

į,

5

や、

物

事ずっと事

態が悪くなる事

だっ

7

あ

オアリスのあ Ó 表情。 苛立ちと、 おそらくは不安。 周 囲 が あ ħ では、

てそれを感じるだろう。

(……私だって変わんないじゃないか)

アスタロトは苛立ちをぶつけるようにベールの顔を睨んだ。

「お前が知ってること、みんな話せ」

オ ベ アリスに伝えるつも 1 ル は 目 0) 前 0) 紅 7 りな 瞳 を覗き込んだ。 のはその瞳 の色か ア ス ら分か タ 口 1 る。 が 自 べ 分 ] か ル 5 聞 はどこか 1 た話 複雑 を、

誰だっ

な色 一の交じ つった笑 ハみを浮 かべた。

聞 けば、 お 前 は 迷うだろう。それでも聞くか?」

聞いたところでお前はそれを飲み込めるのかと、そんな問

い掛けに聞こえる。

だがアスタ 口 トは 少し  $\mathcal{O}$ 逡巡 しも見 せ ずに、 挑むようにベー ルを見上げる。

迷うかどうかな んて 聞 か な ļ`\ と判んないだろ。 教えろ」

らせた。

自分を睨

み据えるアスタロ

1

. の

顔

を見つめながら、ベールは束の間思考を巡

王は既に、 半ばその 命を解い ている。ベールは 一つ頷い た。

「よろしい。 それ もお前 の責務の一つでもあるだろう。 ――では、 何から 聞き

たい?」

長椅子の上で足を組 み、 正 面 か 5 瞳を覗き込んでくるベール 0) 前 で、 そ  $\mathcal{O}$ 声

響きにアスタ 口 トはこの 時 にな って僅 上かに躊 躇った。 自らに決意を促すよう

に 小さく息を吸 V 込 む。

「……十七年前 何が あ 0 た 0 か。 それと、 バインドが 何者な  $\mathcal{O}$ かだ」

口 ツ } バ ル トは 明 る 7 · 日差 しが降り注 ぐ、 幾 重 に しも折れ 曲 が 0 た 硝 子張 りの

口 廊 を歩 き、 そ  $\mathcal{O}$ 最 奥に あ る 豪奢 な 屝  $\mathcal{O}$ 前 で 足 を 止  $\Diamond$ た。

広大な敷 地 内 に 設け 5 れ たこの 離 れ は、 邸 内  $\mathcal{O}$ 者 しも用い が な 1 限 ŋ 訪 れ る 事 は

ない。 回 廊 と離 れ を包 む 庭園 ŧ, 午後  $\mathcal{O}$ 白 V) 光 (T) 中 に . V っそりと静ま ŋ 返 0 7

1 る。

名乗ると、 中 カゝ ら低 į, 声 が応えた。

溜息を一つ吐 き出 し、精緻な彫刻の施された取っ 手を回して扉を押し

広 1 室内、 に ŧ, 口 廊と同じく白 1 陽 光が 満ちてい る。 その中な を、 正 面  $\mathcal{O}$ 机  $\mathcal{O}$ 奥

に 座 る男 0) 方 ^ 足 を進め る。

る大貴族。 たま 厳  $\Diamond$ ま、 1 壮 が は 年 0 机 L 0) 男だ。 越 りとし しに その た身 十ある侯爵家 体 少 を幾 前で立 重 ŧ  $\mathcal{O}$ ち 筆  $\mathcal{O}$ 頭 止 長 ま に 衣 位置 に 0 包 み、 兀 泰 然然と バ 大公に継ぐ地位 ル しして · を 眺 椅 子 た。 に を誇 腰 カン

口 ツ } バ ル トは 男に 礼すると、 その 顔を見返 す。 け

男

L

た

口

ツ

1

1

8

開

けた。

と言って 中にあるはずの この 場 Ŕ に全く見 俄 カン 暖 に 知 は 5 かさはまるで感じられな 信 め じが 第三者が たいだろう。 いたとして、 姿形で \ <u>`</u> 彼等 は が なくその 血  $\mathcal{O}$ 繋 上 が 辺 り  $\mathcal{O}$ か 5 あ は、 る親 家族 子 だ

「珍しいですね、貴方がわざわざ私をお呼びになるなど」

…元気そうだな。 兵舎などに入らず、 この 館 か ら通えばよ V) ŧ  $\mathcal{O}$ を。 ヴ

工

ルナー家の子息が何を好き好んでそのような場所におるのか」

変わらな え思えるほど、 り合う様子は 会う度に 聞 な かさ それ \ \ \ れ は決まりきった会話だ。 もう既にそれを言う事を信 る言葉に、 口 ツ トバ ル  $\vdash$ 口 は ット 条 僅 に か に笑 バ L ル てい  $\vdash$ 4 るの を浮 の答えもまた、 では か べ ただけ な 7 カ 常に とさ で取

が、 めろというお話 何のご用です。 今はこうし てい であ 私も既に役を頂い る時 れ ば 間 これで退出させて頂きますが。 も惜 L V) てい る身 な のでね。 *(* ) 既にご存じでし つものように軍 よう · を辞

だからこそ呼んだのだ。 それだけ言うとあっさりと踵 事態 が を返 . 好 ま L カゝ しくな け た息子に、 い方向へ向えば、 侯 爵 は苦 V 第一大隊 声 を 向 0 け <u>\f</u> た。 一場

は 微妙 なものになろう。 わしとしてはその時、 そこにお前を置きたくないとい

うのが 本音だ」

そこには普段の挨拶のような会話とは違う響きがある。 ロットバルトは 再び

身体を戻し、 侯爵 の表情の奥にあるものを見透かそうとするように、 向け た眼

を細めた。

「……あなた方は、一体、何をご存知なのです? バインドと彼について、何

を隠そうとしているんです。それが判らない以上、何を仰られても無意味でしょ

う

-お前:

達は若く年も近い。

同調するのも判るが、

全体を眺めた時、

何が一

番良 選択 かを見 極め る事が必要だ」

1

その全体を眺める事が、現在出来る状態に無い、と申し上げているのですよ。

問題にならないというように、ロットバルトは一度顔を背けた。

中途半端 に . 隠す  $\mathcal{O}$ は お 止 めなさい。 判断をしろと仰るのであれば、それ相 応の

材料を提示 してい ただきたい」

提示すれば、わしの言葉を呑むか?」

伺 つ た後で判 断 します」

に視線を注いでいたが、 侯爵 は暫らく無言のまま、 まるで変わ 指先でコツコツと机を鳴らしながらロ らない表情に、 苛立ちの交じった息を ツトバ ルト

た。

お前は、 今回の件について、 どこまで知っている?」

ドとは何者なのです」

「全く。ほとんどと言っていい程、

情報が伏せられている。

そもそも、バイン

侯爵はその名を疎むように、 灰色の眉をしかめ

あれは、 十七年前まで、 近衛 師 団第二大隊の中将だった男だ」

た。

十七 年前 に あ 0 たの は、 反乱だ」

瞳 の奥に、 ] ル が 捉えどころの ア ス タ 口 1  $\mathcal{O}$ ない微細な光が浮か 反応を見るように、 ゆ んでいる。 っくりと言葉を紡ぐ。 黒く深い

「北方の――、剣士の一族のな」

一瞬、周囲の音が途切れたように感じられた。

アスタロトは ベ ] ルの 言葉 の意味を図 りかねたように、 深紅 0 瞳 で目の前

 $\mathcal{O}$ 

顔を見つめた。

長い睫に縁取られた瞳が、大きく見開かれる。

ベールは皮肉な笑みを口元に刷き、頷いた。

「そうだ。反乱を起こしたのは、レオアリスの一族だった」

アスタロトの唇が喘ぐように数度動く。

――そ……え、だって、レオアリスは」

思わず立ち上が り か け、 アス タ 口  $\vdash$ は 再 び 腰を落とし た。 言うべき言葉 たを見

失って口を閉ざし、ほっそりとした手を額に当てる。

喉 の奥が詰まる。 肺が 酸素を取り込む のを止めてしまったように思える。

「それ はもう少し後で触れ よう。—— そ  $\mathcal{O}$ 反 乱 を収 める 為に 向 け 5 れ た 軍  $\mathcal{O}$ 中

に、 び近衛師 バ インド 団第二大隊、合わせて二千余名、その半数以 がい た。 近衛師団第二大隊左軍中 将。 人上を切 戦場 12 り裂 あ 0 た北 7) た 0 方 もまた、 辺 境 軍及

広い室内は午後の白 *\*\ 陽射 しの中に沈んでい る。 降り注ぐ陽射しは、 それを

び上がらせる。

そこに作り出される光と影。

受ける者の影をくっきりと浮か

この場で侯爵 0) П から語られる言葉は、 その 影をより一層際立たせようとす

るかのようだ。

剣士 は稀な存 在 だが、 戦 闘 能 力 は 群を抜い 7 V > る。 それが、 何故 軍 にレ オア

リスの他に存在しないか、お前は解るか?」

それは先

日 、

口

 $\vdash$ が黙ったまま否定  $\bigcirc$ 意を 表 すのを見て、 侯 爵 は言葉を継 γ<u>)</u> だ。

ットバルトやクライフが感じた疑問でもあった。

口

ツト

バル

 $\mathcal{O}$ 「そぐわな 協調を守る事に *(* ) のだ。 向 かな 剣 士 は戦う事そのも 時に生よりも、 0 が 戦う事を好む。 存 在理 电 本能だ。 軍規 -そしてバイン や隊・ 内で

ドは、その本能が最も顕著な男だった」

侯爵はロ ツトバ ル **|** の顔から、白い光に溶ける窓へと視線を移した。

バインドは バインドが近衛師 周 囲 に 示快 寸 な感情を抱かせるように思えた。 に 1所属 していた折、数度見かけるだけだったにも拘らず、

特に言動が荒い訳ではない。

だが ――そう、まるで周囲の者を、 物として捉えているような眼。

単なる切り裂く対象として。

L か Ļ それでもあの頃のバ インドは、 かろうじてその本能を抑え込み、

の中に自分を抑え込んでいた。

あの時までは。

ベ ルル は アスタロ  $\vdash$ 0) 顔に視線を注いだまま、 つ一つの言葉を繋ぎ合わせ

るように紡いでいく。

軍

結果 る者 反乱を抑える為 同 は先程 じ剣士と戦う事 は , \ な も言 か った」  $\mathcal{O}$ ったとおり。 軍 は、 は、途中からバインドを抑える為のものに変わった。だが、 確実にバインドの中 二千余名の内、誰一人、北方の辺境から生きて戻  $\mathcal{O}$ 何か を呼び覚ましたのだろう。

淡々と言葉を紡ぐ。 黙り込み、 俯 いたままのアスタロ トを前に、 べ ] ル は非 情とも取 れる響きで

11 「その名は禁忌だ。 て剣士もまた禁忌となった」 誰 もが 口を噤 む、 忌むべき名なのさ。 そして以来、 軍 下にお

――戦いは、唐突に終わった」

たのだ。剣士の一族の、 それ インド は近近 は 衛 忽然と消え、 師 寸 が 北 方の 最後の一人だ」 炎 辺 境に  $\mathcal{O}$ 上が 到 'る 剣 達して、 士の 族 日 も 0 里、 経たな そこに一 1 内  $\mathcal{O}$ 人の 事 だ 赤子 0 た。 が V

侯爵 は 蒼 *\* \ 眼 に \* 1 色を 灯 して、 目  $\mathcal{O}$ 前 に 立 つ 口 ツ 1 バ ル  $\vdash$ に 向 け る。 降 Ŋ

注ぐ ·陽射 L が ま るで 温 度の ないも  $\mathcal{O}$ に 感じら れる。

も う 一 度言おう。 バインド が 再 び 現れた今、 わしはこれまで以 上に、 お 前 が

剣 は 王 に 向 けら れるやも L れ  $\lambda$  $\mathcal{O}$ だ

近

衛

師

寸

に

ある事を望まな

\ <u>`</u>

今は

何

ŧ

知らずとも、

١ ي

ずず

'n

過

去

を

知

れ

ば

そ

 $\mathcal{O}$ 侯爵は言葉を切ると、 トが ?頷くの を待った。 途中か

口

ツト

バ

ル

%ら 一

言も口を

挟 まずに話を聞 **(**) ていた。

おそらく、 自 分の意思を理解するだろうと。

だが、 意に反 L てロ ット バ ル トは苦笑を浮かべた。

あなた方は、 少し 観 察 が 足 り な *\* \ ようだ」

何を」

王に剣を向 ける? 間 違っても、 それは起こり得な \ \ \

レ 才 ア IJ ス  $\mathcal{O}$ 中 に 見え る王 0 忠 誠  $\mathcal{O}$ 念 は 自 分達  $\mathcal{O}$ そ れ لح は 少 な か 5 ず次

元を異にする。 そ れ が 何 . の 故 で あ る  $\mathcal{O}$ カコ 口 ツ  $\vdash$ バ ル  $\vdash$ が 明 確 に · 把 握 L 7 7 る

訳ではない。

だが レ オアリ ス  $\mathcal{O}$ 持 つ 感 情 は 地 位 や立 場 カゝ 5 出 た ŧ のではなく、 それ を 知 0

7 V) るからこそロ ツト バ ルト 1. 1. は、 ま た 周 囲  $\mathcal{O}$ 者 達 に は 誰 L ŧ, V 才 アリ ス が

王 に 離反する事は 有り得ないと言うだけ O根 拠 に なる。

口 ツ 1 バ ル  $\vdash$ は 侯 爵 0) 顔 を眺 め、 全 く 別  $\mathcal{O}$ 事 を П にし た。

午前中に、 ヴ イ ル  $\vdash$ ] ル 中 将を喚問さ れま L たね

不機嫌そうな眼

を

口

ツト

バル

トに向

けた。

侯爵は黙ったまま、

「それで、 ミストラの 件に関する中 将  $\mathcal{O}$ 証 言に、 貴方が 確 信 [を得 5 れ るよう

な内容はあ りま L たか」

「……私が

直

接

聞

いた訳ではないが、

疑念が深まるものではあった」

王に対し ての 翻 意が あると?」

問題はそこだ。 もし今、僅かなりとも 周 囲 が それ を認い  $\Diamond$ れ ば、 レ オ アリス は

王 都を追われる事になるだろう。

だが、 自 分をこうして呼ぶ事し か 7 1 ない 以上、 可能 性  $\mathcal{O}$ 範 囲 「を 出 7 7 な

1 のだ。

疑念をどう解消すべきか 口 ツ トバ ルトは思考を巡らせる。

今の時点では 無 *\* \ だろう。 だが、 知 0 た後ではどうなる か は 判ら ん

だからこそ、 事実を伏せ、 十七年を経た今でさえ疑念を棄 て 切 れな 1 で ١ ر る

「では現時点では、 まだ懸念の 範 进 を出 てい ないと言う事ですね。」

ルトはあくまで穏やかな口

調を崩さないままだ。

のだ。だがロットバ

敢えて念を押すように、 侯爵 の瞳を覗き込んだ。

確信に変わ ってからでは遅い ・のだ。 可能性が無いとお前に言えるの か?

に 至 った経 緯 が 明 確 に なってい ません。そこに関 L ては 調 査 は 0 **,** , てい る 0) で

すか」

勿論

可

能

性

は

無

で

は

な

7

でし

よう。

ただ、

今お聞

きし

た限

りでは、

まだ

反乱

詳細 は不 明 だ。 何  $\mathcal{O}$ 前 触 れ もなく、 不意に始 ま 0 たも  $\mathcal{O}$ だ 0 た か らな。 才

アリス  $\mathcal{O}$ 育 0 た村 0 者 が 何 か L ら知 って ( ) る可 能 性 は 高 1 が 調 査 上 一は取 り 立

てた結果は 出 てい な \ \_ \_

「……成る 程

微かに笑みを零し た 口 ツトバ ル } . の 顔 を、 侯爵 は 不審そうに眺めた。

尚 更、 あなた方は調査 不足ですよ

あ 0 村で育った事それこそが、 レオアリスの中に生まれるべき負の を消

ているとも言える。

ただ、内務の調査官にそこまで感覚的な調査を行えというのも無理な話だ。

しかしその余地が ある分、 ロットバ ルトは彼等と別の角度から捉える事ができ

る。

「もう一度、 私からは、 彼が王に離反する事はないと、そう進言させて戴きま

しょう」

揺るぎなく言い切ってみせる。

御前失礼。これ以上軍を空けると職務怠慢で副将に叱責されますので」

優雅に一礼し、 口 ツ トバルトは踵 を返 した。

口 ットバルト。 今の近衛師 団は お 前がい る場所ではない。 ……ヴェルナー家

は、 お前が」

今度はロットバルトは立ち止まりもせず、 振り向く事もしなかった。

貴方とその 議 論 をしても仕方のない事だ」

従うつもりはない、と言外に言い置いたまま、ロットバルトは扉を閉ざした。

回 廊 を玄関へと向いながら、 先 程 の話 を反芻する。

その内 容にまるで衝撃を受けなか つた 訳では、 な

だが、

レ

オアリスの

族が反逆者であ

った事にでは

な

\ \ \

それ

は

口

ツ

トバ

ル

トにとって、さほどの意味を持たない、 過去の事だ。

隠そうと思ってそう簡単 その事よりも、これほどの事実が今まで隠されていた事に驚きを覚えたのだ。 に出来るものではない。 そしてまた、 その経 温緯が あり

ながら現在レオアリスが 軍にある事も。

それを成し得る者は、 王しか 有り得ない。

(やはり王 か。 しかし、 どう取っ るべきなんだ?)

その真意がどこにあるのか、 それ ば か りは 口 ツトバ ルト などの 計 り 知 れ ない

事だ。そこを詮索するには、 まだ情 報 が 少なすぎる。

起こし、 父である侯爵 更に言えば が懸念し 万 が てい 王に るの · 剣 を向い は け レ た時、 オアリ ノスが 口 ツ } バ イン バ ル ドと同  $\vdash$ が 第 じ 大 事 隊 態 にこ を 在籍 引き

ていることは、 ヴェル ナー家にとって都合が悪い ものだからだ。

が自分に向 けれども け *\* \ たからには、 かにそうした懸念が 事 態  $\mathcal{O}$ 方 あるとは 向 は いえ、 王の意 それ 向 は ほどに伏 変わ 0 L た事 たと見て 実を 公爵

(……だからと言って、 事態が 好転 してい る訳でも な 7 な。 情 報 Ł 面 的 すぎ

<u>る</u>

のだろう。

そう思ったところで裏側を覗き込む術はない。 ロットバルトはそれを切り上

げて、もう一つの懸念に思考を移した。

あったグランスレイが知らない訳は バインドが近衛 師団 12 在籍 していたのであれば、 ない。 クライフとフレ 当時既に第一大隊 イザーはそれ以 の中

近衛師 団 へ配属されてい る。もう一人、ヴィルトー ル。

演習場でのヴィルトールの反応を思い出

し、

口

ットバ

ル

トは

溜

息

を吐

7 た。 軍に剣 士 が 存在 しない事に対するクライフの疑問 を、 **,** \ つになく曖 味に

躱していた。

先 日

0

——だが、もうそろそろ、限界だろう)

無理に抑え込めば、その反動は大きい。

将で

降に

と話をする必要が 告げた場合の 侯爵へ告げ た言: 話 でもある。 葉 あった。 は 口 ツ その  $\vdash$ . バ 為 ル に 1 は、  $\mathcal{O}$ 真 意では レ 才 アリス あ るが、 が 戻る前 最 善 に、 のやり方で事 グランス レ 実を

知らず、 口 ツ 1 バ ル トはご 近 衛 師 寸 1士官: 棟 向 かう足を早めた。

ベ ールは言葉を切り、 暫らくの間黙って、 俯 ζ) たアスタロ トの 上に視線 を注

いでいたが、やがてゆっくりと口を開いた。

者は誰、 む事を恐れたからだ。そして、レオアリスがその裡に もが あ  $\mathcal{O}$ 時 危惧を抱いた。バインド以来、 の赤子が成長し、 剣士として王 軍 都 に 剣 に 現 士 は 復讐を抱え れ た 1 ない。 時 、 当 再び 時 ていな  $\mathcal{O}$ 同 戦 いとは じ 場 轍 を 見た を踏

師団に配した」

誰に

も言えまい。

だが、多くの

危惧

な余所

に王

はレ

オアリスを迎え、

近衛

---レオアリスは、何も知らない」

アスタロ }  $\mathcal{O}$ 声 はどこか怒っ たように響く。 それに対して、 優しささえ感じ

られる声でベールは頷いた。

う。 「そうだな。 その あれを育てた村の者達は、レオアリスに何も告げなかったのだろ 後は お 前 もよく知っているとお ŋ 周 囲  $\mathcal{O}$ 危 惧 は ただ  $\mathcal{O}$ 懸念 に終

わった。当時を知る者が見ても、 「当然だ。 レオアリスは王が好きだもん。 あれの中に復讐 見てて笑えるぐらい。まるで、  $\mathcal{O}$ 心を見る事 はできん」 親を

慕うみたいにさ」

アスタロトらしい言 い方にベールは微かに苦笑を滲ませたが、 頷い た。

「私も知っている」

肺に溜 アス め込 タ ロ んだ凝った息を吐き出した。そうしてみても、 トはどうしてい ۲, か良くわからずに、 長椅子の 背凭 喉や胸に圧 れ に 頭 を預 L 掛 かっ け、

た重いつかえは取れない。

―どう言えば 1 いんだ。 私は判ったら教えてやるって、レオアリスに約束

したのに」

ールにこの喉に被さった重しを除いてくれと、そう望んだつもりではない。

けれどやはり、ベールはそれを取り除こうとはしなかった。 「全てを話すか、それとも伏すか。二つに一つだ。——だが、全てを知れば、

レオアリスはここを離れるかもしれんな」

V オアリスが アス・ウィアンから戻ったのは、 陽 が翳 り始めた頃だった。

誰 t 1 な 1 執 務室 を横切ると、 上 着を椅子 O背に 投げ 出 Ļ 背をご 軋 ま せて座

を額に当てた。

る。

身 体

 $\mathcal{O}$ 

裡に

重

7

・疲労が、

わだかまって

1

る。

椅子

の手摺に

肘

を置い

き、

その

手

あの兵士の言葉が、 意識 の上に点り続 がけてい る。

 $\mathcal{O}$ 

アス・ウィアン

0)

街を眺

 $\emptyset$ 

て

7

た。

漂う血と肉の

匂

V

、 は 吐

き気すら催させるも

負傷者を収容

L

終

わ

0

た右

軍を先に帰還させ、

レ

オアリ

スは暫らく半壊

した

だったが、 それ すら意識をし て は 7 な か った。

感じてい たの は、 苛立ちだ。

目の前 の状況 へ の。 それから

北 方辺境 軍と近 衛師 寸 第二大隊  $\mathcal{O}$ 全滅

そんな事を、 グランス レ イが <sup>2</sup>知ら な *\* \ · 事 は 有 り得ない。

何で黙ってるんだ)

過去など、 逐 一 掘り返さずとも良 いものじ ج ° 掘り返 したところで、 後悔

か 生まぬも のもあ る <u></u>

そう言ったのはスランザールだったか。

する気になれず、レオアリスが答えないままでいると、 扉を二度、叩く音と共に、グランスレイの 声 が 入室の許可を求める。 一言断りを入れてグラ 返 事を

ンスレイは扉を開けた。

額に手を当てたまま動 かない レオアリスを見て、 眉を寄せる。 その 顔に浮か

んだレオアリスを気遣う色に、 偽りは見えない。

「上将? ご気分が優れないようですが……」

普段と変わった様子もなく歩み寄るグランスレイの上に、 尖った視線を投げ

る。

(聞くべきじゃないのか)

グランスレ イが黙ってい るのであれば、 それ 相 応  $\mathcal{O}$ 理 由 が あ る 。 が だ。

だが、そう思っているにも関わらず、レ オアリスは 厳 L 7 瞳を副将に向けた。

身 の裡に渦巻く疑問が口を衝く。

「……二隊の全滅とは、何だ」

グランスレ イが 表情を強ばらせ、 レ オアリスを見た。 その表情が、 レ オ アリ

スの中の苛立ちを一層募らせる。

「……バインド カゝ ら何 か をお 聞きになっ たの であれ ば、 そのような事

バインドじゃない」

\_

黙り込んだグランスレ 1 に苛立ちをぶ つけるように、 レ オアリスは

り机に両手を叩きつけた。

黙ってちゃ分からない ! お 前 はその時軍に居たはずだ! 知らない 訳がな

い !

珍しくレオアリスが声を荒げるのを聞き付け、 隣室に *(* ) た中将達 が 何 事 かと

執務室へ姿を見せる。 机に手を付 V) たま ま睨 み付け るレ オ アリス の前で、

ンスレイは一言も発さず姿勢を正した。

「……何故何も言わない。否定も肯定もしないのか」

「私の一存では、お答え致しかねます」

立ち

上が

レオアリスは 瞬深く息を吸い込み、 それ から何 かを飲み込むように顔を伏

せた。

「上将……」

「――もういい」

私は決して」

いいと言ってるんだ!」

激しい拒絶の言葉に、グランスレイは . 領 ば L かけ た手を止めた。

を伏せていたが、やがて静かに顔を上げた。

レオアリスは暫らくの間、机の上についた両

既にそこには先程までの激 高は ない。 けれど心の底を覗 かせない、 閉ざされ

たような印象がそこにはあった。

怒鳴って悪かったな。 ――少し、頭を冷やしてくる」

そう言うと、 顔を背けるようにグランスレ イの横を擦 り 抜ける。 執 務  $\mathcal{O}$ 扉

に視線を落としたものの、 を開けた拍子に、 戻ってきたロットバルトに肩がぶつかった。 ロットバ ル トは何も言わずに彼を通した。 レ オア リス 0) 顔

腕で身体を支えるようにして顔

屝 0 閉ざされる音が響き、 静まり返っ た室内を見 渡 てロ ツト . バ ル トが 息を

吐く。

(……どうにも、予想以上に早く展開しているな)

「……只今、戻りました」

グランスレイは 何かを測るように 口 ツトバルトの

顔を見つめた。

侯爵のご用件は済 んだのか」

「ええ。 二人とも暫らくの間、 お時間を戴きま お 互 したが、 <u>, , </u> の反応を探るように黙っていたが、 もう済みました」

耐え切れなくなったクライフが堰を切る。

何なんだ、全く。 副将、 何をやってんですか」

「……持ち場に戻れ」

に グランスレイが苦い響きを声に宿す。 歩詰、 め寄った。 今 回  $\mathcal{O}$ 件に 関して、 クライフは起こった事 その言葉に、クライフは苛立 実し か 光把握 ちも露わ して

1 な だが その背景に、 レ オアリスを中心とした何 か が ある のだ。

はあ? ……状況は分からねェけど、そうやって何かを煙に巻いてるから上

その沈黙に

将が怒るんじゃない です か。 7) 0 ŧ  $\mathcal{O}$ あ んたらしくもな 体

「クライフ。今はやめておけ」

ヴィルトー ル が クライフの肩を押さえ、 扉の方へ 向かわせる。 クライフはそ

の手を払ってヴィルトールを正面から睨み据えた。

「今言わねェでいつ言うんだ」

向き合った二人の間に、微かな緊張が生まれる。

やめましょう。我々が諍っても仕方ない」

フレイザーはそう言って二人の間に入ったものの、 やはり翡翠の

色はない。グランスレイに一度だけ視線を投げた。

貴男は、 もうご自分の中で消 化 したものだと思 ってまし たわ。 見 込 み違

いなら失礼」

に消える。 グランスレ クライ イが眉をしかめるのを確認する事なく、フレ フはま S だ 何 か言い たげに口を開きか けたが、 イザー 吐き出すように の姿が扉 の外

息をつき、踵を返した。

扉の閉まる冷えた音が響く。

瞳

に納

得の

見つめたままだ。 待っていたが、グランスレ 口 ツ  $\vdash$ バ ル トは暫らくその場に立ったまま、グランスレ ヴィルトー イは黙り込み、 ル も壁に背中 苦い -を 預 けた ŧ のを噛み締 にまま動 かな イが めるように  $\Box$ を 諦 開 めて自 正 <  $\mathcal{O}$ 面 席 を を

押さえてい たも  $\mathcal{O}$ が 吹き出 して、 寒 風 のように熱を奪 0 てい 0 たように思え

「……いつまでもこうしていても仕方ありませんね」

る。

に

に戻り、

脱

1

だ外套を椅子の

背

に掛

け

た。

グランスレイが視線を上げる。

侯爵は、どこまで話したのだ」

「どこまで? 知 つて V る限 りの 事 は 全てでし よう。 あ  $\mathcal{O}$ 方 0) 目的 は 私 に 翻意

を促す事ですから」

揶揄 す る П 調 にグランスレ イは 口 ツト バ ル 1 · を 睨 んだ。 翻意を選ぶ事を是と

「いうこう」である。しない、厳しい光がその瞳にある。

「お前は、どうするつもりだ」

その様子にロットバ ル トは思わず苦笑を漏らした。ここでロットバ ル トの 動

向 のだ。 を牽 制する位なら、 グランスレ イの気持ちも レ オアリスに 分から 誤 解 ないで を受けるような態 は な 事 実を自 度を 取 分 らな  $\mathcal{O}$ 中 け れ に 飲み ば 1

込 む事と、それ は 別 の話だ。 1

だが、 過去をご 封 じ 込  $\Diamond$ る時 は ŧ は や過ぎた。

てきてい 方がそうして黙っている事にだ。 「上将が今拘って る。 その中で得たものを言葉にするの ζÌ る のは、 隠されている事実に対してではな 貴方は、 上将 は、 が 王 そう難 一都に **,** \ らし L 1 た折 事 いでしょう。 ずでは か ら彼 な はず を見 貴

「……簡単に言ってくれる」

ですよ」

事 は 単 純 な  $\lambda$ ですよ。 私にとっては ね。 選ぶ か、 選ばない かだ。 貴方も

これ以 上 複 雑にする うる事 は ない

グラン ス レ 1 が まだ 何 も動こうとしないのを見て、ロットバ ルトは肩を竦め、

ヴ 1 ルト ル に 顔 を向 け た。

ヷ 1 ル 1 ル 中 将。 後 は お 願 1 L ま す

ヴィ ル  $\vdash$ ] ル は 壁に凭れたまま、 瞳だけを上げて呆れたように苦笑を浮かべ

る。

「結局、私は板挟みのまんまか」

「戻って来るまでに、場を収めておいてください」

「やれやれ」

ヴィルトールが了承の意味で片手を上げるのを見て、 口 ツトバ ルトは再び執

務室を出た。

度中庭を望む 口 廊 から辺りを見回 したが、 さすがに姿は見当たら ない。

「ロットバルト」

振り返ると、クライフとフレイザ ´ー が . 回 廊 の柱の間に立ち止まり、 クライフ

が 口 ットバルトを手招く。 口 ツトバ ルトは彼 らの方へ足を向けた。

「何が、どうなってんだ」

苛立ちを隠さない声にロットバルトは小さく笑った。

私 も最初 いからあ 0) 場 にいた訳ではない。 まあ大方の予想 は 付きますが、 何が

あったんです?」

オアリスがそれをいつ、どこまでどんな状況で知ったのか、 それを把握

たかったが、クライフもフレイザーも首を振った。

判らないわ。 ただ、 上将が `副将` を 問 **\**\ 糺すようだったけれど」

「言やぁいいんだ、何だって。今更隠して何になる。 どれ程大した理 由 カン は知

らねェけど、まどろっこしすぎるんだよ」

「そうですね え。 確かに、 簡単に 口にするには大き過ぎる話ではある。

る前に、副将と話をしておきたかったのですが」

ロットバルトの言葉に二人は顔を見合わせ、それ

から詰

め寄った。

こうな

何か知ってんのか!?」

聞かせなさい!」

説 明すべきでしょうが、 まず んは上将な を探したい。 もう少

「私が話すよ」

ヴィ ル  $\vdash$ i ル の 声 が割って入り、三人は執 務 室  $\mathcal{O}$ 入り口 に顔 を向けた。 ヴィ

ル 1 ル は クラ イフとフレ イザー を手招 き、 口 ツ 1 バ ル 1 は 行 け と促す。そ

んはその肩に手をかけた。

 $\mathcal{O}$ 

ま

ま

執

務

室に

入らずに回廊を歩きだしたヴィ

ル

}

1

ルの

後を追って、クライ

「どこにいくんだよ。中でいいだろ?」

消えるの <u>۲</u> まあ、 どこかのんびりしたヴィ 副将には、 フレイザーは気遣わ お前もちゃんと上将を見つけてくれよ。 を見送ってから、 すぐに答えを出されるさ。 邪魔の入らない所でじっくり考えてもらった方がいいだろう?」 しげな瞳を一瞬だけ執務室 ル 口 1 ツ トバ ル 元々持ってい ルトは改めて考え込むように口元に手  $\mathcal{O}$ П 調に苦笑で応え、三人の姿が 説得はお前が一番巧い る答えだ。さて、 の扉に向け、それから頷いた。 か 口 别 らね ットバル の扉へ を当

そらくは演習場 演習場。 レオアリスが一人になる為に行く場所は、大体分かっている。裏庭か、 裏庭や書 0 庫 方だろう。 は大体、 呼びに来られる事を見越して行く場合が多い。 書庫、 お

てた。

だが、 口 ツ 1 バル トが行ってそれを告げる事が、 問題を解決するとは思えな

かった。

口 廊 開く気  $\mathcal{O}$ 出 配 口に足を向けた時、 0 な 1 屝 に -度視線を投げてから、 前方からやってくるアスタロ ともかくレ トの姿が見えた。 オアリスを探そうと

V オアリスの椅子の背に残された士官服の上衣を眺め、 これがなければ

肌寒いだろうと、グランスレイはそんな事を考えた。

初 8 て彼 が 近 衛 師 団に 配 属 された時、グランスレイは一 隊の左軍中将だった。

今とは逆の立場 に あり、 レ 才 アリスはまだ十五にも満たない年齢で、 今よりも

ずっと幼さを残していた。

剣士と聞 いて不安を覚えなかった訳ではな \ \ \ だが 王 が 決め

思慮があるのだろうと、そう納得していた。

最 初 12 配 属された小隊 には あまり長 < はい な か 0 たはずだ。 彼  $\mathcal{O}$ 能 力 が その

中では上手く機能しなかった為だ。

内に、 強 すぎる力は 当 時 揮 下 個  $\mathcal{O}$ より 少 将 で ŧ 隊 あ 0  $\mathcal{O}$ たフレ 連携を重んじる小隊に イザ が 相 談 を 、 は 向 上げてきた。 かず、 数日も経 王 か 5 預 たない か 0

た以上、 彼 をそ 0) まま に L てお、 く 訳 には 1 カ な 7 と考えたのだろう。

あまりに . 力 の 差 が あ りすぎます。 こ の ままでは、 剣士である事 が 強 調 言され、

た事、

何

カゝ

深

1

周 囲 から浮き上が るば かりです」

皆と同じ 剣を使うようにすればいい」

フレイザーは問 題にならないと言わんばかりに肩を竦めた。

無駄です Ŕ, すぐに折れてしまう。 負 荷に耐えら れな *(* ) のでしょう」

フレイザーは判断を仰ぐようにグランスレ

イを見つめたが、

黙り込んだ彼に

軍が

剣士を忌避してい

る理

由

は

詳

しくは

知 り

ませ

ん。

ですが、

それは過

去の

短く息を吐く。紅い髪に映える翠の瞳が苛立ちを隠さな 

話ですわ。 今をどうするか、 貴男は 決め て戴かなくては」

珍しい、随分と親身になるな」

「ご覧になって戴 がれば! 分かります」

·……どうしろと?」

バインドの記憶は未だに禍禍 しく残っている。 まして、 オアリス はその原

因ともなった一 族 *の*、 最 後  $\mathcal{O}$ 人だ。 剣士としての凶兆、 そして或い は復讐者

としての凶兆。 どちらも無い とは言い 切 れ な

「とにかく、 一度ご覧になって、ご判断 を

あ まり気  $\mathcal{O}$ 進 ま め まま 演習場 に 赴 \ \ た。 フレ イザ · が 示 した先に、 組 む 相 手

も無く演習を眺めるレオアリスの姿があった。

剣士として覚醒 したばかりであったせいもあるだろう。どこか自分の力を持

て余すように壁に背を預けたまま、隊の演習を眺めている。

フレ イザー 0 無言 の視線に押され、 グランスレイはレオアリス の許に歩み

寄った。

オアリスとまともに話したのはその 時が 初めてだっただろう。どこかにバ

インドの印象が強く、関わる事を無意識に避けていた。

だが、初 めて正 面 か 5 向 カゝ , , 合ったその瞳には、かつてのバインドのような

翳りは見つけられなかった。

真っ直ぐ自分に向けられた瞳。

あ の時生まれ て 間 ŧ なかった赤子がこれほどに成長したのかと、 感慨めいた

驚きを覚える。

黙ったままい つまでも自 分を見つめているグランスレ イに、 レ オアリス は諦

めたように溜息を吐いた。

俺は、 首ですか」

その様子があまりに残念そうで幼かった為に、グランスレ イは思わず苦笑を

漏らした。

「そうではない。 だが、 隊に馴染まないのも事実のようだ」

レオアリスが唇を噛み締め、 肩を落とす。

「しかし、王はお前を敢えて近衛師団にお入れになった。王の為の力になると、

お考えなのだろう」

弾かれるように顔を上げたレオアリスを見て、グランスレイは思わず息を呑

んだ。彼がひどく嬉しそうな表情を浮かべたからだ。

その瞳の中にあるのは復讐の意志などではなく、王に対する純粋な憧れだっ

た。

この少年を支える者が必要だ、と強く意識したのはその時だ。

何故そう思ったのかは自分でも明確 ではない。 だが、 軍 上に馴染 水めず、 王 都に

ど、 頼るものもなく、『剣士』という禁忌を背負ったままでは、 それの道行きは苦痛を伴うものになるだろう。 自らが望めば望

むほ

「……無論、我々としてもそうあって欲しいと望んでいる」

今までの自分を言い繕うようだと思った。 背後に立つフレ イザーが 小さく笑

うのが分かる。それを隠すように、グランスレイは殊更厳しい表情を浮かべた。

「何故、 王に仕える気になったのだ? 村の者達 は 反対 しただろう」

自分で口にしてから、 ひやりと肝が縮 んだ。 それ は彼  $\mathcal{O}$ 過去を直接指摘 して

いるようなものだ。

だが、レ オアリス はその言葉に深 い反応を示さなかった。 考えを巡らせるよ

うに首を傾げる。

「……何故って言われても。ただ、 御前試合があるって聞いて。確かに爺さん

達は反対したけど」

彼の養い親達は、彼に何も告げていないのだろうか。

あの過去を?

おそらくはそうなのだろう。 理 由 など測りようもな *\* \ が、 レ オアリスの

には自分の過去を知っている様子は少しも見られなかった。

「さすがに、 偉そうな事言って出てきちまったから、 今更王都じや通用 しませ

んでした、なんて帰ったら、叩き出される」

「通用しない事はない。……暫らく、私の下で軍を学ぶといい」 まだ少年らしい発想に、グランスレイは再び苦笑を漏らした。

一気に吹き出した苛立ちは既に鳴りを潜めていたものの、 完全に消えた訳で

はなかった。

情けない態度だと自分でも判ってはいた。 本来なら、 あの場で飲み込んでお

くべき事だったのかもしれない。

けれど、どうしても出来なかった。

(何でなんだ) 誰も彼も、知っていながら隠す。そうしながら、意味ありげな視線を向けて

くる。 一体何を自分に望んでいるの か、 それが判らなくてもどかしい。

ふと、レオアリスは瞳を上げた。

バインドが自分に告げた事は、 おそらく偽りではないだろう。

なら、 自分がここにいる事は、 果たして望まれているのだろうか。

自分は?

水気を失い始めた草を踏む微かな音を捉え、レオアリスは振り返った。 レオ

アリス が寄 ŋ か か つてい る演習場 0 壁 伝 いに、 歩い てくるアスタロ 1  $\mathcal{O}$ 姿が .. 見

えた。

見つめる。 ゆっくり歩み寄りながら、 オアリスの 顔に昇ったい アスタロトは鮮やかな紅の瞳でレ つもは見せる事  $\mathcal{O}$ な 戸惑った オアリスの 表情 に、 顔を

ζ,

小さく笑った。

レ

情けない顔だな」

アスタロ トの 指摘、 に、 レ オアリ スがか 自 嘲するように口元に笑みを浮 かべる。

その笑みをアス ハタロ トはただ黙って眺めた。

告げるつもりでここに来たのに、いざ本人を前にすると言葉が出てこな

喉も胸も、 いまだに重い。先ほどの声 、は少し掠れたが、気付かれなくて良か つ

たと思った。

いつも通りに笑え)

アスタロ } は レ オアリスに真っ直ぐ視 脱線を向 ける。

に会ってから、結構楽しい。おもねる事も、 オアリ Ź 0 過 去がどうだろうと、 何も関係ない。 距離を置く事もなく、身分もな アス タ 口 1 は レ オアリス

アスタロ ト』を継 承した時 か ら、そん た な 相 手はもう望 め ない と思 0 て

だから余計 嬉 L かったのだ。

オアリスは、 自分がアスタロ トだと知った後も何も変らなかった。 当たり

前 0 事だ。 自分も 変らな 

二人は演習場に張り巡らされた壁に寄りかかるようにして座った。

「……覚えてるか。 初 8 て会ったときのこと」 の広場に向けたまま、

アスタロ

トが

? 懐 か

しむような響きで口を開く。

顔 は

中

央

「忘れる訳ないだろう。 ひどく長い時 が過ぎた気がするが、 まだあ れからそんなに経ってない」 V オアリスが王都へ来てからまだ三年も

経ってい な 7 0 だ。

に 醒 は する前 初めて出会っ 参加 資 の事で、 格 が たの 必 初めは 要で、 は、 術 西方 レ オアリス 士として王都に上が  $\mathcal{O}$ 深 *(* ) は 森 そ の中だ。 0 資格 を得るため るつもりでい まだレオアリスが の途上だ た。 剣士とし 王 0  $\mathcal{O}$ た。 御前 て覚 試 合

最初、 食おうと思ったんだよな

オアリスは前を向 \ \ たま ま眉根を寄せ、 何の話なのだろうかと一 瞬考え込

んだ。

「――誰を」

「お前」

「……はあ?」

慌ててアスタロトを振り返ると、 アスタロトは何故かうっとり瞳を細めてい

る。

(---こいつ、マジっぽい……)

「だって、森ん中をずっと歩き回ってて、すっごい腹減

ってたんだもん」

「……うあ~……」

膝の上に屈み込んだ。

とんでもない事をさらりと口にされ、

レオアリス

は頭を抱えて胡坐を組

んだ

「信じらんねぇ」

可愛い少女で、少しばか オアリスとしては、 り、 村を出て、 正直に言えば当時 ほぼ 初め て巡り合った相 はか なりどぎまぎとしていたの 手が 目を疑うほど

だ。それがよもや、食われかかっていたとは。

丸 呑み? Þ 0 ぱ 丸呑 4 か?

食わなくて良か つた」

オアリスの苦悩は 知らず、呆れて上げられた顔を見つめ、アスタロ トはに、

らかうようにレオアリスの顔を覗き込む。

と悪戯っぽく笑っ

た。

ほっそりとした腕で両

膝を抱え込んだま

ま首

を

傾

げ、

か

根性だと思っ

「面白かった。へっぼい術でさー、御前試合に出ようなんて、いい

て

「……うるせえな」

「自分が剣士だって事も知らなくてさ」

アスタ 口 1 は 膝  $\mathcal{O}$ 上 に 顎を載せ、 目の 前 の広 7 演習場 に 視 線 を戻

お 前 が、 王 都 に 来て良 か った」

でアスタ オアリ 口 スは 1  $\mathcal{O}$ 横 浮 顔 かべていた呆れと抗議 を 眺  $\emptyset$ る。 二人の 他 に  $\mathcal{O}$ 入り混じった表情を消し、 誰  $\mathcal{O}$ 姿 ŧ 無い 演習場 内 は 静 漆黒 カン で、 0) 遠 瞳

<  $\bigcirc$ 街 (T) ざ わ め きがここまで微 かに 届 1 てい た。

アスタロ  $\vdash$ . の 言葉が、 黄昏時の冷えた風に力強く刻まれる。

何があっても、私はお前の友人だからな。忘れんなよ」

真っ直ぐに自分に向けられた深紅の瞳。その瞳を見返す。

――話せよ。聞いたんだろう」

「聞いた」

『全てを話すか、 それとも伏すか。二つに一つだ。だが、 全てを知れば、 レオ

アリスはここを離れるかもしれんな』

ベールの言葉がちらりと頭に浮かぶ。

それでも目の 前 0 レオアリスの瞳には、過去を受け止めようとする色がある。

「なら、頼む。知りたいんだ」

(大丈夫)

アスタロトはもう一度その顔を見つめ、 息を吸い込むように唇を開いた。

――十七年前、北方で反乱があった」

アスタロ は言葉を紡ぐ。 それはまるで刃物 のように、 喉を切り裂く感じが

した。

「反乱を起こしたのは、レオアリス、お前の一族だ」

東の間の の沈黙の後、 レ オアリスの瞳が大きく見開 らか れ る。

色を失ったその瞳に、 アスタ 口 1 の裡 に 一瞬 強 7 後悔 が生まれた。

だが、伝えると決めたのだ。 既に 口火は切った。今さら消し去ることなどで

きはしない。

迷いを振り切るように、 アスタロ トは声の響きを強めた。

剣士の一人が辺境軍の小隊を切り

ただ切っ掛けは、

詳しい経緯は知らない。

捨てた事だって話だ。 -多分、 お前の育った村の者が詳しいだろう」

『反乱』

その言葉は、 初めまるで意味のある言葉として頭に入ってはこなかった。

自分の、一族が、

誰に対して……?

軍に。

いや。

それは雷光のようにレオアリスの脳裏に閃いた。

王に。

「―」は」

笑おうとしたのに、声は出ない。喉が引きつるように震えただけだ。

強い眩暈を覚えて、レオアリスは乾いた草の上に片手を付き、上体を支えた。

開いた片手が無意識に胸元の青い石の飾りを握り込む。

バインドのあの言葉。

漸く、判った。誰もが口を閉ざし、

触れないように秘していた訳。

眩暈がする。

まず浮かんだのは、当然の疑問だ。

何で、 俺はここにいるんだ?)

王の敵を排撃すべき近衛師 団 に、 何故。

アスタ 口 トは П を閉ざし、 俯いたレオアリス の顔 を覗き込む。

「……大丈夫か?」

ああ

足元が、 柔らかい 綿にでもなったように頼りなく感じられる。 地 面がそこに

草

は容易く千切 ħ 吹き抜ける風 に .舞う。 あ

る事

を確

認する

か

のように、

レ

オアリ

ス 0

指

が枯

れかけた草を握り込んだ。

だが、 最初の 衝 撃 が過ぎれ ば その二文字はやけに空虚に感じられた。

実感などない。

そんな立場の自 分が今ここに居る事を疑問 に 思い はし ても、 反乱を起こした

自分の一族に 対 する、 同 . 調 も反発もな 

それ は彼等が 顔 É 知 5 な \ \ 遠 V 存在 だか らなの かも れなか つた。

まだ先は 長 続けるぞ」

オアリスが 黙ったまま頷くのを視界 の端 に収めながら、 アスタロ トはベ ]

ル カン 5 聞 1 た話 を感情を交えな 7 声 で淡 々と反復していく。 そうし な 何

ŧ 言えなくなる気がする。

戦 1 は 長引いた。 配備されていた北方軍 一には、 鎮圧する力はな かった。

議と反 ま あ、 乱 相 は 手 辺 が 境 剣 か 士 , ら広 の — [がる事 族じゃ仕方な は無か った。だから、反乱 V ) けど、 圧 倒 的  $\mathcal{O}$ 優 理 位 に立ち 由 は 不 崩 な 確 が なん ら、 だし 不思

ま ま、 レ オアリ ス は 黙っ てア ス  $\vdash$ の言葉を聞 7 てい る。

片膝を抱え込み、その

上に顎を載

せるようにして演習場の

広

場

%に顔

を向

けた

タ 口

暫らく戦局

が

動

カン

な

V

のを見ると王は

近衛師

団を送っ

た。

バ

インド

が

V

たか

F らだ。バインドは当時、 が上手く反 乱 を 抑 え か けたかに見えた。 並ぶ者のな ζ, · 剣 士 だったらし でも」 \ \ \ \ 最 初 は、バ イン

同 じ剣士との 戦 

剣 を交え、 相手 を切り裂く内に、 バインドは狂 っていった。

「……狂った?」

オアリス 0 瞳 が 形 容 しが たい 色を浮 か べ、、、 アス タ 口 卜 · に 向 け られる。

身 の裡 で、 剣 が 微 かに · 脈 打 · つ。

「そうとしか 1 · 様 が 無かったみたい だ。 敵 も味方も、 構わずる 斬 ŋ は じめたん

だから」

当時の戦場からの 急使、 事 後 0 調 査、 それ らから次第に形を帯びた戦 場  $\mathcal{O}$ 様

子は、誰をも絶句させるに足るものだった。

バインドは徹底的に切り刻んだ。

手当たり次第、敵味方関係なく。

少しでも、目の前に動くものは全て。

北方軍、近衛師団ともに、死者の半数以上は、 敵ではなく味方であるバイン

ドによって命を断たれたのだ。

バインドはあらゆるものを切り裂きながら、 やがて剣士の里に辿り着い た。

その頃には、 既に 反乱軍と鎮圧 軍という図式は崩れ去り、 バインドを抑える事

こそが、戦いの目的に刷り変わっていた。

それが

「唐突に——」

バインドが消えた。

そして、

「そこに、お前がいたんだ、レオアリス。赤子だったお前は、バインドが消え、 お前の一 族が 滅びた後の村に、ただ一人残されていた」

炎の中に泣き声を上げていた赤子。

遠からず焼かれて命を落としていたであろうその赤子を、

炎の中から救い上

げたの

は、

王自身だった。

王が何故そうしたのかは判らない。 反乱を起こした一 族が既に滅びた今、 ŧ

はや咎を負う必要もないと、そう考えたのか。

赤子は、剣士の里のすぐ近くにあった村に預けられた。

た芝が、 視線を落とした。 口を閉ざしたア 落ちかかった長い陽に細 スタ 交わす言葉もなくただ座 口 トの横 で、 か な陰影を作っている。 レ オアリス ってい は黙ったま る二人の ま、 足元では、 自 分の 枯 手 れ の上に かけ

やがて深 *\* \ 溜 息 をついて、 アスタロ 1 · は 静 かに立ち上がった。 まだ座り込ん

だままの V オアリスに視線を落とす。

私は行くよ」

見上げたレオアリスの上には、 アスタロ トが 恐れ ていたような感情  $\mathcal{O}$ 色 には見

だがもっと感情を露にされた方が、

不安を感じずに済

んだ

かも

れないと、そう思った。

つけられ無い。

「……私が言ったこと、忘れ んなよ」

アスタロトの表情に、 レオアリスが苦笑を浮 かべ る。

なんて顔してんだ」

不安が、 おそらく顔に . 出 てい たのだろう。

ふん。 お前のせいじゃ ない か

むっとして顎を逸らしながらも、いつもと変わりの無いレオアリスの П 調 に、

漸く アスタ 口 }  $\mathcal{O}$ 胸  $\mathcal{O}$ 裡が少し軽くなった。レ オアリスが 肩を竦める。

悪か 0 たな。 ……少 し、 混 乱 してるだけだ」

アスタロ トはその顔を暫らく眺めていたが、 一つ溜息をつくと、 腕を伸ばし

てレオアリスの頭をばしっと叩いた。

ないんだから、あんまり心配させんな」

「さっさと帰れよ。お前の隊、お前の事心配する奴らばっかじゃん。

ガキじゃ

アスタロトと別れても暫くの間、 レオアリスは演習場 に 張り巡らされた壁に

背中を預け たまま、 次第に暮 れ て行く空を眺  $\emptyset$ 7 7 た。

受け止めるべきなのか、全く見えてこない。

探してい

た過去は、

自分の想像以

上の

ŧ

 $\mathcal{O}$ 

を秘

8

てい

た。

だが、

それをどう

指先が 胸 元に カゝ けた青 1 石 0 飾りを弄ぶ。

お前自 身 0 為じ ج ا

スランザールの言葉が、 脳裏を過り、ふと瞳を上げる。

オアリスがここで今までやってこれた理由、 それは一 重に彼等  $\mathcal{O}$ 態度の故

ではなかっ たか。

V

敵愾心や自分を疎む気持ちの見える者もいたが、グランスレイやアヴァロン、

スランザー ル、そして、 玉。

過去を知っているはずの彼等の中に、 自分に対する負の感情を感じた事はな

か ったように思う。

王は何を思って、自分をその懐に受け入れたのだろうか。

自分に何を望んでいるのだろう。

レオアリスがその剣を向けるとは考えていないのか。

(……剣を、向ける?)

何故だろう。 いくら自分の心の中をさらってみても、 その考えはまるで見つ

からない。

ŧ っと時を置き、 その 事実を自分の中で現実として捉えたならその思 · が 生

赤い落日が長い影を差す。

まれるの

カゝ

ŧ

L

れなかっ

たが、

今はそうは思えなかった。

斜陽に染 水められ た演習場 は、 まるで炎 の中にあるように感じられた。

この色は好きではない。眩暈がする。

ぐらりと深淵 に 踏み込 み か けた意識が、それを切り裂いた焔に引き戻される。

その焔を知っている。

(――バインド)

近衛師団第二大隊と北方辺境軍、そして、自分の一族を滅ぼした男だ。

周囲を焼く赤 い炎。

自分はそれを見ていたのだろうか。

オアリスの中の 剣が、どくんと鼓動を刻む。

バ インドを斬る。 それが今レオアリスのすべき事だろう。

だが、 何の為に?

王城に侵入した者としてか。エザムとアス・ウィアンを焼いた者としてか。

それとも、 自分の一族を滅ぼした者としてか――。

どれも、今のこの曖昧な迷いを打ち消す程の相応しい理由には思えなかった。

オアリスは立ち上がると服に付いた草を払い、演習場の門へと歩き出した。

そうしたものの、 その足をどこへ向けるべきか決め かね ている。

このまま近衛師団に戻って、それでどうすれば 1 *(* ) ?

いつも通り、 何も無かったように振る舞えるとは思えない。

厩舎にはハヤテが待っている。 ハヤテの翼なら、 晩も飛ばせば故郷の村に

着けるだろう。

(爺ちゃん達、元気でやってんのかな……)

口の中で呟くと、堪らなく祖父の顔が見たくなった。 それはただひたすら、

その想いだけだ。

全て放り出してあの家に帰ったら、 祖父は何と言うだろう。 怒るだろうか。

(だって、何でもないじゃないか)

ここで。

この場での、自分の立場は、何だと言うのだろう?

反逆者か、王国の兵か。

周囲は、どちらである事を求めているのだろう。

厩舎の木戸を押し開けると、 銀翼  $\widehat{\mathcal{O}}$ 飛 竜が待ちかねたように長い首をもたげ

た。 レオアリスへ首を伸ばして背に乗れと促す。 首筋に手を置くと銀 の鱗 はひ

やりと心地よい手触りを伝える。

―お前、 北に行くか? それともどこか行きたい所は あるか?」

ハヤテは丸く青い瞳を不思議そうに瞬かせ、 再び帰ろうと云うように首に置

かれたレオアリスの手を押した。

こ の 飛竜 は、 大将に任じら ħ た 時、 王 か ら賜った。 疲 れ を知ら な 1 疾 翼が

気に入ってい る。 北  $\mathcal{O}$ 辺 境にも半 日 程 で 辿り着く。

だが、 王か , ら賜 った ものだ。

オアリ ス は 首 を傾 げるハヤテを見つめた。

'……悪い な。 今日はここで休め」

オアリスは 度その首を軽く叩き、 置いていた手を下ろした。

ノヽ ヤテ が で 呼 び 止 める カン のように高 い 声 を上げる 0 を、 背中で断ち 切 るように

て厩舎 の扉を出 る。

る。 は、 城下に向 王 都 演習場 北  $\mathcal{O}$ 外 (T) 街 った方が 周 は 道 を巡 王 都 は 正 り  $\mathcal{O}$ · 近道 なが 反対 周辺部にあり、 . ら各-に O位置に なるが、 方 面 あ  $\mathcal{O}$ 当然のごとくそれには王 った。 街 正 面 道と繋が の道は 外周をぐるりと回るより ってい 王 城に向かい、 る。ここから北 城の傍を通 左右へ延びる道は É 方に行 正 る事 面  $\mathcal{O}$ にな 道 くに を

行く先を未だ決め か ねたまま、 レ オアリスは 7 つもの習慣で正 面 の道を歩き

出した。

368

迫る に 万人に 左右を木 街 に は 開 <u>\frac{1}{1}</u> カン に 至 れ る 囲 7 お ま 所 り、 れ に 明 た それ 石 か 畳 ŋ が を過ぎると城下の  $\mathcal{O}$ 道 灯 り、 を辿ると、 旅 人に すぐに巨大な門 長 街 1 道 に . 入る。 行 き  $\mathcal{O}$ 門 終 が わ  $\mathcal{O}$ り 向こう、 聳える。 を 知 5 せ 夕 門 闇 は 7 常 が

た。

とは違っ に 争うよう 門を潜 た喧 0 た 瞬 な、 騒 間、 12 賑 満 B それ 5 か 7 な ま 街 1 る。 で 並 が  $\mathcal{O}$ 牧 広 が 歌 的 0 た。 な 風 そこ 景 は か 変 L ここに し、 燭 雑 多とし 蝋  $\mathcal{O}$ 灯 た色 り が 彩 溢 れ が 互 尽 1

陽 地 る 地 下 が 王 以 落ち 前 区 都 では禁 は は 行 る 雑 各 0 。 と 袖 たミ 制 多 地 な 品 か ス を 感 5 が 引く 売買 1 様 が ラ 強 々 くされ、 Ш 街 な 1 種 娼 脈 達 酒 が  $\mathcal{O}$ 集 街 表 0) /まる坩! 姿が に 賭  $\mathcal{O}$ 出 博、 闇 など、 ることのな 街 角 喧 堝 に立 嘩、 であ としょし ŋ, ち、 流 は 7 血 半 0) 沙 特 比 ば 商 にこの 較 汰 業 に 公然とそこに t 珍 な 網 辺 5 が り、 な 確 11 <u>\frac{1}{2}</u> t され 下 層  $\mathcal{O}$ あ で てい る遊 は と呼 な る。 廓 ば れ

界 0 中 心 に 開 く 巨 大 な花花 が そ の広げた花 弁  $\mathcal{O}$ 枚 枚に 抱え込 む 複 雑 な

影。

世

自分も、その影の中の一つにいるのだろうか。

3 たこの時 店 は オアリス 建 分 物 0 の 二 方 は 階 が 王 や地下に 城 この  $\mathcal{O}$ 外 辺 門 り ま と 続 。 で 軒 は賑やかだ。 を競 7 てい 0 て る広 通り *(* ) る。 7 沿 道を選んで歩く。 1 に犇めき合う屋台 陽が 落ちてき <u>\f\</u> ち並

ただ慣り れ ない 者が一人で歩くには 少し 危険を伴う場所でもある。 道 温端や一 屋台

筋  $\mathcal{O}$ 奥に屯 ŧ 伸 びて L いて、 ているのは、 その 奥は迷路 一癖もありそうな顔ば 0 ように複雑 に入り組 か りだ。 んでい 左右には る。 細 1 路 地

が

幾

カン 0 吹き抜い た事に気が付いた。 け る 風 に 肌寒さを覚え、 陽が落ちた後では、 レ オアリスは今更ながらに上衣を着てこな 薄い 半 袖 の服 枚だけでは不 十十分

周囲の建物の窓に灯る明かりが、温度を持って感じられる。

だ。

(……そう云えば、クライフはこの辺に住んでたな)

舎が支給され 下町に好 込み合った街  $\lambda$ で住 ろ のだが、 並 W でい みに る 目 この辺 事を思 を 向 け こり は て 1 出 歩 種 した。 Į, 々様 7 7 る内、 々な 中将ともなれ 住 人達が ふとクライフ ば 1 て面 王 城 白 内 が 1  $\mathcal{O}$ 王 0 士 城 官 だと言 カン 区 5 に 遠 官官 0

ていた。

あの後どうなっただろう。 彼等の戸惑った顔が脳裏に浮かぶ。 引っ掻き回す

だけ引っ掻き回して、何も言わずに出てきてしまった。

彼等が、 事実を知ったら、どう思うのだろう。

レオアリスはピタリと足を止めた。それでいて、

止まった足に不思議そうに

瞳を落としている。

(……行こう)

促すように思ってみても、止まった足は動く気配を見せない。

第一、どこに行くと言うのだろう。

地面に貼りついたように動かない足は、 問いかけてくるようだ。

どこに?

知らない。でも、ここで立ち止まったって仕方ないじゃないか)

もう一度歩き出そうとした時、不意に肩 に何 かが 勢い 良くぶつかり、 レ オア

リスは 体制を崩して石畳に片手を付いた。 荒れた怒鳴り声といくつもの軽 7 塊

が 降りか かる。

「道の真ん中でボケッとしてんじゃねえぞ!」

付けそうになった肩を押し留め、 片手を付い たまま振 の返り かけた肩を、 身体を起こした。 再び靴底 が 蹴 り付ける。 石畳に打ち

「なん……」

訳の判らないまま、 レ オアリスは 漸 く振り返り、 自分の前に立ちはだか つて

いる男を見上げた。

「てめえのせいで大事な商品を落としちまったじゃねぇか。どうしてくれんだ」

の真ん中に立っていて、ぶつかったらしい。

見回すと、石畳の上に

、藤で編、

んだ籠が散らばっている。どうやらぼうっと道

オアリ ス は 足元の籠を手に取 ってひっくり返してみたが、どこも壊れ た様

子もない。

「……拾うのは手伝うよ」

差し出しかけた籠を、男は乱暴に払った。

気の弱 カか、 い者であれば竦み上がりそうな声音だったが、レ てめえは。 弁償しろって言ってんだよ!」 オアリスは

石畳に

座ったまま、ただ空になった手を振った。

「壊れてないだろう」

オアリスの様子に男は僅かに面食らったように顎を引いたものの、すぐ殊

更に口元を歪めて見せた。 こんな場所でぼうっとしているのは、 いいい 鴨 以 外の

何者でもない。

「おいおいおい、正気で言ってんじゃねぇだろうなぁ?」

男は レオアリスの胸ぐらを掴み、 引きずり上げると、 威嚇するように顔 を寄

せた。

見て見ぬ振

りで足を早めるか、

面白

い 見

ものでも眺

めるように笑いを浮

べて

レオアリスは眉をしかめ、 視線だけで周囲を見回したが、通りにいる者達は

いるだけだ。 要は難癖を付けるたかりのようなものかと、 レオアリスは溜 息を

吐いた。

(めんどくせぇ……)

汚れちまっただろうが。これじゃ商品になんねえだろ、なあ。てめェがボケッ

と突っ立ってやがるからよぉ」

「避けりゃいいじゃないか」

「てめえ、誰に向かって口利いてんだ?! 俺は」

レオアリスは溜息を吐き、 胸 元を掴んだ腕を手の甲で跳 ね上げると、素早く

掴んで背中に捻上げた。 関節 が 反対 方向 に捻ら れて軋み、 男は途端に悲鳴を上

げた。

「いい加減にしろよ。不当な商売は……」

そう言い掛けて、レオアリスはふと口をつぐんだ。

(何やってんだ、俺)

こんな場所で乱闘でもするつもりなのか。 それとも、 近衛師団の権限で取り

押さえるか。

そうするのは簡単だが、 全身に貼りつくような億劫さを感じた。

そもそも、今の自分にどこまでその資格があるのか。

お い、若い  $\mathcal{O}_{\circ}$ 1 **,** \ 加減手を放しな。ここで調子に乗って、 後でどうなるか

判ってんだろうな?」

横合いから声がかかり視線を向けると、今までただ道端で眺めていた男達の

人が 立ち上 が 0 てい た。 周 井 に 屯していた男達  $\mathcal{O}$ 目付、 きも変わ って る。

「……こいつが難癖を付けて来たんだろう」

「調子に乗るなって……」

「待て、そいつは近衛師団だ」

別の一人が詰め寄ろうとした男を制し、レオアリスを指差す。

近衛師 鷩 V たように 寸 ! ? \_ 周 り Ó 男達 Ł 改 めてレ オアリス を眺  $\emptyset$ た。 確 か に、 軍 服  $\mathcal{O}$ 上衣

うように顔を見合せる。

が

無

7

ために判

りにく

1

が

両

脚

0

脇

に入っ

た

独特

 $\mathcal{O}$ 

銀線を認

め、

男 達

は

躊

躇

それは全く違う躊躇 1 0) 表情だったが、レ オア IJ スは 無性 に苛立ちを覚えた。

「……師団だったら、どうだって言うんだ」

が *\*\ あ 増した。 うだけで るのはそんなものばかりだ。 苛 々と男達を睨 どうでも は済ま ない み付ける。こんな時に騒ぎを起こせば、 1 *(* ) か もし とさえ思う。 れ ない。 過去だの、 ちらりと過ったその考えに、 近衛師 寸 の立場だの、 ただ問題が 更に苛 あったと 自 分に <u>\f</u>

様子ばかり伺っていないで、決めてくれればいい。

「中途半端じゃ、気分が悪いだろ」

だが男達 は既に関わる気が失せたようだ。気勢を削がれた顔で、 道の端に座

りなおす。

意気がるんじゃねえぜ、 若いの。 そいつを着てるから無事で帰れるんだ」

勝手に自分の立場を判断されているのが、気持ち悪い

近衛師 寸 とは関係 なくなるかもし れない んだと、そう言ってやったらどうな

るだろう。

師団兵さんよ、さっさとそいつを放して消えちまいな」

V オアリ スは何 か言おうかと口を開きかけたが、 結局何 も言わずに唇を引き

結んだ。

苛立ちは、 気持ち悪さに取って変わっている。どうでもいいから、 早くこの

場を離れたかった。

捻り上げていた男の腕を放るように放し、踵を返す。

暫くの間 周 囲  $\mathcal{O}$ 視線は レオアリスに注がれていたが、 やがて興味を失って

逸らされた。

早足で歩く内に、 気持ちの悪さも影を潜めていく。 一つ息を吐き、 レ オ アリ

スは歩調を緩めた。

瞬 に まだ先へ 間 は 大通 に 扉 ŋ  $\mathcal{O}$ 続 変 瞬だけ浮遊感を感じたも 0 少し わ į, γ てい りに、 先の るが、 右手に、 薄く 、光を放 通り 中層 0 流 つ幕 0 れ 区 の 、 0 に乗るように、『門』へ足を向けた。 へ抜ける為 ようなもの すぐにそれ (T) が 門門 張ら は消えた。 れてい が見えてくる。 る。 通り 抜 通  $\neg$ 門 りは け Ś

第に 僅 た。  $\mathcal{O}$ させられる事 影 か ただ、 に 門 距 V > もまた、 · 躊躇 離 0 通 それだけ は 抜けたそこは既に中層区との境で、 5う素振 近づい っても、 ば 急速 カゝ りだ。 Ď て来てい に りを見せたものの、 距 良く出っ 濃さを増し 離 先 程 を 一 る。 来 瞬  $\mathcal{O}$ た レ 場 た。 仕 にして移動した事によって、 オアリスは一 所 組 結局 から歩けば、 みだと思う。 再び歩き出した。 のところ、 水路 度だけ背後 ここまで一 王 が 都 道を横切るように 何の答えもない  $\mathcal{O}$ 術 ク) 一 士 正 刻 達 門』を振 面 以  $\mathcal{O}$ に 上 技 聳 ま は 術 ŋ 「える 流 ま か に 返り、 にこ カン は れ 王 る。 感心 てい 城 次

気 職 が 1 を見せてい 12 僅 水 人 満 達 か 路 5 0 に に 7 工 変 架 房 わ 7 か が た。 る た り、 X ゆ が るや 域 商 內 先 人 程 に B か 職 数多く存在 な半  $\mathcal{O}$ 下 人 達 円 層 区とは・ を 描  $\mathcal{O}$ 多く住 < L て 橋 水 路 ١ ر む を る。 地 渡 本 域 る。 隔 通 に 入る。 り その て ただけ 添 橋 1 この 0 を越える 店は で、 辺 ると、 落ち り まだ軒を開 ĺZ 着 は 街 1 た 商  $\mathcal{O}$ 佇 け 店 様 ま 活 B 相

ろう、 オ は アリス あ ふと眼を上げると、 とりとめも無く、 ちこちに飛ぶば 彼ら は が 咄 嗟 通 に り 横道 過ぎる 石 畳 か にこ 前 り · 逸 れ で 方  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 道を歩く。 を見送 か た。 5 向 数 に る。 路地 名 向 0) か う道を 歩く事で考えが纏 近  $\mathcal{O}$ 壁に 衛 師 背 見 寸 を預 兵 1 が 出 近づ け、 しそうに *(* ) 王 るかと思ったが、 一城か てく は るの 無 5 の か 帰 が 0 途な . 見え、 た。 のだ 思考

か を覚えた。 った。 第一 大隊 黒い  $\mathcal{O}$ 兵 生 で 地 は 無  $\mathcal{O}$ 服 7 は、 事 に ほ あ ちこち砂埃に塗れてい っと息を吐き、 それ から自 たが、 分 払 0 う気 行 動 に に もな 情 け れな なさ

(さっきっ か 5 何 やって んだ、 俺 は

今も別に隠れ る必要は な 自 分の 過 去がどうであろうと、 今立場が変わ 0

レ

た :: で ŧ な *\* \ のだ。 レオアリ Ź は 自 嘲  $\mathcal{O}$ 息を 吐 き、 路地  $\mathcal{O}$ 壁 に 寄り 掛 か 0 たま

まその場に座り込んだ。

細 7 路 地 に 、 は 誰 の姿もない。 そのまま壁に頭を預 けるように頭上の 狭い 空を

見上げる。暮れていく空に、星が輝き始めている。

何をするつもりなんだ)

曖昧なのだ。全部。

怒 りが あ れ ば、 畏れ が あ れ ば、 悲嘆や喪失、 憎 L み、その一 つでも自 0

に · 明確 に あ れ ば、 足を向 け るべき先もまた明確だっただろう。

それら全てが曖昧な故に、 どこに進むべきか、 それが判らなかった。

(---何を、したいんだ)

もう一度自分に 問 1 掛けた時、 緩く傾 斜 0 0 *\* \ た路地  $\mathcal{O}$ 奥 カン 5 微 カン な 金 属 音

が響いてくるのに気付き、レオアリスは視線を向けた。

複数  $\widehat{\mathcal{O}}$ 金 属 音 が 何 か を弾くように 規 則 正 しく流 れ てい る。 レ オア リス は 咄嗟

に入ったこの 路 地 がどこに続 į, て 7 る  $\mathcal{O}$ か、 今更ながらに思 7) 出 L た。

立ち上がり、 僅 か に 躊躇ってから、 音の流れてくる方へと歩き出す。 おそら

中

< 追 1 払わ れ るだろうと思 いなが ら、 今はそ れ が 無 性 に 見 7 み た カン つ

金属音は次第に大きく、高くなっていく。

緩 B か に 登る 路 地を抜けると、 面 前 に 小さな 丘 が 開 け る。 丘  $\mathcal{O}$ 周 用 に は ま たた

王 都  $\mathcal{O}$ 街 並 み が 続 いて ١ ر て、 家 Þ 0) 窓 に 灯る灯 火 が、 光 り だ L た天 空  $\mathcal{O}$ 星 々

ょ

ŋ Ł 明るく散りば められていた。

開 け たそ 0) 場 に は、 煉 瓦造 りの 黒ず、 んだ壁をした

地 面 を覆う短 1 下草 が 小 屋 0 周 囲 に行くほどに、 小屋か 5 後退するように黒

小屋が三

棟

<u>√</u>

0

て

1

た。

1 ・土を覗 か させてい る。 三つの小屋 の一つから、 止まる事 を知らない **、** 一属音 が 流

れ 7 ١ ر た。

開

け

放た

れ

た戸

に近づくにつれ、

周

囲

 $\mathcal{O}$ 

温

度が

上が

つ

て

7

<

() ()

が

感じられ

る。

オアリス は 戸 П  $\mathcal{O}$ 前 で足を止 一めた。

覗 き込 む と、 小 屋  $\mathcal{O}$ 中 に は 層 強 1 熱気 が 満 ち て V た。

手に 中 央に した鎚を赤 鉄を溶 て焼け か す 炉 7 が 輝く鉄に振 明 Þ と燃え、 り下ろしてい そ O周 囲 で る。 は 数 名 0) 鍛 冶 師 達 が 黙々と、

打 ち下ろす度に 火 花 が 散 り、 鉄 が 少 L ず つ 形 を変えて

周 囲 を 瞬、 強 1 輝 きで照ら L 出 す。

それは 生 命  $\mathcal{O}$ 煌 め きのように美し V. 息の詰まる光景だ。 鍛冶師 達 が

乱に 剣に 魂 を注 ー ぎ 込 んでい · <\_ °

S V > に、 戸  $\mathcal{O}$ 傍で剣を打っ てい た鍛冶師  $\mathcal{O}$ 汗と熱で赤く染まった

顔

が

上が

一心不

り、 入り口に <u>\</u> つ レ 才 アリス 0 姿を捉えた。

開 きか 老齡 けた に近 が *\*\ そ S  $\mathcal{O}$ 鍛 と 口 冶 を閉ざし、 師 は、 途端に苦虫を噛み潰し じっとその姿に視線を注 たような表 V) 、 だ 後、 情 を 手 浮 元 か に ベ 視  $\Box$ を 線

を 戻した。

剣を傍る 5  $\mathcal{O}$ 水 桶 に浸け る。 たちまち激 L い 音を立 て、 水蒸気が立ち 昇 る。

冶師 は 黒 < 沈 N だ 色を取 り戻 L た鋼を、 燃え盛る炉に差 し込んだ。

前 払 普段なら 7 を食 5 レ オア わ せ る リスが は ず 入り  $\mathcal{O}$  $\sum_{}$ П  $\mathcal{O}$ 鍛 に近 冶 とづくの 師 が、 を眼 今は に 一言も発さない しただけで、 怒鳴 事 は、 り 逆に つけ 僅か て門

な 居 「……見てていい 心 地  $\mathcal{O}$ 悪さすら感じさせた。 か。

0

を打ち延べ る複数の音が 重なり、 さほど広くは 無い 鍛 冶 場  $\mathcal{O}$ 中 に てい

る。 鍛冶師はちらりとその視線を投げただけで、 片時も手を休 め ず 鎚 を振 り下

ろし続ける。

「そこから近寄ンじゃねぇぞ」

ぼそりと告げられた渋みを含んだ声に、 レオアリスは心外そうに苦笑を漏ら

した。

「いくら何でも、 近寄っただけで折 れる訳ないだろう」

信用なんねェ。

\_\_\_

にこりともしない鍛冶師を前に、レオアリス 体何本俺 は戸口に手をかけたまま視線を

の打った剣を折りやがったと思ってんだ」

さまよわせた。 他の 鍛 冶 師 達 は 視線すら寄越さない。

炉と剣が放出する熱に汗塗れになりながら、 黙々と鎚を振 るい 続ける姿に、

これほどまでに精神を傾 けて打ち上げる剣を次々と折られるのでは、 確かに腹

に据えかねるどころではないのだろうと、そう思った。

悪 いと思ってる」

ィで済むか。ひとが魂込めた剣をよす」

相 変わらず手を休 める気配 も無 **(** ) が、 乱暴な物 言 į, ) · 程 に は、 その声 たに嫌 悪の

響きはな

大体何の用だ? お前が使える剣はここにやねえぞ」

「ただ、 見ていたいだけだ」

レオアリスがそう言うと、 鍛冶師は荒っぽい動作で肩を竦めた。

けッ、

面白 , , , , まるで、 剣 が、 命を得ていくみたいだ」

物好きなガキだ。剣士がこんなモン見て、

何が

面

白 7

んだ

か

鋼から飛び散る火花、振り下ろされる鎚の音。一振り一

その音を聞き、 一瞬に燃え上がり散っては消える火花 の輝きを見ていると、

余計、 に な 思 1 が全て流れ落ちてい く気がする。

波打ってい た心 が 深 *\* \ 湖 のように凪ぎ、 その底に沈んでいる想いを覗き込め

そうな気すらした。

「……ふん、 好きにしろ」

再び鎚を振り上げ、 打ち下ろす。 水に浸し、 炉に戻す。

次第に 形創られて行く剣。 意思を持たないそれは、 使い ・手に何をもたらすの

振りに込められる魂。

だろうか。

た。 たが、やがて小さく舌打ちして手にしていた鎚を振り上げると、一息 鍛冶師は打ちかけの剣を目の前に持ち上げ、暫くためつすがめつ検分してい 思わず息を呑むレオアリスに構わず、 折れ た鋼 を再び炉に投げ入 に へれる。 叩き折 0

「おい、せっかく……」

「納得いかねぇ」

そう吐き捨てて、 鍛冶 師 は 厳 1 表情 のままレオアリス を見上げた。

「見せてくれ」

唐突に請われて、レオアリスは思わず辺りを見回した。

「何を」

何をだあ 鍛冶場で剣士 ? が 寝呆けてンじゃねぇぞ。決まってンだろうが、テメ 剣を抜く事に僅 か に躊 躇 いを覚え、鍛冶師  $\mathcal{O}$ 浅黒 エ 0 1 剣 顔を見つ だよ」

 $\Diamond$ á. ずぶり、 だがその上 と手首まで呑まれ、 にある真剣 な 表 洩 情 れ 出 に、 L た青白 レ オアリス  $\overline{V}$ 光 は が 鳩 鍛 尾 冶 場 にこ 右 に 満ちる。 手を当てた。

呼び合うように響いてい た鎚 の音が止 まり、 鍛冶 師 達が 顔を上げた。

右 手 をゆ っくりと引き抜く。

宵闇を切 り裂く光と共に現れた長剣 に、 鍛 冶 師 達  $\mathcal{O}$ П か ら溜 息に、 も似た声

が

漏 れた。

目 0 前 の青白 1 光を 纏 う剣に 視 線 を吸 7 寄 せ 5 れ たま ま、 鍛 冶 師 は 感 嘆 を 隠

そうともせず、 半 -ば独 り言 のように 呟い た。

何の気負いもてらい

もねえ。

……それがこれほど、

見る者を惹

き付ける」

簡素な剣だ。

引き寄せられるように手を伸ばして刀身に触 れ、 剣を受け取る。

スの手を離れた瞬間、 剣 は 輝 きを消 L た。

ちッ、 0 れ ね え 奴だ。 主以 外 に興 味 が ね 工 か

度名残惜しそうに掲げて見上げ た後、 レ オアリスに戻すと、 剣 は 再び 美し

1 輝きを纏 つた。

V) い剣だ。 俺達 が 目 指 してるの は、こんな剣な  $\mathcal{O}$ か ŧ 知 れね え

オアリス 0) 顔 に目 を止、 め、 太い 眉を上げる。

何、 妙な面 してやがる」

だが

レ

オア

「・・・・・いや、 誉められるとは 思 わ な カン 9 た。 嫌 わ れ てると思ってたか らな」

意外そうな響きに、 鍛冶師 は L か  $\emptyset$ 面 を浮 か べ てレ オアリス から視線を逸ら

した。

「ふん。こんな剣、 嫌える刀打ち あ *(* ) ね えよ」

そう言って背中を伸ばすように立ち上ると、 鍛冶師 は汗と熱で贅肉 (の削)

ちた身体をレオアリスに 向けた。

「変な野郎だな、テメエ

は。

怒鳴られ

 $\lambda$ 

のが

判ってんの

に

ょ 0

ちゅう来やが

げ落

る。 バインドはこんなとこ、 なかったぜ」

見向きもし

あまりにもあっさりとその名が語られた事に、驚くレオアリス の横を抜け、

口で立ち止 一まる。

「テメェ等、 手 エ 休めんな。 ..... おい、 風に当たんねえ か

オアリス 0) 返 事を聞きもせずさっさと小屋の外に出ると、戸 0 すぐ脇  $\mathcal{O}$ 

壁に寄 ŋ 掛 か り、 懐 か 5 煙管を取り出 して火を灯 L た。 黙ったまま  $\mathcal{O}$ レ 才 ア IJ

ス に 構 わ ず、 吸 1 込ん だ煙を吐き出す。 白く細 V) 煙が 踊 るように立ち 昇り、 鍛

冶 師 0 視 線 が その 煙を追って動いた。

「……どうやら生きてやがるらし いじゃ ね えか」

―知ってるのか」

知 ってるも何も、俺ぁ奴が掛け値無しに嫌いだった。野郎  $\mathcal{O}$ 剣 は 独善 の剣だ。

他の誰 0 為 0 ŧ  $\mathcal{O}$ でもなく、 ましてや王の為ですらね . 工 \_

吹き抜け る風 が、 煙管から立ち昇る煙を吹き散らす。

俺達

あ、

王の為に剣を打つ。毎日

毎日汗水垂らして肌

あ焼いて、

そりや全部

王 の為だ。 その先にあ る国 の為だ。 テ メ エ  $\mathcal{O}$ 隊 が しじゅう剣をぶっ壊してくれ

てもよオ、 そんなら次 あ もっとい ( ) 剣を打ってやる」

少しも和らぐ事 のな ( ) · 目元 に、 だがどこか暖かさを感じさせる色を浮かべ、

鍛冶 師 は レ 才 ア IJ 、スを見 た。

お 前 を嫌 *(* ) じ Þ ね え 0) は、 それが結局 同じ事 だからよ。 お 前  $\mathcal{O}$ 剣 が、 王

 $\mathcal{O}$ 為にあるからだ」

S ょ 弾 か い、と煙管を裏返すと火種を足元に落とした。火の消えた煙管を銜え直 れたようにレ オアリスが 瞳 を見開 くの を、 可 笑しくもなさそうに眺 め、

オアリスに背を向ける。

ま、 その 内テ メ エでも折 れ ね え 剣を 打 って 見せら あ

力強 鍛冶 い音を聞きながら、 師 が 小 屋  $\mathcal{O}$ 中 に 消えると、 オアリスは すぐ新たな鎚 の横 に立ち止 の音 が響き始めた。 その確 かな

レ

戸

まったまま

自分

0

鳩

尾に視線 を落とした。

至 Ø, 為  $\mathcal{O}$ 

鍛冶師  $\mathcal{O}$ 言葉は、 温 か , , 血が全身に行き渡るように、 身体の隅 々に染み込ん

で行く。

身の裡 0 剣が、 ゆ っくりと鼓動を刻む。

思わず込み上げた笑いを抑えるように、 レ オアリス は瞳

を閉じた。

S どく単純で、 だが 番大事 な事 を、 忘れ てい た。

何の為に、 自分は 王都 に 来た んのだ つ た か。

状況に囚われ過ぎて、 見失っ ていた。

自 分が 今ここにい るの は、 王に仕える為では な か つ た か ?

明確 な 理由 などない。

それでも、 育て親の反対に耳を傾 ける事も無く、 頼る当てもない王都に一人

こうしてやってきたのは、その漠然とした、けれども強い想い故だ。

過去や立場など、始めから無い。

そこに、強い光を宿した。

な薄明 を開 背後で 僅 け カ に か て . 迷 り は L Ó ま 王 ったものの、 中、 都 0 が た 秋の虫 が、 光を型どって夜 先ず 達 レ は の音色が オアリスは 置 7  $\mathcal{O}$ 7 きて 競うように聞こえてくる。 闍 再 にくっきりと浮かび、 たも び演習場へ戻った。  $\mathcal{O}$ を連 い れ 帰 らなくては 長 そこから 久しぶりに感じ V) · 時 間 1 届く け 近 衛 な 僅か \ <u>`</u> 師 寸

影  $\mathcal{O}$ 無 *\*\ 演 習 場 0 門 を潜 り、 すぐ右手にあ る厩 舎の 木戸を押し 開 け る。

た

穏

B

カゝ

な

夜

 $\mathcal{O}$ 

気

配だ。

は はすぐに 厩 舎 (T) 見 中 は 7 取 灯 れ り が た。 · 抑 え 飛 られ薄暗 竜  $\mathcal{O}$ 前 に 見覚、 か 0 た え が  $\mathcal{O}$ あ 僅 る 影 か が な 光源 あ る  $\mathcal{O}$ でも光を纏 に気付い き、 う銀翼 レ 才 ア の姿 IJ

スは思わず足を止めた。

まま、 上に 口 視線を落とす。 ツ } レ バ 才 ア ル トは IJ ス が レ そ 歩 オアリスの  $\mathcal{O}$ 4 頬 寄 に る 微  $\mathcal{O}$ を 待 姿を認めると、 か な苦笑 0 た。 が過ぎる。 ゆ 0 くり 左腕 を頭 を胸に当て深く頭を下げた を上げ、 レ 才 アリ ス  $\mathcal{O}$ 

また随分と埃塗れになら れた ものだ。 一体何をされていたんです?」

気が 付 けば まだ服  $\mathcal{O}$ あちこちに、 白く砂 埃が つい たままだ。

P, まぁ……」

さすがに下層で揉め事になりかけたとはみっともなくて言えず、 レオアリス

は 曖昧に П 0 中 で 呟 *(* ) て、 服 0 埃 を払う。

それでも

前にいるのがグランスレ ここに誰 か が *\* \ るとは思ってい イでは無か なかった為少し驚いたものの、 った事に僅 かに安堵を覚え、

どんな顔をしてグランスレイと向き合えば いいい のか、い まだに躊躇っている。 に

似た溜息を洩らした。

か いきなり顔を合わせずに済んだと安堵する反面、 ある種 の落胆も感じ

てい た。

「……良くここが分かったな」

簡単な事です、と言 いたいところですが、ここまでしか貴方の情報が ? 無か 0

たも ので。 八方手分けして探させる訳にも行 かないでしょう」

確かに、それは余りに情けなさ過ぎる。レオアリスが飛竜の柵に歩み寄ると、

それから苦笑

自の

ヤテが嬉しそうに長 い首をもたげて顔 を摺 り 寄せ る。 レ オアリ Ź は 艶や か な

鱗に手を当て、詫びる代わりに数度叩いた。

「それで、ずっとここに?」

「近衛師団に戻られるのに、貴方が彼を置いていく訳が

近衛師団には戻らなかったか も知れない。 そう言おうかとも思ったが、 今更

な

い

それは大した意味の無い仮定だと気付く。

に偉そうな事を言った手 私もま あ、 居ま せ んでしたとただ帰るのでは、 前もある、正直申し上げれば、ここに戻って戴 面 目が 立ちま せ  $\lambda$ カン がけてほ 5 ね 父 0

としましたよ」

「……侯爵に? 何を……」

ただろう。 ただ思い ところにい  $\Box$ を閉ざす。 問 **(** ) かけて、 ・つい そこはレオアリスの関われない、 るのだ。軍内にばかり目を向けていてそこまで思い至らなかったが、 ロットバルトはある意味で一番、事実を伏せていた側に近づける たとしても、それをロ 皮肉を込めて口元に笑みを浮かべた口 ットバルトに頼むという気にはならなかっ 複雑な部分だ。 ットバル トの 顔 を眺 め、

「……余計 な事をさせたな」

特には。 まあたまには会話くらい必要ですよ」

オアリスはすぐ隣のロ ットバルトを見上げた。

聞いたんだろう」

聞きました」

余りにもあっさりと言ってのけられ、レオアリスは次に言うべき言葉を捜し

にこれまでと違う色は認められない。

て口篭った。だが灯りを落とした厩舎内

の薄闇の中でさえ、

ロットバ

ルトの

顔

1 つまでも自分に乗らないのか、 柵に片手を置いて、開いている手でハヤテの頭を撫ぜる。ハヤテは何故主が 不思議そうに青い瞳を瞬 かせている。

―それで」

それで、とは?」

問い返されてレオアリスが 声 び 口籠もると、 ロットバルトは声に可笑しそう

な色を滲ませた。

「今更私の意見など、必要の無い顔をされていますが?」

確 か にそ れ で自 分  $\mathcal{O}$ 意思が 変る訳 いでは な *\* \  $\mathcal{O}$ は分か っていたが、 敢えて ロに

出 L た 0 は その 事 を確 認する為だ。

率直な意見 を聞 きた \ | |-

口 ツ } バ ル  $\vdash$ は 度レ オアリス 0) 顔 を見返

では、 私  $\mathcal{O}$ 個 人 的 な見解を述べさせて戴きますが 関係 あ ŋ ませ んね」

П

を開

7

た。

「……はあ?」

「貴方の 過去がどうであろうと、大して問題 では、 ない . ک そういう事です」

あ っけに取ら れて目 0 前 の参謀官を見つ っ める。

私は貴方の背景を見て、 貴方に仕える事を選んだ訳ではありません」

施分、 簡単に・・・・・」

悩 んだ自分が 滑稽に思える。 だが、 結 局 はそういう事 な 0 カ もし れ ない。 今

思えば、 アスタ 口 トもまた同 じ事を言っていた。

貴方もそうでしょう。」

?

貴方が王に仕える事と、 貴方の背景とは関係ないはずだ」

V オアリス は 驚 1 た 瞳 を 口 ット バ ル 1 に 向 けた。 その まま暫く黙ってい たが、

やがて俯くと、 小さく笑い始め た。 すぐに肩を震 わ せ、 声を立てて笑う。

「……相当俺は、 自分を見失ってたらし V な

多分、そういうものなのだ。 迷っている自分よりも先に、 落ち着 周 进  $\mathcal{O}$ 方 *\* \ て振 が 正 ŋ L 返 7 り、 答えを見つけてい ゆ 0 くりと自分と周 る。 井

を

眺 めれば、答えはどこかしら存在 してい る。

どう選ぶ か、 それだけ の事だ。

「シスファン大将との 面 会に ついて報告を上げようと思ってい

た半日  $\mathcal{O}$ 間 に 随分状況 が 変わ りまし たね」

ンに現れ 口 ツ } た事 バ ル ŧ }  $\mathcal{O}$ アス 言葉 タ に 口 V 1 才 が ア IJ 語 0 ス は た過去も、 改 8 て頷 たった半 1 た。 バ 日 1 ンド  $\mathcal{O}$ 間 が に起こった事と ルア ス ウ イア

は思えな い程だ。

だが、 疲労を感じて **,** \ た 0) は そ れ ま で 0 事 で、 全ての事 実が 見えた今、 逆に

わだか ま ってい た疲労は きれ 1 に 流 れ落 ちている。

道

,は選

んだ。

後はそれ

を進むだけだ。

ましたが、

たっ

その 前 に 一つだけ、 きちんと筋 道 を付 けて お カン なけ 'n ば なら な V 事 が あ

「……師団に戻る。それから」

口 ツ } バル トが軽く片手を上げ、レ オ アリスの言葉を遮る。 視線を上げた先

の顔が、面白そうな笑みを浮かべた。

どうやら、 あまりに お 戻りが 遅 V) ので、 心配 になったようですね」

-

口 ツ  $\vdash$ バ ル  $\vdash$ 0) 視 線 が 厩 舎  $\mathcal{O}$ 屝 向 け られ る。 そ れ え を 認  $\emptyset$ る 前 に 聞 き慣 れた

足音を捉え、レオアリスは扉を振り返った。

足音は厩舎の入り口 で ·躊躇 うように一瞬止まり、 それから扉を押し 開 けた。

光の中に踏み込むと、無言のまま頭を下げた。

再

び

入り

П

 $\mathcal{O}$ 

す

ぐ傍らで

静

か

に立ち

止まってか

5,

グランスレ

1

は

厩

舎

 $\mathcal{O}$ 

薄い

つい 先程までどんな顔をして会えば *\*\ **,** \ のかと、 躊 躇 \ \ すら感じていた 相手

を前に して、 レ オアリス は ほ W の 一 瞬だけ気まずそうに視 線を落とし

けれど、 すぐにその 視 線を 真 っ直ぐにグランスレ イヘ と向け る。

長 い事 レオアリス は グランスレ イに眼を向けたままだ ったが、やがて静 かに

 $\square$ を開 いた。グランスレ イの耳に届 いたそれは普段より固 い響きだが、

恐れていた色はない。

「もう一度だけ聞く。バインドの事を、知っているな?」

グランスレイは覗き込 む漆 は黒の瞳 を見返した。 常に正面 から向けら れる・

瞳。

この瞳から逸らさない事 が、 彼を信じる証といえた。そして、 グランスレ イが

選んだ道でもある。

「知っています」

俺が軍に……王都に来る前からか」

「そうです」

レオアリスはグランスレイを見据えたまま、 僅かに眉を歪めた。

呆れた響き

と共に肺から大きく溜息を吐き出す。

まったく……」

三年間、それを知りながら、 ずっと自分を支えて来たのかと、 感嘆とも苦笑

ともつかない想 V) が湧く。

度眼を伏せ、それから再び視線を上げた。そこにあるのは、 いつもと変わ

らない強い意志の光だ。

「王にお会いする。その手続きを取ってくれ」

「お会いになって、何を」

決まってる。——王から直接、バインド討伐の許可を戴く」

王を守護すべき近衛師団の将として、バ インドを討つ。レオアリスが出した

答えに、グランスレイはゆっくり頷いた。

「早速、王へ上申いたしましょう」 グランスレ イは一度姿勢を整えると、左腕を胸に当てる。深く上体を折った。

ここには、それを伝える為に来たのだ。

お戻りを――剣士レオアリス」

執務室の扉を開けると、思い思いの場所で黙り込んでいた中将達がさっと顔

を上げた。入って来たレオアリスの姿を確認し、緊張 一番初めに口を開いたのはフレイザーだった。 した面持ちで立ち上が

――おかえりなさい」

柔らかい笑みと単純なその言葉が、 僅 いに躊 躇 を覚えてい た気持ちを溶か

えてくれた。

す。

思えば初めて近衛師団

に配属された時

ŧ

フレ

イザーはこうして笑って迎

「……ただいま」

レオアリスが照れくさそうな顔をしながらも頷くと、 クライフがほ っとした

ように息を吐いて、それから大股で歩み寄った。

「探しに行こうかと思ってたんすよ。ロットバルトに任してたら、日が 暮 れたっ

て戻ってこねえし」

にやりと笑ってレオアリスの前に立つ。扉の前にいたロ ーツトバ ルトはただ肩

を竦めた。

「ヴィルトールから大体は聞きました。 正直言って驚いたなんてモンじゃない

んですが、でもそれよりも先ずは腹立ってンですけどね.

そう言うとクライフは一旦言葉を切り、 唇を曲げ眉をしかめてレオアリスを

「とく」・眺めた。

「水くせえですよ。 上将も、 副将も。 言ってくれりゃ、いくらだって手伝った

のに

お前が口を出したら、事をややこしくするだけだ」

ヴィル トールの言葉に、クライフは首を巡らせて後ろを睨み付けた。

「そういう所が十分ややこしいっつーの。大体お前だって黙ってたくせに口出

すな」

「全てがお前のように単純じゃないんだよ。残念だけど」

「てめえ、本っ当」

悪かった。 ―一人で何とかしようってのは、 考えが甘すぎた」

ヴィル トールに身体を向けかけていたクライフの前で、 レオアリスは静かに

頭を下げた。クライフが慌てて手を振る。

「やめてくださいよ。 頭を下げて欲しいとかそんな事言ってんじゃなくて」

「そうです。大将がそう簡単に部下に頭を下げるものじゃ」

「もう一つ、勝手を言わさせてもらう」

中将達は顔を見合わせ、それから姿勢を正した。

―一隊に、バインド討伐の許可を戴くつもりだ。 直接は俺が出る。

ただ命

が下されれば、 バ インドの力は既にエザムとアス・ウィアン、それよりも十七年前の一 動いてもらう事になるだろう」

証明されている。 軍を動かす事は、 例え最終的にレオアリスがバ インドを倒し

たとしても、犠牲を出す事も考えられる。

「これは俺個 人の 問題でもある。 だから、 選んでくれて構わな 

出 来るかと問 えば、 正直 に言ってしまえば、 その 確 信は まだレオアリスの中に

は無かった。

必要なのは

王

 $\mathcal{O}$ 

下命であって、彼等の犠牲ではな

バ

インドを抑える事が

----それが水くせェって言うんですよ」

件で

「当然、 上将がどうお考えだろうと、 私 達はそのつもりですわ」

「よく、 考えて……」

もう一度、促すように彼等を見回した中で、ヴィルトー ルが灰銀色の瞳を真

0

直ぐにレオアリスに向 けた。

「結局どの時点であっても、 軍とバインドとの衝突は避けられません。

貴方が出なくとも、バインドは

同

じ事を続

けるでしょ

現時点

で近衛師

寸

が

出 ず、

ヴィル

ト |

ルの言葉に全員

が頷く。

クライフはもう一度、にやりと笑った。

結果 が 同 じなら、 早 -期に手 を打った方が ( ) いと思 1 ますよ。」

「決まりですね。 は苦手だろうけど、 まあ、 当然本来 口 ットバルトにきっちり戦術考えて貰いましょう。人 だ、 手考え付くよな?」

向 !けられたからかう視線を 口 ツト バ ル トは事 も無く返す。

 $\mathcal{O}$ 

役割

V

7

探し

剣士相手に策ですか。私なら先ず、退けと言い ますがね」

役立たね

屝 が 、開き、 グランスレ イが 戻ってくる。 室内 を一 度見渡してから、 レ オアリ

ス の前に立ち、一礼した。

「王への面会の許可が下りました。すぐにお会いいただけると仰せです。 仕度

を整え、王城へ参りましょう」

- 今……?」

こんなにも早く面会が叶うとは考えていなかった。 瞳を見開いたレオアリス

グランスレイが促す表情を向ける。

レオアリスは瞳を伏せ、自分の鼓動を数えた。

一つ、二つ、三つ――

意志は変わらない。

王に目通りする事を考えれば、過去を知った今でさえ、震えるような喜びを

覚える。

何故と問いかけても、答えのない感情だ。

瞳を上げる。

「――行こう」

そう言うと踵を返し、レオアリスは扉へと足を向けた。

官 0 冷えきった王 背を見 つめ 城 る。  $\widehat{\mathcal{O}}$ 廊 壁 下  $\mathcal{O}$ を歩きながら、 所 々 に 設け られ た灯 グランスレ 火 が、 1 V 才 は 数歩先 アリス を行く  $\mathcal{O}$ 姿 を 年若 夜  $\mathcal{O}$ 罶 1 上 に

浮 か び 上 が 5 せ、 ま た 闇 に 溶 か L て 1 く。

闇 に溶 け た先 に、 今よりももう少し背  $\mathcal{O}$ 低 *\* \ 彼  $\mathcal{O}$ 姿が 浮 かぶ。

た。 グラン ス レ 1 や他 0) 中 将達と戦 術 を 論 じ、 そ  $\mathcal{O}$ 切 り П に 驚 か さ れ る事 ŧ L

ばし ば あ 0 た。

才

ア

IJ

スは兵法などを始めとする様

Þ

な 知

識

を、

驚くほどの

速度

で吸

収

任務に お いて功を重ね、 次第 に、 だが 確実に 彼 0) 近 衛 師 団内 部 で  $\mathcal{O}$ 位置 は 古

ま って行 0 た。

剣 士 剣 へ の 士 が 禁忌となったその理 忌 避 ょ ŋ Ę その 剣  $\mathcal{O}$ 由 強さに対する驚 を知るごく一部 嘆  $\mathcal{O}$ 者  $\mathcal{O}$ 思 以 外 1 に  $\mathcal{O}$ 方が は、 強 曖 < 昧 な 模 って 糊 と 7 した 0

た 事 ŧ あ る。

に 対する否定的 才 ア IJ ス が な 近 見方 衛 師 は、 寸 に 配 ほ とんど消えていた。 属 さ れ . T カゝ ら半年 Ė 経 た な 7 内 に、 隊 内 で  $\mathcal{O}$ 剣 士

びきから少し オアリス 個 離 人によるものも大きかっただろう。 れた位置に身を置けば、 レ オアリスはすぐに誰とでも親 連携を重んじる隊というく

オアリスを中将に、そして大将に推 したの はグラン スレイだ。 なった。

グランスレ イは かつてのレオアリスの姿と、 今目 の前を歩く彼とを比べるよ

うに、もう一度その後姿を見つめた。

き、彼を支えるようになる事を、何の違和感もなく受け入れていたように思う。 思えば初めてレオアリスと正面 から向きあった時 から、こうして彼 の下に付

なり、 今まで上官だった者を飛び越えて、急に命令を下さなければ レオアリスは当初随分戸惑っていた。 その事に煩わ しさを感じていたと ならない立場に

言ってもいい。

推 したの できればあまりしがらみのない場所に居たかっただろうレオアリスを大将 は、 そこが 最 ŧ 彼  $\mathcal{O}$ 能 力 が 生かされ る場 所であろうと考えた故だ。

周 井 に 軽 んじら ħ る 事 のな į, よう、 事 ある毎に П 調を改めさせ、それも今で

はすっかり板についている。

は

逆にレオアリス 尤も、 どこか  $\mathcal{O}$ 砕 魅力でも け た 飾 ŋ あ 気 ý,  $\mathcal{O}$ な 表 7 態 面 度だけ で は 嗜 8 は はす 変わ くる も る事  $\mathcal{O}$ は な  $\mathcal{O}$ 本 か 気で改 つ たが、 め そ る 必要 れは

の先に、 まだ青年とも呼べ もっと大きな未来を向かえるだろう。 な ( ) 程 の 若 7 将だが、今ここを越え れ ば、 おそらく彼 はそ

は

な

いと思ってい

る。

可能であれば、自分がそれを見届けたい。

振 がり返っ 謁 見  $\mathcal{O}$ た。 間 0 前 促すように頷い ま で来ると扉 てみせると、  $\mathcal{O}$ 前 で立ち止まり、 レ オアリ レ Ź オアリ は 再 び Ź は 屝 に向き直る。 グラン スレイを

巨大な両開きの扉は音も立てず、ゆっくりと開いた。

左右には 広大な広間には、 抱え ŧ あ る 扉から深緑 柱 が 等 間 隔 の絨毯が最奥の玉座へと真直ぐに敷か に 並 び 高 1 天 井を支えてい る。 れ、 その

誰 定例 の姿もな 0 謁 V ) 見 (T) 際 V オアリスは足音を吸収する絨毯 などに は、 その奥にずらりと諸侯 0 上を玉座へと進 が控えるが、 今はそこには しんだ。

段高く造られ た玉座 へと昇る階段  $\mathcal{O}$ 前に、 左右 に分か れ て 立 つ 兀 つ 0) 影 が

ある。それを認め、グランスレイは小さく息を呑んだ。

四大公――ベール、ベルゼビア、ルシファー、アスタロト。

(定例の謁見ではないのに、彼等が顔を揃えるとは……)

王に対して僅 か なりと翻意が見え れば、 **,** , つでも討てるように」

んだかのように、ベルゼビアが低く忍び笑う。

「そう見えるか?」

グランスレ

イの思考を読

向けられた身を凍らす冷たい瞳に、グランスレイは心臓を掴まれ るような感

るが、 覚に陥った。ベルゼビアは四大公の中で、最も冷酷 もしレ オア リス 0) 上にそれを見たと思えば、 躊躇 な男だ。 **,** \ も無く手を下すだろ 冗談 め か して はい

う。 傍らのレ オアリスをちらりと見たが、 レ オアリス は彼等 真っ直ぐに顔を

向けたままだ。

「東方公、それ言うだけ無駄って判ると思うけど」

アス タロ  $\vdash$ の呆れた声 がそ  $\mathcal{O}$ 場 0 緊張を溶かし、 グランスレ 1 - は漸 く息を吐

いた。

アス タ 口  $\vdash$ . の 横に立 っていたルシファーが 穏やか な笑みを二人に向 け る。 波

打 つ漆黒  $\mathcal{O}$ 髪を首 の辺りで短く揃え、 暁 の空のような紫の 瞳を持った、 アス

ロトとはまた違う透明な美しさを持つ女性だ。

「そう構える事 は ない わ。レオアリスが王都に来た時こうして迎えたように、

今この場を見届 ける為にいるだけ。そして我々 が、この場の証 人となる」

オアリスは彼等の前まで行くと、その前に片膝を付き、

深く頭を下げた。

壇上の玉座は、今はまだ空のままだ。

増上の日座に とにずた名のすずた

御前だ」

鼓動

 $\mathcal{O}$ 

音

が

響くように感じられ

る程

の静力

寂

の 中、

ベ

ールが低く告げた。

一斉に四大公が片膝を付く。

微かな衣擦れと共に 玉 座 の 背 後 0 長 布 が 左右に開き、その奥の 屝 から、アヴァ

ンを伴って王が姿を現した。

口

一度その場を睥睨し、玉座へゆったりと身を預ける。

広間 が、 王 の 力 に満たされ張り詰 めていく。 四大公すら、 その空気に僅 かに

身を震わせた。

王が 玉 座 と 着 1 た  $\mathcal{O}$ を 確 認 べ ル は 顔 を上 げ、 レ オアリ ス と視 線を

向 けた。

直接の 口上を認める」

跪 1 たま ま、 レ オアリ ス は 頭 を下げ た。

「近衛師 団第 大隊大将 V 才 ア IJ ス、 御前 で  $\mathcal{O}$ 拝謁 [を賜] ý, 恐悦に存じます」

バインド、 か

伏せてい た瞳を上げると、 王は レ オアリスの 上 に 金色  $\mathcal{O}$ 瞳 を投げた。 低 く流

れる声に、 レオアリス は一層深 く頭を垂 れ る。

す。 畏れながら申し上げます。 本来管轄でない 事 は 十分承 バ イン 知  $\mathcal{O}$ ドが 上です。 向 か 0 たと思われるのは、 第一大隊 に、 バ 北 ンド  $\mathcal{O}$ 討 辺 境で 伐  $\mathcal{O}$ 

1

ご命令を」

四大公がそれぞれ、 僅かに視線を交わす。

面 を上げよ」

王 の言葉に、 オ アリスは 伏せ ていた上半身を起こし、 壇 上  $\mathcal{O}$ 玉座 に座す王

に 視線を向けた。

身を覆い尽くす、 強大な力の 波動。 それはこの広間の隅 々にまで余すところ

無く満ちている。

心地良さと畏怖とが、 跪いたレオアリスを覆う。

「……そなたはバ インドについて、 どこまでを聞い た

―私自身に、 関わ る事を」

グランスレイには、自分の鼓動の音が、 広間 に割れ鐘

の如く響き渡るように

た。 思える。 長い間、 誰も何も言おうとせず、 その 诗間 は永遠のようにも感じられ

· 注 王は玉座 でい たが、 の肘置きについた右腕に頭を預け、暫らくその瞳をレ やが いた。 オアリスの上

近衛師団 [を動 か す許 可は与えられ ん に

١ ر

7

ゆ

つくりと口を

開

その場 の全員が、 呪縛を解かれたかのように、 身じろぎをして王に顔を向け

る。

7)

た顔を上げた。

視線を落とし言葉を失ったレオアリスを見て、グランスレイは思わず伏せて

だが グランスレイが口を開こうとする前に、 アスタロト が壇上をきっと見上

げる。

「何故です!? レオアリスが離反すると、そう思ってるなら」

王の元に詰め寄らんば かりのアスタロトの肩を、 ルシファー がやんわり と押

さえる。

王は彼等の驚きや戸惑いを前に、低く笑った。

勘違いをするな。バインドを相 手に軍 · を動 カゝ ? す 事 は、 無意味だと言っておる

のだ。それはそなた達も良く判っていよう」

玉 座 の背に預けていた体を起こす。ゆらりと、 広間全体の空気が揺らいだ。

剣士レ オアリス」

弾 かれるようにレオアリスは顔を上げた。

バインド討伐はそなた自身に命じよう。見事打ち倒し、 度だけ、大きく瞳を見開 オアリスは深く頭を下げた。 我が前に戻れ」

き、レ

暗紅色の長布を翻し て王が 玉座を立つ。

全員が首を垂れ見送る中、 玉座 の背後の扉の前で、王はふと足を止めた。

「――まだ、そなたは全てを聞いてはおるまい」

訝しげに王を見上げるレオアリスに、 深い金色の瞳を注ぐ。 その瞳の中に読

み取れる感情は無い。

「そなたの養い親に会うといい」

問いかける間もなく、王の姿は扉の奥へ消えた。

上 将お一人で、 行かれるのですか ! ? \_

「そんな無茶な話 何 こでその まま 納 得 て来 5 れ た んです!」

ランスレ 人執務室に戻ってきたグランス 1 · に 詰 め寄る。 ヴィ ル <u>ا</u> ル レ とロ 1 の言葉に、 ツト . バ ル トは クライフやフレ 非難こそ口 に 1 しな ザ ĺ か が 0 グ

たが その 顔 の上 には 到 底 承 服 L カン ね る色が 浮 か  $\lambda$ で 1 る。

インド · 相 手 に 軍を出す す意 味 は な V) と、 王はそ  $\mathcal{O}$ お つ もりで 命を下され

フレイザー は 不 服そうに目 0) 前 の顔 を睨 んだ。

ではせめて、 グランスレ イは考え込むように彼 我等のうち一名だけ 等の でも、 顔を見渡 上 将 の傍 L た。 に お 王 付 けく は 軍 、ださ を 動 か 1 す 事 は 認

めず、レ オアリスにだけ討伐を命じた。

指 確 か に たっ た 一 人で 行 か せ る訳 に は 7 か な だが、 その 事 が 王 に 背 7 たと

摘 批 され 判  $\mathcal{O}$ 糸 る 事 口をこれ以 に ŧ 繋が Ĺ り 広げさせるべきではない。 か ね な 王 か らではなく、 他  $\mathcal{O}$ 諸 侯 か ら。

た

口 ツ  $\vdash$ バ ル  $\stackrel{\circ}{\vdash}$ 上 将に付 いて、 北 方 向 かえ」

口 ツトバ ル  $\vdash$ は 微か に目を見開き、 それ カ ら笑った。

私 口 ツト の立場なら、それほどの咎を受けまいとお考えですか バ ル トの指摘 に、グランスレ イは 僅 かに П 篭る。 彼 0) 本 来  $\mathcal{O}$ 身分を考

慮し

たの

は

事

実だ。

ヴェルナーという地位を背景に

· 持

つ

口

ツ

}

バ

ル

}

なら

ば、

諸 侯 の批 判 の声は封じ込める事が出来る。

「……そういう意味だけではない。お前なら預か

る隊も無く、か

つて上げ

一将に

伴

0

て郷里を訪れた事もあるだろう。 それ故、 適任と考えたのだ。 不服 か ?

「いえ。喜んで参りましょう。 まあバインド相手では、 私が力になれる事 はほ

とんどないでしょうが」

グランスレイは不器用だと、 口 ットバルトは心 の内で笑う。 ただ違うと言え

ば いいものの、 彼 の性格ではそれはできな いのだろう。

もまた、 彼に全般 0 信 頼 を置 1 てい るのだ。

今回その

実直さが

少

し

ば

か

り

0

不

安を招きはしたが、

だからこそレオアリス

上 一将は 刻後、 夜明けと共に発た れる。 戻って準 備をし、 再びここへ」

「承知しました」

ると、踵を返して扉に向かった。 夜明けまで、それほどの時間は無い。ロットバルトはグランスレイに一礼す

九

王都を覆う夜の帳が、 ゆっくりと西に後退していく。

澄 んで冷えた大 、気が、 厚 1 石造りの 城 内に ŧ 静 か に染み込んで、 それ が 全て

覆うように漂っていた。

の音を吸収

してい

るか

0)

ように思える。

王の

執

務室

0

中にもその冷気が室内を

は、 方 ~ 向 カン 1 まし

オアリス 北 た

傍らに立つアヴァロ 養い親に会えば、 レオ ン アリスは十七年 に視線を向 け、 -前に時 王は 無言 起こった事とその理由の、 のまま頷く。

を知るだろう。 知った時に、どうなるの か。

自分を憎み、 敵対する者となるか。

それとも。

王は 何かを期待 する か のように、 薄く笑みを浮 かべ た。

そ れ からふと、 次第に白 み始めた夜の しじまに金色の視線を注ぐ。

あ れは いつの どこの戦場でだっただろうか。

全て

もう既に遥か遠 1 過去 のようにも、 昨 日 の事 のようにも思える。 時間 は 王に

とって、それほど意味を持たずに流れていく。

あれは、バルバ ドスの 戦乱の折だ。ならば三百年ほど前の事 か。

あの時の彼等は、王国の要請に応えて戦場に赴い

た。

あの、剣士。

一度だけか、直接話す事があっただろう。

屍の山の上、紅い夕日と返り血を全身に浴びて、笑った---。

ただ切り裂く者としての 『不思議なものだ。 俺達 み、 は闘 存在する』 う為に生ま れる。 他と馴れ合わず、 受け入れず、

かもしれない それなのに時折、 Ļ 命を捧げる程の想いからかもしれな 心に入り込んでくる者が あ る。 ほ 1  $\lambda$  $\mathcal{O}$ 些 細 なきっ かけから

417

『ただ、そうなれば、俺達は剣だ。その相手、それだけを守るための剣として、

自らの生にもう一つの意味を得られる』

あの剣士は、未だその相手を得ていないと言っていた。

『剣士にとって、その剣を捧げるべき相手を得る事は、 何ものにも変えがたい

喜びだ」

『私も、そのような剣を得たいものだ』

『いずれ得られるだろう、王よ。貴方なら』

第四章

雪がひとひら、にび色の空から落ちて地に辿り着く前に溶けた。

次第に数を増 し、 ゆっくり、 やがて次 、々と、 終り なく落ちてくる。 瞬く間に

茶色の土や枯草が白く覆われていく。

周囲

を深

北

い森に閉ざされ、背後には低く幾つもの山が連なる。そしてその更

に 奥には、 再び鬱蒼とした森が広がっていた。

に

外界から隔絶された土地に、寄り添うように建てられた粗末

な家

々。

その上

の辺境を覆う黒森、ヴィジャ。それを抜けた先は最早、王の版図では

ŧ 白 1 幕 が 容 赦なく降り募っていく。

「これが始 まったら、 ここは暫くの 間 は 雪の中だ」

口

ットバル トを振り返り、レ オアリス は懐 かしむように空を見上げた。この

北方の辺境では、 冬は 年の 内 の半分近くにも 渡り、 世界を閉ざす。

「よく、 ずっと雪が降 ってくるのを見てたな。 何 か 案外飽きない ・だろ」

様々な軌跡を描きながら落ちてくる雪は、見ていてつい引き込まれる。この

な \ <u>`</u>

村で、 雪が音もなく降ってくるのを眺めながら、 色んな事を取 り止めも無く考

えた。

それは一族の事だっただろうか、自分の未来の事だっただろうか。

番は、この厳しい地で、決して豊かではなく、 それでもこの土地 に寄り添

うように暮らしている、彼等の事だ。

白く染まり始めた細い道を、自分が暮らした家へと向う。

『そなたの育て親に会うといい』

彼等はどんな事を知っているのだろう。もう大抵の事では驚かないと思い

がらも、僅かな不安と、久しぶりに祖父の顔を見れるという懐かしさに、レ オ

アリスは足を早めた。

長老は時期外れの帰郷に、驚いた顔を上げた。

「珍しい事じゃ。年に一度しか帰らぬ奴が」

そう言いながらも、手にしていた書物を脇に積み上げた本の山の上に置くと、

な

嬉しそうに立ち上が り、 囲炉 裏 Ø) — 角を開けてレオアリス 達を手招 *\*\

「お久しぶりです」

口 ットバルトが会釈をすると、 長老は表情の読み取りにくい鳥に似た顔 の上

に、確かに笑みを載せる。

「まだ、これの傍にいてくださるか。有難し、イント

い事

だし

囲炉裏の前にあぐらをかいて座り込み、レオアリスは「どういう意味だよ」

周 ?囲に支えてもらわねば、 お 前 のような若造が、 まともに上になど立てまい

祖父を睨

んだ。

て

「――知ってる」

長老は自分もレオアリスの前に腰を降ろしながら、 少し意外そうに顔を傾け

囲炉 裏に掛けられた鍋 カン ら湯を器 に酌み、二人の前に置く。仄かな香草  $\mathcal{O}$ 

香りが狭い室内に漂った。

「ほお。成長したものだ」

からかうような響きにレオアリスは不満そうに顎を逸らせた。

リスが今の そないが、 のそれぞれ けれど、 レ 自分 位 が 置 様 オアリスが に 々 一人で生きているのではない事 ( ) な配慮をしてい る 0) は、 望むままに 彼らが る事 · 動 在ってこその事だ。 は、 けるように、 良く判ってい は、 常に実感していた。 グランスレ る。 普段 イを始 П に出す め、 レオア 事こ 隊

自分の一族は王に対して反乱を起こしたという。

それでも今ここにいるのなら、 本来ならば近 衛師 寸 にいるどころか、生を持っている事すら不思議な立場だ。 それはその時その時に、 誰 かが手を差し伸べ

てくれて来た結果なのだろう。

に仕える事だ。 る炭火に 既にレオアリスの中に迷う心はない。 木のはぜる音と共に、 だがその事は今回 向 け T 何 1 . 故そ た顔 の件を経て、今まで以上に強く心の中に根を下ろしている。 を上げ、 0 囲炉裏の中の炭が崩れる。レオアリスは赤く熱を発す 事に、ここまで強い思い 長 老 の落ち窪 自分が望むのは、 んだ瞳を捉えた。 を感じるの 近衛 か は 師 団に 分か らない。 あって王

「教えて欲しい事があって来た」

――ほう」

め んどくさいから単 刀直入に言うぜ。 俺の一 族について教えてくれ。 それか

ら、――バインド」

長老はしばし、じっと囲炉 裏 の上に視線を落としていたが、 やがて深い 溜息

と共に顔を上げた。

「知ったか」

肺 から押し 出すようなその声には、 苦しみと、どこか開放にも似た安堵  $\mathcal{O}$ 

きがある。

「バインドが、王都に現れた」

弾 か れるように長老 は 腰を浮かせた。 その拍子に脇に積んであった書物 が 崩

に付か れる。 れた手 表情  $\mathcal{O}$ が、 掴 み にく 囲炉 裏 7) の縁 そ  $\mathcal{O}$ 顔  $\mathcal{O}$ 木 に激 枠を強 しい (く握 驚愕と 'n 締 僧  $\Diamond$ 悪 た。 が交じり、 身体を支える為

「――まさか。……死んだと」

「……思われてたみたいだな」

祖 父の 見 えせた激 L ζ) 感情 に驚きを覚えながらも、 レ オアリスは立ち上がると

祖父の横に行き、崩れた本を拾い上げた。

「相変わらずごちゃごちゃしてんなぁ」

所狭しと書物や薬草が積み上げられた壁際にそれらをまとめて置き、 改めて

祖父の脇に座り直す。再び、じっとその顔を見つめる。

「――生きてて、まだ斬り続けてる」

「……会ったのじゃな。バインドと」

長老はすぐに呼吸を落ち着け、静かにレオアリスを見てああ」

―どこから、 話すべきか。 ……やはり、 我等とお前 の一族との関わ ŋ から

入れ替わるように深い悲しみが

広が

ってい

た。

既にその

面

か

らは

じゃろうの……」

憎し

みの色は影を潜め、

んしゅんと立てる音だけだ。

口を閉ざせば聞こえるのは、

囲炉

裏の炭のはぜる音と、

沸きあがる湯が

L

ゆ

降り続ける雪に音を吸い取られるような静

やがてゆっくりと口を開いた。

長老は暫らく黙ったまま、立ち昇る湯気を追う様に視線を上に向けてい

たが、

寂。

彼等-剣 士 の — 族に出会ったのは、 それほど昔ではない。 オアリスが生

まれる僅か一年前、ほんの十八年ほど前の事だ。

## 『忌み族』

訪れる地に災いを呼ぶとして疎んじられる種族をそう呼んだ。

疫病、 災害、 飢 餓。 偶然か 心然 か、 そう呼ば れ る 一 族 は 確 かに、 災 1 0) ある

石を以て追われる事が常だった。

場所にその姿を見られ

る事が、

多

根拠

0

ない

迷信に近

*\*\

ŧ

0

では

あ

0

た

が、

だろう。 カイル が長とし 数年か、 して 一 数十年 族を率いるようになってから、 か。 常に疎 ま れ ながら生きるには、 どれに ほど 例 え様 0) 時 ようの が 流 れ たの な

長い月日だ。

た。 り着き、 一年の半分近くが雪で閉ざされるそこでなら、 箇所に落ち着く事 誰 も住み着くもの が 叶  $\mathcal{O}$ わ ず、 な *\*\ 凍 各地 0 た大地 を点々としなが の上に、 誰からも忌まれる事なく、 5 細 漸く北 Þ とし た村を作 0) Щ 脈  $\mathcal{O}$ 麓 上げ に 辿

ひっそりと暮らしていけると思ったのだ。

その Щ 脈 の更に奥に広がる深 *(* ) 森、 黒森 の中に、 彼らの 剣士の一族の里

があった。

剣 士 の存在を知った時、 村人の誰もがこの地を離れる事を考えた。 自分達が

忌み族と知られれば、 おそらく剣士達はこの村を、 瞬く間に滅ぼしてしまうだ

ろう。

だが ―ここを出て再び彷徨う事は、 抑えがたい疲労を伴った。剣士達 の存

在を恐れながら、それでも安住を求める心を捨てられないまま、不安 0 内 日々

を過ごした。

は薄れ、 けれども、 不安は 日々の中で剣士の一人とも出会う事はなく、次第に恐れる気持ち 和 5 V でいった。

誰も、この地には来ない。

もはや憎しみをぶつけられる必要はないのだと。

度目の厳しい冬を越 し、 短 い春を終えようとしていた頃 の事だ。

薬草を摘 みに数名で森の中に入り、そこで一人の若い男に出合った。

初 8 カイ ル 達 は 他 者  $\mathcal{O}$ 存在に怯えさえ覚え、極力係わり合うのを避けようと、

すぐにその場を離れるつもりだった。

だがその青年は 周囲を見回 l, しきりに思い悩む様子が見て取れる。

どこかほっとした色を浮かべた。

が

思

わず道

に

. 迷

0

たの

か

たと声

をか

けると、

青 年

もま

た驚

7

た 顔

をし

たも

0)

 $\mathcal{O}_{\mathbf{k}}$ 

カイル

どうやら家にひどい怪我を負った者がいるらしく、 薬草を探しに来たのだが

たように溜息をつく。

どれが効く

、のだか・

良く分からないのだ、

と下生えに眼を落として手を付

け

カン

ね

能 を 確 持 か に つの 森 か、 一 の中は様々な野草が至る所に生え、 見して見分け は 付 か ないだろう。 薬草 カイル に疎い者にはどれ は周 ŋ É 見 が 回 何 0) 効

番良く効く薬草を見つけると、それを示した。

お前さんは運が , , い。今の時期しか花を咲かせんものじゃが、その花弁なら、

深 1 傷でも七 日 ほど塗 布 してお れ ば 塞がるじゃろう。 ただ磨 り 潰 せ ば ょ **\**\

そう告げると青年は ひどく嬉しそうに笑い、 礼を述べて教えられ た薬草 · を 摘

むと森の奥に消えた。

のだと、その事が心を暖めた。 と言葉を交した事すらなか 他者と関 わ る事には 僅 カゝ った自分達にも、 な不安を覚えた。 反面、 まだ礼を言ってくれる者が もうずいぶ んと長 1 あ 間 0 他者

た

数日後、その青年がふらりと村に現れた。 彼は驚く村人達の前に、 森で獲 0

たらしき獣を差 し出した。

あんた達 自 分達 は O肉を食べないのだというと、 お 陰 で助 かった。 結構 マズイ傷だったんだ。これはその 精悍な 面 にばつの悪そうな色を浮かべ 礼 だ

別 の礼をするよ。 何がいい?」

る。

「そりや逆に

悪

*\* \

事をしたな。

ま、

狩

0

ちまったし、

里に持ち帰って食うか。

か 口 特には。 |復し な ١ ر それよりも、 じゃろう。 今、 あ 0) 薬草 煎じ薬を持ってくるか  $\mathcal{O}$ みで は傷 は 塞が 5, っても、 戻ったらそれを飲ませ 体 力まで は な かな

てやるといい」

青年は驚いたようにカイルを見ると、 再び嬉しそうな顔 を見 せ た。

「礼に来て、また助けられるとはな。 俺は、 ジン。この 奥の 里に住 んでる。

最初に言っておくが、剣士ってヤツだ」

やっぱり知らなかったな。 長老の顔に浮 カゝ んだ驚きの 安心しろよ。 表情を眺め、 青年 何も取って食う訳じゃない」 は 面 白そうに笑った。

それから、今まで周囲に集っていた村人達が怯えるように後退ったのに気付

困ったように . 黒 *\* \ 髪をくしゃりと交ぜる。

剣士ってそんなに印 象悪 *(* ) . か ?

カイル は慌てて首を振 った。

, , ١ ر P<sub>o</sub> すま んの。 わしら は 剣 士を見 たの は初 めてじゃて、 少し

ておるのだ」

それはただの言い訳というだけでもなく、本当に彼には好ましい印象し か 抱

7 V) な か 0 た事もな あ る。 それに剣士とはもっと恐ろし 7 姿なのだろう、 と漠

然と考えてもいた。

1

「それならいいけどなぁ。 でもここに移り住む時、 周りの 奴等 カ いら俺達が が *(* ) る

それでわざわざ住み付くんだか

5

随

分

胆

の据

わ

0

た

奴

らだって、うちじゃ話題になったんだ」

 $\mathcal{O}$ 

は聞いてたんだろ?

「……いや、知らなんだ」

「何だ、 怖が つて ない 訳じゃなかったんだな。 でも珍しいぜ、 こんな 辺 境 に好

んで住むな んて。 一 年 の半分近くが冬だ。 あんまり寒さに強そうにも見え な

けどなぁ」

それについ ては 曖 昧 な返答し か 出 来 な か っった。 青 年 は 残念そうな様 子し か 見

せず、 取り /繕つ たように聞こえなか ったかどうか は 分か らな \ <u>`</u>

自分達が忌み族と呼ばれる者である事を知られれば、 この青年はやは り 剣 を

抜くかもしれない。

今までどれほどそれを経験しただろう。

浴びせられる石つぶて、 罵声、 嫌悪の眼差 l<sub>o</sub> 時には武器を以て追われた。

け れど青年 はそれ以上 詮索する事もなく、 受け取 った煎じ薬にもう一度礼を

言うと帰ってい 0 た。

それからしばしば、 青年は村に姿を見せるようになった。

ょ ほど怪我人を癒せた事に感謝しているらしく、 あれ以降は獣こそ持ってこ

人の時もあ れ ば、 数人を伴う事もあった。 怪我をしていた剣士を伴って現

しらを手土産に持ってきては、村人達と言葉を交わ

た。

れた事もある。

な

かったも

0

の、何か

その 男は・ 青年より十 は 見た目も上で、髭を蓄え、一見して学者 風 に も見え

俺 0 義 兄 なんだよ。 見た目はこれだけどすぐかっとなっちまって な、 お 陰で

要らん負傷が多い んだ。この通りすっかり良くなったけど、今回ば か りはさす

が :に爺! 様 達 に 会わ なきや死 んでたぜ」

トと名乗 青年 . (7) ý,  $\Box$ 調 カイ は 軽 ル達に歩み寄りその手を取ると、 やかだっ たが 相当に深 刻な傷では 気難 あっ たのだろう、 しいそうな顔に子供の 男は、 ゲン

ような笑 人みを浮 か べ、 Þ は り 何 度 も礼を述べ た。

剣 士 達 は 力 1 ル 達  $\mathcal{O}$ 生 活 に . 興 味 を持、 ち、 術や薬草に つい · て 様 々な質 問

またカ 1 ル 達で は 木 難 な作業を良く手伝ってくれた。

雪の 剣 木を伐る時は斧など必要とせず、一人剣士が黒森まで行って斬ってくるという。 「やり過ぎるとヴィジャが怒るから、結構気を使うけどな。けど意外とそこが カイ  $\mathcal{O}$ 被害を受けあちこちが壊れ 制 ル 御 達  $\mathcal{O}$ 訓  $\mathcal{O}$ 種 練に 族 がは元 もなる。 々力も強くない。自分達で建てたあばら家は、 だか ら 一 ていたが、 番 制 御 それを補強してくれ 飛ばし易 (1 ヤツに行 たのも彼等だ。 かせるんだが、 先の冬に

義兄に冷たいと思いませんか」

大抵ゲン

1

カン

な。

良く失敗して伐りすぎてるが」

ル に細 達 彼 に は は 力 恐 1 の注意を怠らない。 ろ ル 達 L に 1 事で、 訴えるように溜 何とも返事 息 を を 向 L けた か ねた。 が、 黒 力 森 1 ル  $\mathcal{O}$ 達は森 樹 を伐 に入るのでさえ ること自

カイ

常

心

L か 黒森に暮らしている事さえ、 彼等 は 楽 l んでい るようだった。

「失敗するとどうなるのじゃ。殺されてしまうのか」

村人達が恐々と身を乗り出すと、青年はあっさりと笑った。

「それは無 ま あヴィ ジャ は優し いから、二、三日出してくれ な V) 程

けど奥に行っちまうとでかい  $\mathcal{O}$ がい るからな。ゲントはそれでこな 1 だ一 戦交

えて、腹を半分喰われかけて帰ってきたんだ」

けたと聞いて、 できるものではな 剣士 黒森 0 の奥深くには、 口 [復力 力 の高さ、 イル 強大な 第一そんなものと戦うなどと、想像も及ばない は 驚い 戦場 魔物 た。 での強さを垣 が あ の時 棲むと言わ 渡した薬草は、 間 見た気がした。 れてい る。 そこまで深 その 魔 物 に 1 傷 ものだ。 喰 12 わ 対応 れか

彼等が 村 を訪 れ るに つ れ、 次第 に 彼 5 0) 事 t 判 0 てきた。

Ł 満たな 里 人の 数 い小さな部族のようで、 は そ れ ほど多くは 無 \ \ \ 皆外見 青年 は若 を含め、 いが成 里にい 人は るの かりで、 は 全部 幼い子供 で二十 · 名 に は 無

かった。

まとめ役が要るから。」剣士達の誰もが笑ってそう言い、実際彼等の中にも長と 青年は中でも一番若 かったが、どうやら一族の長であるらしかった。「一応、

1 うほど取 り立てた上下関 係 は感じられ ない。

ただ青年が常に首に掛 け て ٧, た 青 V) 石 0) うい 、 た 銀 0) 飾 り、 それは長

が受け継

ぐものなのだと聞

ζ)

た。

げる。 にし、 誰 実際に デ 一 その強さに憧れを抱 番 彼 強 が 1 剣を持  $\mathcal{O}$ か Þ つ所を見た事などなかったが、 は *\\* り 興 ていた。 味を覚えてそう尋ねると、 剣士 達 皆迷わず 0 誰 ŧ が被 青 年 を誇 を挙

夏も盛りになる頃には、カイル達の不安は薄れていた。

巷で殺戮者として恐れら れ、 自分達 が 存在 を 知 5 れる事 を恐れ 7 **,** \ た剣 士達

は、付き合ってみれば自分達と何ら変わる事はなかった。

そして不思議と、全く性質の異なるはずの彼等と気が合った。

ただ切 り裂く存在として恐れられ . T *\* \ た剣 ± 何 がそうさせていた 0 か は分

からないが、もはや彼らを恐れる気持ちはどこにもなかった。

ただ、自分達が忌み族と呼ばれる者である事実を、彼らに告げられないでい

る事に対する罪 悪感 は 日増し に カイル 達 の中で大きくなってい った。

ち、 隠したくないという思いと、 その二つが常にカイル達の心の中にあった。 告げる事で彼ら 0 視線が変わる事を恐れる気持

芯 なやかに背の半ばまで流れている。 ある時、 の強さを感じさせる、凛とした美しい女性だった。青年と同じ漆黒 青年が一人の女性を連れてきた事がある。 冬の前だっただろう。 の髪が、

「紹介するよ、俺の妻だ」

彼女は青年の傍らで頭を下げ、穏やかに微笑んだ。

「これはまた、美しい女性じゃの」

当然カイル達と美の基準など違ったが、 自然とそう口から出たのは、 内 面か

ら照り映えるような美しさを感じたからだ。 その 理 由は、 すぐに分かった。

「い *(* ) 女だろ。 けど剣も気も滅法強くてさ。 口説き落とすのは 命懸 けだったん

だし

こっそりカイル の耳元で囁き、 隣から向けられた視線に慌てて顔を引き締

8

る。 それから集まっていた村人達をぐるりと見渡した。

すると暫らくは連れて来れない から、 紹介しておこうと思ってさ」

「この冬を越したら、子供が生まれるんだ。そろそろ雪も降り始めるし、

そう

内 から零れる光は、 ますます輝きと柔らかさを増したように思えた。

その場の者達は皆顔を見合せ、それから口々に祝いの言葉を述べる。

青 年 -は少 し照れくさそうではあるが、 その上には待ち遠しくて仕方がな V ) 様

子が見て取 れ る。

カイル達もまた、 自分達 の事のように喜びを覚えた。

青 年 . (7) 義 兄、 彼の 妻 へ の 兄 のゲントは二人の肩に手を置き、 やは り嬉しそうに

破顔 した。

剣士なんて戦うばっかりが頭にあって、他は二の次でな。 我々の一族に漸く

彼

女の

生まれる子供だ。 待ちに待った子だ。 きっと、 いい子が生まれるだろう」

その言葉に、レオアリスは形容しがたい表情を浮かべた。

右手が、服の中に納めた銀の飾りの辺りを押さえる。

その子供――それがおそらく、レオアリスの事なのだろう。

戸惑いと、思慕、喪失。

そんなものが入り混じったその顔を、 長老は悲しげな瞳で見つめた。

その夜、村人達は誰からともなく、それを告げる事を決めた。

もし疎まれるとしても、 他から耳に入るよりは、 自分達から告げた方が

と思ったのだ。

告げようと決めたものの、そうするのに数日はかかっただろうか。

彼らの表情が、どう変わってしまうの

か。

こうして他者と交流する事が、どれほど心安らぐ事か、

どれほど失いがたい

ŧ のか

それは初めて手に入れた安らぎだ。

今更それを失ったら、この先の放浪は耐え難い 苦痛を伴うだろう。

それでも意を決して告げたのは、どうしても、

これ以上隠していたくなかっ

たからだ。それは彼等の信頼を裏切る事になる。

そして、忌まれたとしても、彼らの手にかかるのであれば、その方が いいと。

だが、 恐れ ていたような反応は全くなかった。

まるで裁断を待つ面持ちで顔を伏せた村人達を前に、 剣士達は少し途惑った

ように顔を見合わせる。 それ から先ずは青年が、 半ば苦笑しなが らも申し 訳な

さそうに口を開いた。

「緊張してもらって悪いが、最初から知ってるよ」

- 緊張してもらって悪しか。最初から知ってるよ」

村人達が耳を疑ってざわめく様を、 彼等はどこか面白そうに 眺 めた。

「そりゃこんなとこに来るんだ、ある程度訳有りだろう。

第一

俺達

の方が

あち

こち行くからな。自然と耳には入る」

「それで……」

「それでって言われてもなぁ」

青年は腕組みし考え込むように天井を見上げた。

……我らは、災いを呼ぶと」

「呼べんの?」

逆に興味深々といった態で問 い返され、 カイルは返答に詰まった。 そんな事

は今まで考えた事もなかった。

「い、いや……」

呼べないんだろ? じゃああまり意味はない。 まあ、 迷信なんてのは大体が

## そんなもんだ」

自分達の恐れと不安が滑稽に思えるほどあっさりと、 彼等はそれを笑い 飛ば

した。

剣士というものが皆そうなの カゝ は分からな \ \ \ だが 確 か に、 迷信など気にも

留めない · 程 の強さが彼等の中にはあ つった。

カイル 達 の喜びがどれほどであったか、言葉に言い表すのは難し

ただそれが全てで、これまでの放浪の苦痛を癒し 溶 カュ す  $\stackrel{'}{\mathcal{O}}$ に は、 それで十分

だった。

肩の力が抜け、

安堵に座り込んだ村人達

の背を、

剣士

達

 $\mathcal{O}$ 

手

が

軽

< 叩 ٧̈́

た。

冬に入って、世界が雪に閉ざされ始めても、 村と剣士の里とは互いに行き来

を続けていた。

そんな中でふと疑問に 思った事が ある。

出会ってからずっと、 彼等は全くと言ってい · い程、 戦場に出る様子がなかっ

た。 通常、 戦場に , , · る事 の多い彼等がこんな北 の辺境に定住 している事もまた

疑問ではあったが、尋ねるとあっさりとその答えは返った。

俺達は主持ちじゃないからな。必要な時に要請を受け、自分達が気に入った

戦いなら参加する。気楽なもんだろ」

主持ち……?」

黙ったまま聞 いていたレオアリスが、その言葉に引かれるように顔を上げる。

懐かしむように細めていた眼をレオアリスに向け、 カイルは頷いた。

「そうじゃ。 剣士には二通りあると彼は言っておった。 自由意志で戦う者と、

主を持つ者。わしはどちらが良いのかと問うた」

だ。 得る事に等しい」 「よりけりだな。そこに条件がある訳でもないし、必ずしも主って概念でもな 剣士ってのは言ってみれば抜き身の剣だ。 だが剣士にとって、 剣を捧げるべき相手を得る事は、 主を得る事は、 何にも勝る存在 剣を収め る 鞘を 理由

「剣を、捧げるべき相手――」

お前は既に見つけておるじゃろう」

窪 んだ瞳を、じっとレ オアリスに据える。 その前で、 自分  $\mathcal{O}$ 中  $\circ$ 想 いに答え

を見つけたかのように、 カイルはそれを暫らく見つめていたが、 レオアリス 0 瞳 の光が 再び ゆっくりと語りだした。 強さを増す。

今まで懐 かしむように 語 って *\* \ た声に、 痛み を堪 えるか のような響きが 混じ

る。

たのだ」 気にはならなかった。だが ある事も、 それは思い 「彼等との交流は、 返せば ここが死と隣り合わせの厳しい冬を持つ北 短 今までの放浪の苦痛を全て和らげるようなものじゃった。 1 日々で、 ――それでも確かに、我らは忌み族と呼ばれる者だっ あったが、 その間 我ら は自治 の凍土である事も、 分達が忌まれ るも 全 く ので

きっかけは、北方辺境軍の村への地税調査だった。

軍は彼らが何者であるかに気付き、そこにある事を疎んだ。

忌み族とは根を辿れば、 軍に正式に、 忌み族を排除せよと命が下されてい 貧しさや日々の苦しさを転化する為により低 る訳ではな い位置

 $\mathcal{O}$ ŧ 0 を 創 り、 心 を慰め る為に 創 5 れ た 蔑称 で あ り、 長 1 時 を 経 7 般 0) 中に

流布するようになった、謂わば迷信に過ぎないのだから。

ただ単に、このような北方の 辺境にある軍 は 王 都 0 軍とは違 い、 地 の者 達で

多く構成されてい る。迷信もまた、 彼等 (T) 中では、 現 実感 を伴っ て生きてい た。

出て行けと迫る彼等と、押し問答を繰り返す日々が続いた。

偶然にも、 その年はいつにも増 して厳しい寒さが続き、 近 隣 の村でも多くの

者達が寒さと飢えの為に死んだ。

この 厳 L *(* ) 冬は あ 0) 村 0 者達 が 呼んだのだと、 ۲, つしかそんな噂 が 流 れ 出

していた。

彼等さえいなければ、自分達の生活はもっと楽なはずだと。

凍りつくような一日を越す毎に、 兵 達 0 顔 に ·も憎· L み  $\mathcal{O}$ 色が . 募る。

そして、冬が漸く折り返し点を迎えた頃、 耐えか ねた警備 軍  $\bigcirc$ 一小隊 がが 村

と押し入った。

彼等は 入 ) り 口 近 くに あった家に火を放った。 村人達 が 凍 った大地を耕 L て

作っていた薬草畑にも、燃え盛る松明を投げ入れる。

それ から 止めようとして飛 び出した一人を、 斬り捨てた。

それは今までによく見た光景だった。 ひと時なりと身を落ち着けた土地 で、

終われ りは いつもそれとあまり大差な が形 で訪 れ た。

よって命を取りとめたあ の男だった。

だが、

その時そこに、

剣士

達

の一人が

居合わ

せたのだ。

彼は村・

人

達

の薬草に

村に来て 7 た  $\mathcal{O}$ は 僅 カン 一小 隊  $\mathcal{O}$ みだっ たが、 彼は それ を全て斬

それ

が

王

0)

軍

で

なけ

ń

ば、

結果

は

違っ

てい

た

 $\mathcal{O}$ 

カゝ

ŧ

L

れ

な

\ <u>`</u>

り捨

ってた。

进 炉 裏  $\mathcal{O}$ 前 に 座 り、 炭 の上に視線を落とし たまま 動 か ない レ オアリ 、スに、 力

1 ル は 痛 4 を宿 L た声でとつとつと語る。

辺境の一小隊とはいえ、 軍に剣を向ける事、 それはすべからく、 彼等を王に

ŧ, それは瞬 対する反逆者とする事 それは王の領分。 < 間 に、 反乱という名に形を変えた」 他の者が手を出せば、 であった。 例え王 が 事 反逆者となるのは当然じ 実 を知 り、 軍 を 咎 8 罰 したとして やった。

辺境軍を統括する司令官は ころまで進 ても、それを止めたい 「この辺境 暗い 夜 が に向 んでい 高 波 けて、 のように押し寄せる。 た。 と願 軍 もはやわしら が つた。 差 切省みる事 し向けられた。 ーーだが、 . О それは、 問 は無か 題 では 既に事 カイ わ った」 しら なくなり、 ル 態は は自 達 に 分達 取 は り返 わし 成 す  $\mathcal{O}$ 命 5 術 L <u>О</u> に Ł 陳情、 付 代えたとし な かないと カゝ った。 など、

済まな わしらがこんな所 に移 り住 んだばっかりに、 こん な事 に なってし

もうた」

だが、 詫びるばか 。 り の 力 イル 達に、 青年はい つも見せるのと変わらない笑み

を浮かべた。

「気にするな。 ζ, いんだよ、 俺達は。 元 々闘う為に存在するんだ。 それが友人

の為なら、最高だろう」

しかし、 お 前

青年はカ イル 0) 達が反逆者など……!」 肩を一 度叩くと、 漆黒の瞳に深

い光を刷く。

「……前に . も 言 った事があったよな。剣士にとって、 剣を捧げるべき相手を得

る事 は、 他 0 何にも勝る存在理由だと」

わしらは剣を捧げる相手とか、そんな大したものではなかったが、 確かに友

人同士じゃ った」

彼等を懐かしみ、 誇る、 その祖父の顔を、 レ オアリスは瞬きもせず見つめて

いる。

剣士 の — 族 は 強く、差し向けられた軍を悉く打 5 破 った。 雪 解 け  $\mathcal{O}$ 季 節 に な 0

ても、 北方 軍 は未 だに彼らの一人も討ち取る事 が出来ずに . ۲۱ たし

ただそれ故に、 事態 は 膠着化し、 間 題 心はすり 替 わ ったまま 引き返 ようの

無いものになって行ったとも言えるだろう。

やがて、 王 一は近 (衛師) 団を差し向けた。 近 衛師 団第 二大隊 には、 当時

最強

の剣士として恐れられていた、バインドがいたのだ」

近 衛 師 団第二大隊 が 派兵されたと聞 7 た た 時、 初 8 7 剣 士 達  $\mathcal{O}$ 間 に緊張 が 走 0

た。

第二大隊――という事は、バインドか」

全員がそ の 意· 向 を伺うように、 壁 際 に 寄 り カコ か 0 て 1 た 青年 を見る。 バイン

ドの名はカイル達の耳にも届いていた。最強と謳われる剣士。

その男が、この地に来る。

青年は少しだけ面倒そうに口元に笑みを刷いた。

「バインドね、やっかいだな。 もう少し早い段階で交渉に持ち込んでおくべき

だったか」

「どうする?」

「どうするも何も、仕方ない。俺がやるよ」

そう告げた顔は、どこか面白がっているようでもあった。

その夜は、いつにも増して空気が冴えていて、上空に昇った臥し待ちの月が、

遠く彼方まで光を投げかけていた。

青い光に浮かび上がった夜の中に青年が立っている。 森の奥に視線を注いで

V) る青年に近寄ると、 彼は振 り返りカイ ルを認めて笑みを浮かべた。

が決めちまってるかも知れないけどな」

「多分、

今日

か明日にでも生まれるぜ。

なんて名前にしよう。

ま、

もうあいつ

ふいに俯い たカイルを見て、 不思議そうな表情を浮かべる。

「どうした」

済まないと詫びたかった。本当ならどれほど身重の妻の傍にいてやりたい 事

だろう。詫びる言葉を飲み込んで、カイルは青年を見上げた。

「男の子じゃったかの」

「あいつはそう言ってるけどなあ。 生まれてみないと判らないさ。けど、これ

だけは判る」

可笑しそうに笑う。

絶対、俺より強くなるぜ」

お前よりもか。

まだ生まれてもおらぬ

のに、

親馬鹿というやつじゃの」

俺達の子だからな。実際、あいつは俺より怖えんだ」

わない青年を、 そう言って、青年はまた陽気な笑い声を立てる。こんな時でさえ陽気さを失 カイ ル は 数わ れる気持ちで眺めた。

教えたい · 事が、 山ほどあるじゃろう」

そうだな……」

そしてふと表情を改める。 再び里の方 角に引き締 まった顔を向 けた。

番伝えたいのは、 剣に呑まれるなって事か」

それがどういう意味か判らず、カイルは青年の横顔を見つめた。

剣士はともすれば、自らの剣を抑えきれずにそれに食わ れる。 俺 はそういう

奴を、 何人も見てきた」

青年の上に、どこか翳りの色が浮かんだ。出会ってから初めてのその表情に、

「その可能性があると?」

カイルはふと不安を覚えて青年を見上げる。

「剣士なら誰でも、その可能性は無くはないのさ。だから、俺達は生まれてす

身体と心が耐えられるようになるまでな。

赤子の内に下手に暴走でもしたら、 剣に内から裂かれちまう」 ぐ、一旦剣を封じられる。剣の力に、

口調 は いつもと変わらないままだが、その声にはどこか思案する響きがある。

をもたげる 青年の瞳が里へと引き寄せられるのを見て、 を感じた。 カイルは自分の裡の不安が更に頭

**О** 

不安の 正 体を測 れ な いま ま青年の名を呼ぶと、 細 いめら れ た瞳にいつにな 1 懸

念の色を浮かべ、 呟いた。

剣が、二本だ」

「二本? それは、珍し , , 事 な  $\mathcal{O}$ カン

珍しいな。 聞 1 た事 が 無 生まれる時に、

た。だがすぐに、 青年はいつもの笑みを戻した。

「まあ、それも言ってみりゃ、 · 以 降 の楽しみってとこだ。 取り敢えずは、

明 日

それはカイルに向けられたというよりは、自分自身に確認するように呟かれ

あるいは」

バインドを倒さないとな」

「出来るのか?」

「さぁな。 あれと戦うのは初めてだ。 剣を合わせてみない事には何とも言えな

そうは言うもの *(*) 青年の上には揺るぎない , 自信 が 垣 間 見える。

「まぁ、 そんなに心配す んな」

こうして彼が笑っている以上、 大丈夫なのだと、何も問 題はないのだと、 力

イルはほんの少しだけわだかまる不安を、 心の奥に押しやった。

その翌朝、近衛師団第二大隊が、黒森に到着した。

深い溜息を吐いて、カイルは口を閉ざした。 長い昔語 りの間に、 囲 炉裏の火

は小さくなり、 炭は中心を残して灰になってい る。

夢から覚めたような、そんな感覚がある。まるで、

剣士の一

族が、

たった今

までそこにいたような

ると、 ふいに火が消えたように、冷えた室内の空気が身体を包む。 扉を開け、 屋外のすぐ脇 の小屋に積んでい た炭をいくつ か取って戻って 長老は立ち上が

きた。

新たにくべられた炭は、 暫らく  $\mathcal{O}$ 間火を移すのを拒むように、 黒い 姿の

まま

囲炉裏の上に横たわっている。

「……それから、どうなったんだ」

オアリスが 进 炉 裏の方に顔を伏せたまま、 の事はない」 ぽ つりと問 かける。

王都で、 聞 いておろう。 それ 以上

俺の | - つ \_

顔を上げ、 押 し詰まるように口を閉ざした。 見ら れる事 を拒 むように 再び

を伏せる。

カイルは疲れた表情の上に、 強い悲しみと、それからおそらく、十八年前か

ら全く変わる事のない、誇りにも似た想いを宿した。

はなかったであろう。ただ、彼らは 「……お前 の 一 族 は強 かった。 特に 戦いのみを求める剣士とは違って、優しさ お 前 の父は。バインドとも、さほどの違い

を持っていた。持ち過ぎていたのかもしれん」

重い溜息が、再び熱を増し始めた炭のはぜる音に重なる。

暫らくは、誰も、何も言おうとはしなかった。言うべき言葉を捜しあぐねて、

ただ炭が熱を放つ音を聞いている。

やがて、 カイル は何かを否定するかのように、首を一つ振った。

たなら。 「わしらは時折、 ŧ わしらにもっと己を守れるだけの ひどく後悔する。 もしも、わしらがそのような存在でなかっ 力があ ったなら。 ŧ 彼

等と出会わなかっ たなら-おそらく、お前が一 族を、 父母を失う事も無か 0

たろう」

仮定なんてのは、 無意味だろ」

「そうじゃ。それでもな」

「もし、なんて無いんだ。爺さん達に力があろうと無かろうと、そうする事を

選んだのは、 俺 の一族なんだろう」

レオアリスははっきりと、カイルに顔を向けた。そこに先ほど見せた、

引き

絞られるような感情の乱れはない。

「それなら、爺さん達が後悔する必要なんて無い」

カイルが再び何か言おうとする前に、 レオアリスは立ち上がった。

少し、外に , , 、 る \_

カイルもロ ツ トバ ルトも黙ったまま、 雪の戸外に出て行くレオアリスの後姿

を見送った。

彼が死んだと聞かされた時、カイルには信じられなかった。

それは村の他の者達も同様だ。

こ の 北  $\mathcal{O}$ 地 で 戦 1 が 始まって以来、 彼は少しも揺るぐ事なく、まるでどこか

散歩にでも 出 カン けるように戦場 に出 向 *(* ) ては、 何も普段と変わらな まま 戻っ

てきた。

千余名からなる北方辺境軍は次第に後退し、やがては周辺を取り巻くのみに

なった時、どこか残念そうな様子すら見せたものだ。

バ インドの件が片付いたら交渉 の場に持ち込むかと、 そう言ってい たの

朝の事だ。

その、彼が、死んだ、と---。

一人の 剣 士が 自 分でも信じ難いだろうその事 実を呆然と告げた時、 力 1 ルに

はその事が理解できなかったのだ。

実際に戦場を見た訳ではない。

傷 を癒り す 為の 薬草 0) 小 瓶 が 手 か ら滑り落ち、 足元で砕けても、 それにすら気

付かなかった。

は 今

もうすぐ、 もう、 今日か明日にでも、 子供が生まれると― そう言っていた

ではないか。

戻らない訳がない。

あれほど嬉しそうに、自分に初めて子供が 生まれるのだと言った。 傍らに寄

り添う妻に、かけがえのない者達に向ける瞳。

戻らない訳がないのだ。

剣士が身体を休める間もなく里へ向かった事にも、 それ が何を意味するのか

も気付かずにいた。

切り裂か 1 村を出たのだろう。 れた死体が点々と転がった、 気付けばカ イル 悪夢のような光景 は、 彼 が戦 0 た戦 場 その中央に。 に 7 た。

あの快活さも、すでにそこにはない。震える手が、生気の失せた身体を抱え起こす。

何も、感じなかった。

涙すら出ないのが不思議だった。

視界の 隅に、 瞬 光を放 0 何 カゝ ?を捉え! 顔を 向 ける。

散 乱 l た兵達  $\mathcal{O}$ 亡骸  $\mathcal{O}$ 間 に . 隠 れるように。

あ 0) 7 石 0 飾 ŋ が 落ちてい た。

剣士達の里が 滅びたと知ったのは、 まだ深い夜の中だっただろう。

カイル は その言葉を、 夢の中の出来事のように聞いた。

告げに・ · 来 たの は、背が高く威厳に満ちた壮年の男だった。その男が た兵達が一斉にひれ伏し、 男を呼ぶ名前から、それ 現 れ た 時、

が

の 王

玉 の王、 その人であると知っても、 その驚きも畏れも、 どこか心の表層 で滑り

落ちた。

村を取り

巻

いて

**,** \

いた。

もはやどんな感情も、 自分の 裡には無 ζ) のだと、 他人事のようにそう考えて

461

ただ、 青年 が 死 んだ事 12 触 れ た 一 瞬だけ、 王  $\mathcal{O}$ 金  $\mathcal{O}$ 瞳 が 苦痛を受けたように

歪んだのを見て、 ふい に 抑えようの 無 *\*\ ・怒りが 込み上げ たのだ。

王だというのなら、 何故我 Þ の言葉を聞かな かった。 我々を処 罰せよと、 あ

れほど願 0 たでは ない か。 何 故それを聞き入れなか った  $\mathcal{O}$ だ。

ルや村人を、警護の兵達が引き倒す。冷たい

· 剣

が

首筋

に当たっ

ても、 カイ ル は 叫 び続 けた。

掴

4

か

カン

るカ

1

だが 本当は 自 分でも判ってい たのだ。 その怒りは 王に向

けら

れ

たものではな

\ \ \ それは自分達に向けられた怒りだ。

今更どんな事も叶わな V )

自分達を受け 入れてく れた友人達は、 ŧ は や永遠 近に失わ れた。

ふいに扉 が 開 1 た。

その兵がどう告げたの か は、 はっきりとは覚えていない。

炎を上げ続ける里 の 中 で、 赤子の 泣き声 がする、

引き戻そうとする兵士達を振り切 って駆け出した。どれほど森を駆けただろ

う。

里は きまだ、 収まる気配を知らない 炎の中に沈んでいた。

確 か に、泣き声 が聞こえる。 とも しすれ ば 炎と渦 巻く風 の音に掻き消されそう

になりながら、 け れども力強く、 精 杯  $\mathcal{O}$ 声 で泣 1 てい

る。

生まれていたのだ。

そうはっきりと意識する間もなく炎の中に飛び込もうとしたカイルの肩を、

背後 カ 5 伸 びた手 が 抑 えた。

カ

1

ル

0)

王は 達 脇を抜け、 燃え盛る炎

全てを焼き尽くす筈の業火は、 王 の身体に僅 か も触れ得る事なく、 その姿は

0

中に足を踏み入れる。

炎の奥に消えた。

何度炎の中に飛び込もうとしたか 判らない。 その度に、 兵 士  $\mathcal{O}$ 手 が 力 1 ル 達

を引き戻した。

やがて炎 の中 か 5 王 が 再びその姿を現 した時、 王  $\overline{\mathcal{O}}$ 右腕 には、 生ま れ 7 間も

ない 赤子 が抱えら れて **(** ) た。

わ しらにとって、 あ れ は 命にも代え難 7 宝となった」

ま りと口を開く。 0 V 彼を見つめた。 オアリスが 戸外に出 口 ツト 老人 バ ル は て行った後、 トは瞳を上げ、 問 わ ず 語 りのように言葉を綴 長 ζ) 井 沈黙に沈 炉 裏  $\mathcal{O}$ 傍で背を丸 んでいたカ る。 8 1 顔 ル を伏せ が、 ゆ たま つく

助 を思い出させてくれた。 「ともすれば生 けてくれるようになっ ^ 0) 希望を失 小さかった手があっという間に大きくなり、 た。 あ (1 の 子 か けた我らに、 が 成 長 L ていく様 あ 0 子は再び生きる事 は、 絶え間なく浮 わ ^ かぶ後 0)

答えを求 かのてい るのではな V) 事 は 判っていた為、ロ ツトバル トは黙ったまま、

カイ ル の言 |葉に耳 を傾 け る。 。

悔と罪の

意識とを上回る喜び

じ

Þ

0

た

に、 快活さや芯の 物言 いは時折、 強 1 あれ ところが、 の父がそこにいるのかと思えるほどじゃ」 父母によく似て 、おる。 誰 が 教えた訳 で t な *(* ) 0)

執

着

5

を

その度に沸き起こる悲しみと追憶、刺すような喜び。

か を教える者が無 わ しら は あ  $\mathcal{O}$ 子に過去も、 7 、 以 上、 復讐の為にバインド 剣士という事すら教えずに育てた。 のようになる事を恐れ 剣 士 とは たし 何者

カイルは喜びと疲労の入り混じった声で、静かに語り続ける。

成長 王 した時、 は あ の子を、 望む のであれば、 わしらに お 預けになる形を取ってくださっ 王都 へ来させるようにとも。 た。 本来なら そしてまた、 がば処し 、罰さ

れてもおかしくない者に、多大すぎる程の温情じゃ。

「だが、

畏れ

なが

らわ

しらは、

王のその言葉すら、

あれ

に伝えなんだ」

 $\mathcal{O}$ 憤 王を恨 ŋ を覚 んだ訳 えは ではな L たも  $\mathcal{O}$ \ \ \ \  $\mathcal{O}_{\mathbf{k}}$ どこか その 被 憤 ŋ  $\mathcal{O}$ が 死 向 を悼むような様 かうべ き場 所 は 子をみせた王 違う 0 だと分か に、 って 時

いた。

ただ王に興味を持てば、いつかは過去を知るだろう。

そ  $\mathcal{O}$ 時 が 永 遠 に 訪 れ な 1 事 を、 村  $\mathcal{O}$ 者 全てが 願 0 てい た。

あ 王 ったのに、 0 御 前 試 合 あれ に 出る は自分自身の意思でこの村を出て、 と言っ た 時、 わ L らは 反 対 した。 剣士とし だが 何 ŧ て覚醒さえ 知 5 め はずで

王に仕える事を選んだ。 剣士としての血 そうとしか 言いようが 無

すれば、これもあの子の運命の一つなのじゃろう」

ゆっくりと顔を上げ、ロットバルトを見つめる。

そして、静かに頭を下げた。

その先に、王都でレオアリスを取り巻く者達に。

「――あの子を、頼みます」

気が付けばレオアリスが外に出てから、随分と長い時間が経過している。 口 ツ

トバルトは 僅 か に思案し た後、 立ち上が って扉を押し 開けた。

途端 に、 凍るような寒さが身を包む。 一度戻りレ オアリスの外套を取り上げ

た。

戸外に出ると、無音の世界が広がる。

雪雲の 晴 れた夜空に細 7 · 月 が 一つ浮か び、 僅 かな光で世界を青く照らし出し

ていた。

0 中に薄白 雪 は 既 に 止 <  $\lambda$ 大 で 地や疎らな家 1 たが、 昼か 々が 5 降 り 出 浮 か び したとは思えない 上が つてい る。 ほど 少し 先の広 積 ŧ り、 場 に 青 立 1 闇 0

影 を認め、 口 ツ 1 バ ル  $\vdash$ - は積 É った雪に足を踏み入れた。

近寄る足 音に も振 ŋ 向 かず、 レ オアリ Ź はじっと村の奥に広が . る 山 並 一みを眺

めている。

「……そろそろ、 お戻りください。 そんなに薄着では体を壊す」

「慣れてる」

口 ツトバル トは苦笑を浮かべ た。 少し低い位 置に ある顔には明 確 な 感情 は見

え な いが、 彼は いつもそうだ。 悲しみや憤りとい . つ た負 の感情を面 に 表そうと

はしない。

思 いをさせない それはこの白 為 く無音 の 、 幼 の世界で育った故 V) 頃 から  $\mathcal{O}$ 癖 な なの 0 か カゝ t ŧ L れ L れな なか った。 か ったし、 周 囲 に 辛い

腕 を延ば Ļ 外套を掛 けると、 肩に腕 を回 L て引き寄 せる。 案の定、 それは

ひどく冷えきっていた。

温 もりを覚える事で少しぐらい泣けばいいのだと、そう思う。泣くという行

為は、 何か一つくらいは、 洗 い流してくれるものだろう。

0 肩越しに再び視線を だが レオアリスは僅 Щ かに身じろぎをしただけで、 肌 に投げた。 何も言わず、 口 ットバルト

その奥に広がる、 森に

そこに何を見出そうとしているのか。

失われた彼等の姿か、そこに今いるだろう、バインドの姿か。

もう、 お戻りなさい。 あの囲 炉裏の傍が、 貴方にとって一 番 暖か *(* ) 場所

の筈だ」

彼等がレオアリスをどれほど大事に思っているか、 慈しみながら育ててきた

 $\mathcal{O}$ かが、 良く分かる。

友人の忘れ形見。

年々育っていく様は、 悲しみや後悔よりも多くの喜びを、この村に与えた。

「上将」

判ってる。もう戻る

漸く、彼方から視線を外し、それをロットバルトの上に向けた。

「……バインドは、俺が討つ。けど、一つだけ自信が無い」

「何です」

これまで二度、バインドと剣を合わせた時。そして、おそらく明日、剣を交

える時――。

それを考えると、怒りとは別の感情が浮かぶ。

それは、悦びだ。

戦う事への――。

『バインドは、狂っていった』

---俺は、狂うと思うか」

自分の剣を止めた相手。剣士として覚醒をしてから、 初めて  $\mathcal{O}_{\circ}$ 

あれ以来ずっと、戸惑いや疑問、怒りや悲しみといった感情に寄り添うよう

に、戦いへの悦びがあった。

そして、それこそが、バインドを狂わせたものの正体だ。

「――さあ。絶対と言い切れるものなど無いでしょう」

「……そうだな」

レオアリスは自嘲するように軽く笑うと、家に向かって歩き出した。

ですが、貴方既に収まるべき鞘をお持ちのはずだ」

足を止めてロットバルトを振り返る。

ふと、祖父の――『彼』の言った言葉が、心に浮かんだ。

『剣に呑まれるな』

レオアリスはもう一度だけ、夜の中に広がる深い森に視線を注いだ。

兀

降り募る雪と灰色の雲の幕の向うで、 太陽が次第に高く昇っていく。

レ オアリスは戸外に出て雪を踏みしめ、 雪雲に覆われた薄 い太陽を降 り 仰

だ。

「昼までには止みそうだな」

一足先に戸外に出てい たロットバ ルトが 振り返る。 足元には膝 下まり で雪 が 積

もっている。

「この足場では、少々動き辛いのでは?」

歩踏み出そうとするだけでも雪が 纏い ついて、 足は 重りを付 けたように感

じられる。 この中で普段通りに動くのは 困難だ。 だがレ オアリス は事もなさそ

うに首を振った。

「問題ない」

ずっとここで育ったのだ。むしろ地  $\mathcal{O}$ 利は レオアリスにある。

カタリと音をさせてカイルが戸口から姿を現し、 レオアリスの前に立つと彼

の顔をじっと見つめた。

「……無事に戻れ」

祖父の顔を見つめ返し、レオアリスは口元に笑みを刻んだ。

「心配すんなって。すぐ戻るよ」

飛竜へと歩き出しかけたレオアリスを、カイ

ルが呼び

止める。

何だ?」

カイルは暫らく黙ったままだったが、やがて首を振った。

「いや……」

そして顔を上げ、訝しそうなレオアリスを見上げる。

「一つだけ、伝えておかなんだ事がある。 本当は三年前に伝えるべきだった事

じゃ」

カイルはそれまでの思いを振り切るように、レオアリスの瞳を覗き込んだ。

 $\bar{\nu}$ オアリスよ。 王が お前を、 炎の中から救い上げた。 ――そして、名をくだ

さった」

オアリスの張り詰めていた表情の上に、内側から光の透けるような感情が

差す。

驚きと、もう一つ、

名を――」

手足の先に暖 か 1 血. が 行き渡 るような感覚

け

 $\mathcal{O}$ 

自

分の中

にある感

それに何と名前を付 れば 1 **,** \ カュ は 分から ない。 だが、

情を確かに肯定するも のだ。

この村で、王の 御前試 合が あると聞 7 · た 時、 ひどく急かされ る気持ちを感じ

尊敬、 畏怖、 憧憬 た事を思い出す。

そして、

王と相対する時に、

常に抱く思い。

ただ一言では、 言い 表せない 感 情。

「……その誇りが、 お 前をこの 先、 前へと進ませるのじゃろう」

*\*\ つか、 青年が 言った言葉が、 カイル の心の 中に浮か んだ。

剣士にとって、 剣を捧び けげるべ き相 手を得る事 は、 何に も勝る存在 理 由だり

ならば、 オアリスは自 レ オアリスがこの村を離 分の手でそれを見つけた。 れる事が、 剣士としての、 どれほどの喪失感を伴うも 存 在 理 由 を。 ので

あっても、もうカイルにそれを妨げ る理 由 は ない。

「必ず戻れ」

を押す。レオアリスは まるでそう言わなければ戻らないとでも考えているかのように、カイルが念 祖父の様子に安心させるように笑い、背を向けて歩き出

した。握った拳を高く掲げる。

「そんなに心配すんなよ。いい知らせを持ってきてやる」

一瞬、レオアリスの姿に、 あの夜の青 年の姿が重なる。

鼓動が 跳 ねた。

中に浮かんだ恐怖に似た感情を認め、 カ イ ル が 再び差し出 しかけた手を、 それを打ち消すように穏やかな笑みをみ 口 ットバルトが押さえた。 カイ ル  $\mathcal{O}$ 眼  $\mathcal{O}$ 

せる。

ですから。王はそれが可能だとお考えです。だからこそ、それに応えられると、 「……あまり心配なさらなくとも大丈夫でしょう。 これ は 王が彼に与えた任務

そう思いますよ」

カイ ルル にとっては、 それ は辛 *(* ) 響きにも聞こえただろう。だが、「剣士」とし

7 0 レ オアリスにとって、 その 事 は 彼の 力となるものだ。 カイル自 信が一 番、

その事を知っている。

「……そうかもしれん」

カイルは皺ぶい た顔を伏せ、 足元に積もった白い雪を見つめた。

静 かに降り募る雪は、 全てを覆い隠しても尚満足する事を知らないように、

ゆっくりと落ちてくる。

口 ットバルトがレオアリスを追ってその場を離れ、 彼等の 乗った飛竜 0 姿が

雪の幕の向こうへ消えても、 カイル はじっと足元 の雪を見つめていた。

ごく小さな、 誰 の耳に しも届り でく事  $\mathcal{O}$ 無 V > 呟きが、 雪に紛 れ て散 る。

の前にして初めて、そこに選択 -後悔する事、 それ自体を避け が 存 た 在 1 L ・選択は、 ていたと気付く。 取り 返し のつ たった一つ、 かな **,** \ 事実を目 揺 こるぎ

なく、取るべきだった正しい選択が確かにあったと」

カイル は 静 かに瞳を上 一げ、 レ オア リス 0 向 か っただろう森の奥へと、 視線を

向けた。

か 周 王が 囲 対東し、 0 者達から、 毎年村へ届 忌み族という見方も薄れ消えていった。 けられた書物。 王都との交流があ 2 た為 か、 1 つし

意識とは単純で愚かだ。

容易く周囲の状況や言葉に流され、向く先を変える。

だがそれを責める気にも、憤る気にもならなかった。

あの場所へ、レオアリスを連れて行ったのは一度きりだ。

てい 幼 た。 () 何も告げ オアリスは、ただじっと不思議そうに、 られ ない 事が辛く、 その姿を見る事 崩れた家々と自分達を見つめ は 心に刃を差し込むよう

に耐え難かった。

そこには崩れ、草に覆われた廃墟以外何も無い。

小さな手を握 る はず 0, 力強 < 暖 か 1 手 ŧ 優しく柔ら か **,** \ 手 ŧ

そこに満ちていたはずの、笑い声も。

しんしんと、雪のように想いは降り続け、 心の底に静かに積もり続ける。

静かに、深く、凍り付き、溶ける事を知らない雪のように。

雪 に 覆われた廃墟の中に立ち、 バインドはさも懐かしそうにその場を見渡し

た。

明け方に . 再び ) 降 り始 めた雪は、 廃墟を更に白く染め上げてい <\_

雪が覆 0 ていなけ れば、 崩れて焼け爛れたそれらを見る事が出来るだろう。

だが :一見し ただけでは、 おそらくそれが家だった事 は分 か るま \ \ \ \

自分がこの手 で破壊 Ĺ 焼き尽くした。ここに住 む者達も全て切 ŋ 裂い た。

あれは、 それまでどの戦場でも味わった事  $\mathcal{O}$ 無 1 感情だった。

快楽。

自分の裡からとめどなく溢れる、切り裂く事への渇望。

落された腕 は 再生する事はなく、 それ は 抑 え難 7 苦痛を伴った。 絶えず痛み

続 がける傷 跡 より ŧ, 斬 る事を封じら れた、 そ  $\mathcal{O}$ 事 が 強 **,** \ 苛立ちと焦燥 派を生 んで

いた。

だが絶望 一の中、 切り刻 む事 への渇望は、 やがて左腕に新たな剣を生んだ。

そして、 その 剣をか つてのように使いこなせるようになるまで、 これだけの

時 がかかっ たのだ。

あ の 時、 右腕 を切り落とした、 青白い 剣風

バ インド - は瞳 を上げ、 雪に覆わ れ た木立 0 間 を透か し見た。

もう、ここに来る。 近づい て来る のが ^感じら れる。

愉悦が、その頬に踊 つた。

あの年若

*(* ) 剣 士 は、 十七年前に斬 った剣士 よりも強 *\* \ だろうか?

力は拮抗 していた。いや。 あ

0

剣士

は

強

かった。

初めて、

あ

れほどの

相

手に出会ったのだ。

あ 0) 男  $\mathcal{O}$ 方が自分より上回っていた。

瞬でも気を抜けば、 切り裂かれ てい たのはバインドの方だっただろう。 そ

 $\mathcal{O}$ 事が逆に、バインドの中にこの渇望を目覚めさせたのだ。

それ まで 0) 戦 1 は、 ひどく退屈だった。 力を出 L 切れる相手などどこにもい

ない。 敵を 切 り裂く事 は、 まるで単 純な作業のようだった。

だがそれなら自分は何の為に存在 してい るの か。

生も死も賭けられず、戦う相手も無い。

自分の存在が空虚なものに思え、全てが煩わしかった。

そんな時に目の前に現れた剣士。

剣を弾かれ、受ける都度、力が増していくのを感じた。

それでも あの ままの 状態で あれば、 自 分が今生きてい たかどうかは

い。それもまた悪くはなかっただろう。

だが、あの時――ただ一瞬だけ、あの男の視線が

逸れ

たのだ。

分かれ

らな

遠く離れた森の方角に、ただ一瞬。

何の為か は分からない。 だがその剣 の持つ力を、 瞬だけそこに向けた。

それで、勝敗は決した。

ただ一瞬のうちに、 生と死は逆 転 し、 バ インドは呆然と足元に倒れ 、 た 男 0 身

体を眺めていた。

何が起こったのか、理解できなかった。

勝 利 (T) 喜 びなどない。 虚ろな心の 中 に沸 き起こったのは、 怒りだ。

何があの男の気を、自分から逸らした?

自 元 分 と  $\mathcal{O}$ 戦 1 以 上 *(*) 何 が あ るという 0 か。

勝 利 に 駆 け 寄 0 た 副 将 を切 ŋ 捨てた。

驚き、 そして憤 Ŋ, それ カン 5 恐怖  $\mathcal{O}$ 内 に逃げ 惑う自軍 0 兵士達を、 目に

Ł  $\mathcal{O}$ から全て切 り裂いた。

周 进 が 何百、 何千という死体で埋 ま っても、 苛立ちは収

まら

なか

つ

た。

つく

そうして、 森に、 あの 男 の視 線 が 向 1 た方角 に向 つ た。

無性 に 知 り É か つ た。 そこに何 が あ る  $\mathcal{O}$ か。

辿

り

着

1

た里では

他

 $\mathcal{O}$ 

剣士達と戦

0

た。

右腕

0

剣

は

男との

戦

( )

で既

(Z

限界に近

付 į, てい たが、 さほどの 手間 は か か らな かった。 家 Þ を破 壊 Ļ 捜 L 口 った。

剣 士 達 が 護る先 に、 目 指 す É  $\mathcal{O}$ が 在 る は ばずだ。

剣

か

5

迸る炎

が

自

分

 $\mathcal{O}$ 

周

进

を焼

き始い

 $\Diamond$ 

る

のにも構

わず、ただそこを目指

した。

里 0

の者全てを切り伏せ、 その先に あ た家の壁を吹き飛ば した。

崩 れ落ちる石となだ れ 込む 炎  $\mathcal{O}$ 中、 女が ·· 人、 立って *(* ) た。

たった今まで床に臥 決然と光を宿 した瞳で、 L てい 自分の前に立ちはだか た様子でひどく弱っていたが、 る。 それでも剣を手に

女の後ろに、小さな白い布の包みが置かれていた。

そこだと、判った。

女を切り裂いた瞬間、 その背後から青白い光が膨れ上がり、右肩に鋭い 衝撃

を感じた。 女が 制止の声を上げ、 その光を隠すように覆い被さるのが見え る。

あの男の剣と同じ光――。

気が付いた時には、どこか見知らぬ場所にいた。

激痛に目をやると、右肩から先が無かった。

右肩に左手を当てる。バインドは失わ れたはずの腕が齎す痛みを、 愛お しむ

ように撫でた。

肩に注いでいた視線を上げる。

その先に、長い間待ち続けた者の姿があった。

飛竜 の背に立ち、 レオアリスは眼下を見渡した。

深 1 森 の中に、ぽ っかりと白く開けたその場所。 た 0 た 一 度、 訪れ、 ただけの、

心 の奥深くに宿る場所。

オアリスにとっての、 全ての始まりの土地だ。

の中心に、 既に見知 0 気 が ある。

追憶よりも、思慕よりも、その

事

が

. 今 の

レ

才

アリス

の中を大きく占めていた。

その廃墟 た 剣  $\mathcal{O}$ 配

吹き付ける雪に黒い髪を巻き上げながら、その一点だけを睨む。

口 ツト バ ル <u>۲</u> お 前 は 村で待て」

バ インドを倒すには、 全力を以て当たらなけ れば 難 L *(* ) だろう。 周 囲 0) 影

響は考慮 しきれない。

「・・・・・いえ。 見届 ける 0) ŧ 私  $\mathcal{O}$ 役 割 です。 私に関 ては お 気遣 なく。 まあ私

ŧ 命 は惜 しい、 安全圏 は 見 極 8 ます Ĺ

口 ツト バルトらしい言い草に、 レ オアリスは視線だけを背後に向け苦笑を洩

らした。結果がどうあれ、王都への報告は必要だろう。

「損な役回りだな」

「お陰さまで」

口 皮肉 ツトバ め ル ١ ﴿ た 口 } が 深 調 を返すと、 く頭を下げる。 レ オア IJ ス はもう一 度笑った。 左腕 を胸

に充て、

「——ご武運を」

一度だけ頷き、レオアリスは飛竜の背を蹴

0

た。

鳩尾に当てた右手が、 ずぶりと手首まで埋まる。 青白 7 光が 零れ、

ちていく雪に反射し拡散しながら大気を染めていく。

剣を抜き放つと同時に、雪を巻き地上へと降り立った。

廃墟に腰掛けていた男が風に揺れる柳のように立ち上がる。

青白く光を纏 うレ オアリス  $\mathcal{O}$ 剣に 呼応するように、バインド  $\mathcal{O}$ 左腕 が赤く光

を宿す。

艶 の失せ た 黒 *\* \ 前 髪  $\mathcal{O}$ 奥で、 バインド . (7) 瞳 が 愉 悦  $\mathcal{O}$ 色を浮 か ベ た。

随分と待たせるじゃない か、 近 衛 師 寸 大将。 王に敵するものを迅速に排除す

地上に落

る。それが近衛師団の本分だろう」

間 には オアリス V オアリス 雪 が が自 薄 は 1 幕 分の元へ来るのを待ち構えるように動こうとはしない。 無 を掛 言 のまま、バインドに向って歩を進める。バインドはまるで、 けてい る。 歩進むごとに、 白い幕は薄 くなり、 互 二人の  $\mathcal{O}$ 

輪郭を浮き上がらせていく。

「師団は居心地がいいか? そうだろうなぁ。……思う存分、

切り刻める」

「……俺は、お前とは違う」

1 「違う? V : 敵を切り刻む事こそが、 クク、 違わ ないさ。 剣 士 剣 士 の存在意義だ。 の本分は戦う事だ。 俺は時に、 それ以外はどうだって この意識すら鬱

陶しいよ」

低く這うように、

冥い

強い

声

が響く。

光を吸い込んで閉ざした闇色の瞳

が、

レオアリスをひたと捉える。

お前は剣士だ。それは変えられ

ない」

お

前

12

言わ

れるまでもない

剣の間合い、その少し手前で、レオアリスは足を止めた。

バ イン K が 肩 を 竦 める。

つれない な。 俺 は常 に、 お 前の事を考えていたのにな

あ

射るような視線を感じながら、バインドは腕  $\mathcal{O}$ 欠 け た右肩を撫 派ぜた。

十七年前  $\mathcal{O}$ あ  $\mathcal{O}$ 時か ら、 片 時 も忘れた事など 無 か 0 たよ」

そこに宿り続ける痛み。 戦い へ の、 それは悦びだ。

肘 じわり、とバインドの左腕が から先 の骨 が盛り上 一がり、 紅く光を増した。 む音を立てなが 次第に炎を纏 う長

軋

ら、

剣

لح

姿を変えていく。 バ インドへと降り 掛 カ る雪が、 その 身体に届 て前 に · 溶 け て 消

える。

「夢にまで見た。 腕が 疼く度に、どう切 り刻んでやろうかと、 それ ば かり を考

えていた。 お 前 が 師 寸 に いると知っ た 時 *O*, 俺の喜い びが分 か る か ?

オアリスは無 言の まま、 バ インドに 視線を据えた。 バ インド . の  $\Box$ 元 の笑み

が、 更に深く吊 り 上が る。

「これでこの痛みを満足させてやれる。 しか ŧ, 師 団 ? 最高 0 舞台じゃない

か、 なあ?」

剣を伝って零れた焔が、雪の上に滴った。

バインドとレオアリス、互いの剣が同時に振り抜かれる。

雪を蹴立てて走った剣風 が中央でぶつか b, 弾ける。 轟音と共に衝撃が大地

を穿ち捲り上げた。

それを合図に、二人の足が雪面を蹴る。

雷光と紅煉、対照的な二つの閃光が尾を引いてぶつかる。

鍔元を打ち合わせ、刃の向うの瞳を覗き込んだ。

ツ 1 . バ ル  $\vdash$ は 廃墟 を望り む張 り 出 した Ш 肌  $\mathcal{O}$ 上に 飛竜を降ろした。

口

十分に距離を取 0 たその場 所にまで、二人の剣士 一が放 つ圧迫されるような波

動が伝わる。

こうした離れた場 所 か らでなければ、 剣筋 を眼で追 1 切る事すら難

どちらに分が あ るの か、 眼下に広がる戦場 は、 全くの互角だ。

まだ双方とも力を抑えている状態だろう。ただ)

らくそれこそがこの戦 ように見える。 バ インド 0) 剣 経緯 に 些 を か , , 知  $\mathcal{O}$ 0 躊 0 最大の懸念だ。 て 躇 7) 1 る ŧ が な 故 1  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ に比 杞憂に べ、 過ぎな レ オアリ 1 か Ź ŧ  $\mathcal{O}$ L れ 剣 な はどこか 1 が、 おそ 迷う

『俺は、狂うと思うか?』

オアリスがそれを消化出来たの かは、 今 朝 の彼  $\mathcal{O}$ 様 子からい は 判 断 が 付きか

ねた。

口 ツト ハヤテが不安そうに喉を鳴らす。 バ ル トは戦 場 視線を向けた。 それ を宥め る為に片手 を飛竜 の首に置き、

閃光が奔る。

剣を弾き、流し、斬り上げる。 胸元で止められた刃を反して薙ぐ。

周 互. V)  $\mathcal{O}$ 刃が 上 り裂い 段 かと思えば下段へ、 カン れ て倒れ、大地が削られた。黒森 流星のように 尾を引く。 剣が 7 翻 る都 めく。 度、

囲 剣 を撃ち合わせ、 0) 木 立 が 切 瞬 互 V) の視線が交叉する。 同時に弾き上げて跳び退さる が苦痛を受け 騒

<u>ځ</u> 後ろ足 で地 面 を蹴 0 た。

鋭い音が響き、 互い 0 足元 で剣が交叉して止 まる。

二人の間 0 地 面 が 衝撃を受けて陥没した。

身体を入 れ 替 え、 再 び 距 離 を取 る。

残響が、 瞬 寂を取り戻した廃墟

ゆらりと上体を起こしたバインド  $\mathcal{O}$ 内 に 静 . の П 元に冥 の中に谺して消えた。 い笑みが湧き上がる。 肩が僅

に震え、 それ は 次第に大きくなり、 高 7 、哄笑に · 変 わ った。

再び剣を合わせられる相手を……!」

この俺と、

「はははっ

!

**\**\

*\*\

なあ、これだよ。

俺は

長

1

間、

ずっとこれを待ってい

か

ゆ つくりと、 左 腕  $\mathcal{O}$ 剣を目  $\mathcal{O}$ 前 に掲げる。 剣を縁1 版取る赤 (1 焔 が、 喜 び に 震え

るようにざわざわと揺らぐ。

お前も、そうだろう……」

「……言ったはずだ。 俺は、 お 前 とは 違う」

ている間、 不快さを隠そうともせず、 ずっと身の内に沸き上がってくるもの。 レ オア リスはそう吐き捨てた。 だが、 剣を合わせ

愉悦。

闘いへの

二つの思いがある。

警鐘を打ち鳴らすも 0 貪欲にその

愉悦

を欲するも

 $\mathcal{O}_{\circ}$ 

考えるな」

バインドが動く。

先程よりも疾 1 剣戟を剣 の 平 で流すように手 , の 内 を反 し、レ オアリ Ź は その

まま弧を描 いて斬り下ろした。 切っ先がバ インド  $\mathcal{O}$ 脇腹を掠めた。

初めて、 赤い血 が散る。

バ インドは後方 へ跳 び、 雪の 上に片膝を付 **,** \ た。 僅 かに掠め ただ、 け  $\mathcal{O}$ 刃  $\mathcal{O}$ 凍

るような痛みに、 瞳を 細 める。 捉えられ れば 確実に、二つに切 ŋ 裂 か れるだろ

う。

だがまだバ インドの望む存在には足り ない。 生と死を垣 間見る、 その戦

いこ

そがバ インド -の 望 むも のだ。

それだけが、 自らの存在を満たす。

それ 以 外 は 必 要ない。

右 腕 が存 在を訴えるように軋んだ。

まだ、 足りないな。 その程度じゃあ期待外れだ。 ……お

せるには、 何が 必 要だ? 怒り か

身を起こし、 バ インド は脇 から流り れ出る血 · を 細、 め、

に目

に

()

っと笑った。

前

0

目を覚まさ

腹

瞬く間に血 が · 止 ま り、 傷  $\Box$ が 塞が っていく。

振 り抜い かれたレオアリスの剣を、 赤い 刃が受け止める。バインドは剣を反す 必要な

ļ,

お

前

0

そ

0

剣

その

青

白

7

光。

覚えてるよ。

……昔話をしようか……

?

オアリス  $\mathcal{O}$ 剣を巻くようにして足 元の 地 面 に 押さえ込 んだ。

オアリス に退く間を与えず、 剣を跨ぐように踏み出 し体重を乗せる。

. つ \_

バインド が ぐ *\* \ · と 顔 を寄り せた。見開 か れ た瞳  $\mathcal{O}$ 中 に、狂気と愉 悦 が 仄 見え

「ま あ聞 けよ。 お 前 に ŧ 懐 か しい 話だー 俺 が初めて 戦つ た 剣士。 0 地で

反乱を起こした剣士の一族の一人だ。そいつが一番強 かった。美しい長剣を持 0

7 いてな あ。 青白 1 光を纏う…… お 前 のこの 剣 0 ように

オアリス 0 瞳 を捉 えたまま、 П 元が 歪 んだ笑みを浮 かべる。

そいつとの 戦 *\* \ が、 俺  $\mathcal{O}$ 中 の欲望 を呼 び起こした」

· 黙 れ

剣士の本能 切り 刻 む悦びだ」

レ

オアリ

Ź

は

弾

か

れ

るように叫

んだ。

バ

イン

K

が

嗤う。

お前の、

父親だ

よ!

似て

いたぞ、

お

. 前

に、

ょ

お

<

黙れ <u>!</u>

V オアリスの 瞳 に怒りが灯る。

抑えられ てい た 剣が 足元かり . ら 跳

ね

上が

いった。

バ インド · の 腕 が 高 々と上が る。

衝 振り下ろされた剣に、バ 「撃を受けて、 大地 に · 深 インドの身体 1 亀 裂 が 走る。 が真っ二つに割られたか 巻き上がった雪と土 砂 に見えた。 0) 中 · に 踏 み込

んだレオアリスの背後 で、 嘲 笑 が響 いた。

お 前 の父親を殺すのは楽しかったよ。感謝してるんだ……… お かげで俺は、

剣士とは何者かを知ったんだからなぁ!」

目の前が怒りで霞む。

剣が大きく脈打ち、引きずられるように振り抜いた。

バインドの背後の木々が薙ぎ倒され、積もった雪の上に崩れ

二の太刀、三の太刀を軽くいなし、バインド

は

レ

才

アリス

0)

懐

に踏

み込んだ。

る。

.

バインドの 剣が 紅く輝く。 右下から剣 が . 振り 抜 か れる。 刃よ り 熱 0) 塊 を 叩き

つけられるような感覚だ。

辛うじて防いだ剣もバインドの剣の勢いを殺しきれず、 オアリスは後方へ

と弾かれた。

木の幹に肩と頭を打ち付け、一瞬意識が遠退く。

薄れかけた視界に紅い光が過る。

っつ

反射的に木の幹を押すように離れた場所を、焔が砕いた。

バ インドが 間 合 ζ\ を詰め、 迎え打 つレ オアリスの 剣を弾く。 そのまま手を緩

めず、鋭い切っ先がレオアリスの身体を掠めた。

「くく、どうした? 剣が鈍いな」

躱しているにも関わらず、 焔 の熱が皮膚を焦がすのが判る。 それだけで体力

が消耗していく。

バインドが一歩踏み込むごとに、レオアリスは後退する。

逸らしたレ オアリスの首を剣が掠め、 切れた服 の襟元から蒼い 石の付い

た鎖

が覗いた。

「へえ」

バインドが面白そうに瞳を見開く。

退こうとした肩が木  $\mathcal{O}$ 幹にぶつかって漸く、 自分が ١ ر つ 間 に か 木を背 後に

ているのに気付き、 レ オアリスは舌打ちした。 だが 崩 された感覚を取り 戻そ

うとしても、沸き上がってくる怒りが邪魔をする。

インドが

ずい、と踏み込み、

剣を突き出した。

左に抜

けようとして、

木の

幹に突き立った剣 に絡まっ た鎖に引かれ、 がくんと身体 が 止ま る。

オアリスは木の幹を背に振り返 心り、 バ インドと正面 カン ら向かい合った。

バインドの瞳が細められる。

-----なっ か L 1 な、 この 飾 り。 お 前 の 一 族 の紋 章 Ü Þ ない

か

?

じり、と剣の当たっている鎖と首の皮膚が焦げる。

キン、と小さい音がして鎖が千切れた。

石が 剣先に弾き上げら れ、 反射的 に追った手を、 バ インドの 赤 7 刃 が

切

り付

出

ける。

咄嗟に 躱 たも  $\mathcal{O}$ の 、 右 の 二  $\mathcal{O}$ 腕 が 深 ぶく裂け 鮮 血. が 噴 出 足 元 0) 雪 を 紅 <

染めた。

腕を抑えながら、 離れ た雪の吹き溜まりに落ちた鎖を、 レ オアリス 0) 視 線

追う。その様子をバインドが面白そうに眺めた。

気になる か? そうだろうなぁ。 あ れ は お 前  $\mathcal{O}$ 父親  $\mathcal{O}$ ものだ。 よく残って

いか

たも

んだ。

青

1,

石

の も

のはその

長だけ

が

持

つ。

今の

お 前

に

相応

しいじゃな

バインドの哄笑が廃墟の中に響いた。

「たった一人だもんなぁ!」

が

雪を吹き上げて 剣 風 が走る。 だが .. 切 ŋ 裂い たのは、 バ インド  $\mathcal{O}$ 残像  $\mathcal{O}$ みだ。

バインドの姿は視界から消えている。

移動する気配 を追いながら、 レオアリスは大きく息を吐いて呼吸を整える事

に集中する。

『殺せ』

じわり、と心の中に浮かび上がってくる、殺意。そしてその喜び。 それらが

自分を支配しようと沸き上がる。

(――邪魔を、するな!)

気配は、上だ。

鋭 1 金属音とともに、 頭上に振り上げた剣が、 打ち下ろされたバ インド の剣

を弾く。

踏みしめた足元が雪に取られ、 体勢を崩したレオアリスの上に、 新たな剣戟

が振り下ろされる。逸らした左肩に焼け付く痛みが走った。

「……余計な事を考えていると死ぬぞ。剣も満足に振るえないまま死なれちゃ、 予期した追撃 は ない。 体勢を直したレオアリ スの 周 戸囲で、 バインドが嗤う。

この俺 が十七年待 つた甲 -斐が 無い。……まだ後 押 しが必一 要か?」

振り返り様、 叩きつけるように振り抜 かれた剣 が、 バインドの 頬を浅く切り

裂く。赤い血が飛び散り、花弁のように雪の上に散った。

バインド は身動ぎもせず、レオアリスの 剣先をちらりと眺めた。 腕が <u>流</u> を拭

いとると、既にそこに傷は無い。

「しっかり狙えよ。……なあ、 お前の父親は強かったぜ。この俺よりも……」

喉の奥で嗤いを転がす。

バインドの 剣がレ オアリスの右腕と胸を掠める。 熱を受け、 レオアリスの瞳

が軋んだ。

「それで何故俺が今生きているか、教えてやろうか」

打ち込んだ剣はバ インドの左手に弾き返される。バインドは大きく踏み込み、

間合いを詰めた。

瞬だけ、 奴は 何 か に 気を取 られた。そこに力を向 けた。 気に 食 わ ない

よなあ。 俺との戦 7 以 上 <u>の</u>、 何があるっていうんだ? ……俺は、 その何 かを

探した」

その言葉を聞くなと、心の奥で警鐘が打ち鳴らされる。

だが聞くまいとしても、塞ぐ術などなく言葉は自然と耳に入り込む。

レオアリスの剣が正確さを欠くのと反比例するかのように、赤い剣が、浅く、

だが確実に、レオアリスの身体に熱を刻み付けていく。

「そして、剣士の里で……ここで、それを見つけた」

聞くな。

脳裏に青い光が過ぎる。

自分を押し留めるように、暖かく包んだ光。

バインドの声が低く、愉悦を宿して蛇のように這う。

赤子だった――」

青い。

聞くな。

――お前だよ」

びくりと震え、レオアリスの剣が動きを止めた。

俯いたその右肩を、バインドの剣が貫く。

更に 剣を深く押し込むと、 腱が千切 れ、 骨を削る音がバ インド . の 耳 にも 届

た。

噴き出すはずの血が、 剣の纏う炎の熱で赤く蒸発する。 剣を握った右腕 が、

力を失ってだらりと下がっ た。

俯いたレオアリスの表情は見えない。

インドが剣を引き抜くと、つられるようにレオアリスの膝が雪の上に落ち

た。

インドは苛立つようにその瞳を細めた。

右肩を覆う激痛にも苦鳴すら上げず、

俯い

たまま

動か、

ない姿を見下ろし、バ

「早くしろ。 それとも、 終 わ りか?」

紅い剣が、 レオアリスの頭上に持ち上がる。 それでもレオアリスは身動ぎす

らしない。

その内 面 ー を 現 わ す カン のように、 手に、 L た剣 か ら は 光が失せてい

インド は鋭 く舌打ちをし、 振り上げた剣に力を篭めた。

つまらねえ・・・・・。 死ね」

翼の羽ばたきが凍る大気を打った。

 $\mathcal{O}$ 剣 銀 が  $\mathcal{O}$ 飛 鱗 竜 が 光を弾き急降下する。 、 と 動 ₹ ° 剣 が飛竜を捉える寸前 顔に掴 4 掛 で、 か 0 た鋭 鍔を弾く音と共に白 11 鉤爪を躱 し、 バ 1 1 閃 光 ンド が

走った。

首 許に伸び びた白 光を後方に飛 ん で 避 け、 バインド は笑みを浮 カン べ たまま  $\mathcal{O}$ 顔

を向けた。首に浮かび上がった赤い筋をなぜる。

鞘 走らせ た剣 を 納 め、 口 ツ 1 バ ル 1 は 再び柄 に 手 を

か

け

た。

「……面白い太刀筋だなぁ。惜しかったか?」

「全く。限界ですよ」

向 か V 合うと、 じわりと圧迫 感 が 身 体 を包 む。 V オア IJ ス  $\mathcal{O}$ 剣 んと対 する 時

は違 う、 狂気を孕んだ剣気に、 口 ツ } バ ル 1 は 無 意 識 に退こうとする足を 押

止めた。

バ イン K は 光  $\mathcal{O}$ 無 1 闇 色  $\mathcal{O}$ 瞳 を、 膝 を付 1 たま ま  $\mathcal{O}$ レ オアリスと、正 面  $\mathcal{O}$ 口 ツ

トバルトに交互に向ける。

剣士同士の戦いに、不粋だとは思わないか?」

べらべらと、 埒 ŧ な **(** ) 事を捲 し立てる貴様 よりは マシだ」

不愉快な響きを隠しもせず、 口 ツトバ ルト はバ インドを睨み据えた。

ークク……」

インドはチラリと上空に視線 を飛ば した。 飛竜 が 再 び バ インドに 掴 4 かか

ろうと旋回する姿を捉え、 嗤う。

余計な手出しをしなければいいものを。

まあ、

お前等の死もまとめて、

オアリスにくれてやるの ŧ 7 **,** \ カン もなあ?」

バインドが一歩踏み出す。 それだけで強烈な圧迫感が叩 きつける。

相 手に、バインドに間合いなど関係ないだろう。バ インドが 2剣を一 振りす 'n ば、

それで終わりだ。

更にもう一歩

――だがロットバルトの間合い

には

足り

な

口

ツト

バ

ル

トを

ツ トバルトは鞘を強く握り込み、バインドに視線を注いだまま距離 を測 0

た。

口

あと数歩踏み込んでくれば オアリスは雪の上に膝を付 剣が届く。それを待つだけで激しい いたまま、 動く気配すらない。 消 耗を覚えた。

口 ツ } バ ル トは バ インドを退 カュ せる方法を探して思考を巡らせる。

バインドがもう一歩、歩を進めた。

じり、と冷たい汗が額を伝う。

バインドが再び踏み込む。

何の策も浮かばないまま、左手の指が剣の鍔を弾きかけた、(チ)

その時。

瞬、大気が震えた。

二人の視線が吸い寄せられるように一点に向けられる。

レオアリスの身体を青白い光が覆うように包んでいる。

レオアリスの剣が纏う、剣光。

S ١ ر に 強 一烈な一 圧 迫 感 が、 レ オアリ スの 身の 裡 か 5 膨 れ 上 が 0 た。

剣光が爆発するように急速に広がる。 光に触 れ た 瞬 間 口 ツ トバ ルトは 弾 か

れ、 後方に飛ばされた。

「つ」

雪に片手を付き、 霞む頭を振って顔を上げる。 視界の先、 先程までと変わら

ない位置に、レオアリスが立ち上がってい るの が 見えた。

陽炎のように青白い 剣光がその身体を取り巻いている。

バインドもまた、

驚愕に 見開 かれた瞳 が、 次第に再び強 ( ) 愉悦 の色を滲ませる。

弾き飛ばされたその場で、レオアリスの姿を捉えた。

か

な

\ <u>`</u>

だが、

その足元から、

ゆっくり

と、放射状 0 亀裂が広 がっていく。

レオアリスはその場に立ったまま動

右手に剣を提げたまま、 レオアリスの 左手が持ち上がり、 鳩尾の上に置かれ

た。

ずぶりと沈み、 光が 溢 れ る。

白い世界が、 青く染 められていく。

再び、 左手が引き抜かれる。

ゆ つくりと現れたのは、 右手のご 剣を映 したかのような、 青白 光を纏う長剣

だ。

口 ットバルトが息を呑む。

V オアリス 0 剣 は 彼 の十三対目 0 肋 骨

だがこれまでの戦

7 で、

レ

オアリスが二本の剣を持つ所を、

口

ツトバ

ルトは

即ち、二本。

見た事が無かった。

強い不安が 胸に灯る。

俺は、 狂うと思うか?』

ミストラの時とは違う、だが確かに、レオアリスが纏う強烈なまでの鬼気は、

普段見知ったも のではない。

オアリスの負った傷が、 瞬く間に癒えていく。

「……ク……ハハ、ハハハハハ! 待っていた、待っていたぞ、これを!

…漸く、会えたなぁ!」

感に耐えないというようにバインドが喉を震わせた。 立ち上がり、 レ オアリ

スに向かって歩き出す。

「さぁ、思う存分戦おうじゃないか」

バ インドの剣が熱を増す。 たちまちの内に周囲の雪が溶け、 乾き始めた。

周囲には静寂が満ちていた。

目の前に赤い一本の剣が浮かび上がっている。

(――何をするんだっけ? ……ああ、)

バインドが頭上から剣を打ち下ろす。レオアリスの右手の剣がそれを受け止

めた。

感じるのは、悦びだ。

解放と、――目の前の戦いへの。

沸き起こる、歓喜。

(こいつを、斬ればいいのか)

にい、と口元に笑みが刻まれた。

受け 止めたバインド  $\mathcal{O}$ 剣 を、 軽く、 ほ  $\lambda$  $\mathcal{O}$ 僅 か、 跳 ね上げた。 その 動 が作に、

逆に体勢を崩され、バインドがよろめく。

レオアリスの左腕が動いた。

閃光のように打ち込まれた剣をかろうじて受け止め、 バ インド

が

後方に

吹き

飛ばされる。

防いだはずが、バインドの胸 から腹にかけて深い傷が走った。吹き出した血

に、驚きと、

悦びがその顔を彩った。

剣が赤々と焔を纏う。

廃墟 に、 赤い 光が渦を巻いた。 剣から 散 った焔が が 廃墟 を覆う雪に灯 り、 四方

に走る。

懐かしい光景だなぁ。 まるであの時に 戻ったみたいじゃない か

レ オアリ Ź 0 足元を焔  $\mathcal{O}$ 舌が 舐  $\emptyset$ る。 蒸発 していく雪の 下から黒い . 土 と、 焼

けて崩れた石が覗く。

「この墓場に相応しいのは、俺か、お前か」

バ 1 ン ドの 足が 焔を蹴 る。 レ オアリスの右後方 刀に · 間 合 1 を縮 めると、

剣を斬り上げた。 焔が 迸り、 大気を焦がす。

振 り返 りもせず、 レ オアリスは右手を動かした。

バ イン ド  $\mathcal{O}$ 剣 は レ オ ア IJ ス  $\mathcal{O}$ 背後で、 その 剣 に阻 ま れ て 止 ま つ た。

剣に触り

れ

た 瞬

間

バ

1

ンド

は弾き飛ばされ、

廃墟

0

中

に

叩きつけら

っれた。

刃を下に向けたまま、 レ オアリスが身体の前に二本の剣を掲げる。

剣 は引き合うように重なり、 その ま ま 振り Ó 長剣に姿を変えると、 強 ( ) 光

を発した。

目 の前に浮かび上が った剣 の柄を、 光の中に延ばされたレオアリスの右手が

掴 む。

剣

0

纏う光が、

主の

手

の中に収まり、

瞬

輝

きを増し

た後、

静ま

いった。

例えようもな

VI 圧 迫 感 が 周 进 を取 り巻く。

大気  $\mathcal{O}$ 振 動 が 離 れ た 所 に 1 る 口 ツト バ ル } に ま で伝 わ る。

無造 作 に · 剣 を 閃させると、 生じ た剣 風 が 周 囲  $\mathcal{O}$ 木立を断ち、 その 奥の Щ 肌

を穿った。

レオアリスがひどく酷薄な笑みを刷く。

「――それが、完全な姿か……」

バインドは目の前の剣士を、ただ陶然と眺めた。

剣が、届かない。

剣を打ち合わせる、 それすら適わず自分の剣が空を切るのを、 バインドはど

こか敬意すら抱いて眺めた。

横薙 (T) 剣  $\mathcal{O}$ 口 転 をそのまま乗 せ、 左足を軸 に踏み込む。 袈裟掛 けに 振り抜か

れた剣には、やはり何の手応えもなかった。

バインドの顔を、今までとは違う笑みが彩る。右肩を覆い続けていた痛みは、

既に無かった。

戦いは、バインドにとって生命だ。

死を感じることこそが生命だ。

漸く、今再び、生を得た。

青い光を視界の 隅に捉え、バインドは咄嗟に上体を反らした。今まで首があっ

た場所を、剣風が抜ける。

戻した上体の、すぐ前に、レオアリスがいた。

黒い凍るような瞳と、酷薄な笑み。

何の予備動作もなく至近か ら打ち込まれた剣を、バインドの左腕が迎え撃つ。

!

くぐもった、

嫌な音が響いた。

剣の衝撃を殺せず、バインドは地面に叩きつけられた。

砕けた左腕を、驚愕に見開いた瞳が見つめる。

「はは」

顔を上げた視線の先に、レオアリスの姿はない。 気配を感じて動こうとした

瞬間、足が左腕を押さえ付けた。

青白い剣が首筋にひやりと当る。

バインドとレオアリス、二人の視線が合わさる。

七

骨を断つ鈍い音が、ロットバルトの許まで届いた。

断ち切られた首が雪の上に転がる。

口 ツトバ ルト ・の位置・ か 、らは、 佇んでいるレオアリス後ろ姿が見えるだけで、

その表情は判らない。

ひきつっていたバインドの身体が、 やがて静かに動きを止めた。

つまらないな。もう終わりか」

その声はぞっとするほど無機質な響きを持っていた。

先程までのバインドとの戦 1 は、互いの力が ほぼ 拮抗 してい た。

おそらくバインド自身想定していなかっただろう。

二本目の剣の

出現、全能力の

解放がここまでの差をもたらす事になるとは、

それとも、それがバインドの望みだったのか。

(どうなった……?)

あの感情を欠いた声の響き。

レオアリスが頭をもたげ、ゆっくりと視線を巡らせる。

口 ツ } バ ル } は 知らず、 剣  $\mathcal{O}$ 鞘を左手で掴 んだ。 冷えたその感触 に気付 ١ ر て

笑う。

普段のレ オアリ ス からは感じる事  $\mathcal{O}$ な V ) 心 臓 を 撫 ぜるような恐怖 が そ  $\mathcal{O}$ 

を満たしている。

このまま放っておけば、切り裂くものを求めて、

眼にするもの全てを滅ぼす

だろう。バインドのように。

だが今この場には、ロットバルトー

人し

かい

ない。

(……俺が、止めるか?)

止められる可能性があるのか。

(――全く、自信が無いな)

自分一人で止める自信どころか、 大隊一つ手にしていた所で何の勝算もない

事は、バインドが証明している。

リスにどれほど彼の意識があるのか、 だが、 すぐにで ŧ レ オアリスは 口 ット この場か バ ル } らは を見つけるだろう。 想定が付かない。 今の レ オア

どうすれば戻る?

剣を手放させるしかない)

最も単純で、最も効果的だ。

どうやって?

知るか」

価値の無い自問に、自嘲気味に笑う。

レオアリスの視線が 口 ットバルトを捉えた。

ふ、とレオアリスの姿が消えたと見えた瞬間、

目

の前にその姿があった。

上げられた漆黒の瞳と一瞬視線が重なる。

何も考える間もなく、 身体だけが 動い た。

地面を蹴ったその後を追って横薙 の関 光が走る。

(しまっ)

咄嗟に立てた剣が、砕けた。

剣風に弾かれ、 後方の森へ弾き飛ばされる。

雪 0 上に全身 を 吅 きつ けら れ、 口 ツ 1 バ ル  $\vdash$ · は 激 しく ・噎せ返 つ た。

先程の位置から再びレオアリスは一息に間合いを詰めた。

呼吸を失ってその場に沈み込んだのが幸いした。

横 薙 O剣 が 口 ット バ ル トの 頭上を抜 け、 背 後 0) 木 々 が 衝 撃 共に 断 5 切

られ

る。

息をつく間もなく振り下ろされた剣が、 口 ツトバ ル }  $\mathcal{O}$ 首の横で止まった。

剣のひやりとした感覚が皮膚に伝わる。

自分の首と胴が未だに繋が つ てい る事に、 どこか 他 人 事 のように不思議さを

覚えた。

だが剣は止まったまま動く気配が無い。

首筋で 剣 が 小 刻 み に震えるの を感じ、 口 ツ 1 バ ル } は 視 線を上げ、 レ オ アリ

スを見た。

レ オアリ ス 0 瞳 が 軋 む。 見慣 れ た感 情  $\mathcal{O}$ 色 が、 僅 か に そ 0 瞳 に 揺ら *\*\

噛 みし め 5 れ た 唇 か 5 擦 れた声 が 途 .切 ĥ 途 切れ に 押 L 出される。

……離、れろ……っ」

鬩ぎ合う意識を表わすように、 剣を握った右手を、 左手が押さえ込む。 レ オ

アリスはよろめくように、数歩後退った。

(……まだ——)

先程の初太刀を避けられたのも、この為だ。

まだ完全にレオアリスの意識が消えた訳ではないのだ。

止めるなら、今を置いて他にはない。

だが幾度思考を巡らせても、 自分の今の能力を考えれば答えは全て、

比較にならない。

それでも、ただ殺させる訳にはいかない。一旦身近な者を斬れば辛うじてか

けられている枷は外れ、 もはやレオアリスは自分を押し止める事 はできないだ

ろう。

一つだけ、賭けのような方法がある。

(気休めに近いな)

それでレ オアリス の意識が が戻り る確率など、握った砂の一 粒もあるかどうかだ。

だが、 きっかけにさえなればい \ \ ° 自らの意志で剣を抑えない限り、レオア

否だ。

リスの意識を戻す他の方法はない。

それを捜して視線を巡らせ、ロットバルトは息を呑んだ。

雪を踏んで、ゆっくりとこの場に近づいてくる者がある。

カイル――レオアリスの祖父だ。

右手に丸い香炉を提げている。

来るなと、喉元まで込み上げた声を飲み込んだ。刺 激を与えるの

は避

しけたか

つ

(何をするつもりだ……?)

た。

レオアリスはまだ背後に気付いては

, ,

ない。

カイル は足を止めると低く何かを呟いた。その詞に合わせ、 提げて ζì た香炉

か 5 薄紫  $\mathcal{O}$ 煙 が 溢 れ出し、 雪の上に落ちると這うようにレオ アリ ス 0) 足元に

**漂っていく。** 

それは足元からゆっくりと、 レ オアリスの身体を絡めとろうとするかのよう

に立ち昇った。

ひどく重量感を伴う。 口 ツ トバ ルト  $\mathcal{O}$ 許 に 咄嗟に足を引いたものの、 も煙がじわ りと這 **,** \ 寄る。 触 足先に僅 れた瞬 間 かに 頭 触  $\mathcal{O}$ 奥 れ が た そ 鉛 れ のよう は、

に重くなった。おそらくは捕縛用の術なのだろう。

煙を嫌い、レ オアリスは身体を捩る。 だが絡み付いた煙に繋ぎ留められたか

のように、脚は動かない。

脚に、腕に絡み付いた煙が厚みを増す毎に、剣がじり、

と下がった。

(……成功したのか?)

上体が揺

れ、

雪

の上に

膝が落ちた。

く。

煙は途切れる事なく、 屈み込み動きを止めたレオアリスの背に纏い ついてい

を括られたように動かない。

じわり、とレオアリスの中に怒りが生まれる。手足が痺れるように重く、

鉛

苛立ちと怒りが胸の奥に渦巻く。

自分を抑え込もうとするのは何だ?

背後に、何かの気配があった。

邪魔だ。

雪についた右手が、剣の柄を握り込んだ。

V オアリスが 動かなくなったのを見て、 カイルは大きく息を吐いた。 掲げた

香炉を下ろそうとした瞬間、 青白 , , 光が走り、 手にした香炉を砕いた。

!

衝撃でカイルが雪の中に倒れ込む。

身を起こし向けた視線の先で、 レオアリスの身体が重い 戒めを纏 ったまま、

ゆっくりと立ち上がる。

取り巻く煙を断つように、身体の周囲を剣が一閃した。

煙が掻き消える。

(やはり、抑える事は出来ぬか)

カイルは予め分かっていたかのように、僅かに笑った。

恐らくは、抑える事は不可能だろう、と……。

ふと、瞳を見開く。

ならば何故、自分はこの方法を選んだのか。

その場に立ち尽くしたカイルに向 かって、 レ オアリスは足を踏み出した。

自分の邪魔をしていた相手に向って歩く。

これはかい、つまっぱいのに。目の前まで来ても相手は動く気配もない。簡単に

斬れる。

それは少し、つまらなかった。

――違う。

心の奥に浮かんだ声を無視して、剣がゆっくりと持ち上がる。

凍える冬に自分を暖めた腕。

目の前にいるのは。

剣が切り裂く事への喜びに満ちる。

剣が、動きを止めた腕に苛立つように震えた。囲炉裏の傍で、そのしわがれた声が語る言葉に耳を傾けた。

目の前の相手は逃げる気配すら無い。

斬れ。

剣の歓喜が全身に流れ込む。

.....何で---。

胸の奥底で、微かな悲鳴が響いた。

何で、逃げてくれない。

無造作に、右腕が上がる。

カイルは少しも身動きする事なく、 ゆるやかに持ち上がる剣を見ていた。

これが自分を斬れば、もはやレオアリスは止まるまい。

そうさせてはならないという想い の奥底に、 小さな硬い 石のようにこごった

固まりがある。

それが自分に裁断を下すのを待っている。

彼らが去って長い間、 口に出されないままに、ずっと抱き続けてきた想い。

幾度重ねても、どうやっても、思考はそこに戻る。

我々はやはり、忌み族だったのだと。

関わるものに禍を呼ぶ。

何故、生を求めてこんな地まで来てしまったのだろう?

もっと早い段階で諦めるべきだったのだ。

自分達の足掻きが呼んでしまったもの。

ずっとどこかで死を望み続けてきた。

もうすぐ、それが訪れる。

一番、相応しい者の手によって。

バルトの中に憤りにも似た感情が沸き上がった。 カイルは剣が振り下ろされるのを待つように動かない。その姿に、ふいに 口 ツ

"あの子を、頼みます"

1

あれは、そういう意味で言ったのか?

"我が子』を想う親の願いではなく?

〔――冗談じゃない。そんな頼まれ方は御免だ〕

雪に覆われた木立の間に視線を走らせる。探しているものはすぐに見つかっ

た。

いつの間にか晴れ上がった空の光を受けて、鮮やかに輝く。

走り寄り、 雪  $\mathcal{O}$ 上に落ちていたそれを取り上げると、 ロットバ ルトは二人へ

と向き直った。

今にも振り下ろされそうな剣。

微かに震える腕が、レオアリスの中の葛藤を伝えている。

カイルにはそれが見えていないのか。

正めろ! あなた方が望んだのは、そんな事では無い

鋭 が声 が 力 1 ルを思考から引き戻した。 レ オアリス の後方に 口 ツ トバ ルトの

はずだ!」

姿がある。

その手が投げ た 何 か が、 陽光を弾 (1 てカイ ル の手 0 中に落ちた。

剣の意匠に、青い石の飾り。

目の前のレオアリスの姿に青年の姿が重なった。

『忌み族? 迷信なんて大体そんなもんだ』

『伝えたいのは――』

あ、あ」

自分は、何を、しようとしていた?

この、何よりも大切な、彼等の忘れ形見。

それを――。

見上げたレオアリスの瞳の中に激しく鬩ぎ合う色がある事に、 カイルは漸く

気付いた。

どうして今まで見えなかったのか。

そこにあるのは、怒りでも憎しみでもない。

苦痛にも似た、悲しみの感情だ。

今にも泣きだしそうな。

無造作に上げられていると思った剣に込められた、二つの力。

振り切ろうとするものと、押し止めようとするもの。

それを目にした瞬間、 カイル は腕を延ばして目 が 前 の身体を抱き締めた。

限界に達した弓のように、その上に剣が落とされた。

引き絞られ、

抑えがたい衝動が、鼓動に合わせて吹き上がる。

止 め処も無く生まれるそれは、 解放を求めてレオアリス の意識を揺さ振 り続

ける。

千切れそうになる意識を繋ぎ止める為に、 精神 は 急激に 疲労してい

相手を求め、剣が歓喜に震えて持ち上がる。

目

の前に祖父がいる

のは判っていた。

抑えようとする腕を無視し、

抑えようとするこの腕に力は入っているのだろうか。

そもそも、自分は抑えようとしているのか?

斬りたがっているのは誰だ。

---いやだ。

剣の歓喜が膨れ上がる。

目の前にいるのは、自分を育ててくれた親だ。

切り裂く

---嫌だ、止めてくれ!

意識が、弾けた。

八

ふい に、 辺りが静寂に包まれた。

真 0 白 1 雪の 中に誰 カン が立ってい る。

初めて聞く声。少し低い、どこか

陽気な響きだ。

悪かったなぁ。

俺は、

お前に、

何一つしてやれなかった』

『でも、 楽しみにしてたんだぜ?』

その姿は雪に乱反射する陽光に阻 ま れ、 はっきりと見る事はできない。

自分にやはり似ているだろうか。

-幻だから、 分からない)

現実では在り得ないのだから。

名前もやれなか それでも、 胸に は ったな。 締 め付けられるような、哀しみと喜びが満ちている。 ……でも、 お前は王から名を貰ったろ』

軽やかに笑う。

オアリスか。 いい名じゃないか』

男の手が、剣を握ったままのレオアリスの右手に置かれた。

温もりが置かれた手から静かに伝わる。

鮮やかな漆黒の瞳。

『――剣に呑まれるな』

ゆっくりと、穏やかに、だが明確に告げる。

『それは、お前自身だ』

オアリスが言葉を発する前に、 その姿は雪に溶けるように消えた。

剣が、カイルの背に届く寸前で止まる。

覗き込んだレオアリスの瞳に、明確な意志の光が戻った。

未だ力を緩めない剣を、握った腕が少しずつ押し戻す。

「レオアリス……」

確認するように呼び掛けたカイルに、 レオアリスは瞳だけを向けた。

「……離れてろ」

食 11 縛 0 た歯 から押し出される言葉に、 言わ れるままカ 1 ル は 数歩後ずさつ

た。

レオアリスの腕が再び上がった。

頭上に掲げら れた剣 が 発する青白い 光 が、 白い 世界を染め上げて

*\* \

剣が支配を求めて力を増していく。

無 尽蔵にも思えるその力が、 自分の中 -を突風 のように激しく吹き上

え込もうとするほど、全身を切り裂こうとして身の 裡で渦を巻く。

だがもう、 身体がばらばらに砕けそうな激痛に、 分 か つてい る。 その力も意志も自分の 途切れそうになる意識を繋ぎ止める。 範疇に しかあり得 ない。

抑え得るのは、

ただ意志と、

誇りだ。

自分を常に支える、彼等への。

**湯気ように、置いしこら。** 雪に閉ざされた世界を暖める、しわがれ

た声。

陽気な声と、置かれた手。

炎の中から見上げた金色の瞳---

一がり、

抑

剣 から叩きつけられる風が、 レ オアリスを中心に雪を吹き上げていく。

## まずい)

口 ットバルトは座り込んだままのカイルの身体を抱えると、 雪を蹴り後方に

跳 んだ。

破片となって竜巻のように空に巻き上がった。

瞬上空で停止

し、

竜巻のその中心目がけて急激に落下する。

レオアリスの足元で湿った地

面

が

覗き亀裂を生じたかと見えた瞬間、

レオアリスが剣を大地に叩きつけるように突き立てた。

轟音と共に、 口 ットバルトはカイルの身体を抱え込み、 爆風と光が膨 れ上が り、落ちかかった破片を粉々に砕く。 地 面に伏せた。

巨大な

光は唐突に消え、辺りに痛い程の静寂が戻る。

身体の上に降り注いだ土砂を払い除け、 ロットバルトはふらつく頭を抑えな

がら立ち上がった。

服の裾を引かれ、 踏み出 L かけた足を止める。 蒼い瞳が 呆れとも驚きとも付

かないまま見開かれた。

「……凄まじいな……」

ほんの半歩先から、大地は視界の端まで陥没し、 すり鉢状の巨大な窪みを作

り上げていた。

カイルを助け起こしながら溜息をつく。

つくづく、良く破壊する方だ」

レオアリスは静かに息を吐き出した。

先程まで渦巻いていた身を引き裂く程の力は、 既にレオアリスの裡に収まっ

ている。

地面に突き立てた剣が一つ身震いをし、二本の剣に分かれ、そしてレオアリ

スの中に溶けた。

晴れ上がった空に顔を上げる。

微かな金属音に、

首許に指を当てると、冷えた小さな石が指先に触れた。

村人達はレオアリスの 周りに集まり、名残惜しそうに彼等の育て子を見つめ

た。その顔はどれも皆、恨みがましい色を浮かべている。

「来たのも教えんで、もう帰るとは、薄情もんが」

「カイルもカイルじゃ。わしらに黙って」

祖 父が取り り囲ま れて口篭る様を眺 め、レ オアリス は可笑しそうに肩を震

その姿に一斉に老人達の厳しい視線が向けられる。

た。そうしながら、こうして再び笑える事に、

強い

安堵を覚えていた。

「何を笑っとる、お前もじゃ」

じろ、と睨まれてレオアリス は無理に笑いを押さえ、 肩を竦めた。

それ

から

改めて彼等一人一人を見回す。

「年に一度しか戻らんくせに」「――もう行くよ。また来る」

「いつじゃ」

わせ

来る日を教えて行け」

「んな事言ったって……」

四方から詰め寄られ、言葉に詰まって数歩後退る様を眺め、 口 ツト

バ

ルトは

苦笑を零した。

「上将。よろしければ、 報告は私が先に戻って上げておきますが」

老人達は嬉しそうに頷き合い、レオアリスに再び詰め寄った。

「気が利くのう」

「そうじゃそうじゃ。二三日帰らんでも問題はない

わ

いっそ帰らんでええ」

「それは困りますね。我々には大将が必要です」

老人達は今度はロットバルトに顔を向ける。

「横暴じや!」

「そう仰られても」

ロットバルトは老人達に詰め寄られても素知らぬ顔だ。

オアリスはその様子に笑い、 それから僅 かに迷う素振りを見せたものの、

やはり首を振った。

それは自分の任務として、王から与えられたものだ。

落胆を浮かべ、肩を落とした村人達に再び顔を向ける。

「……またすぐ来るさ。 いない間にじい ちゃ ん達がぽっくり逝っちまっても困

るし」

そう言ってにや、と笑ってみせる。

「なんちゅう口の悪いガキじゃ」

「そうそう死なんっ」

お前みたいな孫がいたんでは、気になって死ねん」

々に言い ながら、 それでも老人達は代わる代わる、 レ オアリス を抱き締 8

る。

П

最後にカイルがレオアリスに歩み寄り、 束の間その顔を見つめ、 身体に腕を

回した。

祖 父の背を見つめたまま、レオアリスは身体を暖める温 もりを噛み締める。

ずっとこれを感じて育ってきた。

あ の手も、これと変わらない 温度を持ってい た気がする。

俺、多分ジンに会った」

呟かれた言葉に、カイルや老人達が瞳を見開いてレオアリスを見つめる。

単なる、 ……笑ってた」

数度躊躇うように開きかけた口が、

結局何、

も紡ぐ事無く閉ざされた。

夢かもしれないけどな。

カイルは一度だけ、 静かに瞳を閉じた。

ーそうか」

胸に架けた石は、 もはや何も言わない。

ただ深い青い色を湛えてそこにある。

オアリスは顔を上げた。

「……俺は、この村が好きだよ」

カイルが少し呆れたように笑う。

止めるのも聞 かずに 飛び出した奴が、 良く言うわ」

そうだけど。 俺を、 ここまで育ててくれた」

色々なものをここで培ってきた。

彼等なくして、今の自分は有り得ないだろう。

「まだ、礼も言ってなかったな」

レオアリスは改めて彼等に向かい合うと、静かに、深く頭を下げた。

「ありがとう」

537

飛竜の銀の翼が大きく風を孕んで空に浮かび上がる。

一面の白銀の世界が、陽光を受けて眩しいほどに輝く。

ここは、これから雪が降り続け、 外界から隔絶された厳しい冬を迎えるのだ

ろう。

レオアリスは暫く白い森の奥に視線を注いでいたが、やがてそれを戻すと、

まだ飛竜を見上げたままの村人達に大きく手を振った。

手綱を引き、騎首を南に向ける。

戻るか」

王都へ。

終音

\_\_\_

前方で王城の尖塔が朝日を弾いた。

薄紫の 夜 明 け が 東 へと後退していく空に、 小 Щ  $\mathcal{O}$ ような王 都  $\mathcal{O}$ 影 が

る巨大な都、アル・ディ・シウム。

る間に視界に迫るように近づいて来る。

周囲を

囲

む

広大な森

 $\mathcal{O}$ 

中

に

浮

かび

上が

現

れ

見

そこに、王が座す。

様々な想いが心の裡を過ぎる。ただその多くは、

レオアリスは大きく息を吸い込み、静かに吐き出

した。

温も

り

を伴うものだ。

随分と久しぶりに戻ってきた気がする。

急 かす心のままに飛竜を駆ろうとして、 王都の上空を旋回す うる複数  $\mathcal{O}$ 飛 竜

 $\mathcal{O}$ 

陽 姿があるのに  $\mathcal{O}$ 日差 L に、 気付き、 飛竜達 レ  $\mathcal{O}$ 姿は オアリスは手綱を引き速度を緩 濃 1 影 のようだ。 やや遅れて、  $\emptyset$ た。 口 真 横 ツ  $\vdash$ バ か ルト i ら 差 が す太 乗

騎を寄せる。

「こんな早くに……何かあったのか」

力 1 は 戻 0 た 時、 何 1も告げ は L な か 0 たの でし よう?」

「特にはな」

オアリスの使 11 、 魔 は、 村を出 る時に帰都を知らせに飛ば L たが、 取り立て

て異変を知らせてはいない。

ただ、ここのところ立て続けに軍 が 動 **,** \ ている。 バインドの件 が 終 わ 0

覚えた。

は言え、

早朝から飛竜

が王都

 $\mathcal{O}$ 

上空を旋

回

L

ている事に、

少な

か

らず緊迫

感を

たと

「どこの隊だ?」

この間に ŧ, 王都 は ゆ つくりと目前 に近づいて来る。 口 ツ -バ ル トは蒼 1 瞳

を細めて次第にはっきりしてくる王都の上空を透かし見た。

---師団ですね」

師団? 何で上を飛んでるんだ。訓練は予定して無いだろ」

何 か 緊 急  $\mathcal{O}$ 案 件 でも あ った 0 か と レ 才 ア IJ ス が ハヤテを急 が せようとした

時、 彼方  $\mathcal{O}$ 飛竜 が 騎、 二人に気付 ζ, た 0 か、 速度を上げ近づい て来た。

それを合図に、 北の演習場から飛竜 0 隊が 一斉に上昇する。 飛竜に驚いた

鳥 達 が 周 囲  $\mathcal{O}$ 木立 から追わ れるように羽 ばたき、 騒 然と羽 音を響 か せ

## 「何——」

飛竜 の 黒 い鱗 が陽光を弾き、 黒雲のように王 都  $\mathcal{O}$ 北 側  $\mathcal{O}$ 空を埋めて い . る。

飛竜 の上 一に立てた た棚 引く旗 は黒地 に暗 紅 色  $\mathcal{O}$ 双 頭  $\mathcal{O}$ 蛇 紛 れ もな *\*\ 近 衛

師団

## **飛竜を**駆

 $\mathcal{O}$ 

軍旗だ。

飛竜を駆 る騎手の姿が肉眼で捉えられる程に近づき、 オアリスは身を乗り

## 出した。

## 「一隊……」

先頭の飛竜の上に立のはグランスレイだ。 クライフの中軍がそのすぐ背後に

続き、 左右にそれぞれ、 フレ イザーとヴィルトー ルの左右 軍が 展開 L ている。

――ほぼ、一隊全騎じゃねえか……」

「そのようですね。ただ離脱もその後の飛空も乱れが無い。見事な編隊ですよ。

儀礼の際の空域展開の見本だな」

ま ま 今度 0 口 御 ツ  $\vdash$ 前 バ 演 ル 習 トは に取 ŋ V 入れ オアリスに瞳を向 ましょうか、 けた。 と感心 L たように口元に手をあてた

**(** ) P, お 前、 何 をの んきに・・・・」

次 など通常ではほぼ 々に飛 オアリスが驚きを通り越して、呆れた声を上げる。 来すると、レオアリス達の周囲に滑り込むようにぐるりと取り巻い 有り得ないのだが、第一大隊の飛竜は一糸乱れぬ編隊 全隊がこうして動く事 のまま た。

黒旗 が 風に靡き、音を立ててうねる。

呆気に取られてハヤテの上に立ち尽くしているレオアリスの前で、グランス

レ イが · 飛竜 0 上に立ったまま、 深く上体を折る。

クライフ、ヴィルトール、そして第一大隊

斉に敬礼を向けた。

フレ

イザー、

「ご無事  $\mathcal{O}$ 帰 還 お慶び 申し 上げます、 大将」

グランスレ イの 低い 声 が、 静ま いり返っ た大気に溶ける。

二、三度口をぱくぱくと動 かしてから漸く現状を飲み込み、 レ オアリスは顔

に血を昇ら せ た。

この為だけに、 早 · 朝 に ŧ か か わ らず彼等はずっと待っていたのだ。

オアリスはまだ顔を赤くしたまま一度俯き、 再び顔を上げて彼等を見回し

の将校と隊士達

が、

た。

「――今、戻った」

黒雲のように密集した飛竜達 の上から、大きな歓声が 上がっ た。

「こういう場合、 将校は兵に対し手を振るなどして応えるのが 慣例 ですよ」

手……?」

手を振って応えるというと、祝祭などの折に王や高位 の貴族がやるあれだ。

オアリスには

番苦手な分野だ。

優雅

で華や

か

, な 印

象が強く、王やアヴ

ア

口

ンが行う場合は

威厳

に満ちている。

「……いや……俺にはちょっと……」

慣例、というよりは、 軍の将として の義 務ですね。 兵 の 士 一気を上 げるも落

とすも、上に立つ者次第でしょう。まあ一言演説されるという手もあります が

義務……?」

実際は剣を挙げて応えて見せ れ ば、 それだけで十分な  $\mathcal{O}$ だが、 義務と言われ

7 オアリス は 真 剣に眉を顰めて考え込 んだ。

口 ツト バル トは考え込んでいるレオアリスの横を離れると、 正面 のグランス

1 乗 騎 を寄せ た。 第一大隊 全軍 ーを 動 かす許可を、 誰 が 出 L たの カゝ <u>ک</u> その

点が気に か か る。

この件に関して、王は軍を動 かす事を禁じている。バインドを討った以 Ł

なくては出来な *\*\ はずだっ た。 既にその

範

非疇では、

ないに

しろ、

緊急時でもなく大隊全騎を動

か

す 事

は

許

可が

イは頷いた。

歓声はまだ続 いていて声は聞き取りにくかったが、グランスレ

「アヴァ ロン閣 下には、 飛空演習を行うと申 請して許可を戴 7 て *\*\ る

グランスレ 1 の顔に浮 かんだ表情に、 ロットバルトは苦笑を洩らした。

規 律規 則を重  $\lambda$ じるグランスレイがこうした選択をするのは、 かなり思い

切っ たはずだ。

「……何だ」

グランスレイが渋い顔 でロ ットバルトを睨 む。

いえ。 派手な演習ですが、 たまに は 必 要でしょう」

今回 は、 我 々だけでは なく」

 $\Box$ を無理に引き結んだままのグランスレイの声に重なるように、鋭く、 だが

朗ら か な声 が 降 り注 いだ。

剣 士, 才 ア リス 良くぞ戻った。 王は お待ちかねだ!」

上空に、 磨き上げられた濃紺 の鱗 の 飛 竜 が浮 か んでい た。 飛竜 の 青 い瞳 が挨

ら、 ひょいと顔を覗かせた。

拶をするように瞬

く。

オアリ

ス

が

言葉を発する前

アス

クロ

 $\vdash$ 

が

その

上 カ

お前さぁ、 こういうとこでがっちり固まっちゃってどうすんの? 情けない

ぱぁ

1

っと。

せっかく派手に迎えて

やつ

たんだからさぁ」

ね。

もうちょっとぱぁーっと行けよ、

華やかな面に、に、と笑みを広げ、 アスタロトは手を振った。 呆気に取られ

て言葉を失ってい たレ オアリスも返すように笑う。

何が派手だ。 大体お前 が何でこんなとこにいるんだよ」

「だって、面白いじゃん。お前がどんなカッコいいこと言ってくれるのかと思っ

リスの正 悪戯 0 面にふわりと浮かぶと、黒い艶 ぽくけらけらと笑い、 ア ス タロ 髪が トは 風 ハヤテの上に に靡いて零れた。 発び降 りた。 オア

握 った拳でレオアリス 0) 胸をトンと叩く。

ほら、 応えてあげなよ。 皆 朝 つぱ らからお前が何言うか楽し みに して来てん

だから」

アリスがどんな事を言うのか、半ば ぐっと詰まり、 レ オアリスは周りを見回 面 白 が した。 ってい 周 る表情 囲 の隊士達 が 浮 か んで 0) 顔 に **,** \ は、 る。 オ

まで注目されると、 こやかに微笑むアスタロ 余 計 何 トに向けた。 も出てこな レ オアリス は 恨 ひみが まし 7

「しょおがね えなあ。 上将 !

イフはハヤテの上に飛び じ れったそうな声と共に隊 移 った。 士 達 主以外  $\mathcal{O}$ 中 カゝ の者に乗ら らクライフ れ、 0 飛 竜 ハ ヤテが不機嫌そうに が 進 4 出ると、 クラ

鋭く息を吐き出 す。

ちっと我慢してくれよ。 お 前 のご主人の為だ」

クライフ オアリスは慌てふためいた声を上げたが、 はハヤテへそう声 を掛け、 レ オアリスを肩に担ぎ上げる。 クライフは構わずぐるりと隊士

瞳を、

ノノノ

達を見回した。

「バインドを討った剣士だ! 俺達の大将だぜ!」

朗々としたクライフの声に重なるように、再び歓呼の声が響く。

クライフはレオアリス 0) 顔 を見上げ、 カラカラと笑った。

上将おつ、 ほら、 奴等に何か言ってやってくださいよ」

オアリスは赤

面

したまま何とか逃れる手は無いものかと周囲を見回したが、

逆に期待に満ちた顔に迎えられ、 やがて観念したか のように顔を引き締めると

ヤテの上に降り立った。

この位の責務は果たせて当然なのは確かだ。

アス・ タ 口 トが 期待に瞳を輝 かせて、 食い入るようにレオアリスを見つめてい

る。

(くそ、何の期待だ)

レオアリスはその顔をじろりと睨 み付 けた。

(きっちり、 格 好 いい事言ってやろうじゃねぇ か

喉 の調子を整える為、 一度軽く咳払いして顔を上げる。

[ ······· [ ·/· ]

[ :] ?· ]

け加えれば、王の前にある時よりも、 じっとらそこにある全ての視線が集中する。どんな戦場にある時よりも、 緊張した。

付

(――やっぱ、何も出てこねえ……)

「……これからもよろしく……」

一瞬の沈黙が生じた中を、涼やかな風が吹き抜ける。

「史上稀に見る、迷言ですねぇ」

---少し厳しく、大将としての在り方を学んで戴かねば」

アスタロトの爆笑が、晴れ渡った空に響いた。

良く戻った。バインドを見事討ち倒しての帰都、 喜ばしい事だ」

王 の 声 が、低く心地良く、そしてその場を圧する響きで、 静 かに流 れ る。

高 い位置に設けられた窓の飾り硝子から、 複雑な色彩を帯 び た光 が 玉座を浮

か び上がらせるように降り注 いでいる。

オアリスは玉座の 壇下に · 跪 1 たまま、 顔を伏せ、 王

0

声を聞

*(* ) 7

1

た。

血.

液

に

乗 0

湧き上がってくる喜びと、 身体の隅々まで行き渡るように感じられる。 誇 り。 それらは心臓 カゝ ら送り 出される

この感情が、 彼の言っていた、主を得るという事

なのだろうか。

結局、 明確な答えをくれる者はい ない。

それは自分自身で選ぶしかない感情だが、そうであれば、 自分は既に選んで

1 るのだろう。

許されるなら、 王に尋ねてみたい 事がある。

十七年前の事を。

何故あの時、自分を救い上げてくれたのか。

名付けた、その理由を。

だが、王の上には常と変わらない表情があるだけだ。

レオアリスは気持ちを抑え、深く頭を下げた。

「……月の末は演習があったな」

「はい。御前に、披露させて頂きます」

楽しみにしている」

一言、そう告げると、王は瞳を閉じた。

王都に戻ってからはひたすら慌ただしかった。

まずは 正 式な報告書を作成 しなければ ならない。 どこまで記載すべきかで、

口 ツト バ ル 1 やグランスレ イと何度か 議 論を交した。

ス 口 ツ レ F 1 オ もそ . バ ア リス ル トは過 れ に は直接的にバ 賛 同 去の経緯 した。 は インドと関わ 度明らかにしておく必要があると説き、グラン る事柄のみでいいと考えてい たが、

5  $\mathcal{O}$ 「それが誰にとっても真実となる訳では  $\mathcal{O}$ の見方 主張 を は 提 *\* \ ず 示 れ すべきでしょう。 か の時点でしておくべきです。 特にこの件に関 ありません。 この先王都 しては、 ですが、 貴方は に あ 多方面 貴貴方 る なら、 の立 から 尚 場  $\mathcal{O}$ ŧ 更 カン

必要な事ですよ」

に · 任 結局、 せた。 実際の報告書 自 分ではどうしても感情 へ追記として別に添える形で、 が先に立ち、 報告としての その部分は 処 理 ロットバ は 出来そう ルト

にない。

軍議での口頭の報告も残っていた。

報 告 一は淡 々と行 な わ れ、 バ 1 ンド  $\mathcal{O}$ 死 12 対 て確 認する二、 三の 質 問 を受け

ただけで、 特に 問 題も 挙がら なか 0 た。

される事 インドを たとは言 もとより四大公 は 無か 討 V) 難 0 7 0 1 た。 表情 戻っ の立会い を浮 た  $\mathcal{O}$ で 0 カン べ あ 上で王が下した決定に異論を差し挟 てい れば る者も そ れ あ 以 0 上 たが、  $\mathcal{O}$ 議 論 そ Ł れ な も表 まだ・ <u>\f</u> つ む余地 て 完 取 全 は ŋ 12 なく、 沙 納 汰

応には 開 が 放 口 感 ツ 連 カン  $\mathcal{O}$ 肩 1 5 軍 透 バ ほ 議 か ル つ と  $\vdash$  $\mathcal{O}$ L 終 を が 食ら 用 息を吐い 了を告げた時 意 った気分さえ覚えたが、 Ī た答弁 た。 は、レ  $\mathcal{O}$ 資料、 オアリスもグランスレイも顔を見合わせ、 ŧ あまり それでも正規軍 開く必要の な 1 副 ま 将 ま、  $\mathcal{O}$ タウゼン 彼等  $\mathcal{O}$ 

中 -断され てい た 御 前 演 習  $\mathcal{O}$ 潍 備 ŧ ま た 再開された。

慌 ただしく、 L か L 確 実 に、 日 常 が 戻ってくる。

ゆ つくりと振 り返る時間 もな **,** \ まま に、 演習訓練、 演習会場 の警備 や王 0 警

反

更に合同 護と入退 日 Þ すべ き事 場に  $\mathcal{O}$ 演習 · 伴 う は ŧ Ш 重な 導線 積 れ 7  $\mathcal{O}$ ば、 *(* \ 確 く。 保、 ほとん 列 近 衛 席 ど食 する 師 寸 事 諸 内 を取 で 侯  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 会 警 る暇さえ惜 議 備 R 正 規 般 軍 L 観 لح 1 覧 ほど、  $\mathcal{O}$ 者 合 同  $\mathcal{O}$ 誰 対  $\mathcal{O}$ 会 応と、 ŧ 議 が慌

そうして、 インドの一 日数を数える間 件で準 -備が滞 もなく、 0 てい · た 分、 日 Þ は 尚更立ち止 過ぎた。 ま 0 ては **,** \ られ ない。

しく

・動き回

って

1

た。

る第 Ł 街路 早  $\mathcal{O}$ (二層) 7 は 樹 ŧ 枝 ので、 は、 を は 離 金色に染まり、 出陣 れ もう明 7 . 前 散 に り ŧ 日 始 匹 は め、 敵 御 乾 する慌ただしさに 前 路 į١ 演習 た葉が枝 上  $\mathcal{O}$ 石 が 行 畳 わ に から零れそうに揺れてい 鮮 れ る B 包まれてい か 日 だ。 な絨毯を敷き始 正 規 た。 軍、 近 る。 衛  $\emptyset$ 師 7 て 気 寸 0)  $\mathcal{O}$ 1 る。 早い 詰 8

子にどさりと腰を下ろし 最 後  $\mathcal{O}$ 近 衛 師 寸 全体  $\mathcal{O}$ た。 布 陣 久 演 図を しぶ りに 確 認 動 L つて 執 < 0) を止 務室 め に た 戻 気がす ると、 る。 レ 才 T IJ ス は椅

警備態勢も、 演習  $\mathcal{O}$ 布 陣 ŧ, 閲 兵 0 並 び ŧ, 全部終わりだな?」

念を押すようにグランスレ イを見ると、 グランス レ イも慌ただし 1 影を 額に

残したまま、力強く頷いた。

さは充足感も感じさせるものだ。 と寄りか 後は午後の会議 グラン かった。 ス イの ただ、 言葉に、 で全体の最終確認を行い、それで本日の案件は終了です」 闇雲に疲れ レ オアリスは大きく息を吐き、 てい る訳でもない。 終着点 椅子  $\mathcal{O}$ 0 背にぐったり ある慌ただし

「明日か……」

閲兵と、 明 日 は 数刻に渡って行われる。 正午から始まり、 王の高覧のもと、布陣演習、 演武の中で、 レオアリスの剣舞も予定されて 隊内の実戦 演習、 演 武、

いた。

た上で決めようと思っていたが、中々じっくりと考える時間も取れてはい 実際 二刀を使うかどうか、それを少し迷っていた。剣の あ れ 以 来、 レ オアリス はまだ剣を抜い 7 はい な 制御や演習場の状況 \ <u>`</u> を ない。 測 0

完全に オアリスは束の 制 御できるの 間天井を仰いでいたが、一旦身体を背凭れ カン 、 と 自 分に問 えば、 ١ ر ま ー つ 確 証 が 付 け 難 に沈め、 か 0 た。 勢いを

つけて椅子から立ち上がった。 とにかく、 この後の会議、 近衛 師 **団** 正規軍の

揃う会議で取り敢えず最後だ。

「行ってくるか」

面倒なのは変わらないが、バインドの件を議論していた時よりはずっと気が

楽だ。

「どうぞ、会議用の資料です」

**扉へ向かうレオアリスへ資料を差し出** 口 ットバルトは言葉を継いだ。

「会議が終了された後、お時間を戴いても?」

「予定は開いてるけど……めんどくさい案件じゃないだろうな。さすがにもう

色々考えるのは遠慮したい」

ロットバルトは笑ってそれを否定する。

では、王立文書宮へお越しください」

見せたい ものがあるとそう言って、会議 の時間が迫っているレオアリスを送

り出す。

何があるのか尋ねようとも思ったが、なんとなく止めた。

よい 外に . 出 レ オアリス れ ば、 日 差 は青く しが 晴 暖 れ か . く 中 渡 0 てい 庭に る空を振 注 *\* \ で 7 り仰 る。 ぎなが 吹き抜ける冷 5 東の えた 間 風 遠 Ł < 心地 離

「参りましょう」

れた故郷

の雪を想った。

グランスレ イに促され、 V オアリスは 視線を戻し慣れ た中で 庭 0 景色を見渡す

頷いて歩き出した。

太陽もかな ら追 御 う 様 前 演習 に この流 り 確 西 認 に れ L 傾 て の最終確認だけに *\* \ 1 て け V) ば、 る。 会議 が も関わらず、 終了した頃には既に二刻が 一つ一つの手 順や事 経 過 L 項を てい た。 頭か

なが ア スタ 5 レ 口 オア 1 が 随 IJ ス 分と真面 は 王 城 目に  $\mathcal{O}$ 広 参加 間 ま で来るとグラン していたのが印 スレ 象的だと、そんな事を思い イを振 り 返 0 た。

文書宮に行ってくる。 か な ŋ 待 たせたかもな。 お 前 はどうする?」

もう今日は公務はございません。

ゆっくり休息

私は先に戻らせて戴きます。

をお取りください」

グラン スレ イも 身体を休めろよ。 皆にもそう言っとい てくれ」

1 は 王 中 グラン 庭に 城  $\widetilde{\mathcal{O}}$ スレ 純 奥、 白 王立  $\mathcal{O}$ 1 花 が 文書 頷き、 崗岩で造ら 宮 ^ 向 礼 れた長 か して王 0 た。 城 1 口 廊  $\mathcal{O}$ 出 下 廊 を が П 暫く 伸 向 か び てい 歩 き中・ うの る。 を確認 庭 0 扉 を 出 レ ると、 オアリス 広

まで王立学術院 ナ ĺ 擦 0) れ違う学院 名 前 が 交じ  $\mathcal{O}$ 生 一達が、 院生だっ るの を 聞 やけにさざめい た事 7 て、 を思 レ オアリ \ \ 出 てい L ス た。 る。 は まだ学院 口 彼等 ツ 1 の会話 バ 生 ル 達 1 が  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 間 中 0 に で 1 ŧ 度 年 Þ ヴ 話 ほ ど前 題 工 に ル

新

いようだ。

とな  $\mathcal{O}$ 進まず軍 は、 在 ったとも。 席 軍 してい に へ入る事 とっ た 間 て 武 ŧ ţ  $\mathcal{O}$ ずっ 歓 方 極 迎 が 8 て珍 と首 すべ 伴 0 き事 て L 席 ζ) *(* ) だ にったと だ。 る事 例で、 が 肝心 聞 今年の学院生 1 だ 7 が 7 る。 今後 首 達  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 席 参 進 に 謀 路 あ 部 に ŋ 大きな な 候 補 が 5 が 内 増 える 択 務 肢

とも カン < 口 ツ 1 バ ル  $\vdash$ が既に来 てい る 0 が 判 り、 V オア リス は 少し 足を 早め

た。

げる。 王立文書宮の 周囲を遠慮がちに 屝  $\mathcal{O}$ 横 に 囲 口 ツト んで立ち止まっている学院生達 バル トが 寄り カン か 0 て *\* \ るの の姿に先 を認い め、 日 片手  $\mathcal{O}$ 食堂を を上

思い出し、 どこも余り変わらないと苦笑を洩らした。

悪 少し長引いた。……待ったみたいだな」

口 ットバルトが一礼し、 面を上げる。

私も今しがた来たところです」

回廊からこっち、話で持ちきりだったぜ。ちょっと詳しく聞 ( ) てみたいよな」

お聞きになるほどの価値はありませんよ。 それより、 会議 は恙無く?」

無事終わって、 後は 明日を待つだけだ」

オアリス 0) 面 に浮 か んだ苦い色に、 口 ツ 1 バ ルトは П 元に笑みを刷 た。

剣舞は?」

V

「……最後に回された。アヴァロン閣下の前だ」

不服、というより心 底 が嫌が るような低 声 に、 口 ツ トバ ルト は オアリスの

顔を同る 情と興 味 の入り交じった瞳で眺めた。

それはまた」

「有り得ね え。 普 通 に 年 功 序 列 で *\* \ V) じ やね え か。 第一 大隊なんだ 番最

初で。 最初なら失敗し ても演 武 が 終 わ 0 た頃に は忘れてるよな あ

「失敗の度合いにも寄りますがね」

総将の前 など大舞台だ。そこへ本来の 序列 を無視 して置くということは

ま

だ試す気持ちが全体的にあるのだろう。

失敗すれば、 またそれを理由にあれこれと批判も挙が

「二刀を披露され れば 7 \ <u>`</u> 失敗しさえしなけ れば、 批 判  $\mathcal{O}$ П を閉ざさせ る

る。

れているとお考えになった方が ζ, ( ) でしょう」

機会になりますよ。

それに今回

0

報告

は既に

上げ

てい

ます

か

ら、

期 待

は

持た

「・・・・・いっそ、 お もい 0 きり 振 り 口 「すか な

「それで発散され るの ŧ 1 V カゝ ŧ L れま せ しんが。 応、 修繕費は押さえてあり

ますしね」

その言葉にレ オ つアリ ス は隣 を見上 一げた。

……ちょっと参考に聞 ツト ・バル トの告げた数字に、 きた \ \ んだけどさ。修繕費はどの位押さえてるんだ?」 レオアリスは呆れて口を開いた。

口

――お前、俺がどれだけ壊すと思ってんだ」

「さて。 命が · 幾つ あっても足りないと思った事 は何度もありますが」

自分の所業 大抵記: 憶が余り無いところが 余計 怖 *\*\ を思 い 返 . オ

アリスは肩を落とした。やはりまだ今一つ確信が持てない。

「やっぱり二刀はよすか……」

「ご随意に」

「……本題。見せたいものがあるって言ってたろ」

ロットバルトは頷いて、すぐそこにある重厚な扉を示した。

「そうでした。どうぞ中へ」

王立文書宮の扉を押し開け、 正 面 の机に近づくと、 スランザールが , , つもの

ように書物に突っ込んでいた顔を上げる。

「ふむ」

それだけ呟いて立ち上がり、ちょこちょこと二人に近寄る。

少しは成長した顔をしておるの」

スランザー ル は首を伸 ばしてレ オアリ スの 顔を覗き込み、 そう言ってくし

りと笑った。

成長したかどうかは判んねぇけど、まあ少しは変わったつもりだよ」

「己の自覚 は その 程度 が 程良 1 ものじや」

知恵者と自ら公言して憚らない老公はそう言うと、

口

ツトバ

トへ顔を向 けた。

普段国

内

随

0)

お 前 ŧ ましな顔になったの」

皺枯れた声でカラカラと笑うスランザールに対して、

口

ツトバ

ルトはただ笑

視線

みを返し、 一礼しただけだ。レオアリスはその顔を眺め、 スランザ ] ル に

を移す。 スランザールは王立学術 院 の院 長 も兼務 してい る。

「そうかもな……。 学院生時 代はどんなだったんだ?」

再び興味が湧いてそう訪ね ると、 スランザー ルは 口元を尖らせた。

つまら  $\lambda$ ヤツじ やったわ。 わしの会心 こ の 問 7 を全部解い てしまいよる。

も解答が 実利 辺 倒で全く面 日白みが ない。不可をやろうかと何べんも思っ たが、

周 囲 が 煩 く 止 めるでのう」

それは残念ですね。 正当な評価 を戴く機会を逸してい た訳だ」

嫌味とも素直な感想とも判別し にくい物言い に、 スランザール は眉を盛 大に

寄せた。

「ふん。して、今日は近衛が二人も揃って学問 の聖域に何 の用じゃ。 わ  $\mathcal{O}$ 教

えを聞きたいと申すのであれば、 特別 に 時間を割 *\*\ てやらない事もない が

いえ。それはまた次の機会に」

さらりと否定され、スランザー

ルの皺

顔

がさらにくしゃくしゃと寄った。

こいジーされい言うとの材合り」

閉架を見せて戴いても?」

文書宮 の開架は十数万冊の文書量を誇るが、 整理途中や分類前、そして持ち

出 し不可  $\mathcal{O}$ 貴重、 な書物を含む 閉架 は 更に開 架  $\mathcal{O}$ 数 倍  $\mathcal{O}$ 規模になる。

「ふむ、まあ良いじゃろう。……大戦のか」

基本的に申請さえ行えば、

希少本

以外

は

誰

でも

閲

覧が

可能だ。

「そうです。以前と同じ場所ですか」

あそこら辺は変わっとらんよ。……くれぐれも言うとくが、 整理を付けてい

ない訳ではないぞ。他をやっとるだけじゃ」

「じいさんの場合、すぐ読み耽るからじゃないのか?」

オアリスが 口を挟むと、 スランザールはじろりとその顔を睨んだ。

「スランザール様と言わんか、小僧。大体お前のような不勉強者の孫を持った

覚えはないと」

レオアリスが 肩を竦める横から、 ロットバルトが付け加える。

「貴方と上将の祖父君は、良く似ておいでなんですよ」

スランザー ル <u>の</u> 麬顔が、 何とも表現しがたいほどくしゃくしゃになった。

「……ふん。勉強せえ」

スランザールはくるっと後ろを向くと、さっさと机に戻り、 再び書物に首を

突っ込んだ。

「似て……るけど……まあ」

レオアリスも照れくさそうに、片手で黒髪を交ぜた。

口 ットバルトは可笑しそうに笑い、レオアリスを案内 して机の奥にある扉を

開けた。

扉 0) 向こうは すぐ左・ 右 が 階 上 と 続 < 短 1 石 段 に な 0 7 ر را د را て、 それ を上 がる

とまた長 1 廊 下 が あ 0 た。 内 側  $\mathcal{O}$ 壁に は、 幾 0 ŧ  $\mathcal{O}$ 扉 が 定 間 隔 に 設 けら

書 物 0 分類名と数字が を振られ てい る。

「こんな場 所 あ 0 たの か

オアリス が 感 心 L 7 見回 し てい ると、 口 ツ トバ ル **|** が . 足を 止 めず に振 り返

る。

学院  $\mathcal{O}$ 関 係 者 に は あ り Ś れ た 場 所 です が、 般 0) 閲覧者 は余りここま で は入

り ませ ん ね。 開 架で足り な 7 、程深く 調べようとする者位です」

口 ツ 1 バル  $\vdash$ の言うとおり、 僅 か な距 離を歩く間 に、 学士らしき女性と一 度

擦 れ 違 つ つの扉で立 た。 頻繁 に使 わ れ て V る  $\mathcal{O}$ 表記 だろう。 は、 史書だ。 口 ツ 1 バ ル } - はしば ららく 歩 7

ら、

ち止

一まっ

た。

屝

0

扉 0 向こうは 天 井が三階部 分まで吹き抜け に な った広 1 部屋 で、 壁 面  $\mathcal{O}$ 書

棚  $\mathcal{O}$ 他 に、 + 数 基  $\mathcal{O}$ 書 架が二列 にずらり と 並 W でい る。

すげえ……」

こんな部屋が 幾 つもあるのかと、 レ オアリス は手近な書架に寄り、 書 物  $\mathcal{O}$ 背

に 視 線 を流 L た。 古 1 Ł  $\mathcal{O}$ 新 7 ŧ  $\mathcal{O}$ が まち まち に 置 か れ、 背 表 紙 に 標 題  $\mathcal{O}$ 

無 1 ŧ 0 ŧ 多い。

が 5 口 歩 ツ き、 } バ Þ ル トは が て 立ち 並 んだ 止 書架 ま 0 た。 の 一 取 つ ŋ を選んで入ると、 出 した  $\mathcal{O}$ は 冊 背 表  $\mathcal{O}$ 幅 紙 広 1  $\mathcal{O}$ 表記、 書 物 を確 だ。 部 認 しな 屋

 $\mathcal{O}$ 

央に戻り、 設えられ ている卓にそれを 置 V)

中 た。

近寄って見ると一見しただけでもかなり古い造り で、 表紙 の装丁や縁が 所 々

擦 れ て 1 る。

彼 0 名 前 を聞 7 て、 以 前  $\sum_{i}$ れを見た事 が あ 0 たの を思 7 出 L ました。

表 記 は あ り ませ んが……」

V オアリス は <u>日</u> 口 ツ 1 バ ル } 0) 顔 に 視線 を 向 け て、 また書: 物に落とした。

静 かに息を吐く。

多 分、 そ  $\mathcal{O}$ 事 な 0 だろうと考えていた 0 だ が、 目 0) 前 12 見 せ 5 れ 7 改め て、

書 物 が 残さ れ 7 1 たのだと感慨を覚える。

アリスは ゆっくりとそれに触 れ た。 特別 な感覚が伝わってくる訳でもな

子

細な

く 乾 *\*\ · ~ かさつ V た古 1 紙  $\mathcal{O}$ 手 触 がりが あるだけだっ たが、 そ れ でも心臓  $\mathcal{O}$ 鼓

動 が早まった。

指先がすぐにそこを開いたのは偶然だろう。

時折小さく絵が添えられている。

年代記というべきな

 $\mathcal{O}$ 

か、

淡

々と起こった出

来事

だけを記

てい

、るも

のだ。

文章を眼

で追えば幾 その項に書かれ ているのは三百年前のバ ルバドスの大戦の記述で、

戦場の 記 変も、 録。 月日と場所、 その名が浮き上が 布陣や戦果、 るように そうした事務的な記 飛 び 込 んで、 きた。 述の中 。 の
、

を持って感じられる名前。 彼 が 戦場に有ったのは、 大戦が 終結、 する直 前 *(*) ほ

ん  $\mathcal{O}$ 数 年 間  $\mathcal{O}$ ようだった。

幾度か ? 項を繰 0 た後、 レ オアリ ス は挿 , 絵 0 一つに引き寄せられるように視線

を落とした。

彩色の ない 小さな挿 絵 で、 何 処 か  $\mathcal{O}$ 戦 場 に、 王  $\mathcal{O}$ 姿が 描 カン れ てい る。

そ の横 に 人  $\mathcal{O}$ 青年 が 立ってい た。

顔 までは見えな 1 が、 背格好、 そして手にしている飾 り気のない長剣は、

温

度

オアリス 0) それ に良く似ていた。

大戦  $\mathcal{O}$ 剣 士 今までただ歴史の 中 - で聞 くだけだった名が、 自分と関

わ

り

を 持 つの は不思議な感覚だ。

声に出さない ま まに名を呟くと、 胸  $\mathcal{O}$ 奥 が 静 か

に

騒めく。

右手を上げ、 軍 服  $\mathcal{O}$ 上 一から 胸 に掛 け た 飾 めに 触 れ た。

僅 かに 躊躇い、 それ から、 自分  $\mathcal{O}$ 耳 に · も 届 か な 7 ほど微かに、 もう一つ、

別

 $\mathcal{O}$ 呼び方を呟く。

一父さん」

現実感は少し薄 それでも、 胸 の中に震えるように、 暖かい 火が灯るよう

な気がした。

オアリスはそれを噛み締 めるように瞳を閉じ た。

「……もう少し探 させば、 色 々と記 述は見 0 カュ るか も知れ ません ね

のだろう。

彼

 $\mathcal{O}$ 

ジン

 $\mathcal{O}$ 

事

は

伏

いされ

7

**,** \

る訳

で

は

な

ただ記

憶

 $\mathcal{O}$ 中

-に埋も

れ 7 7

る

だけだ。 辿 つ て 来たら、 *\* \ けば 判る事 いて回るか」 は 少なく な *(* \

時

間

が

出

聞

村に戻って、祖父達に聞く事もできる。近づく事は可能だ。

居たんだもんな」

鳩尾に手を当てる。

自分の裡に在る、穏やかなもう一つの鼓動が感じられる。

父と母、二人から受け継いだ剣の鼓動。

それはこの先ずっと、レオアリスと共にある温もりだった。

太陽は日ごとに地上に近づき、 風も吹く向きを変え、 北から冷たい空気を運

んでくる。

ただ、空は見事に晴れていて、 低い陽射しが大気を暖めていた。

演習場を抜けていく冷えた風に、 レ オアリスは 一度瞳を閉じた。

静かに息を整え、瞳を上げる。

演習場を取り巻く観覧席とそこにひしめく大勢の視線が、

レオアリスへと注がれている。

その正面の高い位置に、王の座す玉座が

すぐ下の席でアス タ 口 1 が 手 を振 る 0 が <sup>2</sup>見え、 レ オアリスは П 元に苦笑を浮

あった。

かべた。

あいつ、 何を暢気に 観 覧してるんだ。 俺の ひとつ後じゃね え か

この後にアヴ ア 口 ン 0) 演武が あ り、 最後にアスタロ  $\vdash$ が 正 規 軍将軍としての

演 武を見せる予定だ。 その二人の演武はレオアリスにとっても楽しみの一つで

演習場

の中央に立

もある。

ゆっくり観るためには、まずはこの場を問題なく乗り切る必要があるが、 今

はそれもあまり気にしてはいなかった。

(ま、後処理は頼んでるしな)

レオアリスは一礼すると、右手を鳩尾に当て、 剣を引き抜いた。

青白い光が演習場に満ちる。

現れた長剣に、ざわめきと溜息が場内に広がった。青日いうな浴音歩り治する

その響きが消える前に左手を上げ、再び鳩尾に当てる。

ずぶりと、沈む。

場内が息を呑む。

力が、身体の内から吹き上がってくるのが感じられる。その力に靡くように、

オアリスの纏う長布が翻った。

深い呼吸と共に、一息に引き抜く。

解放、尊厳、意志。

レオアリスの瞳が王の姿を捉える。

左右の剣が呼応するように、眩い輝きを放った。

二本の剣が空を切り裂き、 時折呼び笛のような高 い音を立てる。

広い演習場で、レオアリスが二本の剣を操る。

静から、一転して動へ。

風を巻くように空を切り裂き、空で止める。

舞という響きから想像される優雅さは 少ない が、 剣が 青 ζì 尾を引 1 て大気を

黒衣

が動作に合わせて翻る。

切り裂く様は、 だがやはり、 見る者を惹き込む程 に美 し カゝ 2 た。

「満足~」

身を乗り出すようにその動きを眺 めていたアスタロ トは、 言葉どおり満足そ

うに息をついた。

御前演習が行われている第一演習場には多くの諸侯が列席し、 この演目に言

葉を忘れて見入っている。

視線  $\mathcal{O}$ 先 のあ るのは、レ オアリスに対して意趣 0 ある者にさえ、 それまでの

批判を一 時忘れさせる光景だ。

二刀の 剣士か……」

感嘆して呟く彼等の顔をちらりと眺めて、ア スタ 口 トは笑った。

その存在は、 王国にとって悪い事ではない。

視線を演習場

へ戻す。

アスタロトはまだレオアリスとゆっくり話

をしてい

な

かったが、 聞きたい事への答えは全て、 視線を注 いだ先にあった。

「良かったですね」

傍らのアーシアが 穏やかに笑う。 その言葉が 何に · 向 けら れたものなのか、 敢

えて確認する必要は な か つた。

「うん。 ――これからまた、楽しいな」

王 は 拾 い上げた赤子を、 その 村に預けた。 名を与え、 いずれ成長した時 に、

望むのであれば、自らの元に来させるようにと。

それが復讐の為であったとしても、 落胆する事はなかっただろう。

剣士とはそういうものだ。

自らが守ると決めたものの為の、剣。

だが、レオアリスは仕える事を望んだ。

そうなると、 不思議と過 去を知らせる事 よに躊 躇 1 を覚えるようになる。

自分にか、それとも。

いずれ過去を知った時、

こ の

剣はどこに向く

. О

カゝ

?

その剣を恐れた訳ではない。

ただ、 剣士にとって主を得る事がその最大の喜びであるように、 自らの為の

剣を得る事は、その者にとっても喜びだろう。

明確な言葉で言うのならば、絶対の信頼、を。であればこそ、その剣を失う事に、躊躇いを覚えたのだ。

バインドがレオアリスの前に現れた時、王は僅かに自問 した。伏せ続ける か、

全てを明らかにしてみせるか。

だが敢えて、レオアリスが自ら知るままに任せた。

その剣が何を選ぶの か、 干渉を与える事なく、 それを見てみたいと思ったの

だ。

る事に、 僅かに安堵している自分に苦笑する。 全てを知ったレオアリスの瞳の中に、 今までと変わらないそれが

いずれ得られるだろう、王よ。貴方なら』

時は思わぬ方向へ流れる。

淡々と流れていく時の一幕一幕は、意外と興味深いものだ。

· 見え

V オアリスが ?剣を納? め、 その場に片膝をつく。 黒衣がその身体を追って、 S

わりと落ちた。

王 の高座に対 して一 礼すると、 水を打ったように に静まり 返 0 ていた場内に、

歓 声が響く。

王が立ち上がると、場内は再び静まり返り、

その言葉を待った。

見事 な剣舞であ 0 た

低 かな声 が 朗 々と演習場内に響き、 レオアリスが一層深

V)

静

先のバインドとの 戦によって、そなたは名実と共に、 この国に於いて比類

無き剣士となった。 我が名付け子にして、 我が · 剣士。 そなたを得た事 を誇

に思う」

場内に満ちた驚きが、すぐに波のような歓声に代わる。

最高 の 、 後ろ盾だ)

アスタロ  $\vdash$ が 笑みを浮かべる。

王自ら、 諸候 の前でそう告げる事 の意義は計り知れない。

く頭を下げる。

(……まあ、あいつにはそんな事どうでもいいかな)

レオアリスの頬に浮かんだ、誉められた子供のような喜びの色を認め、アス

タロトはもう一度、満足そうな笑みを浮かべた。

そんで、王から下賜されたのが、それ?」

アスタロ } は レ オアリスの 執務 机 の前に椅子を持 ってきて腰 カゝ け、 机 に 置

 $\mathcal{O}$ アスタロトも乾いた笑いを洩らす。

た 腕

の上に

顎を載せたままそれを眺

8)

た。

レ

オアリス

が頷くのを見て、

さすが

(はは。 何考えてんだ……)

机 の上に載せられているのは、 見事 な細工の施された、

鞘に彫 り込まれた紋様、 使われ ている地金、 黒 檀 で加工された柄。

鞘 か ら出さずとも、 刀身が完全な美しさを以って鍛え上げられてい るだろう

事 が容易に想像できる。

拝領してから既に三日。 ずっとこうして、執務室の机の上に置かれている。

「……しまっとけば?」

「うん」

アスタロトの言葉に頷くものの、レオアリスは非常に複雑な表情で剣を眺め

振

りの長剣だ。

たままだ。

――だめだな、こりや)

噴き出しそうになるのを堪えてアスタロトは席を立った。

もう、 お帰りですか」

うん。ちょっと見たい気もするけど」

口

扉の奥に、 まだ剣を眺 めたままのレオアリスの姿が見える。

ットバルトが執務室の扉を開けると、アスタロトは回廊へ出て振り返った。

「三日か。 結構保ったよな」

でしょうね」

アスタロトを見送ってから、ロットバルトはレオアリスの前に戻った。

V オアリスは鞘に包まれた剣をじっと見つめている。

何を考えていらっしゃるんです」

いや、ちょっと、使ってみようかなー、と」

遠慮がちに視線を落としながらも、 レ オアリスは今にも剣に手を伸ばしそう

だ。

「……敢えて言わせていただければ、お薦め致しませんね」

「でも俺なぁ。 最近結構加減も効くようになったと思わ ねえ?」

ロットバルトは暫く黙ってレオアリスの顔を見つめてから、薄く笑みを浮か

べ、無言で立ち去った。

「……何だそりや」

憮然とした表情で室内を見回すと、誰も彼も視線を逸らす。

(まずいのか、やっぱり)

でもやはり、 使ってみたい。 これほどの剣を使わずにただ飾っておくなど、

宝の持ち腐れもいいところだ。

(まずいかな。折れるか?)

折れる。

いや、折れないだろう。

細心の注意を払って扱えばいい。

たぶん。

きっと。

折れない。

才 7

(……一度、振ってみるだけだ)

レオアリスは期待に満ちた笑みを浮かべて、剣を取った。

「うーん、上将の考えてる事は分りやすいな」

組んで背もたれに寄りかかった。 執務室を出るレオアリスの姿を目で追いつつ、クライフは両腕を頭の後ろに 同意を求めるように、隣席のヴィルトールに

顔を向ける。

顔に全部出てるからな」

「賭けるか?」

「お前が折れない方に賭けるならね」

「有り得ねえ」

百でどうかな?」

「有り得ねぇっつってんだろ」

「じゃあ五十」

「しつっけえなぁ!」

二人のやり取りを聞きながら、 ロットバルトはグランスレイの席へ行くと、

書類を机の上に置いた。

「……お止めになるなら、今ですが」

グランスレ イは渋い表情を浮かべ、息を吐いた。その様子に、フレイザーが

翡翠の瞳を閃かせて笑う。

仕方ない。 鍛冶師には、 全員で頭を下げに行くとしよう」